
アオイトリの消失

野ノ屋イカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アオイトリの消失

【Nコード】

N1735Q

【作者名】

野ノ屋イカ

【あらすじ】

彼女は（鬼畜）RPG『leur ルールミストラル mistral』の世界に送られ、しかもラスボスの力を得ていた。勇者の旅について行き、不条理溢れる絶望的な物語を知った少女は、物語を壊すために動き出す。勇者の旅を阻止しようとする主人公と、そんな少女に求愛しつつも敵対する背徳的な勇者の話。

プロローグ

土曜日。買い物物の帰り――真っ黒のドレスを着た女性が私の前に立ちふさがった。

普通の住宅街に突然現れた、披露宴のお色直しで着るような黒色のゴージャスなドレスの女性。黒く長い髪に、V系みたいな化粧。綺麗ではあるが、どこか不気味さを感じさせる人だ。……あれ？でもどこかで見た事ある気がする。多分、小学生の時位に……。

どこか魔女っぽい雰囲気醸し出している女性を無視し、そのまま歩きだそうとする。何故私の前方に立ったのか分からないけど、明らかに怪しい人と思っ合っているのは精神的に辛い。

人がいないので注目を浴びないというのは私のガラスのハートには優しかった。

何事もなかったかの様に歩きだすと、その女性に腕を掴まれる。

「え……あの」

新手の切り裂き魔とかだったらどうしよう。すでに動悸が早くなっている私は自他共に認める超チキンです。

闇色の瞳が私を射止め、悲しげに伏せられた。と思うと、拳を作っていた手を私の鼻の辺りに持ってきた。

……？ 何だろう、とその拳を見たら――その拳を唇につけられ、開かれる。何か堅い物が唇に当たる。

「――口を開いて」

ひ、開けるかー！

嫌だ嫌だと体をよじると、女性の力とは思えない力で私の腕を引き、壁に押し付け、太ももと太ももの間に足を割り込まれる。えええっ?! 何、誰か助けて! 急いで辺りを見渡すけど誰もいない。先ほどは安堵した筈のその事実が、私を氷つかせる。

「毒じゃないわ、安心しなさい」

「んんんんんー!」

毒じゃなくても安心できない! 首を振って抵抗すると、押し付けられている謎の物体が唇を擦って痛い。何だろう。ツルツルする。大きさは親指一間接位の大きさだ。段々息も苦しくなってきた。

半泣き状態になっていると、女性は私の腕から手を離し、唇からも手を離れた。やっと息が吸える……叫べる! はぁっと息を吸った瞬間――唇に何かを放り込まれる。……や、やられた。急いでそれを吐きだそうとするが、その何かは唇に入った瞬間に溶けた。まるでラムネの様に。

「……ふう」

「な……何を飲ませたんですかー!?!」

「大丈夫、ただの私の力よ」

「は? ……は? はぁ?!」

意味が分からない。よく分からないラムネを作っている会社の方なんだろうか。それで、新作のラムネを私に無理やり――って無駄あるよこの考え方!

毒じゃないって言ってたけど、本当に毒じゃないかわからないし、第一何で私なの? あああ最悪、何でこんな……もしこれで死んだら末代まで祟る。祟ってやるんだから!

漆黒のドレスを着た女を睨むと、淡く微笑まれた。何ですかその顔は、私が加害者みたいじゃないか! 被害者私ですよね?

「……ごめんなさいね、私はもう……耐えられないのよ」

彼女は私の肩に頭を置く。

「私はただ、皆の役に立ちたかった……それだけなの……」

何の話をしているか全く分からない。

「……間違ってしまった。そして私は、世界に囚われた。ずっと繰り返す世界、誰も私を殺せない――」

彼女が肩から頭を離し、私を見た。闇色の瞳から涙が止めなく溢れている。それを見て、私の怒りゲージがMAXから下がって行く。よく分からないけど、辛かったのだろう。彼女の涙に偽りは感じない。私はこういう人の気持ちを讀んだりするのが得意なのだ。顔色ばかり窺って生きてきたから。

「――だから私は、逃げる事を選択するわ。それはとても卑怯な事で、ずっと避けていた事だった……。でも、もう……ごめんなさい許して頂戴」

女性の足が太ももの間から離れ、彼女は私の前に姿勢よく立った。

「私はもう、無理だけど……貴方ならば、あちらの世界でも普通に生きれる筈よ。ただ、私の力を授けないと……世界の均衡が崩れてしまうの。だから、ごめんなさい。貴方にアレを飲ませたの」

あちらの世界？ ……死後の世界の事をそんな言い方しなかっただろうか。

急に背筋が寒くなる。怒りゲージは無くなっているけど、恐怖ゲージは今もマックスで警報が鳴りまくりだ。

「……出来る事ならば、オワゾー・ブルーアンペラトリス青い鳥の女帝としてグラナート様と結ばれて欲しい……なんて、それは我儘がすぎるかしらね」

「オワゾー……？」

どこかで聞いた事がある単語だった。

女性はゆるく頭を振り、悲しげに微笑む。

「……今の気にしないで、オワゾー・ブルーアンペラトリス青い鳥の女帝の名は出さない方がいいわ。ああでも、オワゾー・ブルーアンペラトリスマルガリーテースに出会ったら青い鳥の女帝の力を引き継いだ者だと伝えて。そうしたらマルガリーテースは貴方の味方になってくれるわ」

マルガリー……うう、どうしよう。どこか記憶のある言葉だ。だけど全くもって何を言ってるのか分からない。

でも私の中のセンサーが『今からでもいいから逃げろ！』と警告音を鳴らしまくっている。

「……ごめんなさいね。ありがとう」

お礼を言われた。私の中のセンサーが振りきれて壊れる。

彼女の手が私の肩に触れ、彼女の赤い唇が動く。

「コーロスピリヴオード」

殺す！？ ピリオド？ え。な、なななっ！

膝が震え、そのまま跪く。自分の意志など全く関係なく、私はアスファルトに座り込んだ。

「……ヴィエーディマ」

綺麗な音色を奏でた彼女の唇が、閉じられる。

悲しそうな彼女の目から涙が零れ、私の頬に当たった——と同時に私は光に包まれた。真っ白い光。発色している。……なんですかこれは。

冷静にその光を見れる程度に冷静な時が、一番危ない。

一羽

目を瞑っていても感じる眩い光が消え、私はゆっくりと瞼を開けた。

背中から感じる感触は、柔らかく、実は全て夢落ちなんじゃ、と一瞬だけ願う。

一番初めに視界に入ったのは、白い天井。病院……？

「……あ、起きた。ジー起きたー！」

「……え」

赤色が視界で動く。その赤を追おうとした私の顔を覗かれ、絶句した。

深紅の髪と少しつり目がちなガーネットのような瞳。小さな鼻に、白磁の肌。薄い桃色の唇は開かれ、真珠のごとく白い歯が覗いている。

——人間だとは思えない。

「……天使……」

「はー？」

「目を覚ましたのか？」

低い声が聞こえ、少し白髪の混じった黒髪の男の人が、青い瞳で私を覗き込む。

大人の色気をこれでもかと凝縮したその人が、天使みたいな美貌の持ち主の後ろから私を見つめた。

「……大丈夫か？ 身体の調子は？」

「だ、大丈夫だと思います。……えっと、あの……ここですか？ 極楽ですか天国ですか地獄ですか？ それとも失楽園ですか」
「少なくともそのどれでもない事は確かだ」

そうか、違うのか。少なくともそのどれかだと思っていた。

「失楽園ってなんだー？」

「グラナート、お前は知らなくていい」

ぴしゃり、と黒髪の人言い捨てる。グラナートと呼ばれた青年が首を傾げ、文句を言っていた。それを見ながら私は起き上がり、辺りを見渡す。

やけに広い部屋だった。20帖位の部屋に、家具がぽつぽつとある。6帖位の部屋に置く程度の家具しかないのがどうにも可笑しい。

「……っーかお前」

「えっ!？」

紅髪の天使が、私の顔を覗き込んだ。フローラルな香りがした。人間の限界を超えた様な美貌が近づき、私は思わず後ろに反る。

「俺とどっかであったことねーか？」

「え、……そう言われれば……」

そう言われれば、どこかで見た事ある。じっとその人を凝視して、記憶を探る。

過去を必死に引っ張り出していると、小学校の時に流行ったゲームを思い出した。

ラスボスがチート並みに強くて、エンディングを見るのにすこぶ

る時間がかかる事で有名なあのゲーム。その主人公の名前が――グラナートで、ラスボスの名前が……オワゾー……。

忘れていた記憶が、勝手に蓋を開けて出てくる。

すう、と頭が冷えて行く感触を感じた。……これは、所詮異世界トリップとかいうものでしょうか？ 誰かに問いかけるが、勿論答えは帰って来ない。

呆然としている私を尻目に、2人が会話している。

「雰囲気似てるんだよねー……」

「違うだろう」

「そー言われれば違う気もする」

グラナートが私から顔を離す。黒髪の人が、無表情で私を見つめた。

「……君は、どうしてあんな所に倒れていたんだ？」

「……あ、あんな所？」

一旦思考をやめ、ぎこちなくその人を見る。

無表情で、全く抑揚のない声で黒髪の人言う。

「ウチの店の前だ」

「それは、多大なご迷惑を……」

「構わない」

何時間倒れていたかによるけども、その所為でお客さんは店に入れなかったことだろう。

「ウチは人が来ることがないから問題ない」

経営的な面ではとても問題があると思うのですが。
無表情なその人が、何の店をやっているか気になった。

「気分がよくなるまではここに居ればいい。もう夜も遅いからな」
「えっ、いいんですか？」
「ああ」

無表情で頷くその人の横で、グラナートがケラケラと笑う。

「ここに世話になったら、朝食食パン、昼食菓子パン、夜食惣菜パンだけだなー」

「えっ、パンだけ!？」
「おーパンオンリーだ」

悪戯っぽく笑うグラナートを一瞥してから、渋い人はため息を吐く。どうやら嘘らしい。さすがに三食パンはないだろう。

「グラナート。お前は明日の事があるのだから、もう帰りなさい」
「お前俺のお袋かよ。継承式程度、軽ーくこなしてやるよ」

口端を上げて、グラナートは不敵に笑う。お袋と呼ばれた人は、ため息を吐いた。

継承式って何だっけ？

……ああ、そうだった。このゲームの序盤のイベントだ。

——leur ルールミストラル mistral

一時期私がはまりそうで、はまらなかったゲームで……多分、この世界。

主人公『グラナート』が、第2次ミストラスで混沌としてしまった世界を救うRPG。

ミストラルと言う名の暴風の所為で、世界？アルシュ？は色々な世界・次元と混ざってしまうのだ。

アルシュを元の正常な世界に戻すには、各国にいる『オワソー・ブルーファンペラトリス世界の歪み』の使い魔を倒し、ラスボスである青い鳥の女帝を倒さないといけないという王道冒険モノだが……、

ネットでは『鬼畜ゲーム』『ドエスゲーム』『ドエムしか買っちゃいけない』と散々書かれていた。そしてその批評通り、全てにおいて鬼畜。システムであったり、キャラクターの半生であったり、大体全てのモノが鬼畜なのだ。

そんな鬼畜ゲームでありながら、メディア化しアニメや漫画になったので私でも結末やラスボスも知ってる。多分、殆んどの人がメディア化してから結末を見たと思う。

けど、思い出せない。……この、黒髪の人誰だっけ。あだ名がオカンだったのは覚えてるんだけど……。

「グラナート、我が儘言わずに帰れ」

黒髪の人の、厳しい声が聞こえて、私は2人を見る。

グラナートは唇を尖らせ、不満げな表情をしていた。……ひたすら女神の様に美しい。

男なのに、こんな美貌を持ってるなんて羨ましい。グラナートが紅い髪を掻き、ため息を吐く。

「うち、しょーがねーな」

「よく食べてよく寝て、明日に備えさない」

「へいへい。じゃーな」

片手を軽く振って、グラナートは階段を下って行った。

部屋の中には、黒髪の人と二人つきりになる。

グラナートが居なくなっただけにより、なんとも言えない沈黙が

室内を支配したが、すぐに沈黙は破られた。

「……俺の名前はジビエ・ドーだ」

「あ、私の名前は――」

そう口にして、私は喉を縫われたような奇妙な感覚を感じた。喋れない。言えない。

名前が名乗れない。

「……………」

「言えないのならば、無理して言う事はない」

「……すみません」

「今日はもう遅い、ここで寝ていい。君は継承式を見に来たのだから。9時に起こせば事足りるか？」

「あ、はい」

私はよく分からないけど頷く。ジビエさんはそうか、と頷き下に行ってしまった。

……どうしよう。

私はため息を吐いてから、ベッドに寝転んだ。

よく解らないし、とりあえず――寝よう。

一羽（後書き）

書きなめました。

初出 2010年1月15日

二羽

私がどうしてここにいるかを考えた結果、とある事が解った。

魔力の中核――ラスボスの青い鳥の女帝が身体に宿らせていた、
その名の通り世界の魔力の中核。

私が飲まされたのはそれだろう。それがないと、この世界は均整
がとれなくなる。

だから、青い鳥の女帝……略してブルーは、私をこちらに送った。
つまり、私は――ラスボスの力を得た。と考えていいと思う。
だけど、確か……魔力の中核を宿すと、不老不死になるんじゃない
かったつけ。

その代わり、私はチートになった。のだろうか……？ どうも一
筋縄でいきそうにない。

「……ん？ 起きていたか」

「おはようございます。あの、ありがとうございました」

「気にするな。服は、そのクローゼットに入っているものをどれ
でも使うといい」

「え？」

「女物も入っている」

「……は、はい」

なんで？

それだけ言って、ジビエさんは下に戻って行った。私は遠くにあ
るクローゼットまで行き、中を見る。本当に女物が入っていた。
淡い水色のワンピースを選ぶ。……これ、誰の服なんだろう。彼
女さん？ あの年なら、結婚してても可笑しくない気がする。それ

なのに、私を泊めて大丈夫だったのだろうか？

罪悪感を感じながら、その服を着て下に降りると、いいにおいがした。

パンの香りだ。

小さな廊下があり、階段を下りて右が厨房、左がパン屋さんになっていた。

「……いいにおい」

「そうか。そのテーブルで朝食を準備している。飲み物は何がいい」

「え、そ、そんな悪いです」

「気にするな」

「……で、ではジビエさんと同じものを」

「紅茶でいいのか」

「はい」

ジビエさんは再び厨房に戻って行った。

広いパン屋の店内の端の方には、白い小さなテーブルとイスがあり、簡易カフェになっている。

そこに座り、店内に並んでいるパンを見る。パンの種類6種類位だ。

パン屋さんにしては少ない。……売れ行きがよくないのだろうか？ それとも、一人だけで作っているのだろうか？ そう言えば

昨日、人が来ないと言っていた。お店として大丈夫なのかな……。

テーブルの上に視線を移す。スクランブルエッグと、サラダにくるみパンが置いてある。

厨房から戻って来たジビエさんが紅茶セットを持ってくる。あ、手伝えばよかった。なんて気がきかないんだろう。

ジビエさんが前の席に座り、紅茶を入れる。手際の良さと、入れ方の綺麗さに感動した。

オカンのあだ名は伊達ではない。

「砂糖とミルクは」

「あ、じ、自分でやります。すみません……」

「何故謝る」

「お世話になりっぱなしで……」

「気にするな。世話するのは慣れている」

「……おかん」

思わず呟くと、ジビエさんがきよとした顔をする。

「ご、ごめんなさい」

「いや、いい。言われ慣れている」

こんなクールな人にオカンと言いまくる人がいるのか。……グラナートか。

「継承式はもうじき始まる。朝食を食べ終わり向かえば間に合うだろう」

「はい」

継承式かあ。興味が無いと言えば嘘になるけど……。少し悩む。

——折角ゲームの世界に来たんだ。積極的に関わりたい。いつか覚める夢ならば、したい事をしよう。そう決定して、心の中で頷く。

でも——私、この世界でどうすればいいんだろう？

したいことは、いっぱいあるけど、お金はない、家族はいない、友達もいない、住む所もない。ついでに言えば——自分を証明するものが何もない。

『未来の私』なんて小学生の作文の題材みたいな事を考え出した途端、どうにかなるか。という精神が早くも折れそうになった。

『……—に出会ったら青い鳥の女帝の力を引き継いだ者だと伝えて。そうしたら—は貴方の味方になってくれるわ』

不意に、ブルーの言っていた言葉が脳裏に過る。

名前が思い出せない。マルチーズみたいな名前だった気がする。マル……まるがり、まる……。今は思い出せないけど、その人に会った方がいいと思う。

「ごちそうさまでした」

手を合わせ、ジビエさんにお礼を言う。ジビエさんは無表情で頷く。

名前さえ思い出せば、ジビエさんに聞けるけど……どうしよう。どうやって探そう。

大体、名前を覚えていても、ジビエさんが知っている可能性なんて……限りなく低いのでは。……それでも、一応聞いておこう。

「あの、私事なのですが……」

「なんだ？」

「探し人を、しているのですが……。名前も顔も解らないのです」「ふむ」

「何か……探す方法はないでしょうか？」

「……魔術で探すと言う手もあるが。だが、その人物が持っていた物や、情報が必要だ。そう言った物は持っているか？」

「も、持ってません」

「ならば難しい」

「……で、ですよね」

「自分で旅に出て探すのが一番だと思うが」

自分で探るのが一番か……。予想通りの言葉が帰ってきて、密かに項垂れる。

——私はチート能力を持っているのだから、一人旅位へっちゃら。と言う訳にもいかない。そこまで勇敢にはなれない。いきなり一人旅は難易度が高すぎる。

それなら私はどうすればいいのだろうか？　ここにお邪魔する、なんてことができたなら、私はブルーの言う通り異世界で平平凡凡に過ごす事ができる。異世界にまで居るのに、現実世界と同じように過ごすのは少し勿体ない気もするけども。

「……一人で旅にでるのが不安であれば、勇者の旅に付いて言うてはどうだ？」

「勇者の旅……？」

勝手な妥協案を練っていたら、ジビエさんが提案してくれる。勇者の旅というのは、グラナート達が行う旅の筈だ。いわば、ルートの本編。

楽しそうだと、思う。

「私みたいなのが、ついて行ってもいいのでしょうか？」

「問題なからう。女子が一人付いて行った程度で問題が生じるならば、それは勇者の旅ではない」

真顔でジビエさんはそんな事を言う。

厳しすぎやしませんか。なんて突っ込みは紅茶で流し込んだ。

私は笑顔を作りながら、じゃあお邪魔しちやおうかな、なんて言うってみる。

ゲームは途中で放棄したのだけど、漫画も買ってたし、ファンだ。そんな旅に関われるのは、ファンにとっては感涙ものだと思う。……ただ、この世界はRPG。魔物が消息どころか、養殖されて

いると言っても過言ではない剣と魔法の世界。
危険も伴うだろう。

「勇者の旅と言っても、グラナートだけが行く訳ではない。この国の王子であるディアマンテと、シアンから雇った青年も共に行く。心配しなくても大丈夫だ」

王子の事を呼び捨てにするジビエさんに疑問を感じたが、気にしないふりをして頷く。

「それに、ずっと付いて行かなくともヴァイス共和国まで共に行けば、ヴァイス共和国は交通手段が充実している。そこからは列車等を使って一人で旅行も兼ねて旅をすればいい」

それを聞いて、私は安心した。

ヴァイス共和国まで勇者の旅にお邪魔して、そこからは一人でマルチーズさんを探そう。

ちよっと位参加できたら、それで十分だ。このゲームは中盤から酷い鬼畜を発揮するゲームだったと思う。それは体験したくない。

当面の目的が出来、ジビエさんにお礼を言った。

三羽

「首長、ガジエラ・ソーテリアーの御成りです」

すごい服を来た人が椅子の隣まで歩いて来て言う。多分祭司長だ
と思う。果然と祭司長を観察していると、皆が一斉に頭を下げたの
で私を慌てて頭を下げる。

朝食を食べ終わり、私達は勇者継承式に来ていた。

着飾った人たちが廊下に敷いてある赤い絨毯を取り囲むように列
をなしていて、少し奇妙な感じだ。中世ってこんな感じだったのか
なあ。そんな事を思いながら観察していたら、何故か私服の男の人
を見つけた。かなり浮いている。

「頭を上げい」

威厳のあるしゃがれた声に、皆がゆっくりと頭を上げる。

偉そうに椅子にふんぞり返っているお爺さんは、体からほとぼし
る高貴さを除けば普通のお爺さんだった。いわゆる外国のお爺さん
って言うより、日本の頑固親父（70歳）を少し洋風にした様にも
思える。

ジビエさんの横顔を覗き見ると、射殺さんとはかりに首長を睨ん
でいる。首長と何かあるのだろうか？

……思い出せない。小学生の時の私は、クールな魔術仕が好きだ
った。その為、友達にドラマCD貸してもらった時も、ジビエさん
メインのトラックを何故聞き飛ばしていたのだ。

酷く残酷な事をしていた気がしてきて、私はジビエさんの顔が見
れなくなった。

「今から勇者継承式を執り行う」

首長が宣言すると、またパイプオルガンが鳴り響く。パイプオルガンの姿が見当たらないのは制作側の『ちょっと時間がなかった』という理由らしい。攻略本のインタビューに書いてあった気がする。……私よく覚えてるなあ。肝心な部分を思い出せないのに、いろいろな事ばかり覚えてる。

自分の妙な記憶力に心の中で苦笑していると、足音が聞こえて来た。

解放された扉の外を見ると、いかにも勇者という服を紫に変えたグラナートが歩いて来ている最中だった。長い紫のコートが風になびいている。

少し暗めの紫色衣装が、グラナートの赤い髪と赤い目を引き立てていて、彼の容姿の良さをこれでもかと皆にアピールしていた。

表の道を歩き終わり、勇者が室内に足を運ぶ。

勇者としての威厳や、風格が既にグラナートにはあった。……女子達が光悦とした表情でグラナートを見ている。ゲームでもネタにされていたけど、グラナートは凄く綺麗だ。人間の限界を逸した中性的で女性的な美しい顔。日頃『めんどくせえめんどくせえ』なんて常にぼやいている人間とは思えない。

どうでもいい話だが、ゲームでこのイベントは自動で進むモノではない。

真っ直ぐ首長の元まで歩いて行けばいいだけなのだが、それをせずに人に話しかけたりすると首長に怒鳴られ、三回人に話しかける、もしくは時間内に首長の元までに行けなかったら首長が切れて継承式が中止になるのだ。

それを知らずに物が貰えたり、『服似合ってる』と褒めてもらえ

ると思い、人に話しかけてゲームオーバーになった事がある。
勿論グラナートはそんな事はせず、真っ直ぐと首長の元まで歩いて行く。階段は登らず、そこで跪いた。

首長の長い誓いの言葉が終わり、首長が階段を下りてくる。グラナートは跪いたままだ。その姿は昨晚普通に話していた青年だとは思えない。

「顔をあげろ、勇者グラナート・マリートヴァ」
「はい」

顔を上げ、グラナートと首長の視線が交わる。
……何故かこちらまでドキドキしてきた。

「汝、勇者グラナート・マリートヴァに勇者の腕輪を授ける」
「はい」
「腕の前に」
「はい」

グラナートが腕を前に出すと、国王がその腕に腕輪をかけた。手錠をかけている様に見えるのは、気のせいだろうか。いや、気のせいじゃない。確かこの腕輪、死ぬまで外れないのだ。だから勇者の旅から逃げた勇者って言うのはすぐ分かる。その時点で……あれ、なんだっけ。

腕輪をはめ終わり、グラナートの腕が太ももに戻される。首長の命令でグラナートは立ち上がり、一步下がる。

祭司長が高らかに宣言した。

「勇者手帳授与」

「はい」

ラッパの音が鳴り響く。……これが一番のイベントみたいだ。なんだっけ？ 勇者手帳って。

祭司長が下りて来る。木の箱を持っており、その中の手帳があった。あれが勇者手帳か。ぱっと見は警察手帳にも見える。

手帳を手に取り縦に開き、警察手帳の様に皆に見せびらかす。上は免許書のようにになっておりグラナートの顔写真の下に年齢やらが書いてあった。

『グラナート・マリートヴァ 18歳 男』みたいな奴だ。その下は国のマークが描かれている。

歓声と拍手が場内を埋め尽くす。すごいものらしい。

「勇者、手を」

「はい」

グラナートが手帳の下の部分に手の平をかざすと、手帳が光った。そしてそこから透明な手帳と同じサイズの板が出て来る。どういう仕組みだ。あれ。

首長はその手帳を自分の方に向け、透明な板に指を押した。

手帳が発光し、黒色から紫色に変わる。また歓声と拍手。

そうだった。思い出した。

勇者手帳はその国の王が指で印を押すと、国のカラーに変わり、国に居る限りソレを見せるとアイテムや宿屋代が無償になるのだ。（勿論、制限はあったと思うけれど）

「頼んだぞ、勇者——グラナート」

そう言って、首長は去っていた。緊張の糸が途切れる。

皆がきゅっきゅっきゅ喋りだした。主に『グラナート様カッコイイ』だが、自らグラナートに話しかけるものはいない。

グラナートは黄色い声には答えず、踵を返し、こちらに歩いてきた。

一瞬身構えてしまった。だって、勇者の風格っていうか、むしろ王子とかの品格があるんだもの……。

「よー、お二人さん。わざわざ見に来たのかー？」

「この一大イベントを見に来ない国民はいないだろう」

「そーか？ 俺なら見ねーけど」

だってめんどくせーじゃん。と言ってからグラナートは頭を掻く。綺麗にまとめられていた髪が乱れるが、そんな事は全く気にしてない。

そんなグラナートを見て、女の子たちの黄色い声上がる。この美貌なら仕方ないのだろうか。ゲームのキャラだと割り切って見ていると、普通に見えてくるから怖い。二次元フィルターという奴か。

「まーいーや、いこーぜ？」

「他の者に話しかけないでいいのか？ ここに戻ってくるまで、暫くは話せないぞ？」

「かまわねーよ」

グラナートは出口に向かって歩いて行く。私は金髪縦巻きロールのお嬢様を見る。確か、あの人に話しかけたら、HP回復できるチョコが貰えたと思う。

それを言おうか迷っていると、グラナートはもう外に出てしまっていた。

縦巻きロールのお嬢様に睨まれる『あんたグラナート様とどうい
う関係よ』という視線をびしびし感じる。
さすが勇者……モテモテだなあ。

四羽

ジビエさんの店に^{パン屋}戻り、私達は二階のテーブルで昼食を取った。

ここまで来る間の道なりの建物が、全て灰色の囚人が住む様な建物なのは何か意味があるのだろうか？ 首長の家はあんなに豪華だったのに……。

「グラナート」

「んー？」

「この娘もお前の旅に付いて行かせてやってくれ」

言わなくちゃと思っていた言葉を、ジビエさんが言ってくれた。少し寝むそうなグラナートが、コーンスープを飲みながら頷く。

「いーんじゃねーか？」

ものすごく適当だ。ありがたいんだけど、適当すぎてちょっと困る。

大丈夫かなあ……本当に。勇者の旅ってそんなに軽く決めちゃって大丈夫なのだろうか。

仲間が増える時って言うのは、それぞれの信念とかがあって、それが複雑に絡み合い――。

一般的なRPG理論を脳内で組み立てていると、ジビエさんがため息混ざりに呟く。

「……それと、しばらくこの国には戻ってくるな」

「戻ってくる気はねーけど、なんで？」

「グラナート達がこの国を出た後、すぐにでも首長へのデモ運動が起ころ」

「へー……。そのうち起ころと思ってたけどよー」

興味無さ気にグラナートは頷く。

デモ運動って、すごい大変な事だよね？ そんな適当でいいの？
全く興味なさそうなんだけど……。

「このことは――」

「ディアマンテには言うなー。だろー？」

「ああ」

「いわねーよ」

パンをかじり、グラナートは窓から外を見る。窓の外には、灰色の街が広がっていた。

ジビエさんは食べ終わった食器を持って下に行ってしまった。手伝うと言ったけど、いいと言われてしまった。ジビエさんとの距離感が、友達のお母さんと私。という感じがして、少し複雑だ。

……確か、この時に『謎の女性の写真』を取っていないと、中盤で何か困ったことが起きたと思う。

そう思っていると、グラナートが立ちあがって本棚をあさりだした。……心配するまでもなく……勝手に……あさるんですね……。

「あの……勝手に、その」

「んー、大丈夫だって、バレやしねえよ。それにバレてもどうせ違う国にいるし」

——勇者がアイテム盗って行く時の心中ってそれなの！？　そんな計算してるの！？

強盗じゃん、賊だよ！　勇者じゃないよ、賊だよ！　ただの賊だよ！

「お、写真発見ー」

「……」

「お前も見ろ？」

「……いえ」

ゲーム上では『謎の女の写真』とだけ表記されて見えず、アニメでも反射した作画でその女性の顔が見えなかった。中盤で見えてたかも知れないけど、あまり覚えていない。気にならないと言えば嘘になる。かなり見たい。……でも、勝手に見るのは……。

「へー、ジーってこういうのがタイプなんだいかにもって感じ」

「俺も好きなタイプかも」

「っーか、初恋の奴に似てる」

「好みって似るもんだなー」

見ても、バレなければ……いや、ダメだ。恩を仇で返すつもりか！

写真を見ながらコメントをしていたグラナートが振り返り、私を見つめる。

「っーか……お前にもちよつと似てるな」

「えっ？」

余計気になる事を……！

「結構ちげーけど、まーいっか」

結構違ったらそれは似てると言わないのでは？

そう呟いた所で、ジビエさんはこちらに来る足音がした。

グラナートは急いで写真を懐にしまう。

泥棒の現場を見てしまった。

グラナートを見ると、無表情を装っているけど、少し変な顔をしている。嘘をつくのが得意ではないのかも知れない。

「2人とも、おかわりはいるか？」

「おー。いるいる」

「そうか。紅茶でいいか？」

「おー」

ジビエさんはそれだけ聞いて、また下に戻って行った。
グラナートが安堵の息を吐く。

「も、もしかして盗ったままにするつもりですか？」

「おー」

「い、いやいや……大事な写真かもしれませんし」

「大丈夫じゃねー？」

大丈夫な訳がない……！ 女性の写真ですよ！？

彼女とかの写真かも知れないのに、それを盗っていくなんて現金や宝石を盗って行くより酷いよ！

私の心の叫びは、心の中だけでとどまった。

ジビエさんが再び戻って来る。グラナートが瞬時に私の背後に回り込む。

「？ 何をしてるんだグラナート」

「?!」

「気にすんなー」

と言って、グラナートが私を背後から抱きしめた。

突然の行動に動悸がし始めるが、首にかかった圧力で口を閉ざす。ジビエさんは目を丸くしている。そりゃそうだ。私だって目が丸くなっている事だろう。

「……大胆だな」

「おー」

「……………グラナート」

「な、なんだー?」

「……………いや、なんでもない。俺は洗い物をしてくる」

「おー」

去って行ったジビエさんの背中が消えた後、グラナートは私から身体を離れた。

「ぐ、グラナートさん?」

もしかして私が何か知らない事を言った時は、その腕で首を絞めるつもりでしたか?!

そんなに謎の女性の写真が欲しいですか!? あなた本当に勇者ですか。

こんな勇者は嫌だ。を凝縮したような勇者グラナートを睨むと、何かを確かめるような声色で呟く。

「後ろからだったら大丈夫だったよなー」

「な、何が……」

振り向いてグラナートを見ると、にやりと笑われる。天使みたいな美貌を見て、余計に心臓がドキドキしてきた。

五羽

何で抱きしめられたか解らないまま、グラナートは席に戻り普通に紅茶をすすっている。

外国人って、スキンシップが激しいから、これ位普通なのかなあ。はたして外国人なのか異界人なのか、それともむしろ人間じゃなくてキャラクターなのか……。どれにせよ、抱きしめられてドキドキしているのは私だけで、グラナートからしたら口封じの一手でしかなかったのかも知れない。

「なんかよー」

「は、はいっ!？」

声が思わず上ずってしまうと、グラナートはそんな私を見て笑う。女神をも超える可愛さに目を奪われていると、グラナートは紅茶を置いて私を見る。

「お前、初対面とは思えねーんだよな」

次元が違うから、初対面以外ありえないよ!

という言葉は紅茶と共に飲み干す。

愛想笑いを浮かべ、グラナートを見ると、目を細められる。窓から洩れる木漏れ日が、グラナートの髪を煌めかせていた。

絶世どころか、伝世にも現れない美貌の主の瞳に、ぽかんと口を開いた間抜け面の私が映っている。

「……なー」

「な、何……?」

「この旅が終わったらよー」

超テンプレすぎて、今時は使えない様な死亡フラグのセリフだ。
恋人に『この旅が終わったら結婚してくれ』と言う、もしくは知り合いに『この戦いが終わったら結婚するんだ』と言った人はほぼ100%死ぬという曰くつきのセリフである。

何で勇者がそんなセリフを？

疑問に思いながらグラナートを見ると、桃色の唇を開き――

「俺と結婚しねー？」

「ぺひょっ?!」

勇者自ら死亡フラグを作ってしまうか!?

思わず紅茶を噴き出すと、グラナートが汚ねーなどか言いながらハンカチで拭いてくれた。そのハンカチを受け取り、口元を拭いて行く。

「な、なんで急に……」

グラナートと接して、どれくらい経っているだろう。数時間位しか経ってない。

私は何か彼に、惚れられるような事をしただろうか？

していない。

いったいどんな理由があるんだろう？

「なんか、フィーリング？」

びっくりするほど感覚任せだった。

「……そんな適当に、結婚を申し込むのは、どうかと」

「んーでも、今まで居なかったしー？　ここまでフィーリング合う奴」

私は貴方と感覚が全くずれている気がしてならないのですが！
だ、大体、

「初恋の人とやらは……」

「あの人ジーの恋人だし」

「はあ……って、もしかして」

「んー？」

「その初恋の人に私が似てるから、なんとなく好きなのは……」

女性の写真を見て、初恋の人に似ている。そして私にも似ている。とグラナートは言っていた。こんな急に行き成り唐突に求愛するなんて、『身代り』とかそういうのしか考えられない。

「まー似てるけど。あんま似てねーぞ？　あっちの方が断然綺麗だった」

酷過ぎる事を言いだすグラナートに、どうせ普通ですよ、と呟く。それって、世に言う『妥協』という奴では。

「普通でいーんじゃねーか？」

「感覚で好きになられても、怖いです」

きっとそれは、私が好きなのではない。

初恋が叶わなかったから、そのやり直しをしたいだけなのだと思う。

「感覚って大事だと思うけどなー」

「……なんだか違う気がします」

「違うー？」

「結婚してもっと大切な事だと思います……」

「んー、だろうなー？」

全然解っていないでしょう。

そういえば、グラナートの恋愛観ってすごく可笑しかった気がする。そんな何かを聞いたか見たかした気がする。

「でも一目ぼれとかあるだろー？」

「それは恋人とかですよね！？ いきなり結婚に発展はしません！」

「うちの親、一日で結婚したらしーけど」

「……はっ!？」

一日!？ いや、いや。一日って言うのは、出会ってからとかじゃなくて、友達から始めたとか、そういうのだよね？

「出会ってから一日で結婚したんだぜー。親父が母親に結婚申し込んで、母親も認証」

認証——にんしょう「国語辞典（旺文社）」

1 > 1 < ある物事が法律上、正式であることを認めるおおやけの証明。

それってもしかして既成事実を無理やり作った——ってそれは果たして本当に認証か。正式でも何でもないぞ。法律無茶苦茶破ってるじゃないですか。それとも、その名の通り本当に認証したのだろうか。

「だからお前も俺を認証する羽目になる」

「なんですかそれ!？」

「俺の親は2人とも幸せそーだぜ。子供の入る隙間もねー位」

グラナートの母親は、誘拐犯を受け入れる位の勇氣と度胸の異常なまでの心の広さがあるのではないだろうか。

ゲームのキャラクターに求愛されるというのは、すごく嬉しい事であるとは思うのだけど……。

この、嬉しいに混じるちょっとした恐怖感は何だろう。

「ま、そーいうことだ」

「どういうことですか!？」

この話で納得しろと言いますか?! 無茶ですよ!

一人で納得しているグラナートを睨む。この世に存在してはいけない程の美貌。全てを超越するほどの。こんな人外じみた容姿をした人は、普通の世界には居ない。そーゲームのキャラだからって言うのもあると思う。少し受け入れてみたい気持ちもあるけど、やっぱりダメ。相手はゲームのキャラクター。

微妙な気持ちがぐるぐると回る。

私は、いつか元の世界に帰るかも知れないのだし、やっぱりこの世界の人に恋愛感情を抱く訳にはいかない。

……いや、ゲームのキャラクターじゃなくて普通の容姿の普通のお兄さんからこんなこと言われても、答えは決まっている。

「……結婚の申し出は断ります」

「……ふーん。じゃあ勝負だなー?」

「しょ、勝負?」

簡単に諦めると思っていた私は、きょとんとしてしまう。軽いナンプパと同様だと思っていた。私は断ったら次へ、その人が断ったら次へ。ベルトコンベヤーの様にくるくると廻って行くのかと……。

グラナートはにやり、と不敵に微笑んだ。

「お前が折れるのが先か、俺が死ぬのが先かの勝負だ」

それって私の難易度だけ高すぎませんか……!?

……この人、まさか本当にフィーリングだけで私に婚約を申し込んで、しかも墓まで一緒に入るつもり!?

勇者だよな? ……なにこの勇者。可笑しいよ。

大体、私好かれるようなこと一切してないのに。

六羽

「あ、やべっ！ 時間じゃねーか」

「は？ うわっ」

グラナートに腕を引っ張られ、そのまま階段を下って行く。途中足がもつれて幾度となくコケそうになった。

「あの、なっ、何が」

「あいさつ回りの時間、一時までだったの！」

勇者継承式が10時〜12時までだったと思う。ジビエさんの家に來てからもう一時間も経っていたのか……。うーん。って、今1時10分じゃないか。普通に遅れてるよ。だから、焦ってるのか。階段を下り終わり、厨房が見える。ジーさんが洗い物してる。

「ジー！ 俺もう行くから！」

「ん……？ そうか。気をつけろよ」

洗い物をする手を止めて、ジビエさんがこっちを見る。え、ちょっと待って？ このまま別れるの？ そ、そうだったよね……継承式当日に物語はスタートする。

確か——中盤までここには帰ってこれない。中盤までのプレイは30何時間だったけど、この世界の時間で何日かは解らない。何年かも知れない。

お礼、お礼言わなきゃ。

「まっ、グラッ」

制止の声は、グラナートの手に飲み込まれた。

「悪いが聞いている時間はない」

紅の瞳が私を一瞥した後、腕から手を離す。あ、よかった。離してくれたと思ったのも束の間——ひょいっと持ち上げられた。俵を持つように肩に……え。

「ちょ、あの……!」

「お前トロイからこっちの方が早い」

さっき何回かコケそうになったのバレてたのか! じゃなくて、この持ち方に疑問を感じるけど、それよりジビエさんにお礼を——うわあ?!

決意して顔を上げ、ジビエさんを視界に捉えたその時、グラナートが駆け出した。ガランガランと鐘が音を立てる。お礼を言う間もなく、ジビエさんの姿は私の視界から消えた。

……お、お礼すら言えないの?

傷心する私だが、最後に見たジビエさんの顔が脳裏に過る。

——笑ってた。

仕方ないな、こいつ。みたいな顔でグラナートを見ていて、私を見て苦笑した。私の読心術から言わせてもらうとアレは『こいつを頼むよ』みたいな笑みだと思う。

……そうだと思う。そう思おう。

ジビエさんにお礼をするには、グラナートを守るしかないと言う事。と、私は決め付ける事にする。

生憎私はチートな能力が備わっている。呪文捉えただけでドーン! とラスボスすらも倒してしまえるかもしれない。それで守られるグラナートは複雑かも知れないけど、絶対に——死なせない。

中盤にここに戻ってくるまで、グラナートを死なせないよ……ジ
ビエさん！

ヴァイス共和国までは……！

……そんな心の誓いも数分で、車酔いの様な気持ち悪さで薄れて
行く。……この子一人で大丈夫じゃ、うう……うえ。下ろして貰い
たいけど言えない。

言っても取り合ってくれないだろう。諦めて気持ち悪さと戦って
いると、グラナートが扉を蹴り破り、家の中に入って行った。え、
ついた？

「グラナート！ 遅いぞ！ うん？ ……そ、そのお嬢さんは？」

グラナートが私を下ろす、気持ち悪さからそのまま座り込みそう
になると、誰かが私の腕を掴んだ。

「あ、ありがとうグラナー……へっ！？」

腕を掴んで起こしてくれたのは、グラナートじゃなかった。

長い前髪から覗くアメジストみたいな瞳と目が合う。肩にかかる
男の人にしては長い紫色の髪。グラナートの様な中性的な美しさじ
やなく、いわゆる男の人の最上級の顔。……こ、この人は。

「……、あつ、ありがとう……ごさいます」

思わず頬が熱くなる。その人は私から手を離し、壁に背を預けて
腕を組む。

カッコイイ。と思ってしまうのは仕方ない。

この人は——私が小学校の時に一番好きだった人^{キャラ}なのだ。

「おい、あ……名前しらねえや」

何かを誰かと会話していたグラナートが呟いた。

肩を掴まれて振り向かされ、いかにもめんどくさそうな顔をしたグラナートと——まるでダイヤモンドの様なキラキラした銀髪を持つ女性を瞳に映す。

……綺麗な人だなあ。白髪と対になっている少したれ目な漆黒の瞳が綺麗なコントラストを描いていて、グラナートをお似合いのふんわり美女だ。

「お前、名前何だっけ」

銀髪の美女に目を奪われていると、グラナートが私の顔を覗き込む。……あの子も、ものすごい美女なんだけど、グラナートの方が美しいって言うのはどういう事なんだろう。

そんな人が、名前も知らずに結婚を申し込むという変な事をする事実を再確認して、私はなんとも言えない気持ちを抱く。

「あ、私の名前は——」

名前を名乗ろうとして、口詰まった。名前を思い出せない訳ではない。頭の中では何度も言える。……でも、口に出せない。ジビエさんの時にも一度あった。何で？ どうして？ 記憶を探ると、その返答が返ってくる。

ブルー——オワゾー・ブルー・アンペラトリス青い鳥の女帝だ。彼女の名前は青い鳥の女帝ではない。この名は通り名で、本名があった筈だ。だがそれを、ブルーは名乗れなかった。アニメで、ブルーがグラナートと出会って名前を名乗ろうとするシーンがある。でも彼女は名乗れない。

その理由は——メーアヒエン魔力の中核。魔力の中核を体内に宿らした物は、

自分の情報を一切公開できなくなる。魔力の中核を狙う者から逃れる為に。

……こ、困った。困った困った。何が困ったって、名前を言えない理由に悩んだこの数秒の所為で、グラナートを筆頭に部屋の中にいる人全員に訝しげな視線を向けられている事だ。

「おい、何止まってんだよ」

「えっと、あの……」

偽名だ、偽名を考えろ。時間は数秒だ。五秒以内だ。

どうせならカッコ可愛い名前がいい。……出てこない。どうしよう。

俯いて考える。出てこない。山田花子は流石にダメだろう。

「グラナート、よさんか。名前が言えぬ身分の方かも知れん」

ありがとう、誰か解らないけどありがとう！ イケメン声の人ありがとう！ そう思い顔を上げて——視界に入っただのは銀髪の美女。ううん？ あれ？

その女性が口を開く。

「すまん、グラナートは少し配慮に欠ける所があるのだ。しかし素直で綺麗な心の持ち主なのだ」

「……は、はい」

……えっと、あれ？ あれれ？ ……誰か天の声みたいにアフレコしてるのかな？ そうだよな？ 美少女からいかにも男なイケメンボイスが聞こえてくる訳ないよね？すごい低い訳じゃないけど、絶対男だってカッコイイ声が聞こえる訳ないよね？

……というか、この人だれ？ 全く印象がないんだけど。印象に

……あーっ！

印象にないで思いました。そうだ。この人初期メンバーでありながら印象が薄い人だ！ ゲームでは活躍したらしいけど、アニメでも漫画でも超人気俳優が演技してるのにひたすら印象の薄い人じゃないか！

……なんて失礼な思い出し方をしてしまったんだ。ごめんなさい、そして名前はやはり思いだせない。

七羽

「ワシの名は、ディアマンテ・ソーテリアー。長くて呼びにくからう。ディアでいい」

「あ……はい。私の名前は……」

いつもの調子で名乗ろうとしても名乗れなかった。
銀髪の美女——もとい美青年ディアは柔らかに微笑む。

「無理に名乗らんでもよい。グラナートに聞いたぞ、お嬢さんも旅に付いてくると言う事を」

「は、はい……」

「して、どこまで付いてくるつもりだ？」

「一応、ヴァイス共和国までです……」

「ふむ、そうか」

ディアは顎に手を当てて目を瞑る。
サ克蘭ボみたいにぷるぷるした綺麗な唇を開く。

「お嬢さんは、戦えるか？」

「……え、えっと……」

チートな能力が私の中にある事は知っている。
でも、それが使えるかはまだ分からない。どう答えようか悩んでいると、家内の扉が開いた。三十代位の綺麗な女性と、いかつい男性。もしかして、あの綺麗な女性が……結婚を一日で受け入れたという猛者か。

「そろそろ出ないとダメなんじゃないの？」

黒髪のふわふわした猛者が首を傾げる。

グラナートがめんどくさそうに髪を掻き、頷いた。そんなグラナートめがけて、いかつい人が何かを投げた。グラナートはソレをカッコ良くキャッチする。

「……大剣？」

「持ってけ」

「おー、サンキュー」

……あのいかつい人はグラナートの父親だろう。髪紅いし。父親が息子に剣を渡すって一大イベントだと思うのだけど、なんですかそのだるい感じ。感動のかの字もない。

「じゃー行くか」

「そうだな」

紫の君（大好きなキャラだったのに名前が思い出せない）も頷き、……家を出ないといけない状況になった。

グラナートは早々と扉を開けて外に出て行ってしまった。紫の君もそれに続く。

「行くぞ、お嬢さん」

「は、はい……」

ディアに誘われ、私もグラナートの家（多分）から出た。

颯爽と歩いて行く三人に付いて行く。……街行く人の視線が痛い。

下を向いて歩いて、数十分。三人が立ち止った。視線を上げて目に入っただのは、馬車屋と書かれた看板。

この国は、小さな国なので列車とか交通手段は殆んどない。海沿いなので船はあるのだけど、漁師が使用するだけで……その船では違う国にはいけない。

だから、交通手段は各国に90%ある『高給馬車』しかない。魔術で防御されたこの馬車は、モンスターがいるダンジョンを走ってもモンスターに攻撃されないのだ。

しかし……百回に一回、超強いモンスターが現れて攻撃をされる時もあるらしい。ちなみにその場合、馬車の弁償代（超高額）を請求されるらしい。鬼畜だ。

……そして、その馬車は片道日本円換算で一万程度。グラナートの初期の全財産は三千円である。換算と言っても、この世界のお金と値段は一緒に円が一パス（pass）に変わるだけだ。

ああ、思い出してきたぞ。世界のお金と言っても、○○大陸でお金が変わるのだ。ここはパスだけど、ペになったりパクスになったり。うっかりお金を変えてなかったりして、後払いのホテルに泊ったりすると手伝いをさせられるのだ。そんな実況動画を動画サイトで見た事があった気がする。しかもその日はボスと対戦した後だったりして、どうにも言えない哀愁がメンバーの背中から漂っていた。『何で誰かを変えに行かせないんだよWW』というコメントがいっぱいあったと思う。私もそう思った。でも仕方ない。ルートは鬼畜RPGゲームなのだ。

「もしかして、この馬車に乗るんですか？」

「はー？ バカ言うな。馬車乗って勇者が旅に行けるかよー」

「国から出るには、ここしかないのだ」

ディアが優しく説明してくれる。グラナートは呆れたように私を一瞥してから、中に入った。私達も後に続く。

「お、勇者御一行じゃないか」

「おー、出口借りるぜー」

「世界、頑張って救ってくれよ！」

ぶにとした男の人がガハハと笑い、受付からグラナートに話しかける。

グラナートはおーと言い、軽く流し出口に向かっていく。

「王子も……お怪我のないように」

「ああ、行ってくる。任せておれ」

力強く頷くディアに、その男の人は複雑そうな表情を浮かべる。王子が旅にいくのは、やはり不安なのだろうか。

グラナートはすでに外に出ていて、ディアはもう一度強く頷いてから外に出た。

私もそれを慌てて追う。紫の君は、後ろから無言でついてきていた。喋らないなあ。さすがクール。

扉を開けて――目に入ったのは、広大な草原。山や海が見える。左側に海、右側に山。中央には整備されて土が見える道がある。この道の通りに行けば、きっとどこかの国に着くのだろう。

「……これぞ、ダンジョン」

「ダンジョン？」

「ごめんなさい、独りごとです」

ただダンジョンに出ても、一人にまとめられないのはさすが現実

と言う感じだ。

大体のゲームでは、ダンジョンに出た瞬間いつのまにか一人にまとめられるのに。

特に歩調も合わさず、さくさく歩いていたグラナートが振り返った。

「そーいやお前の名前なんな訳ー？」

「アメテュステウス・ドクトリーナだ」

「長いからアメでいいー？」

「構わない」

「そーか、俺はグラナート。確かお前、国が雇ったかなんかの魔術仕だったよなー？ まあよろしく」

……よろしく言った割には全く興味なさそうだ。アメさんはああ、と頷く。が、こっちも興味なさそうだ。なんだか相性悪そうだなあ、この二人。

八羽

少々速足なグラナートに合わせ、隣に並んで歩く。

暫く歩いた所で、茂みが揺れて、変な物体が出て来た。私の頭の中にはバトル突入の激しいBGMが流れ出すが、その物体を見てぴたりと止まる。

「ウナギ……？」

モンスターと言っているのか良く分からない物体を見ると、そのウナギが身体をくねらす。ウナギの4倍程ありそうな謎の巨大ウナギ。

モンスターならば怖がらないといけないはずなのだけど、どうにも巨大なウナギしか見えなくて警戒心が湧かない。

「何ぼさつとしてんだバカ！」

グラナートが大剣を抜き、ウナギに切りかかる。ウナギは青い液体をまき散らす。えぐい。こんなモンスター居たっけ？ 居た様な気がする。ああ、うん居た。雑魚モンスターだ。私も倒したことがある。グラナートを操作して。――そのグラナートが自動でしかも等身大で動いているのを見るのはなかなか感慨深い。

「……ピュール」

低く、世界に溶け込むようなアメさんの声が後ろからしたと思えば、火の球がモンスターを攻撃する。

炎の魔法だ。ちゃん、と金属がすれ違う音がする。振り向けば、

懐中時計を手に使っていた。

「ピュール」

モンスターが燃える。

「ピュール」

モンスターが燃える。

「ピュール」

そ、そんなに炎で攻めないといけないかなっ!?

ウナギから『もう炎はやめてくれ』という声が聞こえる気がしてならない。海の生物(?)に火攻めは可哀想すぎる。確かに、プレイしてる時だと、同じ魔術使ったりするけど!

実際見ると、何か辛い物があった。

モンスターは燃え果てて、焦げて動けなくなる。勝ったらしい。グラナートはその屍に剣を突き刺し、ざくざくと屍をえぐっていく。えぐい。えぐすぎる。死者への弔いの気持ちはないのか。

「おっ、チョコ発見」

「ももももしかしてそれ食べるつもりですか……!?!」

「包装されてるから大丈夫だろー?」

「……ッ」

RPGをプレイした人なら解ると思う。

モンスターを倒せば、アイテムを貰えるシステムに大体のRPGはなっている。

その秘密を、考えた事はあるだろうか……私は、考える直前でや

めた。

だって、ほら——うん、これしかないじゃないか。
見たくない現実から目を背け、巨大ウナギを心の中で吊った。

その後も、モンスターが数匹出てきたが——全て倒し、勇者は全ての死体（の中身）を暴いていた。えげつない。

ディアは終始困った顔をしており、攻撃はせずに回復だけしていた。そう言えば、ディアって初期は回復しかできてなかった気がする。

一言で言うとか散散としていた。

——国についての感想は、それだった。

田舎の奥にある田舎と言えはいいのだろうか。家がポツポツとしがなく、国と言うよりは村で、家は全てログハウスだ。

……ゲームだと、何でも国に見えるけど、実際に来てみると……。確かここはアイテムを買ったり、モンスターでレベル上げるためだけにあるツナギの国だったと思う。製作者手抜きすぎでしょう。

「じゃー、宿でも捜すか」

「そうだな」

「……」

グラナートが宿を探すために歩きだした。

製作者の手抜き工事の国を見ながら、私はルートの内容を思い出す為に思考する。

だいぶ、思い出しては来た。

プレイの仕方によってパーティメンバーが8〜11人になったり、桃色の頭の女の子がいたり、虹色の髪の子がいたりしたことは覚えてるんだけど……。

肝心のストーリーが思い出せないけど、唯一——救いがない事だけは覚えている。

ストーリーが進んで行けば行くほどに、救いがなくなっていくのだ。それが鬼畜ゲームと言われる所以の一つでもあった。

「おい、何ぼーっとしてんだよ」

「へっ!？」

「ついたぜー?」

グラナートが顎で宿を指す。……宿? 宿というよりは民家だった。あ、でも2階建てだ。民宿なのかな……。我が物顔で民宿に入って行くグラナートの後続き、中に入る。1階にはカフェみたいなのがあった。こんなところ、林間学校とかで来た事がある様な。

「そう言えば……ここの王様、か何かに、印押して貰わなくてもいいの?」

横のディアに話しかけると、白銀の髪を揺らして楽しげに笑う。
……なんだこの美少女は。

「ここは一応ビオレータ国の管轄内に入る。むしろ国と言うよりは村と言った方が正しいやもしれんな」

喋るとイケメンでお爺さんなんだよね……。顔見て喋ると吹き替え間違った映画見てる気分になる。失礼だけでも、こんなに全てが噛みあわない人は初めて見た。

受付を済ましたグラナートが戻ってくる。アメさんは一步下がって私達を見ている。

「部屋は上だとよ」

「ご、ご案内します……!」

グラナートの背後から茶髪に緑色の目を持つ少年が顔を出す。……居たっけ、こんな子。可愛いなあ。小さいなあ。小学生低学年って所か。

「いや、後でいー。買わないといけねーもんもあるからな」

「必要な道具なら、ここで買えますっ」

少年がぐっと手を握ってそう力説する。この店の子供なのだろう。きつと。

宿とアイテム屋を兼ねているなんて、すごい事だ。誇る気持ちを解る。

九羽

一応国を探索することになった。グラナート曰く『めんどくせーけど、貰えるもんは貰っとく』らしい。クーストンとビオレータは交友関係があり、ビオレータの勇者はクーストンの勇者でもあり、こちらの人も皆グラナートを応援している。

だからさっきも宿屋の店主が朗らかな笑顔で謎の物体をくれた。ディアによると、敵のHPMPが解る様になるお便利グッズのとことだ。

「挨拶も兼ねなければな」

「あー、ジョニーとかマイケルとかなー」

その人達は絶対村人AとBの位置の人だ。
そんな失礼な事を思ってしまった。

「ここであるな」

グラナートがノックもせず、木の扉を開けた。THEログハウスの家の中もTHEログハウスだった。

お茶をしていた男2人が、きょとんとした顔で私達を見る。きつとジョニーとマイケルだ。想像通り、薄い。ゲームのキャラクターなのに現実にも普通に居そうな2人が、叫ぶ。

「「うおおおっ！ グラナート！」」

「よー」

片手を上げて、グラナートは寄ってくる2人の肩を叩く。グラナ

ートの顔は見えないけど、きっと今笑顔なんだろう。

「勇者の恩寵！」

「俺この服一生洗わない！」

「うぜー」

ケラケラ笑うグラナートと、マイケル&ジョニー（多分）いかにも友達なノリの2人は、グラナートとかなり仲が良さそうだ。

グラナートが友達って事は、ディアの友達でもあるのだろうか、とディアを見ると、笑顔を浮かべているがどこか寂しそうだっ

た。2人はディアには目も向けず、グラナートと楽しそうに笑っている。グラナートとディアはタイプが違う。グラナートの友達がディアの友達とは限らないか。

「カッコよかったぜ、勇者継承式！」

「てめーら居たかー？」

「ひでえ！ 俺が一番輝いてただろ！」

「一人だけ私服だったからな」

「うっせえ金がなかったんだ！」

そういえば、1人私服の人が居た。この人か、足元しか見えなかったかし、顔もあんまり覚えてないけど、多分この人だ。

「でも勇者様がなんでまた、こんな辺鄙な土地に」

「道なりにあるんだから来るだろ。それより泊っていくか？」

「おー、一応。このままヴァイスに向かってもいいーけど。今日はおつかれたし」

「継承式当日だもんな」

「勇者っぽかったよな。グラナート……」

「昔の面影なんてなかった……」

しみじみと2人は懐かしみながら呟いたかと思うと、膝をついた。2人同時に、顔を見合わせたかと思うと、がくりと。そのまま頭を下げる。いわゆる土下座だ。

「ずっと女の子扱いしてすみませんでした……！」

悲痛な声で、2人は頭を床に擦りつける。

「いや、べつに謝る事じゃねーだろ」

うざかったけど、とグラナートは呟く。2人はガバリと頭を上げたと思うと、輝かしいばかりの笑顔になる。

「そうだよな！ 絶世の美少女グラナートが悪いんだ」

「だよな。学校の誰よりも綺麗で美しくて可愛くて麗人なんて言葉でも足りない位のグラナートが悪い」

「学校中の男から恋焦がれてたもんな。女子なんて眼中に入らなかった……」

「そうそう。女子なんてグラナートの前では、月とスッポン程の差があった。こっそりの行われてたランキングも殆んどグラナートが制覇してたよな。可愛いランキングとか、綺麗ランキングとか、恋人にしたい女子ランキングとか」

「てめーらそのまま床に頭埋め込め」

NPCの男女の概念を壊さすとはさすが主人公。

グラナートはフン、と踵を返す。拗ねた顔も可愛い。自分が男子で、こんなのがクラスにいたら劣情も抱いてしまうだろう。バカな事を考えてグラナートを見ていると、視線が交わった。——かと思うと、2人がグラナートの足に腕を巻きつける。

「嘘、うそうそうそ！ すねんなつて！」

「バカ野郎、何真実を言ってるんだ。俺は嘘をついたぜ。実は女子も好きだった。グラちゃんも妄想の世界にだけにとどめておいた」

「お前、大人だな……」

「死ね変態共」

2人の脇腹を蹴り上げ、グラナートは2人を睨む。

何が大人なんだ、というツツコミは心の中にとどめておく。

思わず笑ってしまいそうなら、会話だけど、グラナートにとっては衝撃だろう。友達が自分（男）を女として見ていたのだ。

2人は笑って立ち上がる。なんだ冗談か。

「まあ冗談はさておき、今日はどこに泊るんだ？」

「宿だ宿」

「まったく、と悪態を付きながらグラナートは答える。ジョニー……？ あれ、どっちがジョニーでマイケルだろう？ はここでやっと、私達の存在に気付いた。他の者を霞ませ、消す程のオーラがグラナートには備わっている。だから気付かなかったのだろう。多分、グラナートの背後に見える光る薔薇（少女漫画みたいなやつ）で私達が隠れていたのだ。」

「……王子じゃないですか」

「王子ですね……やっぱり、旅に……」

声色と雰囲気が変わる。軽薄な雰囲気が消えて、2人はどこか悲しそうな顔でディアを見た。

十羽

あの後、2人は終始ディアに気を使っていた。やはり王子というのは、そういうものののだろうか。ちゃんと接した方がいいのかな？ 王子として――。

でも、ディアはディアと呼んでって言っていたし……、うん。普通に接しよう。

宿に戻って来た私達は、少年に二階に案内してもらった。少し緊張気味の少年が振り返る。

「あのっ、ゆ、勇者様……！」

少年が目を輝かせながらグラナートを見る。ああ、緊張していたのはそういう理由なのか。そりゃそうか、世界を救うかもしれない勇者が来たら緊張もするだろう。

「あー、何？」

「せ、世界をす、救ってください……！」

少年の瞳はキラキラと光っている。私はこの世界の不幸さがよく分らないんだけど、こんな小さい子供までが心配する世界状況なのだろうか。それにしても、好奇心半分って感じもあるけど……。そんな少年をだるそうに見て、グラナートは口を開く。

「……世界を救うー？ そんな事はしらねーよ、俺は言われた事をやるだけだ」

……勇者だるっ！　だるくない！？　世界を救えと言ってる貧困な子供に向かって何そのセリフ！？　……ああ、思い出した。思い出してきたぞ、そういえば公式サイトのプロフィールの所のセリフ、コレだった。

だるだる勇者ってあだ名もつけられてたし、反抗期の兄貴ってあだ名もあった。それがグラナートの性格だし、仕方は無いのだけど……。

子供が今にも泣きそうだ。私の中のへたれ心の中に無理やり押し込め、グラナートに近づいて裾を引っ張る。

「んー？　何」

「な、何じゃありませんよ！　子供に期待されてるんだから、もう少しこう……勇者っぽい事を！　泣きそうじゃないですか！」

子供に聞こえない様に小声でまくしたてると、グラナートがきょとんとした顔をする。夕陽を凝縮したような綺麗な赤い瞳が見開かれ、私を映してから少年に映る。

「男がすぐ泣くな」

「ちょ、ちょっ……！」

な、何で傷口に塩を！

「う……っ」

「あ、ああ……大丈夫、僕？　大丈夫、大丈夫、このお兄さんはただの反抗期だから」

瞳にいっぱい涙を溜めた少年をあやす様に顔を覗き込み、頭を撫でる。後ろから『誰が反抗期だよ』というグラナートの呟きが聞こえるけど一旦無視だ。

少年は少し驚き、緑色の瞳でじーっと私の顔を見たかと思うと、私から目を反らした。

「ありがとう……お姉ちゃん。大丈夫、僕が弱いからいけないんだ。僕、立派な男になって、自分で世界を救うよ」

少年はそれだけ言って部屋を去って行った。……なんでやねん。という突っ込みが思わず口から洩れそうになった。NPCだからか、NPCだからか！？ だからなんかおかしいのか……！？

さっさと話を切り上げて帰りたいです、みたいな感じがプンプンした言葉だ。何故か脳裏に、ウザイ上司からご飯を誘われて無理矢理断るサラリーマンが浮かぶ。

「なんだったのだ？」

「別にいーだろ興味ねー。それよりよー」

グラナートが私の腕を掴む。

「お前、名前言えねーんだろー？」

「……は、はい」

グラナートの脳内から、既に少年の事は消えているらしい。勇者にとって貧困な国の子供というのは、もっと意味合いを持っていると思うけど……。

「ならあだ名決めねーと」

「……あ、そうだね」

偽名考えるの忘れてた。……そっか、あだ名つけて貰えばいいのか。

グラナートはベッドに座り、眼を細めて私を見る。吟味されてるような視線が恥ずかしい。真剣な顔をしている。どんな素敵なあだ名を考えてくれているのだろう。

「ポチとかどう？」

「……」

薔薇のつぼみの様な唇から発せられた言葉に、私は絶望感を隠しきれない。

「グラナート、女性にポチはなからう！」

「じゃーコロとか」

日本の犬の名前ベスト三から拝借してるとしか思えない名前である。次はハチだろうか、それとも太郎か。

「それかークロとか」

次は猫だった。そろそろ泣いていいだろうか。私の代わりに怒ってくれているディアのお陰で、どうにか持ちこたえているけどそろそろ泣きそうだよ！

だ、大体――グラナートは私に求愛したよね？ 将来の妻のあだ名が『ポチ』『コロ』っていうのはどういう事ですか。未来の妻のあだ名は犬と同等で構わないのか。勇者どころか、人間としても何か疑問を感じる。

「……全て、却下で」

「じゃーお前が決めるよ」

ふてぶてしく、グラナートが私を睨む。不満そうだ。犬と猫の名

前百選から選んだ名前は、頑張って、私らしさを重視して選んでくれたのかも知れない。そちらの方が辛すぎる事実だ。

十一羽

「その女は次の国までの付き合いだろう。ならばあだ名など必要なのか」

というもつともすぎるアメさんの言葉により、私のあだ名決めの話題は終わり、次の話題に移る。

「ベッドの事だな、」

「そー」

ベッドを見る。一人でも大の字で寝れない小さなベッドだ。2人一緒に寝れば、さぞくっつかなければいけないだろう。

「私別に椅子でも床でも……」

元々イレギュラーな存在だ。ベッドを使うつもりはない。そう思い、グラナートにそう告げると、呆れた顔をされた。

「ばーか、んなだせー事できっかよ」

男前な答えに、少し胸がときめきそうになった時、グラナートが宣言する。

「ま、2…2が妥当だな」

「……は？」

いや、道理である。4人だから2…2というはかなり妥当で道理

だけど……。

椅子に座っているディアが苦笑する。壁にもたれ、腕を組んでいるアメさんは何も言わない。

「なんだー？ 一人でベッド占領する気かー？」

「……いや、だって、あの」

三人を見る。

グラナートⅡ顔は女性的だが180センチはあるまぎれない男。アメさんⅡどっからどう見ても男。

ディアⅡ見た目だけは女。声はイケメン、喋りはお爺さん。

……答えはおのずの決まった。

「……なら、ディアがいいです」

「却下」

「何ですか！？」

「それだと俺がアメと寝る事になるじゃん、なんか嫌」

「……な、だ、ださいとか……その」

「女が床で寝て男がベッドで寝るのがダサイって思うだけで、どっちもベッドで寝るなら条件同じだろ」

……そんなバカな。

「お前の選択肢は、俺と寝るか俺と寝るかの2択。どっちでもいいーぜ、俺は」

「すみません、聞き間違えました。もう一度お願いします」

気のせいかな……2択って聞こえたのに、選択肢はオンリーワンだった気がする。

「だから、俺と寝るか俺と寝るか俺と寝るかの3択だ」

「それはただの1択です!」

一つ増えた様に見せかけると言う悪質な手口だ。勇者がそんな小悪党が使うような手口を……、果たして彼は本当に勇者なのか。

「なんだよその顔」

「……いや、あの、男の人と寝る位なら……床で寝た方が……いいです」

「はー?」

睨まれた。しかし私だって譲れない。

しかも相手は結婚を申し込まれた相手で、その父は1日で無理やり結婚させた天上天下唯我独尊のよく解らない人だ。

「恋人でもない異性と一緒に寝るのなんて変ですから……」

「……ふーん」

グラナートが低く呟くと、ため息をが聞こえた。

「……自分は寝ずの番する。女、お前が一人で寝ればいい」

「あ、アメさん!」

救世主だ。少し険悪な雰囲気は、その言葉で中和される。

「あー、じゃあそれで決定。ディア」

「ワシは別に何でもよい……ただ、ワシも異性と共に床をとるのは憚れる。助かった」

え、そうなんだ。なんだか意外。

あ……もしかして——グラナートはアメさんが嫌とかじゃなくて、ディアのそういう性質も理解しての選択肢だったのだろうか。それなら意味合いが変わってくる。

グラナートはだる気にベッドに腰掛ける。……さっきの子供の事もそうだけど、グラナートって言動でものすごく損してる。唯我独尊っぽく見えるけど、本当は優しいのだろう。なのに言動がキツイからマイナスなイメージ付いてしまう。気の使い方も解りにくいから理解できない。勿体ないなあ。でも……。

「？ んだよ」

グラナートが首を傾げる。

——そういうところが、解れば好きになるんだろうな。

「いえ、なんでも」

思わず微笑むと、首を傾げられる。

でも——好きになったからと言って結婚を認証するかと聞かれれば、話が変わってくる。

ベッドは私が一人、グラナートとディアがペア、アメさんが寝ずの番と言う事になった。宿で寝ずの番って必要なのだろうか。一応『眠くなったら変わりますから!』とは言っておいた。ものすごく悪いけど、今回は一人でベッドを使わせてもらおう。今回だけなのだし……。

「あ、そうだ……お三方に聞きたい事があったんです」
「んだよー?」

「何だ」

「……」

隣のベッドに座ってるグラナートと、椅子に座ってるディアが私を見た。壁に背を預けているアメさんは私を一瞥してから、また眼を瞑った。

「えっと、魔術の使い方です」

「はあ？」

「……」

「……」

「え、ま、まずい事言いましたか？」

グラナートがぐいっと上半身を乗り出す。ベッドとベッドの間に隙間があるから、そこまで近くないけど……結構近くなって、思わず顔を引いてしまった。

十二羽

「お前魔術使えねー訳？」

「……っ、使えないと………思います」

「あー、ミールの血族ではあるだろう？」

「み……ミール？」

ミールって何だっけ。あつたよ、ルートにそんな用語あつた気がする。ミール、ミール。ミール……。

「ミールしらねーって、大丈夫か？」

「ちょ、ちよっと私記憶があいまいでして……」

「ふーん。ミールって言うのはなー、……」

私を見て、天井を見てから、グラナートはディアに視線を移す。

「俺説明嫌い」

「……ミールと言うのは、古代のアルシュに一番多い種族で……^{世界}現代でも魔術を使える者をミールの血族と言うのだ」

ディアが苦笑しながら説明してくれた。グラナートは元の姿勢に戻り、上着（勇者継承式で来てたひらひらマントの奴）を脱ぎ棄てる。そんな適当に扱っていいのか。たたみたい。たたんで椅子に置きたい。もしくはかけたい、ハンガーに……。ハンガーがない。そんなバカな。

「といっても、世界の8割はミールの血族だ。魔術が使えぬ方が、稀なのだ……」

「え、そうなんですか？」

「昔に比べれば、血の純度が落ちて力は衰えているのがな……」

「へえーそうなんですか」

何故かディアの顔が曇った。？　なんでだろう。頭を傾げると、ディアが唇に指をあてる。……美少女にしか見えなくて困る。なのに声がイケメンだ。どうして……こんなことになってしまったのだろう。神様が間違えたとは思えない。……いや、確実に人間の意思か。

「魔術の使い方だったな。ふむ、お嬢さんはミールの血族……なのだよな？」

「は、はい……多分」

魔力はあるのだから、そういうことでもいいのかな。ここで違いますと言ったら『なら魔術は使えん。諦めなさい』と言われそうだからそう言ったけども。

「ならば、共通言語と共にミール言語を覚えさせられただろう」
「……」

私は日本語しか覚えてません——とは言えない。冷や汗をかく私に、ディアが黒い瞳を丸くする。

「覚えてないのか？　……ならば、難しいな。今から覚える事もできるが、新しい言語を覚えるのは大変だ」

「出来ねーことはねーけどな」

ディアが簡単に説明してくれる。

魔術を使うにはミール言語古代言語を使わないといけなく、それ以外で魔

術は使えない。しかも呪文を覚えるにしてもその言葉や発音だけを覚えても使えず、ミール言語全てを一字一句間違えずに記憶し、完璧な発音をしなくては魔術が使えないらしい。……何その超難易度。なんでこんな所まで鬼畜なの？ プレイヤーだけじゃなくて登場人物にも鬼畜ってどういう事？

チートな能力の意味の無さに絶望していると、ディアが口を開く。

「もつとも、……血の純度⇨魔力であるから、純度の高い者は勝手に魔力が補ってくれる……呪文の意味と発音さえしっかりしてれば――」

「ディアマンテ」

ギロリ、とグラナートがディアを睨んだ。え……何？

「この話は終わりだ。ほら、晩飯の時間だろー。催促してくる」

「えっ、ま、まだ6時……あれ、6時ならいいのかな」

壁にかかっている時計を見ると6時だった。もうそんなに時間が経ったのか。びっくりしている私を尻目に、グラナートはディアを引っ張って、下に降りて行った。

私は2人の姿が消えたのを見計らって、アメさんに話しかける。

「……？ あの」

「……なんだ」

「ディアは、何か変な事を……言いましたか？」

グラナートが怒る様な事を言ったのだろうか。

全く思い当たらない。血の純度が高いから何なのだろう。私は日本人純度100%だ。もしかして血の出る思いをしてミール言語とやらを覚えても、魔術が使えないかもしれない。

アメさんはため息を吐く。

「……気づいてないのか」

「な、何がですか……」

「ディアマンテ・ソーテリーアー……この名を聞いて思い当たらないのであれば、言う事はない」

そう言ってアメさんは目を閉じてしまった。何で座らないんだろう。じゃなくて、ディアマンテ・ソーテリーアーね。……うーん、どこかで聞いた事はある。ゲームやアニメで？ いや、そうじゃなくともっと最近？ 思い当たる事？ ……お爺さん喋り？ ……ん？ なんか、いなかったか？

——首長、ガジエラ・ソーテリーアーの御成りです。

……えーっと、アレ。名字一緒……偶然だなあ……な訳ないか。って言う事は、え、ディアはあの偉そうなお爺さんの孫？ 息子？ ……ええ？！

「え、あの……ディアって、王子ですか」

「……ああ」

……？ だからなんだと言うのだろう。

「えーっと……あ、王族だと血の純度が高い、とか？」

ため息をつかれた。違うってことか。うーん、なんだろう？ 頭をひねらしていると、扉が開く。

「……夕飯出来てるってよー。……何話してたんだ？」

「え……えっと」

ディアの事です。とは言えない雰囲気だった。ディアを見ると儂く微笑まれる。

……何なんだろう。全然解らない。

「……他愛もない事だ」

アメさんはそう言ってグラナートの横をすり抜けて下に行ってしまった。そっか、夕飯が出来たのだから下に行かないと。

私も立ち上がるとうすると――

「へっ?!」

――押し倒された。手を掴まれて、ベッドに縫いつけられる。赤い髪が、私の頬をくすぐる。……え。え、何、え。

前髪と逆光の所為でグラナートの顔が見えなかった。

十三羽

「……え、あの……」

「ぐ、グラナート!? な、何をしているのだ破廉恥な!」

ディアの焦った声が聞こえる。グラナートが私の腕を掴む手の力を強めた。

「いっ……」

「……崇る」

「はっ?!」

「禁術使ったら崇る」

「き、禁術……?」

な、何を言ってるんだこの人は。グラナートが何を言ってるのか分からなくてうろたえていると、掴む力が強まった。痛い痛い痛い! な、なんなの。なんなの行き成り!

禁術って何!? その名の通り禁術? 『禁術』というワードで検索するけど出てこない。こんな事されて冷静に考え事なんて出来る訳がない。

私は腕を掴んでいる手にグラナートの触れた。

「……解ったか」

「わ、解りました、解りました!」

全く意味が解らないけど、とりあえず頷くと腕が離され、グラナートが私の上から退く。ため息を吐いてから、頭を掻いた。

「あー、悪い……」

「い、いえ」

「……頭冷やしてくる」

「え、は……ハイ」

グラナートはそのまま部屋から去って行った。何だったんだろう。意味が解らない。首を傾げると、ベッドが人の重みで沈んだ。横を見るとディアが。……身長は10cmも変わらないと思うのだけど、座って並ぶともものすごく変わるのは何故なのか。そんなどうでもいい事を考えながらディアを見ると、ディアが私の腕に触れる。びくりと身構えてしまった。

「すまん……。ワシのせいだ」

「へ？」

「……パルマコン」

ディアの手が光り、私の腕についていた手跡がなくなる。……これが魔術か。相変わらず言ってる事はカタカナでしか聞こえないけど、古代言語で意味があるのだろう。

「ありがとう」

「いや……」

ディアが私の腕から手を離し、目を伏せる。長い睫毛が頬に影を作っている。……ん？ あれ？ ディアの目を近くで見て、違和感を感じた。なんだろう。ディファインしてる女の子の目というか、なんと言えいいのか……合っていない？

「ワシのせいで、グラナートには辛い想いをさせている」

現在進行形？ ……どうしよう、こんな事を言うのは、いや本人を目の前に考える事をすら悪いのだけど……。

ディアの印象が全くない。ルートで印象があるのはグラナートとアメさん、後ピンクの髪の子だけだ。……なんか金髪やら虹色の髪色の人も居たと思うけど、名前も顔も思い出せない。でもそれも仕方ない。アニメは全24話で、途中省略されたやら出てこないキャラ居たわ、それなのにゲームに忠実にしようとするからカオスな事になってて……。確か中盤から視聴率すごい悲惨な事になってた筈だ。それに漫画はご都合主義のオンパレードで、キャラ全員居た筈だけど新キャラの印象が強い。新キャラは黒髪でブルーに似た男だったんだけど、そいつがなんかチートだったし……。ゲームしてないのが痛い。全く思い出せない。ディアが何をしたのか、とかグラナートの関係とか色々。

「あやつの前では『禁術』は禁句なのだ。すまんな」

「……はい、言わない様にします」

あの後、夕食を取って就寝した。

夕食には、国の人が全員来てるんじゃないかってくらいの大騒ぎだったのだけど、グラナートはずっとぼーっとしていた。さっきもジョニーとマイケルが見送ってくれたのに、空返事だった。

……困った。何かまずい事をしたのだろうか？ 何故か現在進行形で冷たいグラナートを見ると、目が合った。グラナートが視線を外した、かと思うとまた交わる。

「……なあ」

「は、はい」

久々の会話だ。ここで好感度戻しておかないと、ダンジョンであ

っさり見捨てられたり、したり……しないよね。モンスターに食べられるという恐ろしい妄想が頭に過り、無理やり笑顔を浮かべてみる。と、嫌な顔された。

「……無理するな」

「い、いや、別に……無理なんて」

「前はアウトなんだよなー……」

「はい？」

「腹が痛くなったら言えよ」

「は？」

「後、気分が悪くなったり……」

「はあ」

グラナートは何を言ってるのだろう。眉を顰め、苦しそうな顔をしているグラナートを見て首を傾げる。グラナートは依然困った顔をしたままだ。

「……確か、九か月だったっけ」

「何がですか？」

「……お前」

困った顔をされた。どうということ？

「あの、グラナート……」

「なんだー？」

「何を、言ってるのか……見当もつかないのですが」

「……その内解るだろー、気分が悪くなったら言えよ？ 無理すんなよ」

「……は、はあ」

意味が分からない。全く持って意味が解らない。

「……ん、国を出るぜー。ここからは魔物よけの魔術がされてねーから、魔物が襲ってくる。後ろにいろよ」

「あ、はい」

それはビオレータの時と同じだと思うけど。やっぱり何か、変な気遣いをされてる。私は疑問を感じたまま、グラナートに付いていた。

十四羽

昨日もそうだったけど、全く疲労しない自分の体力が恐ろしい。
自分の中に魔力の中核が宿っているのをひしひしと感じた。

クスートンから出て結構経った時、急にグラナートが立ち止ったかと思うと――彼の纏っている雰囲気が変わる。

また弱モンスターか。そう思いながら、気配の感じる茂みを見ると――何かが茂みから勢いよく出てき……

「イノシシと鹿が混ざってるー!？」

「ば、バカ野郎! 騒ぐな!」

グラナートが私を後ろにかばい、背中にかけていた大剣を抜き、そのイノシシ鹿に向かって払う。イノシシ鹿は一步下がり、唸る。

……猫の声だった。

なんだと、こんな魔物がいるのか、いたか? いたっけ、いやい
なかったってこんな魔物。新しい魔物か? いや、そんなバカな。
なんとか国に行って中ボスと戦うまでのダンジョンはクリアして
るし、ビオレータ〜なんとか国までの魔物は数匹しかないと攻略本
に書いてあった。だから、ここで出てくる魔物は大体知ってる筈だ。
でもこんな魔物知らない。

「お嬢さん、何をぼーっと座っている!」

「えっ、わうっ!？」

ディアに無理やり抱きかかえられ、ぽいっと放られた。

「トヴィオールドウィー テトラドーノン コーロス」
「ひえっ」

何かが私を取り囲んだ。透明な壁？ こんこんと叩いてみる。堅い。後ろも叩いてみる、堅い。……え、何これ。

「防御魔術だ、そこで大人しくしておれ！」

「あ。そ、そうなんですか……ありがとうございます」

ディアは私から視線を外し、魔物を見据えた。アメさんを見ると、懐中時計を手から落とす所だった。腕に巻かれた鎖があるので地面には落ちない。

「……ピュール」

アメさんの低い声が、世界に溶け込む。懐中時計から火の弾が数個飛びだし、イノシシ鹿に当たる。魔物は唸るが、あまり効いてない様だった。

ええ？！ こちら辺にいるのって弱い魔物だね？ 何その中ボス並みの頑丈さ。ウナギを見習え！

——あれ……中ボス。ん？ そういえば……いなかったか、そういうの……。そう、馬車を壊す強い奴。

い、居たー！ あれだ。動画で見た。急に馬車が壊れて、バトルに突入する動画の……魔物、こんなのじゃなかったっけ。

「ちよ、て、撤収ー！ 撤収しましょう！ 貴方方では敵いませんよ！」

「はー？」

グラナートが魔物を切りつける。全然効いてない。魔物のHPが500だとして、2位しか効いていない。アメさんの魔術も10以下しか効いてないだろう。現実的じゃない。確か初期メンバーのMPは50以下。さっきのアメさんの魔術の使用MPは5程度。使えて10回。圧倒的に足りない。それに、攻撃されたら終わりだ。HPは半分以上、もしかしたら一気に瀕死かも知れない。

「うっせー黙って見てろバーカ！」

「いや、いやいやっ！ ソイツそんな美味しそうな見てくれで中ボス程度の力ありますからー！」

「これ見て美味しそうって言う奴の言葉が信じられるかー！」

イノシシ肉とシカ肉って食べれるんだよ！ 知らないの？！
なんて言葉が口から出そうになり、慌てて口を閉じた。

白熱したバトルを繰り広げている三人を少し離れた場所から見ている。グラナートはずっと大剣で攻撃を続けており、アメさんは魔術を、ディアは杖ですつと二人の回復をしている。私はゲームの画面が見えた。

ヒット2！ ヒット8！

モンスター？イノシシ鹿？のHP390。

グラナートのHP58 アメテュステュスのHP60MP10

ディアマンテのHP80MP5

……みたいな。どう考えても勝てない。逃げようよ、逃げるしか手はないよ。相手のレベルは15で、皆レベル1だよ気づいて。

ああ、そういえばこのゲームの鬼畜と言われる所以にFPシステムと言うのがあった。HPMPと同じようなものだが、このFPと言うのは単純にやる気の値を差す。このやる気がなくなると、攻撃力やらが衰える。これが三回連続戦闘が続いたり、ダンジョンでひたすら歩き続けると減って行くのだ。多分、今皆のFPは殆んど無くなっている筈だ。ダメだ。ヤバイ。

どうやって皆を諭そうかと思っていると、私を取り囲んでいた透明な防御の壁がガラスが割れる様に消えた。

「え……」

嫌な予感がしてディアを見ると、杖で自分を支えていた。

「ディア!？」

「も、問題ない。魔力が尽き掛けているだけだ……」

鬼畜システムその2。魔術仕はMPがなくなると死ぬ。……血の純度＝魔力の為か、魔術仕は魔力が尽きてしまうと瀕死になってしまうのだ。

私を急いで立ち上がり、ディアの元に駆け寄る。

「バカ者、後ろで大人しくしておれ!」

「だ、ダメだよ! 逃げようよ! グラナートツ!」

「この状況で、あちらさんが逃げさしてくれるかよ! 走って体力奪われるだけだ!」

ディアを無理やり後ろに引きずりながらグラナートに叫ぶと、そんな答えが返ってきた。どうしよう、どうすれば。とりあえずディアを座らせる。

HPやMP回復ができるチョコやアメもう使い切ってしまっただろう。前線で戦っている二人を見る。

アメさんは既に魔術を諦め、懐中時計をヨーヨーみたいに振りまわして攻撃している。多分、これ以上魔術を使うとMPがなくなつて瀕死になってしまうのだ。

グラナートは、ずっと最前線で戦ってきた為、ボロボロだった。唯一勇者コートだけは破けてない。何か魔術がかけられているのだろうか。

辛そうな二人の横顔が見える。イノシシ鹿は無傷とまではいいないが、犬に噛まれた程度の傷だ。多分、二人は次攻撃されたら……瀕死まで追い込まれる。

完全なる手詰り。このまま皆で死ぬと？

私にも魔術が使えれば……。

そう考えた所で昨日の事が頭に過る。

『もつとも、……血の純度^血＝魔力であるから、純度^{魔力}の高い者は勝手に魔力が補ってくれる……呪文の意味と発音さえしっかりしてれば――』

ディアがこう発言した後、グラナートは怒り、そして私に『禁術を使ったら祟る』と言った。多分――血の純度^{魔力}を高める禁術がある。そして……ディアはそれを使ったのだろう。

私の考察が合ってるかは解らない。でも、今はこれに頼るしかない。祟られるのは嫌だけ――

「ディア……禁術って、どうやって使うの？」

「……何を、」

「このままだと皆死んじゃうよ!」

「御主が禁術等使ってもこの局面は変わらん! バカな事を考えるな!」

ディアが銀色の髪を揺らし、怒鳴った。

十五羽

「でもっ！」

「でもではない！」

「このまま死ぬのなんか嫌！」

モンスターを見る。全く倒れる様子はない。二人とも傷だらけで、
終わりは見えている。このまま死ぬしかない。……あれ、何か忘
れる気がする。――魔力メーアヒュンの中核の力。

そうだ、それで私は不老不死になっている筈だ。なら、私は……
死なない。

私だけ、死なない。

「――っ！」

最悪の未来が頭に過る。だけどそれは、まぎれもなく――確実な
未来だ。

どうすれば、どうすれば、どうすれば。頭がぐるぐると回って、
気持ち悪くなってくる。――誰か、助けて。私は無意識に、ディア
の腕を握った。ぴくりとディアが動く。

「……っ、お嬢さん」

「え……」

ディアが目を見開いた後、私を横から抱きすくめた。え……？

「……エイセルケスタイ」

ディアの声が耳朶をくすぐった、と思えば私の中から何かが消えた。少量だけど、何かが。呆然としてディアを見ると、ディアは私に目も向けず、アメさんの名を叫び、また元の場所に戻ってグラナートを回復し始めた。そんなディアと入れ違いにアメさんがこちらに来た。

「あの、え……」

「魔力を他人から奪う魔術だ。緊急時に用いられる。あの王子様が大丈夫だと言ったと言う事は、お前の魔力は有り余っていると言う事だろう」

「え。え」

いつもと違い饒舌なアメさんに驚いていると、アメさんにも抱きつかれた。

「エイセルケスタイ」

また私の中の何かが減る。アメさんは私から離れ、また戦線に戻って行く。こんな業務的なハグが世の中にはあるものなのか。……魔力回復。確かに私は魔力が有り余っているが……うん？ よく分からないけど、魔力回復できてるならこの局面……どうにかなるのだろうか。

その後、代わる代わるディアとアメさんが私の元に魔力を補充しに来た。

「……こ、こんなバカな勝ち方があっていいものか」

時間にして二時間。一桁攻撃を何百回も敵に当て、ついに――モンスターを倒したのだ。私の脳内にはレベルアップの音が響く。…これ、一気にレベル5位上がったんじゃない？…。

「あー…：…どうにかなったなー」

「お嬢さんのお陰だ。彼女の血の純度は…：…とても高いと思われる。触れれば他人に、解る程に」

「はあー？ 魔術使えねーのに？」

グラナートがこちらに歩いて来て、私を立たせてくれた。腕を掴んだまま、グラナートは私の顔を凝視している。

「…：…っか、大丈夫かよ」

「え、私は大丈夫ですけど…：…。私より、グラナートが…：…」

服は所々破けており、頬にも傷がついてしまっている。しかしやはり勇者のコートだけは破れていない。

「俺は大丈夫だけどよー…：…まあいいや、大丈夫ならいい」

私の腕から手を離し、グラナートはコートのボタンを外し、勇者コートを脱いだ。はてなを浮かべ、グラナートを見ているとグラナートが私にコートをかけて、ボタンをかけていく。

「え？」

「邪魔」

「へっ！？」

「これ邪魔」

「ええっ」

「やる」

意外と軽いコートを見る。紫色のコート。マント付き。グラナートは私から顔を反らし、歩いて行く。

ディアがぼんぽんと私の肩を叩く。ディアを見ると、苦笑された。

「先ほどはすまんかったな」

「え、いえ……」

「乱暴な事をしてしまった……。望みであれば責任も取ろう」
「大丈夫です」

ハグぐらい、外国では当たり前だと思えば……。それに、ディアがアレを思い出さなければ、していなければ——私達はあのモンスターに殺されていたかも知れないのだ。いや、断言する。殺されていた。

「むしろ、嬉しいです……役に立てて」

「そうか」

ディアが微笑んだ。

……なんだか、よく分からないけどどうにか乗り越えた。(私何もしてないけども) プライヤーの様に、見てただけなのに、すごく疲れた。モンスターって五分程度で倒せるものじゃないの? やっぱりレベル1でレベル15はキツイ。

十六羽

「や、やっと……っ。国、が」

前方に見えるのはいかにも栄えてますって感じの国。

ダンジョンに出て早5時間。まだ昼時だと言うのが信じられない。中ボスモンスターを倒した後もちらほらと弱モンスターが登場したけど、レベルが上がった三人には赤子の手をひねる様な難易度だった。グラナートが3回剣をふるっただけで勝てた。本来そんなモノだと思う、ダンジョンに出てくる魔物は。

高い塀がそびえ立っている国を見て、私は息を吐く。

「ついたなー」

「ああ、長かったな」

アメさんは相変わらずの無表情だ。私達は国が見えて足早になる。ゲームと現実って違うんだなあ……。クストーンからこの国まで、ゲームだと10分もかからなかったのに……。

門で入国手続きを済ませ（といっても勇者手帳を見せたら一発で通してくれた）私達はこの国のお偉いさんの所に向かった。ここはビオレータ色勇者手帳では、宿はただにならならしい。お金を払ってもいいので、真っ直ぐに宿に向かいたい。けどそういう訳にもいかないのだろう。第一宿の料金を払うのは私ではない。……体力は全く疲れてないのだが、精神的にすごく疲れた。

会社帰りのサラリーマンの様に肩を落として歩いていると、ドンっと誰かと肩がぶつかった。

「え、あつすみませんっ！」

「こ、こちらこ……っ！」

ぶつかってしまった子を見る。……髪がピンクだった。アメさんの紫にも度肝を抜かれたが、ピンクだなんて。すごい、毛根どうなってるんだ。

頭から目を離し、その子の顔を見る。ものすごい可愛い子だった。砂糖菓子でできてるんじゃないかって感じの、ふわふわした可愛い子。……どこかで見た事ある。と凝視して気づく、目もピンクだ。ぶつかった拍子に彼女のかぶっていたフードが脱げてしまったのだろう、彼女は慌ててフードを被ろうとしている。やはりピンクは普通ではないのだろうか。

「オイ、あれコライユ姫じゃねえか？」

「コライユ・アンゲルス？　なんでこんな所に」

「お買いものじゃないのか、いいよな姫は」

ひそひそをざわめく声が聞こえる。コライユ姫？　そうかこの子姫なのか。だからどこかで見た事があるのか。いや、んな訳ないだろう。私はこの世界の人間じゃないのだから。あ、そうか、この子！　後にパーティになる可愛い女の子じゃっ！

私のテンションが上がる。ピンクの髪の子は、性格とか全然覚えてないけどものすごく可愛かった印象が――

「控えなさい！　わたくしを誰だと思っているの」

その子は手を大きく払う。ギャラリーはそれで去って行った。……あれ？　あれれ？　思ってたのと違う。呆然とお姫様を見てると、睨まれた。

「……貴女も気を付けることね！ この国の姫であるわたくしに逆らうと、痛い目に合うわよ」

「は、はい……気を付けます」

「ふんっ」

踵を返し、お姫様は去って行った。……典型的な高慢ちきお姫様だった。あんなテンプレなお姫様がまだこの世に存在していたのか。……あの子は違うな。あの子は違う。

「お前、大丈夫かー？」

「は、はい」

「本で見た様な姫っているもんなんだなー」

「……一国の王の子供として、相応しい振る舞いとは思えんな。姫たるもの、国民は当然として旅人にも優しくすべきだ」

どうやらご立腹なディアが難しい顔をしていた。そんなに怒る事じゃないと思うけど、同じ一国の王の子供として思うところがあるのだろうか。

城に着き、私達はあっさり王の元に案内してもらえた。城はザ・中世ヨーロッパで、王も中世ヨーロッパだった。しかし若い。30才位に見える。若づくりだろうか。でもどう見ても50代には見えない。多分、最近王になったんじゃないだろうか。

注意深くその人を見る薄い金髪に、青色の瞳。すごい美形だ。服は白を基調としていて、すごく高貴な雰囲気があふれ出ている。

「貴様らがビオレータ首長国の勇者か」

「はい」

グラナートが頷く。王は無表情で、私達を見た——と思えば、私を見て止まる。え、何？

「……カッライス」

「え？」

「……気が変わった。その娘を置いていけ」

「「は？」」

私とグラナートとディアの声がはもる。気が変わったって何？

「その代わり印はやろう。手帳を前に」

「……いや、待って下さい。コイツを置いていけってどういう事ですか」

「そうです、なぜそのような必要があるのでしょうか」

グラナートが眉を寄せて、王を見る。ディアも渋い顔をして異論を申し立てる。王は無表情でグラナートを見てから、私を見て、ディアを見てからまたグラナートを見る。

兵士たちも困ってる様だった。こんな事は初めてなのだろうか。

「私はこの国の王だ。その娘は王らしくもたらず。心配はいらん」

「……そう言われましても」

釈然としてないグラナートがくっつかかるが、王は顔色一つ変えない。

「元々、貴様らに印を押すつもりはなかった。この女を置いて行けば、スイートルームもただにしてやろう」

え、印押すつもりなかったの？ ……気が変わったってそういう意味？ そういえば、何をしても印を押してくれない意地悪な王様が居た様な。この人か。そうだ、この人だ。……その人が、印を押すって言うってことは、なんかもものすごい可笑しい事が起こってる気が。

「……何を迷っている」

アメさんが感情の無い声色で呟く。

「こちらには得しかない取引だろう」

私を射殺してやらんとばかりの視線をアメさんから感じる。いや、あの……うん。役に立ちたければ、私はここで頷くべきだ。でも、ほら……なんだろうこのすごい嫌な予感。役には立ちたいけど……。グラナートを見ると、これでもかと言う程眉間に皺をよせていた。……、

「……え、えっと……あの、ほら、王ですし……特に、何かあるって事も、ないと思いますから」

そんな表情を見てしまうと、役に立ちたいと思ってしまいうじゃないか。

私は無理やり笑顔をつくり、大丈夫ですとガッツを見せた。

「箱庭の王国（前書き）」

閑話—ヤンデレな王様の話にて注意

「箱庭の王国」

あの後、渋々グラナート達は去って行った。いや、アメさんは無表情だったけど。

私は兵士に案内され、スイートルームっぽい所に連れて来られた。しかしキラキラというよりは落ちついた個人ルームっぽい。黒の家具が多めで、なんとなくあの王様の顔が浮かぶ。もしやここは、王様の部屋なのだろうか。

部屋の中を観察していると、壁にかかっている金色の額縁に飾られた写真が目に入り、私はそこに行く。写真が何枚も飾られていた。

「写真とか……飾る人に見えなかったけど」
「そうか？」

振り向くと、そこには王が居た。え、何時の間に。

王が写真の飾られている棚に手をつき、私は棚と王に閉じ込められた。

お、王らしくもたらすって言ったじゃん！ というか、あれだよ、姫がいるってことはこの人既婚者じゃないの？！

慌てて体をねじり、逃げようとするが王はクスクスと笑いながら手を伸ばす。かちゃんという音。多分、額縁に触れたのだろう。……余計に近くなってしまった。抱きしめられていると言っても過言でない距離。

「サプフィールと言うのは、この少年の事だ」
「え……」

後ろを向いて、その写真を確認する。青い目と、青い髪を持った少年だった。

「お前は雰囲気がサプフィールに似ている」

「……そ、そうですか」

「サプフィールは……現在行方不明でな」

「そ、そうなんですか」

王が私の髪を一房とり、口付ける。ひいひいひい誰か助けて、何この空気。何このピンク色の空気！突然すぎてついていけないよ！

「サプフィールより義理妹——サクラコに似ているな」

「そ、そうですか」

「……この外見ならば、しがらみもあるだろう」

「え？」

「私が、守ってやろう」

いや、別にいいです。と言う言葉は口からは出て来ない。王は海のように深い青色の瞳で、私を見つめる。薄金色の髪の毛は癖がついており、どこかの王子様みたいだ。こんな人がモテない筈がない。というか子供いるでしょあなた。私知ってますよ。姫居るの知ってますよ！

「心配いらん。ああ、娘がいるのだが、アレは気にすることはない。政略結婚のなれはてだ。愛等一切ない」

そう言って王はクスクスと笑う。いや、笑いごとじゃないだろう。というか何で解ったんだろう。エスパーか。王の意味不明な能力に愕然としつつ、桃色の髪を持つ少女を思い出す。顔も何も全く似てない少女。だからあんな童話に出てくる様な嫌味なお姫様になって

しまったのじゃないのか。というか、これはアレなの、結婚フラグ？
そ、そんなバカな。勘弁して下さい。

「いや、あの……」

「安心しろ。妻は死んだ」

「……えっ」

「自殺だそうだが、私はよく知らん。興味もない」

何だこの漫画のラスボス並みに嫌な奴は。

と、というか、本当に求婚フラグなの？ 何で、何で急に？
こんな国だっけ、この国。それ以前に、こんな人だっけ……。

一国の王なんてNPCもNPCの性格まで、ゲームをクリアして
ない私が知る訳ない。

「だが、私は愛する者にはとことん甘いぞ。それ以下に冷たいだけ
だ」

「……みつ、身代りにされても困ります」

この人は一切私には興味が無い。多分だが、義理妹はもう居ない
のだろう。そしてその息子も行方不明になった。彼の愛する者がこ
とごとく自分の周りから居なくなり、その代わりを見つけようとし
ている。

「確かに身代りかも知れない」

認めたよこの人。

「しかし、その内身代りとも解らなくなるだろう。単純に君を愛す
ようになるだろう」

「……私は、自分と歳が変わらない娘がいるのは嫌です」

「アレは捨ててもよい」

「そんな考え方をする人と一緒に居たくありません」
「どうしろというのだ」

異世界って怖い。何で子持ちの王様に言いよられないといけないんだ。しかも義理妹の身代りって何。大体、こういうのって普通は王子様じゃないの。何で子持ちの王様なの。可笑しいよ、何か可笑しいよ。

王様は苦笑して、私の髪を指に巻く。

「……名を名乗っていなかったな。私の名前はセレーノ・アンゲルスだ」

「私の名前は名乗れません」

「ふっ……そうか」

微笑み、アンゲルスさんは私から体を離す。

「すまないな、私はこれから仕事がある」

「……そうですか」

アンゲルスさんが去って行った。こちらとしては万々歳だ。

ソファでくつろいでいると、コンコンと扉がノックされる。

……王様、出て行ってからまだ一時間しか経ってないけど……も
しかして、そんなわけないよね。こんなに早く戻って来ないよね？
一人の時間がもう少し欲しい。

私の返事も待たず、扉が開く。

入って来たのは、お姫様だ。ついて来ていた従者を追い払い、中に入る。部屋の中は、私と姫の二人だけの空間になった。え、何で

？

私はびくびくと相手の次の行動を見守る。

姫はソファに腰掛け、肘掛に腕を置き——ぐだあと寝転んだ。

……？ それは、イメージと違う行動だった。

服が乱れるのも気にせずに、小学生の様に足をパタパタを動かし、ため息を吐く。

「あー……だるい」

あれ、今私言葉発した？ 発してないよ。

お姫様は乱暴に頭を掻く。

「助かったぜ、ありがとう」

「え……っと」

誰だ、何か乗り移ったのか。それともショックでこんなことに……。

「従者に聞いたぜ、親父に目つけられたんだって？」

「……え、う、ま、まあ」

声は普通の少女よりちょっとハスキーなだけな、萌えキャラっぽい声だ。こんな声のアイドルが居たと思う。可愛い声である。だからこそ、違和感があるのだ。この子がこんな喋り方をするのが、

「災難だな。クソ親父の愛は重いぜ？」

「……つと、あの……ちょ、ちょつといい？」

「なんだ？」

「……その、喋り方は……」

「あー。教育の結果？」

どんな教育だ。私は違和感を感じながらも、理解する。この子だ。……後にパーティメンバーになるのは、絶対この子だ。一国の姫のNPCを——男勝りの少女にする意味はない。

「前置きはこんなもんでいいか。あのさ、本題なんだけど——今日はすごいわがまま言いに来たんだ」

「……多分、聞きかねます」

「簡単な事だって、クソ親父とくつつきやあいだけの話だし」

さらりと、爆弾を落としたよこの子。

「……あなたは、自分と同じ年くらいの母親なんて嫌じゃないの？」

「別に、というか母親とか父親とかどうでもいい」

「はい？」

「……詳しくは言えないが、まあ、俺とクソ親父は気持ち絶縁状態だから」

さらりと、再び爆弾を放つ。少女の顔に悲しみは一切浮かんでない。それが当然の様に、本当にさらりと、梅酒飲む？ 位の軽さで姫は言った。

……王様のヒトデナシセリフ集が頭に過って行く。

もしかして——王は私に言った様な事を、娘のこの子に直接言ってるんじゃないだろうか。

「俺は親父には必要とされてない」

ずきん、と胸が痛む。

もしそうならば、なんて事をしてるのだろうか。なんて人なんだろう。

サブファイル

姪っ子や弟夫婦にだけ愛をそそぎ、実の娘には見向きもしない。

ずきずきと心臓が痛くなり、先ほど感じていた疑問が再び浮かぶ。

——どうして、この子は男の子みたいな喋り方をするのだろうか。

教育？ 教育って何？ 一国の姫を、男勝りに育てる意味はない。彼女の外見が中性的であれば、娘じゃなく息子として——次期王として育てる意味もあるかも知れない。でも、彼女はどう見ても女の子だ。

そんな教育をする意味がない。

私は、あの人に『サクラコ』の代わりにされようとしている。

王が誰かを……？身代り？にしたのは、これが——はじめてなのだろうか？

「……じゃあ、用件は以上だから。頑張ってくれよ、俺の為に」

カラカラと笑い、彼女は席を立つ。扉まで歩いて行き、振り返って投げキス。明るく、活発な少女にしか思えない行動、それが私の胸を痛める。

姫は桃色の瞳で私を見つめ、悪戯っぽく笑う。

パチンとウインクしてから、姫は部屋を出た。

私は呆然と扉を見ながら立ちすくむ。

ズキズキと胸が痛む。本当の彼女を知って、彼女を見て、王の本性を知って……出た答えは、彼女に同情もできない程辛い物だった。ただの推測かもしれないけども――。

ため息を吐いてから、私はベッドに寝転んだ。

いつの間にか寝てしまっていた様だった。

私は寝がえりをうち、窓を見る。扉と同じ大きさのある窓はベランダへとつながっており、窓というよりは、ガラス張りの扉といった感じである。カーテンが開いており、外が見えた。大きな木と、厚い雲が空を隠した暗い空。唯一、月は隠れてない。

真夜中……だと思う。風が葉を揺らす不気味な音が聞こえて、思わずシーツを握りしめた。

「――っ」

鼓動が早まり、私は体を抱く。

意味の解らない感情がぐるぐると回る。気持ち悪い、何も……考えたくない。嫌な事ばかり、考えそう。

「……どうした」
「っ!？」

不意に、後ろから抱きしめられた。耳朶をくすぐる低い声。王の唇が動き――サクラコと、声にもならない熱っぽい息が耳に吹き込まれる。

……あだ名で呼んでるじゃない。私の事じゃない。私を心配しているんじゃない。瞬時にそれが解る。そして、コライユの顔が脳裏に浮かぶ。

彼女は――本当に姫として扱われてきたのだろうか？ そんな訳はない。そうであれば、彼女が男喋り等する訳ない。

あの喋り方は――結果だ。コライユをコライユとして扱わず、サプフィールとして扱おうとして結果。

彼女も、私と同じように、この人に他人になる事を強要された。そして、彼女はきつとそれを拒絶して、王の興味を失った。

その時彼女はどう思ったのだろう。自分として生きる事を選択し、捨てられた時――彼女は……、

ずきんずきんと胸が痛む。針で刺されるような痛み、彼女はこんな痛みをずっと？ そんなのって、酷過ぎる。

「っ――やめて、下さい」

「私を、拒絶するのか――サクラコ」

腕に力がこもる。

「っ……!？」

痛い位に抱きしめられて、息ができない。っ、痛い、痛い痛い。やめて、という声すら出ない。

「サクラコ……愛している」

「っ、ん」

痛みで声が漏れる。王はそれを返事だと思ったのだろう。腕の力が弱まる。違うのに、私が貴方を愛する訳なんてない。……身代りにされようとしているのに、愛せる訳はない。愛したくもない。

拒絶、して……帰ろう。皆の元に、グラナートなら……きっと、笑って許してくれる。

私は無理やり王の腕を振りほどき、起き上がる。

「サクラコ……？」

「私は、サクラコじゃないっ！」

寝たままの王を睨みつける。王は目を丸くしている。私はベッドから抜け出そうとし——手を引っ張られた。また王の方に戻ってしまう。今度は、私が王の上に乗っかる様な形で。

王はその体制を変え、私を組み敷く。目が血走っていた。

「お前は、サクラコだ」

「違う！」

「サクラコだ」

「違う……！ 私はサクラコじゃない！ コライユもっ、コライユは……！」

「何が違うというのだ」

腕に力が込められる。赤くなっているだろう。痛さと、何かよく分からない感情で泣きそうになる。

「お前はサクラコだ……サクラコ」

「違うって、言ってるでしょ！ いい加減、目を覚ましたらどうな

のっ！ 身代りなんて、意味がない！ そんな事しても――」

「サクラコはそんな事を言わない」

「っ」

青い双眸が、狂気を増して私を睨む。

「……サクラコを解っていない……何故、私の周りに残るのは役立たずばかりなんだ」

彼の手が、腕から離れて、首に触れる。細く長い指が首に絡まり――力が込められた。

「っ……嫌、助けて……助けて、グラナートッ！」

「サクラコはそんな名前を呼ばない」

「グラナート！ ディアツ！ 助けて、助けて助けてっ」

「サクラコは私とマリア以外に助けを求めない。お前の味方は私達だけ、お前を守るのは私達だけなんだ――なあ、サクラコ」

王が微笑む、狂気的笑み。私は、涙があふれた。それは何の涙かわからない。ただの恐怖からの涙か、誰も助けに来てくれない悲しみからの涙か、それとももっと違う意味を持つのか――私には解らなかった。

あの後王は正常さを取り戻し別室に行った。

私は泣き疲れて眠ってしまった様だ。窓の外の快晴な空を見て、月光が照らす狂気的笑みを思いだし、背筋が凍る。

気分がすぐれないと言う事で違う部屋で過ごす日々が続く、未だ王とは会ってない。できればこのまま永遠に会いたくないものだ。

……グラナート達は、いつ迎えに来てくれるんだろう。精獣は強い。でも、中ボス程度の力を持ったイノシシ鹿を倒したんだ……あれ、そうだ。

ここは、私が途中放置した場所——それ位強い敵がいる。精獣じゃなくて、その後に出てくる人間。

——っ！　もしかして、もう死んでいたり、しないよね……？

きつと死んでない。……三人の命を心配した後、ずっと何かが冷める。

——死んでなかったら、何で、私の元に来てくれないのだろう。

グラナート達と分かれ、何日経った？　……すくなくとも5日は経っている。

嫌な想像が頭の中を侵食していく。もし、死んでいたら、どうしよう。嫌だ。そんなのは嫌だ。

——もう会えない？

——私はずっとここにいなきゃいけない？

——もしかして、王に殺されたんじゃない？

——見捨てられた？

——精獣も何もかも倒して、私を置いて旅に出た？

「……っ、違う、違う。グラナートは……グラナート達は、そんな事しない」

——何でそんな事がわかるの？ まだ会って少ししか経ってないのに

——大体、役立たずは置いておくにこしたことはないでしょ

——というか、王様がここに居たいってアイツが言ってるみたい
に言ったら、あっさり置いてくんじゃない？

心の中で、誰かが私に語りかける。

もし、本当に王様が『私がここに居たいと願っている』と言った
のならば、グラナート達ならどうする？ ……優しい人達だ、何も
言わずに……去るかも知れない。しかもそこに『本当は旅が怖かつ
た』と言っていたと言われたり、『探し人は私が見つけておく』な
んて一国の王から言われたら——。

ガラガラと音を立てて、私の中の何かが壊れて行く。

「嫌だ、やめて……置いてかないでっ！」

涙があふれ出て、私は自分の膝を抱いて、泣いた。

泣き終わり、どうしても気になった私は、メイドにグラナート達
の事を聞いた。

そして帰って来た言葉は——想定される内の一番最悪なものだっ
た。

「勇者様達なら、もう出発されましたよ」

無表情で、メイドは私に死刑宣告を突きつける。

……それはすなわち、ずっとここにいななければいけないという話だ。

一人で旅なんてできない。第一、こんな城から一人で逃げ出す事なんてできやしない。

ガラガラと私の中の何かが壊れる。

私の未来は今ここに決まった――サクラコの身代りだ。

私は私として一生生きられず、他人の身代わりとして慰め者にされるのだ。

真実を知った私は、ただ意味もなく日々を過ごす。はじめてこの国に来てから、もう一週間は経っている。

部屋は別々のままだが、それに対して何も言われてない。

コライユがたまに遊びに来ては、ケラケラ笑って帰って行く。

王は……私をサクラコと呼び、それに私が返事するだけで満足の様だった。

もう希望も何もない。それならば優しくなんてしないでほしい。

窓を開けて、ベランダに出る。

ずるずると座り込み、呆然と空を見る。白色の柵は決して乗り越えられない物ではない。

——ここから、落ちたらどうなるんだろう。

死ぬのかな、それとも生きるのか……。

口から喝いた笑みが零れる。

私は死なない。不老不死の力で死ねない。

逃げる事も死ぬことも許されず、一生鳥籠の中で違う鳥として生きるのだ。

なんてばかばかしい運命なのだろう。異世界に来てまで、不幸になるとは思ひもなかった。

もう涙も出て来ない。涸れつくしたのだろうか。
涙って涸れるんだ。

「あは、っふふ、ふふっ」

何も可笑しい事なんてないのに、笑ってしまう。私はついに壊れてしまったのだろうか。

——壊れるってどんな風に？ 本当に壊れたの？ 何が？ どこが？ どうして？

自分の中の何かに疑問が投げかけられて、私は笑う。

そんなの解らない。壊れてないかも知れない。でも壊れるかも知れない。

どちらでも同じ事。意味がない事。

私は不意に笑うのをやめる。

「飽きた……笑うのに」

目から光が無くなって行くを感じる。きっと今は濁った眼をしている事だろう。ため息を吐いて立ち上がると、すんと、と何か

が落ちて来た。

違う、下から上に何かが投げ入れられた？

でもどうせ私には意味ない事だ。

興味もなく、首を動かす。初めに目に入っただのは白だった。白いシャツ。大きめのボタンがついている。こんな服をどこかで見た事ある。……どこだっけ。

混沌とする記憶を放置し、私は顔を上げる。目に入っただのは、赤。血の様な赤い髪と少しつり目な瞳。白い肌に、整った鼻、綺麗な桜色の唇。女に見まがう絶世の美貌。

嘘、だ……ここに、居るはずない。幻だ。私が作りだした幻想なんだ。

「な、なんだよー？ 何で泣くんだよ！」

「……な、泣いてない……涙は涸れたんだから」

「はー？ ったく、泣くほど楽しかったのかー？ 俺達に会いたくない程楽しんでるって聞いて、むかつくから来たっーのに」

グラナートの幻が仏頂面のまま頭を搔く。

「本当に、グラナート？ ……なんか、変な魔術とかで」

「はー？ なんだよさっきから。俺が来たら変かよ？ お前が会いたくないっていったくせに」

「うっ……ううううう」

「なっ、なんだよー？ 何で泣くんだよ……」

「楽しくなんて、なかった……辛くて、辛くて……ううっ」

あふれ出る涙をぬぐいもせず、私はグラナートに抱きついた。何かを躊躇した様に手を動かしてから、グラナートは私を抱きしめ返してくれる。

「……なんだよ、あの王様嘘言ってたって事かー？」

鼻がつまって言葉も出せずに、私は何回も頷く。グラナートは私を抱きしめる力を込めた後、ため息を吐く。

「……お前、来るか？ 俺達と」

「来るよ、来るに決まってるじゃんっばかあ」

「……あいつ後でぶっ飛ばす……嘘ばっかり吐きやがって——って、おでましかよ」

グラナートが呟き、私を抱きしめる力を強めた時、扉が開く音がある。びくりと体がはねた。こんなところを見られたら、グラナートが……。

嫌な想像が頭を埋め尽くし、震えてくる。

「無理やり来たからなー、それかなんかつけてんのか？……はあー、もう敬語はいーか」

「その娘を離してもらおうか」

王の声が聞こえ、再び体がはね、背筋が凍りつく。グラナートは一步下がり、一度私を離れた後——片手で肩を抱いて自分の胸板に押し付ける。

……一瞬、差し出されるかと思った。

一瞬でもグラナートを疑った事を恥じて、私は心の中で謝罪を繰り返す。

グラナートは何時もは聞かない様な低い声で、王に問いかける。

「……色々嘘だったみたいだけど、どーいう事だー？」

「嘘？ 何がだ」

「本人はすげー嫌だったって言ってるけど？」

「はっ……照れているだけだろう。なあ——サクラコ」
「っ……！」

私はグラナートの服をきつく握る。グラナートはハア？ とバカにした様な声を出し——ケタケタと笑った。

「サクラコー？ ずっと気になってたんだけどよー。コイツの名前本当にサクラコな訳？」

「ああ。その娘はサクラコだ」

違う、私はサクラコじゃない！ 私は——っ！
でも、その名前は名乗れない。心の中で何度も復唱しても、声に出せない。

「サクラコって柄かー？ こいつが？ 名は体を表すっーだろ。こいつは絶対サクラコじゃねーよ」

「……彼女はサクラコだ」

「……てめーがどー言おうと、俺には関係ねーし、興味もねー」
「……」

「ただ、こいつは返して貰うぜー？」

「サクラコはお前の物じゃない」

「てめーのものでもねーだろ。っーか、ものじゃねーし」

グラナートの手が、肩から下がり、私の腰を抱く。

「っーことで、返して貰うから……てめーらには二度と触れさせねーよ。触れたら祟るからな」

背筋が凍りそうな、冷たい声で相手を威圧してから、グラナート

はひょいっと柵の上に乗った。そして、そのまま落下する。

「ひっ……！」

「安心しろって、俺勇者だぜー？」

軽薄そうに笑い、グラナートはまるで三段しかない階段からジャンプしたかのように、地面に着地する。上から『追えー！』という怒声が聞こえる。グラナートは私を肩に担ぎ、疾走した。

宿の様な場所に入り、グラナートはドアを足で蹴り破り、怒鳴る。

「おいお前ら荷造りしろ荷造り！」

「は？ って、な……何をしているのだグラナートッ？！」

「事情は後だ！ 早くここから逃げんぞ！」

ため息が聞こえる。多分アメさんのため息だ。ディアはああと力強く頷き、魔術を使って瞬時に荷物をまとめた。

宿から出て、私達は国を出るための唯一の門に向かって走る。

門番が、私達を見て、警戒態勢に入った。グラナートは舌打ちしてからアメさんの名前を呼ぶ。アメさんの魔術が、門番の人達を凍りつかせた。

「グ……グラナート、後ろの人々がすごいのだが」

「喋ってる暇はねーぞ、捕まったら終わりだ」

門をくぐりぬけ、ダンジョンを走る。担がれたまま、私は呆然と流れて行く景色をどこか他人ごとの様に見ていた。

「箱庭の王国（後書き）」

ロングバージョンはブログにあります。

位置が大変なことになっていたため、変更致しました。
申し訳ありませんでした…！

十七羽

大勢の兵追われている。どうしてこんな事に。

私のせいだ。私が――逃げたから。

王から逃げたから、だ。

グラナートの肩にかつがれ、私は後ろから追ってくる王の刺客達を見る。

耐えきれなかった。だから私はグラナートに泣きつき、グラナート達は私を逃がすために、ヴァイス共和国に追われている。

逆らったのは、世界一栄えている国の王。代償は大きい。

これから、グラナート達には迷惑をかけてしまうだろう。私の……我が儘で。

追ってを巻くために山道を選び、洞窟を見つけて私達は洞窟に入り、魔術をかけてあちら側からは見えない様にした。そこでようやく私はグラナートの肩からおろされる。少し、気持ち悪い。でも、それを我慢する。

「大丈夫かー？」

「……うん」

「ならいいけどよ」

グラナートが微笑み、私の頭を撫でる。久しぶりの感触に、思わず泣きそうになった。

「それで……一体どうしたと言うのだ？」

ディアが銀髪を揺らして首を傾げる。相変わらずの美少女っぷりに安堵する。

ヴァイス共和国で別々に一週間を過ごし――久々の再開だった。私は何の考えもなく頷いて、王と共に過ごし、私は地獄の様な日々を送っていた。いや、地獄ではない、虚無の日々だ。

私は私ではなく、他の人間として扱われ、可愛がられる。それは――予想以上に辛いものだった。しかも、グラナート達は旅に出たと嘘をつかれ、私は一生他人の身代りとして過ごすかと思われた。でも、助けてくれた。

「グラナートが助けてくれたの！」

「え……いや、そういう事ではなくてな」

「別にいいじゃねーか。なーコロ」

「うん」

「……待て、待たんか。何故普通にコロで定着している」

もうコロでも何でもいい。グラナートは私のイメージでコロと言った。それはただのあだ名で、他人の名前でも何でもない。グラナートがつけてくれた、私の名前だ。

「グラナートがコロって言うのなら、コロでいい！」

「……ま、待ちなさい。お主はそんな性格だった？」

「うん？」

首を傾げると、ディアに複雑な顔をされた。ディアは困った顔をしたまま、アメさんに小声で話しかける。

(……全く持って状況が理解できんのだが)

(……精神的ショックを負い、幼児化したのではないか?)

「えッ?!」

ディアが突然大きな声を出し、私を見た。漆黒の瞳が、まん丸に見開かれている。

「……そ、そうか、そうであるか……うむ」

すごく複雑な表情を浮かべたまま、ディアが私の頭を撫でた。

「ディアに撫でられたの初めて、えへへ」

「……そうか、お望みであればいつでも撫でようぞ」

「うん」

私の頭を撫でた後、ディアはアメさんの元に戻る。

(……痛々しくて見ていられんのだが……何故、あのような事に)
(それはあの年であのような振る舞いが痛々しいと言う事か)

「そ、そうではないっ!」

「ディア、大声出すなよー? 防音の魔法はかけてねーぞ」

「……すまん」

ディアは目を伏せた後、再びアメさんとひそひそ話を始める。……ちよっと聞こえてるって言った方がいいかな。何気にアメさんすごくひどいよね。

（しかし、王が自分の身を危うくするような事を一人の女性の為に
するであろうか）

（……権力がある、金もある、ねじ伏せられるだろう）

（……共和国は、国民によって代表者が選ばれる……態々、危ない
橋を渡るとは思えんが）

（……ならばあの女の状態をどう説明する。よほどのショックを負
わない限り、ああはならない。記憶も喪失してるかもしれない）

ひそひそ話が止まり、ディアが私を見る。首を傾げたら、苦い笑
みを浮かべられた。

（……首を傾げる等、ああなる前からしていただろう）

（あふれ出る幼い感じが……どうにも、哀愁を……誘って普通に接
しれん）

（……グラナート・マリートヴァが話す気がないのならば、この件
はお前の知る事にはならないだろう）

（……しかし、お嬢さんは旅始めから一緒におる大切な仲間で……）
（気になるのであれば、本人に聞け。……傷口をえぐる覚悟でな）

ディアが唸り、アメさんは目を閉じた。手には懐中時計。魔術は
続行してかけているらしい。魔力がなくなったりしないのだろうか？
私はディアの言葉を待つが、ディアはため息を吐いた後口を閉ざ
した。

……ありがとう、ディア。

「そういえば、精獣って倒したの？」

疑問を口に出すと、三人が止まった。

グラナートが私の頭を撫でる。目を反らしながら。

「……精獣っーのは、世界にできたの世界の歪みにいる以外にもい
っぱいいるんだぜー？」

「う、うん？」

「最近オワゾー・ブルーアンペラトリスは、青い鳥の女帝の手によって、世界メモワールの歪みの元に遣わされ
ている物が、一般的に精獣と呼ばれる様になったがな」

「へー」

「……」

「……………」

「……………」

「……………」

グラナートの目線が泳いでいる。

こうやって話せないと言う事は、精獣を倒せていないのかも知れ
ない。

十八羽

「……ご、ごめんね……私のせいで」

「お前のせいじゃねーよ。俺達も、精獣がどこに居るか見つけれなかったしよー」

「それどころか、ヴァイス共和国のどこに歪みがあるかすらわからなかった」

え、でも中ボスはヴァイス共和国に居た筈だ。……どこに居たっけ。屋敷、屋敷？ 屋敷……城？ 私の頭の中に、王の城が浮かび、思考が停止した。

「……………」

「……コロー？」

「んっうん？」

「いや、急にとまったから何事かと思ってよー。ま、この話はいーだろ。後回しにすれば済むし。それより、ここ何の山道だ？」

「……うろ覚えではあるが、多分グリース軍国に向かう山道だったと思うぞ」

「……丁度いいな、グリース軍国には世界メモワールの歪みがある」

「んー、ならそこに行く事にするかー。ん？」

「どうしたの？」

グラナートが目を細め、魔術で造られた結界の奥を見る。山道には――キグルミを来た人間がいた。キグルミを来た人が、50センチ程の人形を抱きしめてうろうろと歩いている。

それは異様な光景だった。

「……んだー？ あれ、」

「う、うーむ。新手の変質者かと思うが、どうであろうか……。確かアレはキグルミと呼ばれる奇妙な衣装だったという事しか知らんため、どうとも言えん」

「変態って事でいいのか？ ……あー？ あの人形動いてねー？」

小声でグラナートとディアが会話している。私はその会話に耳を傾けながら、キグルミを見る。手に持たれている人形が動いていた。尻尾が、耳が、意思を持っているかのように。

「……友達がいないのだろうか……」

「……………」

ディアの言葉で、洞窟内になんとも言えない沈黙が訪れる。魔術がある世界だ、魔術を使って人形に魂を移したりする事も可能だろう。

「……人形を動かすために、態々魔術を？ ……そんな労力を使う

必要性が解らない」

「友達と言うのは、尊い者だ。……一人では耐えきれぬ事も、その人がいる事で耐えきれぬ事もある……。あのキグルミの人間からすれば、あの人形だけが……唯一の、友なのかも知れない」

瞳に涙を浮かばせながら、ディアが言う。その言葉に、横に居たグラナートが居心地の悪そうに、だけどどこか嬉しそうに頬を掻いた。

アメさんは二人を見て、理解できないと言いたげに眉をしかめてから、外を見て、目を見開く。

洞窟の前に、キグルミが居たのだ。
見える筈のない洞窟の前に――。

『ここか？ えー、何もねえぞ？』

『信じえ、救われう、わが名はデフテロレプト——1秒を司る——』

『あーはいはい。お前の自慢話は聞きあきた。自慢話と不幸話は一
人につき1回、とっておきのタイミングで話すもんだ』

『……コライユが我を信じぬからであう』

……コライユ？ 私は心臓が飛び跳ねる。

城で何度も聞いた名だ。この声も、何度も聞いた声。少しハスキ
ーな、でも女の子っぽい可愛い声。

グラナートを見ると、きょとんと首を傾げていた。小声で呟く。

「……コライユって、あのお姫様か？」

「ワシもそう記憶しているが」

『ほら、居るであう。見よ、これが我が力あ』

間抜けな、でも可愛い声が聞こえてくる。アメさんは懷中時計を
握りしめ、戦闘に突入しても大丈夫なようにしているが、二人は未
だ首を傾げている。

によるん、と腕が結界を破り、洞窟に入ってきた。

「は、はあ？ ……アメ、防御魔術とか……」

「していない」

「……………」

アメさんを一瞥してから、グラナートは剣を手取る。

相手は自分たちが追われている国の王の姫。警戒するべきだ。

でも、私は何故か警戒できなかった。

キグルミが洞窟の中に入ってくる。

クマのキグルミ。手に持たれているのも、クマの人形。

完全に洞窟の中に侵入して来て——キグルミは私を見た。びっくりと反応してしまう。

「おっ、おー！　よかったぜ。無事だったんだな」

「……えっと」

「あ、俺俺」

彼女がキグルミの頭部を脱ぐ。

現れたのは、清々しい笑顔を浮かべたヴァイス共和国王の一人娘、コライユ・アングルスだった。

十八羽（後書き）

チャプター3はじまりました！

十九羽

「いやああっはっは。よかったよかった。じゃあ本題行くぜ？」

コライユはクマの人形を放り投げる。

『おうあ』

可哀想な声を出し、下に落ちて行く人形を目で追う。びたん、と下に落ちた人形が唸っている。

「ちょ、ちよつと……え？」

コライユを再びを見ると、衣装が変わっていた。簡易なドレス。桃色と白色のひざ丈のドレス、ワンピースと言うよりは姫がお出かけで着る様な高貴なドレスだった。……何時の間に、キグルミを脱いだのだろうか？ 魔術？

「一人むつつりがいたなあ」

「へっ？」

「普通人形見るだろ、それなのに俺が着替える時にじーっと、舐めまわすように……」

ケラケラ笑いながら、コライユは自分の体を抱く。

私はこんなコライユに耐性があるから普通に見えるけど、三人はどうなんだろう？

「け、けしからんっ……ワシは人形を見ていた」

「俺も人形見てたけど、っーかいよ。それは」

二人が否定した事でおのずと答えは出てしまう。私は思わずアメさんを見たが、アメさんは能面みたいに無表情だった。

グラナートもこの件に関しては一切興味がないらしい。……一件乙女っぽいディアが一番男っぽい反応なのが少し可笑しい。

「お前、なんな訳？ 追手かー？」

「いやいや、まさかまさか」

コライユは真面目な顔をして、顔の前で手を振った後、腕を組んだ。人形は未だに放置されている。可哀想だ……。

「単刀直入に言おう」

「おー、そうしてくれ」

「俺も連れてってくれない？」

「何に」

「勇者の旅だよ、たあび」

「「はあ？」」

ぽかんとするディアとグラナートを見て、コライユが口端を上げる。私なりに彼女の心中を察してみると、『その顔その顔、間抜けな面だなー。ハッハッハ、こんな顔すると思ってたぜ』みたいな感じだと思う。

コライユは笑みをやめ、真面目な顔で私達を見る。

「……とりあえず、旅連れてって。役にはたつからさ」

グラナートが舌打ちする。誰かに面と向かって舌打ちする所を見たのは、これが初めてな気がする。グラナートは全く気を使わない

様にみえて、意外に使う。そんな彼が、誰かの発言に舌打ちするのは意外だった。コライユは笑みを深める。しかし冷や汗をかいていた。

「……てめー、コイツの事利用しただろ」

「……事前に許可はとってるぜ」

「……許可ー？」

般若みたいな顔をしたグラナートに睨まれる。びくりと体を縮こまらせたなら、困惑の表情を浮かべられた。アメさんと共に一歩離れた位置に居たディアが私の服の裾を引っ張る。ディアを見ると、苦々しい笑みを浮かべて何かを差し出された。

「これは？」

「グミだ。食べるか？」

「え？ い、今はいいよ？」

「そうか……」

なんだかディアに変な気を使わせてしまっている。大丈夫だよ、と言って微笑むと余計悲しそうな顔をされた。その横に居たアメさんが、呟く。

「……意外と頭の回転が速いな」

「へ？」

「お前じゃない」

冷たい視線を私に浴びせた後、アメさんはグラナートを見る。

グラナートは私達の会話は一切聞こえてないのか、コライユを睨み、口を開く。

「一国の姫が疾走したら相当な騒ぎになるだろうな。いや、表立って旅に出たいと言っても許可はおりない」

「剣士で勇者はバカって相場が決まってるんだぜ？」

「……お生憎様、テストは基本100点だ」

「う、うっそッ!？」

不敵に笑ったグラナートを見て、私は腰が抜けそうになった。コライユじゃないけれど、私もグラナートは……その、あまり頭がよくないと思ってた。だって、いや、だって！

混乱している私に、ディアが笑いながら言う。

「本当だぞ。成績どころか、テーブルマナーまで完璧だ」

「……う、嘘だ」

クーストンでのグラナートの食事を思い出す。……ふ、普通だった。何も感じない位に。でもそれって、いいから普通だと思うのは……は……。

「完璧人間かよ。すげえな……でも完璧すぎる男ってのは女から見たらどうかなあ」

「話を反らすな」

何この厳しいグラナート。

コライユは喋り方が変だけど、すごい可愛い女の子だ。大きな桃色の瞳に、小さな鼻、薄い桜色の唇。桃色の髪は、腰まで伸びていて、毛先だけハネているが、痛んでいるという感じではない。少しでもくせ毛な髪は、絹糸の様にサラサラだろう。

見た目だけ見れば、もうとてつもない美少女だ。綺麗と言う感じではなく、すごく可愛い。ふわふわの砂糖菓子やショートケーキみたいな甘い可愛さ。

「……女に厳しい奴。男は常に女に紳士じゃないといけないんだぜ」

「敵に紳士である必要はねーだろ」

「……敵とは、冷たいなあ……」

「単刀直入に言う。却下だ」

「……どうしてだ？」

「……てめーはアイツを利用した。理由はそれで十分だろ」

「ふうん」

断られたと言うのに、コライユの声色は軽やかなものだった。グラナートの表情が不機嫌なものに変わる。

コライユが唐突に振り向き、私に向かって微笑む。

「それはつまり、この子が許可すればいいって事だろ」

「……え」

「異論は認めない。あんたの言い方だと、この子さえ俺を許せばいいって話だろう」

「揚げ足をとるな」

「あんたのは、俺が個人的に嫌って事だろー？」

二十羽

わざと語尾を伸ばし、コライユが頭だけ振り向いて笑う。私からはコライユの顔が見えないから、笑ったのかはわからない。でも笑ったと思う。

グラナートがますます不機嫌そうな顔をして、剣を握る手を強めた。コライユから視線を外し、私を見る。……何が言いたいか分かる。

許すなっていう事だろう。

……王とどういった風に過ごしたかはグラナートには言っていない。でもそれでも、グラナートは私がとても辛かったと言う事を解ってくれている。

でも、私は——知っている。彼女が、こんな風に振る舞っているのも、私と同じ？身代り？にされた者だと。……うん？ あれ、違う。それは勝手に私が想像していた事だ。本当にそうかは解らない。

「……コライユ、あの」

「俺もあんたと同じ——」

「え……」

「——なんて話で同情票を取る気はない」

「へっ？」

コライユは鼻で笑う。どこからどう見ても女の子の筈なのに、時々女顔の男の子に見えてしまうのはどうしてだろう。

「役にたつ、絶対守る」

「……え、えっと」

真っ直ぐ瞳を見つめられ、私はどうすればいいか解らなくなる。

グラナートは、コライユと一緒に居たくないらしい。なら、私は――違う、違う。ちょっと待って。

元々、コライユは勇者の旅について行くパーティメンバーの筈だ。どうやって、仲間になったかの経緯は思い出せないけど……コライユと、グラナートはこんなに相性が悪かっただろうか？ 違う、そんな事はない。コライユは、サブヒロインの様な役割をしていたと思う。そう、そうだった。

友達が言ってた『グラコラは超王道CPだよ。一番多いのはグラブルだけど、あーでもBL含めると』云々と。

アニメの映像を無理やり思いだす。グラナートとコライユは、樂しげにまるで親友の様に話している。男女の友情というよりは、男同士の友情で、そんなところが人気だった。と思う。

ゲームでは、各所に存在する選択肢次第でもコライユルートに行けて、2人がくつつく話もあった。……らしい。

ルートは制作日時が何年もかかっているブランド第一作で、テスト的要素が沢山含まれていた。それが選択肢によるルート分岐。まるで恋愛シュミレーションゲームの様に、ストーリーが変わるのだ。根本の話は変わらないのだけど、グラナート主人公の未来が変わる。

思いだし、私は罪悪感にさいなまれる。私が、そんな二人の未来を壊してしまったのだ。

「……う、うん、わかった。一緒に来て」

私は頷く。

私のせいで、可笑しな事になっているのなら私が直さないといけない。それは当然の義務だ。

「おい」

「……ごめん、で、でもっコライユは……悪い人じゃないし」

「お前を利用した人が悪い奴じゃねーえ？」

般若のみたいなグラナートから目を反らし、洞窟の側面を見ながら会話する。赤い土でできている。普通タイプの洞窟だ。モンスタ―とか出て来ないのか？ 大丈夫かな……。

「人と話す時は、人の目見て会話しろ」

「あうっ!？」

無理やり顎を掴まれて、グラナートを目を合わせられる。私とグラナートの間に居た筈のコライユは、いつの間にか一步離れて私達を見ている。その腕にはクマの人形。あ、やっと拾ったんだ……。

『コライユ嫌いあ。嫌いあ。もう知らんえ。我をなめたら居たい目にあうえ』

ブツブツと呟きながら、人形はコライユの胸をぽかぽかと叩いている。可愛い。

「おい……」

「ひゃっご、ごめんなさいっ!？」

苛立った声に、急いでグラナートを見ると、血管切れかけ寸前だった。……うわあ、こんなに怒ったグラナート初めて見た。

グラナートは明らかに怒りを含んだ瞳で私を見て、無言。言い訳位聞かせろよバカ野郎って事だろうか……怖い。

「え、えっと……あのーその、私、え、えっとコライユには、酷い目にあわされてないし……」

「でも利用はされたんだろ」

「り、利用？」

「……あのお姫様は、お前を利用した。理由はしらねーけど、大方国から出て自由になりたい、とかだろ」

「え、えっと」

つ、つまりグラナートは私を生贄にして、コライユが国外に逃げ出したと考えているのだろうか？

それは、違わないけど違う。

「……偶然だよ」

「偶然？」

「私が逃げ出して、あたふた騒いでいる内にコライユも逃げた。それだけだよ」

「……、ふーん？」

「う、うん」

「じゃー利用された訳じゃねーってことか？」

「うん。第一、私達逃げたじゃない……コライユが私を利用しようとしたなら、逃がさない筈だよ」

「……」

釈然としない様子のグラナートに、私は愛想笑いを浮かべた。

グラナートは間違っている。確かにコライユは私を利用しようとした、でもできなかった。もしかしたらしなかったのかも知れない。でももうーどうでもいいことだ。私は過去には囚われない。気にしない。……絶対。

二二羽

コライユの事はとりあえず和解となった。

ディアは『戦力になるのなら、断る理由はない』アメさんは『どちらでもいい』との事らしい。

グラナートは依然として、『なんか嫌』らしい。ごめん、私のせいで……。

居心地の悪さに我慢していると、コライユが口を開いた。

「……なあ、何時までここにいるつもりだ？」

「夜」

「……何でまた」

端的に答えたグラナートに、コライユが首を傾げる。グラナートは彼女を一瞥してから、ため息を吐く。

「夜の方が逃げやすいだろ」

「……逃げるって、追手からか？」

「そうに決まってるだろ」

「はあー……ああ、そう。じゃあ行こうぜ」

服が汚れるのも気にせず、壁に背を預けていたコライユが背を離し、皆に向かって微笑む。

「あいつならもう倒した」

「……はあ？」

『倒したのは我の力あ！ いつも美味しい所だけ――』

騒ぐ人形の口をふさぎ、そのまま自分の体に押し付ける。潰れて

る！ 潰れてるよ！ 踏まれた人形みたいになってる！
ディアが苦笑して、コライユに一步近づく。

「それは本当なのか？」

「本当だとも。だから行こう。早く行った方がいいぜ？ 時期に目を覚ますんだから」

「……………」

グラナートは目を瞑り、息を吐く。ちらりとコライユを見た後、山道に視線を移す。誰もいない山道は、人が来る様子はない。

「……そうか」

「おう」

「……なら行くか、コロ」

「え、うん？」

「後ろに居ろよ。前に出て来るな」

「う、うん」

私が頷いたのを確認した後、グラナートは歩いて行く。金属の鋭い音がしたと思うと、結界がなくなった。アメさんが懐中時計をしまい、ディアがアメさんに飴を渡す。MP回復のできる魔法の飴だ。

「コロちゃん」

「へっ？」

「コロって名前なの？ すげえ名前だな」

「え、いや……えっと、あだ名」

コライユが私の顔を覗きこむ。目の前にキラキラ美少女が来て、思わず身構えてしまった。コライユはそんな私を笑う。可愛いのだけど、どこか男らしさを感じるのはどうしてだろう。

「ふうん、あだ名ねえ。……そっか、じゃあ俺もそうよぼっと。あ、俺の事はなんて呼んでもいいぜ？」

「うん、コライユ」

「おうよ、よろしく」

手を差し出され、私はその手を握る。コライユはとびっきりの笑顔で顔を浮かべた後、そのまま歩きだす。手は握られたままで、片手は人形を持っている。不意打ちされた時大丈夫なのだろうか？

山道には結構な数のモンスターがいたが、四人には敵なしといった感じだった。

グラナートは大剣だとは感じさせない剣さばきを、

アメさんは相変わらぬ的確な魔術を、

ディアは皆の補佐を、

そして何より凄いのが――コライユだ。

コライユの持っていた人形はただの人形ではなく、デフテロレプトと言う一秒を司る凄く精密な魔術だった。59秒までなら、何でも止められるらしい。

デフテロレプト通称デプが時間を止め、その内にコライユが魔術を使う。

時間が止められるというのは凄く有利だ。向かうところ敵なしなんじゃないだろうか。

コライユが本をしまう。錠がついた古びた本。

「……アメさんは懐中時計、ディアは杖、コライユは本……。魔術

を使う為の武器って何でもいいの？」

私の疑問に答えてくれたのはディアだった。

「武器こういった物はただの媒体にすぎん。魔法仕であれば、媒体がなくても魔術も使える……。ただ、魔力血の純度が低いものは、媒体がなくては魔術が使えない。魔術仕にとっての武器とは――」

「料理人にとっての調理道具。魔力素材だけで料理はできない。調味料詠唱だけでは味気ないけど、調理道具があればもっと美味しくなる」

コライユが私を見てにやりと笑う。

「さつきディアは使えないって言ったけど、使おうと思えば使えるぜ。まあ、力は半減どころか8減位するけどな」

「また、魔術仕の武器は自分が一番大切になっている物を選ぶのだ。各武器屋で装飾などしてもらえば、魔術の威力や攻撃力も上がる」

「……そういえば、武器って一部の人間の武器しか新たに買えなかった。」

グラナートの武器は買えたと思う。

私は説明してくれた二人にお礼を言い、一言も話してないグラナートの裾を引っ張ると、きょとんとした顔で振り向く。……美女だ。美女がいる。

「グラナートの武器は、買えるよね？」

「ん？ あー、俺は武器に拘りはねーよ」

「……あれ、それってお父さんに貰った剣じゃ……」

「でも強い武器があるなら、そっちに変えるべきだろ」

「……ええっ」

「なんだよその顔」

「だって、普通は感動秘話だよ？ 親の剣で戦っていたなんて、勇者っぽい！」

「それで負けたら意味ないだろ」

「……………」

グラナートって、どこかものすごい冷めてるよね……。勇者って熱いのが基本じゃないの？ そんな勇者じゃなくて、面倒くさがりで変な勇者だからグラナートの事好きになったのだけど、実際に勇者だと思って見ていると少し何か……。

「女心が解らねえ奴だな。あいつ青い薔薇を持ってきた彼女に対して『そんなもんペンキで青く塗ったんだろ』とか言いそう」

「……さ、さすがにそれはないと思うが……。それに青い薔薇は最近ラウルス王国で造られたと聞いたぞ」

「じゃあ夜景の見えるレストランで食事して、綺麗って言った彼女に向かって『何が？ ただの建物と光だろ』とか言いそう」

「あ。あれで……。意外とロマンチックな所も、ある……と思うぞ」

ディアの苦し紛れの言い訳に、コライユが大笑いする。一連の会話を聞いていたグラナートは『そういう時は合わずに決まってるだろ』と拗ねていた。

二二羽

山道を超えると、そこには絶景が広がっていた。
思わず吐息を洩らす。

石灰岩質の山の斜面に四角い建物が建っている。建物は全て岩でできており、例外洩れず灰色だ。そんな灰色の建物と建物の間に青々と木が生えている。天空の城みたい……。

「……要塞国、 그리스 軍国」

ディアが呟く。上へ上へと建てられている建物の頂上には、お城があった。あれを守るために、この様な造りになっているのだろうか？

入国手続きを済まし、大きな門をくぐり、私達は街の中を歩いて行く。石垣で出来た家が並んでいる。そういえばこの国は『ラピュタでも舞台になった都市が舞台です』とインタビューに書かれていた気がする。

「ん？　なんかやってんぞー」

グラナートが前方を指差す。中央都市だろうか？　そこには色々々の天幕がかけられた露店が並んでいた。露店を営んでいるのは、皆いかつい男性で……売ってる物は、銃器が多めだ。……えー！？　それって露店で売っていいの？

私達は露店に近づき、近くで売り場を見て目を丸くする。やはり銃器ばかりだ。赤い布の上に、乱雑に銃器が並んでいる。

「なんだこれ？」

グラナートは小型銃を手に取り、しげしげと見つめている。そんなグラナートを見て、店番をしている日にやけたマッチョなオジサンがにまりと笑う。

「なんだ美人さん、これを知らないのか？」

「……………」

「え、い、いや…………あの、あの」

も、もしかしてこのマッチョの人グラナートの事女だと思ってる？ ええ、180はある男だよ！？ グラナートを見ている。大きなボタンの付いた白いシャツと、濃い紫のズボン。背中には大剣を背負っている。…………まな板な女の子に、見えない事も…………いやいや、ない。ないよ。確かにグラナートは息を忘れる程の絶世の美女…………美男だけど、そんなこの格好で間違える筈は…………！ はっ、もしかして！

「ディ、ディアの事言っただすよね？」

「待たんか、ワシも男だぞ！」

「あっ…………、じゃ、じゃあアメさんを見て…………とか」

「…………女に間違われた事はない」

アメさんは無表情でそう言い、視線を並んでいる銃に戻した。未だ喋らないグラナートにどうしようと思っていると、ひょいっと手が伸びて来た。え？ と思う暇もなく、その手がグラナートから小型銃を奪う。

「これはフィラデルフィア・デリンジャーっていう前装式の単発小型銃なんツスよ」

「……へっ!？」

振り向くと、煌めく金髪に赤い色眼鏡をした男の人が居た。……現代にも居る様な、不良っぽい青年だ。でも、纏ってるオーラがすごい。白いスーツが、さらに可笑しな雰囲気醸し出しているし、何より異質なのは――匂い。

すごくいい、花の匂いがあるのだ。こんな香水知ってる。名前なんだっけ？ 何にせよ、女の子がつける香水だ。

グラナートの様な絶世の美と言う訳でもなく、アメさんの様な男らしいクールなカッコよさでもなく、普通に居そうな顔だ。それでも、カッコイイ分類に入る、現代ならアイドルにでもなれそう。グラナートもその人を見て、首を傾げる。男は楽しげに笑う。

「この国って男女概念があんまりないんすよ。軍国だから」

「は？」

「貴方の事、女だと思って美人さんって言ったんじゃない、男だと解ってて美人って言ったってことッスよ」

金髪の男はそこで区切り、笑いを噛み締める様なしぐさをしてからウインクをする。

「ま、そっちの方が戦慄の走る話ッスけどね」

楽しそうに笑っている男を見てから、グラナートはいかつい店主に視線を移す。店主はガハハと豪快に笑う。ひ、否定しない……の？

「……軍国と言うのは、男尊女卑の文化が未だ残っていると思っていたのだが」

「うーん、大体の組織でそうなんッスけど、男だけでずっと居ると男でもいいと思うらしいッスね。ねえ大将」

「おいおい、やめてくれよ、銃が売れなくなる」

肩をすくめ、店主が笑う。ディアとグラナートは複雑な表情を浮かべている。アメさんを見ると――え？

ぽかん、としていた。そんな顔を見たのは初めてだ。そんな人間らしい表情を見たのは、初めて。その視線の先には――

「ところで可愛らしいお嬢様方は暇ッスか？」

「……ふうん、これがナンパって奴かあ。はじめてだな」

「そんな可愛らしい外見で？ 御冗談を、ッスよ」

――コライユを口説いているその男。

……もう一度その人を見る。金髪の短髪に、色眼鏡。目の色は……多分金色。すらりと伸びた身長は、多分180センチ以上ある。一般的に見てカッコイイ人。……金髪。ん？ あれ、なにか……忘れてる。

「そちらの可愛いお嬢様も」

「へっ？」

何時の間にやら手を取られる。眼前には金髪の男。色眼鏡から覗く金色の目が私を見ている。その奥にある感情は……まったく読みとれない。なんだろう、気持ち悪い。目を見たら万人の心が解る程の達人じゃないけど、何か解る筈だ。それが、解らない。何も感じてない？ ……この人は女の子を口説きながら、特に何も感じてない？ それって、変じゃない？

果然とその人を見てみると、肩に手を置かれ、ぐいっと後ろに引かれる。その瞬間金髪の人は私から手を離れた。え、えっ？ 後ろに倒れ込み、上を見るとグラナートの顔。下からみても綺麗なのって可笑しいと思う。しかし綺麗な顔は不機嫌そうに歪んでいる。

「……………」

「おっとすみません、恋人だったツスカ？」

「……ああ」

「えっ!？」

「……彼女さん、驚いてるツスよ？」

眼前の男は楽しそうに笑っている。私は意味が解らない。グラナートの恋人になったつもりはない。認証はまだしてない。……まだ？ 自分の思考の変化に驚いていると、グラナートが高らかに宣言した。

「……子供だっているぜー？」

「……はっ!？」

グラナートの発言に、私の時が止まった。それは私だけじゃない。コライユも金髪の男もびっくりしている。ただアメさんは無表情、ディアは何故か頷いていた。

二三羽

グラナートに離して貰い、私はグラナートに向かいあう。その後ろにアメさん。私の後ろにディアとコライユと金髪の人がいる。金髪の方は後ろと言うよりは、斜め横にいて、にやにやしながら私を見ている。異常なまでの居心地の悪さをなくし、誤解を解くために私は口を開く。

「えっと……ぐ、グラナートさん」

「なんだよー」

「い、いえ、あの……、その身の覚えが……ないのですが」

「はあ？ ……んだよお前、誰とでもああいう事するのかよ」

「ええっ、しないよ！ だ、大体何の話をしているのか……」

「……そーか、そういえばお前知識がなかったんだよなー」

そういえばそんな事を、クーストンで言われた気がする。……ついでに、気持ち悪くなったら言えよ、とか……九か月とか。

「クーストンの時は、多分宿ってないと思うんだ。ギリギリセーフって奴？」

「うむ、ワシも危ないと思った」

「……え、3……」

金髪の方が私を見てから、口に手を当てる。ご、誤解！ 大いなる誤解！ 私は何もしてない。絶対にしていない！

「んで、アウトって思ったのがヴァイス共和国」

「……ちょっと、待って下さい。その、ヴァイス共和国では別行動でしたし……」

「はー？ 今日しただろ！」
「きよ、今日ー！？」

今日の記憶を無理やり呼び起こす。私の中ではモザイク処理されている王様の顔が浮かぶ。一瞬フリーズしそうになったけど無理やり記憶を探る。グラナートと二人で話したのはベランダだけで、すぐ王が来た。……どう考えても無理だ。

「ベランダで」

「大人しい顔して、随分……ッスね。いや、いいと思うッスよ」

「ち、違うって！ 違いますから！ ぐ、グラナート、本当に何を言ってるのか私にはまったく……！」

羞恥心から出かかっている涙を堪え、グラナートを見ると困った顔をされる。そんな顔をしたのはこっちだ。

「子供に変な知識を与えるのもなー」

「こ、子供じゃないから教えて！」

「……仕方ねーな、知らずに誰構わずして、腹が破裂したら困るし……」

なんてグロテスクな事を言うんだろう。腹が破裂！？

違う意味で高鳴りっぱなしの胸を押さえ、グラナートの言葉を待つ。

グラナートは胸を張り、不敵に笑い、口を開き――

「男と女が抱き合うと、コウノトリがキャベツを持ってきて、女の腹に詰めるんだ。んで、子供が生まれる。常識だろー？」

グラナートの発言に、一同が凍りつく。

コウノトリ？ キャベツ？ 抱き合う？ ……抱き合うってもしかして、ハグの事？ グラナートは、ハグで……子供ができると思ってる？ 確かに、ヴァイス共和国で私達は抱き合った。……一瞬躊躇したのは、そんな理由だったのか。

グラナートが何を言ってるか理解し、皆が一斉に笑いだした。

「ぷっ、あはははっ、すごいッスね、それは凄いッスねえっ！ いっぱい抱き合ったらその分キャベツが詰められてお腹が破裂しちゃうッスよ！」

「ぶははははっ、キャベツはその後腹でどうなるんだ？ 腐るのか？ それとも食べるのか！？ あっははははは」

「食べるー！？ 誰がッスカ！？ 誰がッスカー！」

「そりゃあお前夫がだよ、羊水でふにゃふにゃになったキャベツを水切りしてサラダにするんだよ！」

「サラダッスカいいですね！ キャベツ食うなら羊水も調理しろよって感じッスよ！」

「そうだなあ、じゃあやっぱキャベツスープか。羊水のスープでさあ、羊水と書いてだし汁と呼べ！」

「羊水……っ！」

盛り上がってる二人の会話に店主や道行く人も笑いだす。

抱きしめあったらアウトで、後ろからとかなら大丈夫。そして押し倒した場合はギリギリセーフ。

なんて曖昧なんだろう。

「大体、どーやって解るんスカ？ 男女が愛し合ったって……！」

「……それは、……なんか受信するんじゃねーのか？」

「「受信！！ あっはははははっ！」」

「なんだよ、何で笑うんだよ」

店主や街行き人にまで笑われて、グラナートがご立腹の様だった……。ぷっ、ふふ……ああ、よかった。ただの誤解だったんだ。でも、キャベツ畑とかコウノトリとか言う年頃じゃないよね、グラナート。確か18とかだったと思うんだけど……。

「む、何故笑うのだお主ら」

「え。王子様も？ かぁー、なんだそれ」

「……？ 何の話をしているのだ」

「そーだぜ、急に笑いやがって」

いたって真剣な二人を見て、コライユは笑みを浮かべる。

「ふっ、お兄さんが教えてあげてもいいんだぜ？ 本当の——もごっ」

「えっ、アメさん？」

コライユの口を手で封じたのはアメさんだった。アメさんは無表情で、全く感情が感じられない声色で言う。

「そうだ。キャベツ畑からコウノトリが運んでくる。この人達の言った言葉は気にするな」

「えっ」

まさかアメさんまでそんな事を言うと思わなくて、私は目を丸くしてアメさんを見ると、睨まれた。……余計な事は言うな、という事だろうか。どうして？ このまま変な知識を持っている方が少し問題だと思うのだけど。グラナート達の将来が心配になっていると、先ほどまで爆笑していた男が驚いた声を出す。

「あれ、……アメ君？」

「……お久しぶりです、トパーシオさん」

コライユの口から手を離し、アメさんが丁寧に礼をした。……は？
金髪の彼は私の後ろから前に出て、アメさんに近づく。

「いやあ、3カ月ぶり位ッスかね。髪が長くなって、特に前髪が」

トパーシオと呼ばれた男がアメさんの前髪をいじる。

アメさんは甘んじてその行為を受け入れている。……えええ？！
私がそんな事をした日には『触るな』と手を払われるだろう。私
じゃなくても、グラナートがやってもディアがやっても、コライユ
がやっても。

「一瞬分かんなかったッスよ」

「申し訳ありません」

「謝るのはこっちッスよそれより、今回は何の仕事ッスか？
…付き人？」

「ええ……傭兵のようなことを。トパーシオさんは何故ここに？」

「ちょっと探し人をしてるんスよね」

「探し人ですか？」

「……ほら、ベルジュって居たでしょ？」

「え？ はい。……アレがどうしたのですか？」

会話する声が段々とひそひそ声になっていく。ベルジュ？ どこ
かで聞いたことあるなあ。

「ちょっとお痛をしちゃったんスよ」

「……協力できるものなら、僕もそうしたいのですが……」

アメさんが私達を見る。普段とは違い、人間らしい表情が浮かん

でいる。

「いや、いいッスよ。探し始めたばかりッスし、まだ全然手はあるッスから……、本当に自分の手だけに負えなくなったら頼むッスよ——ところで」

今度はトパーシオさんが私達を見る。その視線は、ディアで止まった。そしてまたアメさんに戻る。

「……もしかして、ビオレータ国？」

「はい」

「……ああ、そう」

トパーシオさんが呟く。それは先ほどまで笑っていたとは思えない程、低く、軽蔑の含んだ声だった。

二四羽

「じゃあ、僕はこれで失敬するッスね」
やつがれ

答えを聞く前に、トパーシオさんはその場を去って行った。

「やつがれ？」

「……古代に、そのような一人称が存在すると読んだ事がある」

私の問いに答えてくれたのはやはりディアだった。ディアは目を伏せ、唇に手を当てる。美術品の様に美しくもあり、花のように可愛い。

「結局、なんだったのだ？ 何故笑われたのだろうか」

「さー？」

コライユがまた笑いを堪えている。アメさんはまた能面に戻り、ため息を吐く。

「気にしないでいい事だ」

なんだかおかしい。

……多分、アメさんはグラナート達の知識が可笑しいって知っている。それでいて隠している。そんな気がする。コライユも気づいたのだろう。特に何も言わない。理由は解らないけど、今はそれが正しい。……気がする。

私達は宿屋に入り、ベッドでくつろいでいた。

中央都市にある普通の宿屋だ。

ベッドが3つに石の机に椅子。外観も石垣でできているのだが、内観も全て白い石垣で出来ている。すごく珍しい。

石造りの天井に電灯はついておらず、机とベッドの横にあるタンスの上に、ランプがあるだけだ。窓は大きめのものがひとつ。ベッドの斜め横、扉から見た真っ直ぐの位置にある。

「あ……あの」

「……なんだ」

先ほどの事がどうしても気になった私は、宿の廊下にアメさんを呼び出した。

アメさんは個室の扉に背を預けた。ここの扉は全て石でできている為、聞き耳はできない。私は意を決して、質問する事にする。

「……さっきのってどういう事なんですか？」

「……もっと明確に話せ」

「……アメさんは、本当にコウノトリとかキャベツ畑とかを信じているんですか？」

「信じていたら何か問題があるか」

無表情でそう言い切ったアメさんに、口ごもるがさっきの事を思い出す。

「なら、何でコライユが本当の事を話そうとした時阻止したんですか？」

「……………」

アメさんは目を瞑り、ため息を吐きだす。鬱陶しそうに髪をかきあげて、壁に手をつく——鈍い音が廊下に響いた。砂の様なものが落ちた音が私の耳に聞こえる。すぐそこから。当たり前だ、アメさんが手を強くついた所は私の頭のすぐ横だ。

一気に近づいた距離より、その目に背筋が凍り、鼓動が速くなる。

——憎悪、軽蔑、憤怒。

アメさんが私を見る目は、まるで路上のゴミクズでも見る様な目だった。違う、もっとひどい。仇でも見る様な、目。

「……貴様はそれほどの魔力を持っているのに、何故そこまで無知なんだ？」

「え、えっと……き、記憶が曖昧で」

「ならば思い出させてやろうか」

懐中時計を取り出し、アメさんは私を怒りを孕んだ紫の目で、睨む。

「巨大な力を持つ者はその力によって周りの人間を狂わす。貴様はその分類の人間だ。記憶がないのなら戻してやろう」

「……」

記憶を戻す魔術やらを使っても、私は古代語を思い出せない。……ルートの内容は思いだせるかもしれないけど、やめた方がいい。……
だけど嘘だ言うのもこの雰囲気では無理だ。

「どうせ記憶はあるのだろう」

「うっ……」

「しかし、それ程の魔力……他人に認知される程の魔力血の純度を持ち、周りが気づかない筈がない」

「……………」

私の額に冷や汗が浮かぶ、何かまずい事になってきた。よく分からないけどまずい事になってきた。

「そこから推定されるに、貴様は——この世界アルシュの人間ではない、と言う事だが」

「……っ」

「それは対して珍しい事ではない。……主も、異界から来た」

「主？」

「貴様には関係ない」

な、なら何故言った……!?

あくまでも冷酷なアメさんに少し怒りを感じる。一番好きなキャラクター云々はいいい、私は役に立ってないし旅の仲間だから優しくしてくれとも言えない。言えないけど、もう少し、もう少しこう!

「……今からでも魔術の使い方を覚えるのを勧める。今から本屋にでも行って、古代文字と魔術の本を買ってこい」

「か、買ってこいと言われましても……」

「金ならやる」

アメさんが懐からお札を取りだす。人の顔は一切描かれてなく、風景が描かれたお札だ。

「本ならば5冊程度買えるだろう」

「……………では、お言葉に甘えます」

「ああ……………ついでに」

私から体を離し、アメさんは再び扉に背を預けて目を瞑る。

「禁術の本で『クローフィ・モナルコス血の君主』という禁術を知って来い」

「クローフィ・モナルコス？」

「……………ひとつ、忠告してやろう」

「へ？ ……はい」

「グラナート・マリートヴァに本当の事を教えれば、あの男は誰とでもそういった事をする様になるだろうな」

「は……………はい？」

なんですか、それは？

二五羽

私は本屋に向かった。道行く人に本屋の位置を聞き、やはり石造りの本屋に足を踏み込んだ。大きな岩を真ん中でくりぬいた様な作りの本棚は、ちよつと圧巻される。

……さて、魔術の本はどこにあるんだろう。
きよろきよると辺りを見渡し、目当ての本を探す。

「どうかなさいましたか？」

朗らかな声が聞こえて、はいと振り向くと……トパーシオさんが居た。

「え、何してるんですか……」

「ちよつと探し物をしてるんすよ。君は本屋で探しものツスカ？」

その言葉に、私は引つ掛かりを感じた。

——君は？

トパーシオさんも本屋で探し物をしているのではないのだろうか？
人のよさそうな笑みを浮かべているトパーシオさんだけど、やはり目は笑ってない。何かを探る様に私を見ている。……気持ち悪い。

「……どうしたんスカ？」

「え。いや……なんでも。あ、そうだ。あの古代文字の本と魔術の
使い方の本がどこにあるか——」

知ってますか、と言う前に私は言葉を止めた。

「……どうしたんツスか？」

トパーシオさんの、纏ってる空気が変わった。普通解らない程に微々に、殺気を孕んだ。こんな事、前は解らなかった。私の中に魔^マ力^{リキ}の中核があるからかもしれない。人の気持ちや雰囲気^{エアビュン}が、手に取る様に解る。

目を細め、トパーシオさんが腕を上げた。私は思わず一步後ずさった。

腕は――ずっと伸ばされて、私の奥を指差す。

「……魔術と古代言語の本は、あそこの奥の棚にあるツスよ。じゃあ、自分はもう行くツスから」

「……はい、教えて下さりありがとうございます」

「いえいえ」

踵を返したトパーシオさんを見て、息を吐き出す。

――何か、されるかと思った。

こんな危機を感じたのは、ヴァイス共和国以来だ。

世界が私の思うままに、という言い方は適切ではないのだけど……私はなんやかんやでともうまく行ってる。誰かに憎まれたりはしてないし、狙われたりはしてない（王様の件はちょっと違う気がするので割愛）怪我した事もない。

でも、この先そうなるかは解らない。そんな不安が蘇ってくる。

「お客様？」

「えっ、あ、はいすみません」

何時までも呆然と立っていた私を奇妙に思った店員さんが私の元に来る。私は無理やり笑顔を作りながら、奥に進んだ。

適当に本を取り、パラパラとめくる。

謎の言語の書かれた本だった。表紙を見ると『幼稚園からできる魔術の使い方』と書かれていた。横の本を見る『サルでもできる魔術』『必須！魔術A』……何この軽さ。数学の参考書か。

とりあえずこれでいいや。後は古代言語の覚え方の本。それはあっさり、見つかり、二冊を抱える。魔術も古代言語も、この世界では必須科目らしい。じゃあこの世界の学校は、六教科なのだろうか。そんなバカな事が頭に浮かぶ。

「そうだ……禁術の本。……血の君主」
クローフィ・モナルコス

真っ黒い本を見つけ、表紙を見る。『禁術』と簡潔に書かれていた。……こうやって読めるのは、魔力の中核の力なのか、制作側の手抜きで共通言語が日本語なのか。

まあどちらでもいいかな。……つと、あったあった。

「——血の君主。クローフィ・モナルコス『血の純度を高める禁術である』お、これね……

えーつと

『穢れのなき身体でなくては使えない。禁術でありながら、その条件だけを使えてしまう為、気軽に使う人が多い禁術である。』

ただ、二十歳までしか生きられない体になってしまう為、要注意だ。
『』

……え？

「……………えっと」

——禁術の副作用で、二十歳までしか生きられない体になる……？

誰が？　なにが？　どうして？

急に体温が冷めて行く様な感覚がしてから、脳裏に、ディアの姿が浮かぶ。

ち、違う。違う。私は知らない。本当の事を知らない。グラナートが禁術って聞いて怒ってて、ディアが……ディアは、なんて言った？ あの時、ディアは『ワシのせいでグラナートに辛い想いをさせている』と言った。そこから、予想しただけ。本当に、ディアがこれを使ったか解らない。

——なら、何でアメさんはこれを私に教えた？

「っ……違う、いや」

私の手から本が零れ落ちる。

この本の通りなら、ディアは……20歳までしか生きられない。ディアの歳は、18歳だった筈。後、長くても二年……？

そんなの、って——……ああ、本当だ。……本当、これは本当。

「お客様？」

知ってる、私は知ってる。見た……もの、何かで見た。

ディアは……旅の後で、一人……その息を引き取る。

どうして、私は今まで覚えてなかったのだろう。

「あの、これ……買います。この黒いの」

「え？ あ、はい」

「どうぞ」

アメさんに貰ったお札を押しつけ、私は禁術の本だけ持って宿屋に向かって駆け出した。

二五羽（後書き）

申し訳ありません！入れ忘れてました……！

二六羽

私は本屋から帰って来た後、ノックもせずに部屋に入る。

「おー。おかえり、アメに聞いたぞー。魔術の勉強するんだって？」

「うん、ディア来て」

「へっ!？ お、おい、待たんか。引っ張るな……っ、うわあ!？」
「え、おーい？」

無理やりディアを外に連れ出した。

愕然としているグラナートとコライユの後ろで、アメさんはため息を吐いていた。

「ど、どうしたというのだ？」

宿の裏まで連れて来られ、驚いているディア。銀色の髪が太陽の光を浴びてキラキラと輝いている。走り方が悪かったか、肩で息をして、ディアを睨む。

——なんで、そんなに普通なの？

これが本当なら、後2年の命なのに。

驚きながらもどこか能天気そうな顔で私を見ているディアに腹が立って、私はディアに向かって本を投げつけた。

「なっ、なにを……」

「ねえ、教えて……本当なの？」

「なにがだ？　ちゃんと話してくれなければ――」

ディアの声は、彼の体に落ちて無残に石の上に落ちた本によって、
嚙まれる。開いたページは、神様の思し召しのようなだった。

「……何故」

目を見開いた後、ディアが目をつせる。私はディアに詰め寄って、
彼の淡い紫の服を掴む。

「……何故、これを」

「違うよね？　……私の、ただの推測だよね？」

ディアは、私の手を優しく包み込む。手袋につつまれた手が、少し震えていた。ため息を吐き、ディアは沈黙する。永遠にも感じられる沈黙。

――ディアは口を開く。

「……クーストンの時から、言わなくては思っていたのだ」

それは、事実を認める言葉で、私は続きを言おうと口を開くディアから顔をそむけたくなった。

「……ワシは、お主の推測通り、血の君主クローフィ・モナルコスを使った」

「……っ、嘘、違う、よね？　嘘って言ってよ」

矛盾してる。私は可笑しい。勝手に人の事情を暴いておいて、それを嘘だと思いこもうとしている。それがどれだけ滑稽な事か、心のどこかでは解ってる。でも、器から溢れて流れ落ちる水のように、

止まらない。

「嘘ではない」

「本当に……、20まで生きられないの？」

「……」

「なんで何も言わないの!？」

怒りを隠しもせず怒鳴る私に、ディアは優しく言う。
子供に絵本を読んで上げる様な、優しい声で、

「本当だ」

なんて残酷な事を言うんだろう。

ディアは——長くても後2年しか生きられない？

「……なんで、そんなことしたのッ、なんで……!？」 そんなの…
…認めないっ」

「……」

「やだ、やだ、解いてよ! 解いてよそんな禁術!」

「……解けぬ」

「どうして!？」

「……ワシは、元々できそこないだ。魔力も、最低レベルで……」

「そんなの、どうだっていい!」

「よくないっ!」

ディアは私の肩を掴み、私を離す。顔を歪ませ、ディアは手に力を込める。

「……ワシは、一国の王子なのだ。後を継ぎ、一国を背負う王になる……」

私から顔をそむけて、ディアは白い床を見た。前髪で、瞳も表情も解らなくなる。

「死んだら王になんてなれやしないじゃない！」

「……今のままでも、ワシは王になれん」

「なによそれ、いや、私は嫌……私だけじゃない、グラナートだってそんな事望んでない！ 王なんてならなくていい！ だから……ッ」

だから——生きて。

生きて、私達と一緒に居て。

涙が、零れ落ちる。何も考えられない。ただ、ただポロポロと、我慢でも出来ずに、大粒の涙が私の目から流れて行く。

「……すまん、ワシは」

かけられたのは、拒絶の言葉。ディアは、優しく微笑む。この場に相応しくない、聖母みたいな笑み。それが——腹が立つ。

「ッバカ……！ バカディア！ ディアなんて、ディアなんて」

——大嫌い、

その言葉は、泣きそうなディアの顔を見て、言えなくなる。

私はディアを突き飛ばし、駈け出した。

走り続けると、行き止まりに行きついた。それが今の私の状況を表してるみたいで、苛立ちを感じる。

「なんで……？　なんで、こんなに、私怒ってる？」

元々世界が、次元が違う。ここまで、感情移入するのは可笑しい。私が、ここに永住するとしても、皆は私にとってゲームのキャラクター。

それに、2年なんて、そんなにすぐやってはこない。解ってる、解ってるけど、

なのに、脳裏には悲しそうなディアの顔が浮かび、彼が死ぬ姿がこびりついて離れない。

ディアは、笑ってる事の方が多い。いつも優雅に、少女みたいな顔で達観したお爺さんの様ににこにこ。だから、気づかない。何も。

どうして、そんな事をするんだろう。王子だから？

王子って何？　……一国の王の子供って寿命を縮めてまで、魔術を使わないといけないの？　大体——そう、大体……何で、何で

——ディアは旅に居るの？

一国の王の子供が、勇者の旅にどうして一緒に？

可笑しい。どう考えても可笑しい。

ああもう、私は何で……ちゃんと、この物語を見ていなかったの？後悔から壁に手について項垂れていると——頭を掴まれた。

「え？！　……ッ」

そのまま、頭を壁に押し付けられる。優しく、壁に頭をつかされ、

私は顔だけ後ろに向ける。

そこにいたのは、煌めく金髪の男。逆光で顔が見えない。それでも誰だか解る。ギャルみたいに甘ったるい匂い。

「……トパーシオ、さん」

「……敬称は、そのうちやめたくなると思うから、今の内にやとめ
けよ」

「……」

口調が違うトパーシオさんに、私は驚く事は無かった。何か裏に抱え込んでそうな男だと思った。どうせ、こんな事だろうと、推測していた。この世界、金髪でいい奴なんていない。

「さあ、大人しく連れられるか、今ここでもか選べ」

「……この世界の人間は」

「はあ？」

「主語がない人ばかり」

違う。主語とかそんな問題じゃない。皆、腹の内を隠している。何かを隠して、会話してる。友好的に見えて、そうじゃない。

私は旅をして、あの二人とそれなりに仲良くなれたと思っていた。赤の他人じゃないと思っていた。旅の仲間、友達ぐらいに思っていたけど……。

二人にとっては、そうじゃなかったのかも知れない。

私が苛立ちを感じているのは、勿論ディアがあんな事したからって言うのもあるけど——二人に、あんなに大事なことを、隠されてたからなのかも。それは、すぐく身勝手な理由だ。私だって、二人に大きな隠しごとをしているのだから。

二七羽

「……コロだっけ。本名じゃねえな」

「……あなたの目的は、なんですか」

トパーシオさん、もうさんづけはいいや、トパーシオは私の耳に口を近づける。息がかかる程近づいたトパーシオに、何故か全くトキメキを感じないのは、私の中で何かが冷めているからかも知れない。

「いちいち説明するのがめんどくせえ、けど」

「けど」

「教えてやるよ」

……むかつく。なんだろう、この人に感じる良く分からない苛立ち
ちはなんだろう。

「ベルジェって知ってるか」

「いいえ、全く」

「シアンは」

「全く」

「じゃあいいや。一から説明するのがめんどくせえ」

「……」

なら聞くな。なんだこいつ。

「ここでいいやもう。確認程度、ここでできるんだし」

「……確認って、何の」

「あんたがベルジェの駒かって、確認」

「駒……？　っ?!」

膝を蹴られ、私はその場に座り込む。

なにこいつ、最悪だな。女の子には優しくしろよ！　そんないつぞやコライユが言っていた言葉が浮かんだ。

トパーシオを睨むと、野良犬を見る様な目で見られた。……この男を慕っているアメさんって、実は相当やばいんじゃない？……。

金髪の後ろには、誰もいない。一人……なら勝てる。訳がないそんなわけない。

コライユの件で解ったけど、ある程度の美形で口調が変わったり性格が変わったりしたら、そいつはルートの主要メンバーだ。もしくはサブキャラクター。

そんな人間が、弱い訳がない。

トパーシオは懷から謎の物体を取り出す。小さな剣に見えたけど、剣にしては柄の部分が太くて大きい。しゃがみこんで、トパーシオは私の前にでそれを振る。

「これは銃剣」

「……へえ」

「特注品、高かった」

知るか。と睨みつけなかっただけ我慢したと思う。この人にこんなに苛立つのは、ディアの事もあるけど、やはりなにか……生理的なものかも知れない。

「……それ、どうするの」

「どうって、こうするに決まってるだろうが」

くるりと回し、トパーシオは、私の手の平に向かってソレを振りかぶった。私は思わず手を引っ込めるが、手の甲が少し切れて、血

が出てくる。

この世界に来て、はじめて怪我をした。痛い……当たり前か。

「……………」

トパーシオは、無言で私の手を見ている。止血しようと左手でその手を押さえようとしたら——眼前ソレを突きつけられる。

「……触るな、そのままにしろ。魔術も使うな。言う事聞けないなら、目えぐるぞ」

「……………」

この人は何がしたいんだろう。

じんじんと痛む手に視線を向けた時、トパーシオの後ろで何かが動いた。小さな何か。トパーシオもそれに気付いたのか、私から銃剣を離し、後ろに薙ぐ。瞬時に立ちあがり、反応したトパーシオの頭上に——何かが降りかかる。

「リオート」

「！？ アネモス！」

氷が降りかかるが、トパーシオは風を吹かし、その氷を横に流した。上空に居た何かが、くると体を回転させてから私の前に立つ。手には小さなナイフ。そして、その後ろ姿も小さい。10歳位の男……？ どこかで、見た事がある。

その子は——ナイフで自分の手を切った。血が、彼の手から滴り落ちる。

「ウスティオー エクリクシス！」

「な……っ、上級魔術だろ、それ！ 詠唱しろよ！」

トパーシオの驚いた声が聞こえた、かと思うと走り出す足音。え、にげた？

「トロス」

少年が呟く。……何も起こらない。ただ、トパーシオの姿は消えていた。逃げたんだ。なんかテンプレに超カッコ悪い悪役みたいな感じだったんだけど……。本当に主要メンバー？ 買いかぶりかも。うん買いかぶりだ。あんなのがパーティメンバーな筈がない。

「……大丈夫、おねえちゃん」

「え。う、うん」

その声はどこかで聞いた事のあるものだった。その子が振り向く。――クーストンの少年だった。

「は、はえっあッ!？」

「あはは、何それ変な声」

「え、いや、な、何やってるの……何やってるの!？」

「言ったでしょ、僕、勇者になるって」

「……いや、な、なんでやねん」

「あははははっ」

楽しそうに笑うその子は、先ほどトパーシオを負かしたとは思えない。
緑色の目を細め、少年は少年らしくない笑みを浮かべる。

「僕の名前は、ジビエ・ドー。よろしくね」

「は?。」

二八羽

ジビエー・ドー。

その人について私が知ってる事はクールな顔して、かなりのオカ
ンと言う事だけ。それ以外は、小学校の時に痺れるオッサンの魅力
を一ミリも解らず、王道なクールな魔術仕のアメさんが好きだった
為、知らない。

だけど本当に優しく、お金も何もない怪しい私を家に泊まらせて
パンをたらふく食べさせてくれた。感謝してもきれない。

外見は白髪まじりに黒髪に、蒼い瞳。決して茶髪で緑色の瞳では
ない。

「……え、っと」

「どうしたの？」

「い、いや……同姓同名の人を知ってたから、ごめん、驚いちゃっ
て。助けてくれてありがとう」

「ううん、気にしないで」

ジビエ少年は可愛い笑顔を見せる。

「あの、手大丈夫？　すごい、切ってたけど……」

「大丈夫！　パルマコン」

そう言って男の子は自分の手に自分の手をかざす。手が光る。デ
ィアが使ってた魔術だ。でも、なんだろう、光り方がケタ違いだっ
た。数秒で怪我が治る。

「おねえちゃんも、手見せて」

「え？　う、うん」

右手を見せる。私は目を見開いた。傷が、なくなっていたのだ。
……そうか、不老不死だから……死を拒むから、怪我也拒むんだ。
勝手に治る。

……恐ろしい。私一生死ねないんだ。

「……」

ジビエ君は私の手を凝視している。そりゃそうだ。傷が、なくなるなんて普通ない。誤魔化さないと、何と言って誤魔化そう。

「自己治癒の魔術だね！ おねえちゃん凄い魔術仕なんだ！」

「え、う、うん……あはは」

よかった。勝手に納得してくれた。

「じゃあ。僕行くね」

「え？ もう？ 何か、お礼……」

「いいよ、気にしないで僕ヒーローだもん！」

グラナートよりよっぽど勇者らしい少年が、走り去って行く。

……え、つとなんだったんだろう。どうして助けてくれたんだろう？
う？

……ラッキーだったのかな？

私は宿に帰って来た。その間の道のりで、トパーシオに遭わなかったのは偶然でも嬉しい。もう金髪の男は見たくない。本当に。

グラナート達の中に居るであろう部屋の前で、右往左往する。入りにくい。

ディアに切れちゃったし……逆切れになるのかな。あんなに、本投げつけたりすることはなかった。

意を決して、私は扉を開けた。もしかしたら、誰もいないかもしれない。そっちの方が気が楽だ。

「……あ、た、ただいま帰りました」

……そんなに、うまく行かないよね。もれなく皆——トパーシオまで居た。は？

「なッ、な……!？」

「あはは、お邪魔してるツスよ」

目が笑ってない。所じゃない。私に解る位に殺気を孕んでいる。

『なんか言ったら殺すぞ』と、目が言ってる。窓枠に腰掛けているトパーシオの前にはグラナートが居る。

トパーシオは小型のナイフを取り出し、グラナートに向けてから舌を出した。

グラナートがそれをよけないとは思わないけど……。現時点で、気づいてないというのが危ない。さっき逃げたからすごい弱いイメージなんだけど、……グラナートより強いって事はないよね？

どちらにせよ、いらない事はしない方がいい。

「……あ、あっはっは……」

地獄に落ちろ……!

心からそう願ひ、トパーシオを睨むと、厭らしく笑われた。金髪がナイフを懷に戻す。

「コロちよつと来い」

グラナートが大腿でこちらに来る。すごく怒ってる気がするの
は気のせいではない筈だ。私の真ん前まで来たかと思うと、グラナ
ートは私を引っ張って部屋を出た。部屋を出る前に、悲しそうなデ
ィアの視線が突き刺さる。

グラナートが我が物顔で隣の部屋に入った。

空き部屋だったからよかったものの、新婚旅行の夫婦が泊って
たはどうするつもり？

グラナートはひよい、っと私を机に座らせる。グラナートは私の
前の立ったままだ。

「……コロ」

「……う、うん？」

「……ディアの、事だけど」

「え、あ……」

そうだ、私……ディアに怒って宿を出たんだ。ディアは、多分グ
ラナートに報告したと思う。いや、無理やりグラナートが聞いただ
ろう。

「……知っちゃったんだろ」

「……ごめん、勝手に」

「……いい。こちらこそ、悪かったな。隠してて……」

「……」

「知らない方が、いいと思ったんだ」

グラナートは、息を吐いてから、とすん、と私の肩に頭を乗っけ

た。

突然の事で、私は硬直する。グラナートから、頭を撫でられる以外の事は、殆んどされた事がない。大体が怒りに任せての行動で、グラナート自身が選択して何かを、こういう事をするのは……はじめて、な気がする。

「……俺は、知りたくなかった……っても、禁術使う所見てたんだけどよ」

「……え？」

「……俺の親父が、国で一番強かったから、その息子って事で幼少期から勇者として期待されてた」

「……そう、なんだ」

「親父は、古傷があって、その所為で勇者にはならなかったら、尚更っーか」

グラナートは普通に話しているけど、私はそれどころではない。真面目に聞かないといけないのに、心臓が面白い位バクバク言ってる。聞かれてたらどうしよう恥ずかしい。

「それで、俺も魔力があるから……多分、俺にもやらすためにディアが禁術使わす所見せたんだと思うけど」

無理やり自分を落ちつかせて、グラナートの言っていた言葉の頭の中で咀嚼する。

俺もやらす為って事は、グラナートはしてはいないのか。よかった。

でも――、

「……どうして、……止めなかったの？」

「……当時は、禁術だって知らなかった。知ったのは、ジーが持っ

てた禁術の本見てからだ」

禁術の本を、見た時グラナートはどう思ったんだろう。……きつと、私みたいに怒ったに違いない。

「……本見た時、知らなきゃよかったって思った。……だって、死ぬんだぜ、あいつ。俺達より、ずっと早く」

「……っ」

「……お前にも、知ってほしくなかった……」

グラナートの腕が私の背中に回り、きつく、抱きしめられる。私もおずおずとグラナートを抱きしめ返すと、より強く抱きしめられた。

グラナート達が、私に真実を話さなかったのは、そうした方が私にとっていいと思ってくれたからかも知れない。なんで、そんな事に気づけなかったんだろう。

二九羽

グラナートが私から体を離し、肩に手を置き、私の目を真っ直ぐと見る。

美術館に飾られていても可笑しくない美貌を見てしまうと、こんな人と抱きしめ合っているのかという気持ちになってしまう。

「……禁術の解き方は、ねーって首長は言ってた。……死ぬしかないんだ。でも、俺は——そうだとは思わない」

「え？」

「解き方は、絶対にある筈だ。……俺は、……正直、」
「うん？」

「世界の平和には興味ない」

うわあ、勇者が一番言っているといけないセリフを……！

「……元々、ディアの禁術を解く方法を探すために、旅に出たんだ」
「そ、そうだったの？」

「世界は違う次元と混ざって、そっちに吸い取られるとか、こっちが吸いこみすぎて均整が可笑しくなって世界が壊れるから——精獣オワゾー・ブルーアンベラトリスと青い鳥の女帝を倒さないといけない、とからしいけど。……そんなに簡単に世界は壊れねーだろ」

そ、それを言っただけならRPGというものは成り立ちませんからっ！

「大体、第二次ミストラルから16年経ってるのに、ほとんど変わってねーし」

「……そ、それを言っただけなら、勇者の旅というものが……」

「勇者の旅なんて、政治の道具だ。別にそこまで困ってねーけど、世界が変だから国から派遣した奴が世界を救えば、国が有名になる」

派遣で。派遣で、そんなバイト感覚な。

「……勇者の旅なんて、そんなもんだ。皆ゲーム感覚でやってる」
「……そ、そうなの」

なんだか聞きたくなかった事実だ。

「だからって手を抜く気はねーし、勇者の旅だってちゃんとやる。だが、利用されてるんだ。利用し返しても問題はねーだろ」

グラナートの瞳には、^{うっせ} 獰猛な光が灯っている。

口端を上げ、にやりと笑う。グラナートらしい笑みを見て、私も微笑む。

「そうだね。私も、協力する……ディアの禁術解く方法探すの」
「おう……悪いな」

私から完全に体を離し、グラナートは安心した様に息を吐いた。かと思うと、頬を赤らめた。男女の概念を覆して、抱きしめたい様な可愛い顔をしたグラナートが急にうろたえはじめる。

「え、ど、どうしたの」

「こ、子供が……」

「あ、ああ……」

そういえば、抱き合ったら子供ができてるって思ってるんだよね。グラナート。

……ん？ あれ、なんだろう。
心の中に引っ掛かりを感じる。

——グラナート・マリートヴァに本当の事を教えれば、あの男は誰とでもそういった事をする様になるだろうな。

アメさんの言葉が、脳裏に浮かぶ。ぷかぷかと浮いたままのそれが、カラカラと壊れて違う文字を作る。

クローファイ・モナルコス
血の君主は、

——穢れのなき身体でなくては使えない。

その言葉の意味が、……誰かと子供のできる行為をしてないって意味ならば——。

「ぐ、グラナート……あの、」

「悪い、考えもなしに……」

「え、いや、ちょっと待って、それは一先ず置いといて……」

「？ なんだよー？」

「その、子供のでき方って言うのは……どこで習ったの？」

「学校だけど？」

「学校って、いくつまで通ってた？」

「18だぜー？ つい最近だなー」

……学校、いや高校と言ってもいい。高校で、グラナートは子供の作り方を教わった。

そんな事は普通はありえない。幼稚園ならまだしも、高校の授業で、コウノトリだとか教える筈がない。

「……学校って、ビオレータのだよね」

「おー、クーストンの奴も来てたけどなー。どーしたんだー？」

そこから考えられる事——首長は、ディアやグラナート達に禁術を使わす為に、学校で性教育を教えなかった？ だから、知識が可笑しい。というのが、普通に考えられる二人の変な知識の理由だ。

そんなのあり得るの？ 自分の息子に、国民に禁術を使わす為に偽装する。首長なら、できるのだろうか。できるんだろう。

何か、引っ掛かる。

なんだろう、なんだろう。

「解った……っ！」

「え、何がだー？」

アメさんだ。

本当の事を言おうとしたコライユの口を、アメさんは塞いだ。言われては困るのだ。そして、アメさんは自分の意思で動く事がない人だ。大体、アメさんが二人に隠す理由なんて——

首長の命令。しかない。

ディア達に、本当の事を教えてはいけない。と言われている。考えられるその理由は——

——穢れたら、禁術が解ける。

「……おーいコロ？」

「……」

合ってるか解らない。でも、合ってる気がする。なら、それをグラナートに伝えた方がいい。

——グラナート・マリートヴァに本当の事を教えれば、あの男は誰とでもそういった事をする様になるだろうな。

アメさんの言葉が、また浮かぶ。

その言葉の意味が今なら分かる。

グラナートは何より禁術を憎んでいる。行為が禁術の解き方であり、予防になるなら——グラナートは、するだろう。誰とでも。

「……ッ。ぐ、グラナート……」

「どーしたんだ？ う、生まれるのかー？ は、腹膨らんでねーけど……」

おろおろしながら私のお腹に触れようとした手を掴み、首を横に振る。グラナートの顔を覗き込んで、聞く。

「……グラナートは、誰とでも、子供ができる行為をしたりは、しないよね……？」

「はあ!？」

目を丸くするグラナートは、パチパチと瞬きしてから私を見つめる。

聞いてから、何で聞いてしまったんだろうと後悔した。

「しねーに決まってるだろー？ なんだよ急に」

……でも、それが禁術の解き方なら、絶対に禁術を使えなくなる予防線になるなら、する。絶対に——彼は、する。禁術を口にしただけで、子供ができるかもしれないと解りながら、知りあって間もない私を押し倒した。抱き合って子供ができると信じ込んでいる人が、押し倒す行為というのは、ある程度の覚悟がいるだろう。それ

を一瞬で、何も考えずにグラナートは実行した。

グラナートは、言葉より先に手がでるタイプだ。

「……あ、うん、そ、そうだよね……」

言いたくない。グラナートが、他の人とそういう事をするのを見るのが嫌。

——何言ってるんだろう。相手は、ゲームのキャラクターなのに。

三十羽

結局、私はグラナートに言えなかった。

間違ってる。解く方法が解ったかもしれないのに、言わないなんて……可笑しい。それは、アメさんより酷い。私は、個人の……感情で、グラナート伝えてない。

部屋に戻り、椅子に腰かけて自己嫌悪の海に溺れる。

「……おーい、コロコロ？ どうしたんだ？ ずーっとコロコロしてるけど」

「こ、コロコロって」

グラナートに伝えなくても、違う人に伝えて、協力して貰えばいいんじゃない？

アメさんは協力してくれないだろう。この件に関しては敵だと言っても過言でもない。……何で教えてくれたか解らないけど、多分これ以上は教えてくれない。

なら、コライユしかない。

「……コライユ、ちょっと……いいかな？」

「うん？ おうよ」

コライユを廊下に連れ出す。今度は私が部屋の扉に背を預ける。

「あ、あのね……その、変な事、聞いていいかな」

「いいぜ？ なに？」

「……その、コライユって、……その、こ、子供が……で、できるような事ってした事ある？」

「？ キャベツ的な意味で？」

「や、そっぢゃなくて……」

「はぁーん、下ネタねえ」

「う、いや……だ、大事な事なの」

「なんだ、仕方がわかんねえのか。仕方ねえなあ。お兄さんが教えてやろう」

「え、い、いや……あの、違う、なんか違う、誤解してる」
「うん？」

桃色の髪を揺らし、コライユが首を傾げた。背を壁に預ける。
おちやらけていた雰囲気が消えた。

「俺はしたことねえよ」

「そ、そう……」

「それがどうした？　なんか王子様も落ち込んでるし、なんかあったのか？　三角関係のもつれ？」

「……そうじゃ、ないんだけど……その、あのさ……コライユは、その」

「おうよ？」

「ディアの事、どう思う？」

「王子様ー？　爺さんみたいだと思うけど。外見は俺よか可愛いかもしれないねえのに、声男だし、性格は頑固爺で面白いっちゃ面白いけど」

「こ、恋人としては」

「はぁ？」

コライユが、ディアと恋人になれば全てが解決すると思う。ディアの性格上、身体だけの関係は絶対に認めない。ならば恋人になるしかない。私は今、グラナートの子供を身ごもってる事になってるから、恋人にはなれない。ならば、現時点ではコライユがディアと

……と言うパターンしかないと思う。

「恋人って、うーん……無理だろ」

「な、なんで」

「王子と姫同志で遊びで付き合う訳にもいけねえし、あの王子様の性格上結婚まで考えて、真剣に……ってなるだろ。いいや、なるね。断定する」

「……否定はできない」

「一国の王子、しかも廃れかけのビオレータ国の王子だろ、いや、どこの国でも関係ない」

「？」

「……絶対に、子供がいる。王妃の、子供が」

お腹に手を当てて、コライユが目を閉じた。

ずきん、と嫌な予感がする。聞きたくない。聞いて、後悔する様な事を、知って後悔してしまうような事が、コライユの口から発せられそうで――

「俺は子供は産めない」

やっぱり、それは嫌な予感にとどまらなかった。

ディアの事を知って、私は辛くなった。自分で調べたにも関わらず、勝手に詮索したにも関わらず、私は知らない時に戻りたいと思うっている。

「……」

「……初潮、まだだし。今後見込めない」

「……こ、コライユって……い、いくつだっけ」

「18だ」

「……18……」

「……嘘」

「えっ、嘘っ!？」

コライユを見ると、可愛く笑われる。だ、騙された？

確かにコライユは18には見えない。中学生位に見える。

え、どこまでが嘘？　もしかして、初潮も嘘？

「……さあ、どこが嘘だったでしょうか？」

「……へ、え？」

「『初潮がまだ』『今後初潮が見込めない』『18歳』の中でひとつだけ嘘があります。どれでしょうか？」

「え、ええっ!？」

楽しそうに笑い、コライユは私に抱きつく。

ふわり、と花の香りがする。柔らかな身体。女の子らしい身体。

「……よくわかんねえけど、多分俺は力になれない」

耳元でそう囁いてから、コライユは私を避けて扉の中に入って行った。

閉まって行く扉を見た後、私はもう一度扉に背を預ける。

「……ひとつ。嘘？」

二つは真実ってことなら、えっと、どういうこと？

『18歳』が嘘なら、初潮はまだで初潮も見込めなくて……うん、筋が通ってる気もする。

『初潮がまだ』が嘘なら、18歳で初潮も見込めない。……可笑しい。初潮が見込めない筈がない。もう、初潮は来てるのだから。

『見込めない』が嘘なら、18歳で初潮が来てない……も、可笑

しい。見込めるのに初潮も来てない事になる。見込めるだけなんて、変だ。二つ嘘になる。

嘘は、ひとつ。

嘘は……ひとつだけ。

「18歳が嘘——？」

なら、どっちも本当？

私はその場にずりずりと座り込み、壁に背を預けた。
コライユは子供を産めない？ 見込めないっていつまで？

「……っ……ああ、もう……私、詮索なんてしない」

皆、普通に面白いキャラクターだと思ってた。ゲームのキャラクター。悲しい過去も多少あるだろうけど、それはキャラクターを面白くする為の調味料……のはずなのに。

知りたくない。皆の過去を、知りたくない。深い闇を、暴きたくない。

膝に顔をうずめて、私はどうにか泣くのをこらえた。

三一羽

友達が、すぐルートが大好きだった。ゲームもクリアしてた。その友達が、ゲームのオープニングを見ながら号泣していた事を思い出した。

『ルートのメンバーは、みんなあ、みんなあ……可哀想なんだよ。帝様まじ鬼畜』

帝様というのは、ルートの責任者だったと思う。プランナー・シナリオライター・プロデューサーをやっていた社長。

『うううつ、3週目プレイ切ないよお……。皆、それぞれね、信念とかあって』

『ふーん』

『傷抱えながらも、頑張ってるのお……。！』

『ゲームって大体そういうもんなんじゃないの？』

当時の私は、ゲームのルートには殆んど興味を失っていた。メデアミックス化は全然されてなかったから、私はヴァイス共和国までしか知らない。だから友達の家で違う漫画を読んでいた。話を聞いてない私に、友達はなお話しかける。

『確かに、そうなんだけどお……。！　でも、本当に、悲しいいいいい』

『はあ……。』

『でも、例外がいるの……。皆、どうしようもない過去を苦しんでるんだけど、グラとディアは違うの』

『そうなの？』

『うん……2人だけは、未来で苦しむ……うわああああん』

『ゲームでよくそんなに泣けるね』

『だって、ルート、本当に、なんかあ、酷いんだもん。あ、でもラルダは微妙かなあ……悲しいって、自分で思っただけ』

『ふーん？』

ラルダって誰だっけ？ そんな事を思いながら、漫画の単行本を読む。わざわざプレイするゲームより、こっちの方が楽で面白い。そう言ったら、怒られた。

『ルートはねえ、最後までしないと、キャラの内面みないとわからないのっ！ この、皆の人生の鬼畜度……！』

『悲しい過去なんて、そこらへんに転がってるテンプレでしょー？』

『それはそうだけど、悲しいの！ ありそうで、ないから……悲しいの』

『ふーん』

あの時、私はなんでもっと友達の話に耳を傾けてなかったんだろう。

私は友達との会話を思い出し、ある事に気づく。

「……グラナートと、ディアは未来で苦しむ？」

グラナートとディアは違う？ 可哀想な過去に入らない？

……禁術使って、あんなに苦しんでいるのに？

そんなものは、『悲しい過去』に入らない？

……思い出さなきゃよかった。

「コロ」

「わひゃっ!？」

急いで顔を上げると、ディアが居た。え、扉、開いた？

「……すまぬ、少し来てくれるか」

「え、う、うん」

立ち上がると、立ちくらみがする。ふらつく身体を、ディアが支えてくれた。

「ご、ごめん」

「いや……すまぬ」

ディアは私の腕から手を離し、そのまま歩いて行く。
私はディアに付いて行った。

付いた場所は、宿の裏。私がディアを呼び出した所だ。

「あの、今日は……その、ごめんね、本……投げちゃって」

「構わん……気にするでない」

「う、うん」

ディアは未だに、私に背を向けたままで、やっぱり怒ってる気がしてならない。

「……あんなに、激昂されたのはグラナート以来だ」

「え?」

「ワシの周りの人間は、皆それが当然だと言う風だった。だから、

ワシもそれが当然だと思っていた」

「と、当然……？」

そんな訳あるはずがない。

ビオレータって可笑しいんじゃないの？

人の寿命を縮めておいて、それが当然なんて可笑的い。

「……可らしい事だとは解っているのだ。間違っている事も解っておる」

「……なら、」

なら——一緒に解く方法を考えて、解こうよ。

その言葉は、ディアに阻まれる。

ディアは振り向き、ダイヤモンドみたいにキラキラした髪を揺らす。

紅い瞳で私を見つめ——え？

「……ワシは、禁術を解くつもりはない。例え、後2年の命であろうと」

「……なっ、なんで」

「役立たずは、嫌なのだ」

「役立たずなんて、誰も思わない」

ディアが無言で首を振る。私の中でくすぶって消えていた怒りの炎がまた灯って行く。

なんでこの人、こんなに頑固なの。

命とプライドどっちが大切なの。

ディアを睨むと、黒色の瞳を細め、微笑まれる。

「……無理やり」

「うむ？」

「無理矢理でも禁術解く」

「……」

大股でディアに近づき、びしりと指をさす。

「絶対に解く」

「……それは、困るのう」

困惑気味に微笑み、ディアは私の肩に手を置いた。そしてそのまま、私の額に柔らかい物が、へっ！？ な、何？

離れて行くディアを呆然と見ていると、ディアが花の様に微笑む。

「……すまぬな」

それだけ言って、ディアは去って行った。

……え、何？

額を押さえて、私は赤面する。ど、どうしてあんな事されたのか全く分からない。

三三羽

私は紅い頬をどうにか戻した後、部屋に戻った。

やっぱりトパーシオが居る。何で居るんだ。

ずっと体温が冷めていく感覚がする。

何時まで居るつもりなんだろう。

「……コロ？」

「えっ、何グラナート？」

「……いや。別になんでもねーけどよー」

「うん？」

「まー、いいや。じゃー、全員揃った所だし、これからの事でも話すかー」

「……え、でも」

私はトパーシオを見る。

全員揃ってはいるけど、余計なものがある。それはいいのだろうか？

「やつがれ僕の事はお構いなく」

「だってよ」

うわぁ、適当、グラナート適当……！

「……これからは、ヴァイス共和国の失敗もあるし、手分けして精獣探すのが先だなー」

「精獣というものは、分かりやすい所に居ると思ってたのだが……」

「そーいう訳にもいかないッスよ、特にここは」

トパーシオは肘をつきながら、そんな事を言う。
なんで一番偉そうなんだろう。

その横の椅子に座っているアメさんは相変わらずの無表情だ。
アメさんの前の席に座っているディアがきよとんと首を傾げる。

「どういふことなのだ？」

「ここの世界メモワールの歪みは軍国。ほら、銃が露店で売ってたでしょ」
「ああ、売っておったな」

「元々グリースも軍国なんスけど、混ざっちゃった世界も軍国で、
グリースにとったら万々歳なんスよ」

「……つまり。隠してるって事かー？」

「そうッスね、グリースからしたら勇者に世界を救ってなんて欲しくないんスよ……何でか知らないけど、ここの国王の元に行かなかったのは正解ッスよ」

そう区切り、トパーシオは悲しそうな顔を浮かべた。でもやっぱり目には何の感情も灯っていない。

「――国王に勇者手帳見せた奴はもれなく暗殺されるッスから」

悲しいッスよねー世界を救う勇者なのに、と聞こえない位の音量で呟く。

哀切な声色。本当に勇者を心配してるみたい。――だけど私は騙されない。

「そーなんだ。それ聞いて助かったぜ、お前いい奴だなー」

「今までに死んだ勇者たちの為にも、我々がここの精獣と倒さねば」
「そうだなあ」

うわぁ、3人普通に信じてる。

「……別に、僕はいいい奴でもなんでもないッスよ。それより、精獣倒しに行くんスよね？」

「おー」

「二人のお嬢さんはどーするつもりッスか？」

「コロは置いてく。あぶねーからな」

「へえ……そうッスか、危ないッスもんね」

トパーシオが私を見る。……にこり、と微笑まれた。

トパーシオの本性を知らない人間から見たら『いい仲間達ですね』という笑顔だと思うけど、私から見たら違う『お前に危害を及ぼす機会ができた』だ。

「……わ、私も行きたい」

隣に座っているグラナートの裾を掴み、そう訴える。ダメだ。この人達を離れてはダメだ。

「何言ってるんだー？ 危険だろー」

「で、でもMP……魔力の回復位には、役に立つし」

「コロ」

咎めるように名前を呼ばれて、ぽんと頭に手を置かれる。

グラナートは紅い瞳で私を見つめる。そこに微かな呆れが含まれている事に気づき、私は口を閉ざした。

「一人が寂しいのはわかるけどよー、わがまま言うな」

「……」

一人が寂しい訳では決してない。私はあの男と二人っきりになる可能性はできるだけ潰したいだけで……！

目で訴えると、グラナートはため息を吐く。

「ダメだ」

「……ど、どうしても？」

「あのな、お前が嫌いで連れていかねーんじゃねーんだぜ」

「わ、解ってるけど……」

「解ってない」

ぴしゃり、と言い切られる。

「精獣がどれだけ強いかわかんねーけど、ここにいるより安全って事はねー」

「……それは、そうだけど」

「コロ」

そう言っ、私の名前を呼んだのはディアだった。こちらに歩いてきたディアが、私を見る。上から見られてる所為か、なんだか怖い。ディアは、いつもは見れない様な冷たい表情が浮かんでいた。

「……お主はここに居た方がよい」

「だ、だけど」

「だけど、なんだ」

「……え、えっと」

なにこのディア怖い……！ さっきあんなに優しくかったのに、え、何！？ 怒らすような事、した覚えはいっぱいあるけど！

アメさんみたいになってるディアを見上げると、闇色の瞳に冷酷

な光が、灯った。

「理由がないのであれば、却下だ。それでよいな」
「は……はい」

思わず、頷いてしまう。

ディアは私を一瞥した後、椅子に戻った。

……こ、怖かった。

グラナートが私に近づき、声をひそめる。

「お前、なんかしたのかー？」

「……覚えは、いっぱいあるけど」

「ふーん……喧嘩すんなよー」

「う、うん……後で謝っておく」

「おー、そうしろ」

三三羽

「じゃー、行くから。大人しくしてろよー?」

グラナートが私の頭を撫でる。

え、今から行くの? ……もう夕方だけど……。そうだね、度々忘れちゃうけど、勇者の旅だもんね。旅行じゃないんだよね。

「では、コロさんの世話は僕に任せてくださいッス^{やつがれ}」

「えっ」

「……任せるって、大丈夫かー?」

「だ、大丈夫じゃない!」

首を横に振って拒否すると、トパーシオがグラナート達に微笑む。

「大丈夫ッスよ、僕にはこわーい許嫁がいるんで、二人つきりになつてなんやら〜とか貴方方が心配するような事はないッスから」

「そーなのか?」

「ええ」

肩をすくめ、トパーシオは許嫁の怖さを語る。グラナートとデアアは信じ切っていて、アメさんは無言無表情。コライユは唇を尖らせる。

「でもお前露店でナンパしてたじゃん」

「案内しようと思ったんスよ皆さんを、この国はじめてみたいでしたし」

「ふうん……」

コライユは唇に手を当て、流し目で私を見た。可愛らしいのに、どこか雄々しく見えるのは何でだろう。

「……なんかきな臭いな」

「そーか？」

「……トパーシオさんは素晴らしい方だ。心配する必要性がない」

きつぱりと、アメさんが断言する。

いはいはいはいえっ！　そ、そんなバカな！

アメさんはトパーシオ教にでも入ってるの？！

「そーか、じゃー俺達行くからなー？」

「……………」

「お土産買ってきてやるから」

「……グラナート嫌い」

「はあ？　……なんでんなに機嫌悪いかわかんねーけど、俺一応勇者だからなー？　旅行じゃねーんだぞ？」

私はふいっとグラナートから顔を反らし、背を向けて椅子に座る。

「……我が儘を言うでない」

呆れた声が聞こえたと思うと、肩に手をおかれて、後ろに引かれた。背中に柔らかい感触。見上げるとディアが。……しかめっ面だ。我が儘言ってるの解るよ、でも、でもトパーシオと2人なんて絶対嫌。あの人剣で私の手刺したんだよ！

「コロ」

「……………」

強めに名前を呼ばれる。なんだかすごく機嫌の悪いディアは怖い。いつも笑ってるイメージが強い分、笑わないディアというのはすごく怖い。

額にキスされてから、ディアは一回も私に対して笑ってない。普通逆じゃない……!?

あれって、この世界では絶縁の意味とかがあるんだろうか……。

「我々はもう行って構わんか？」

「……構いません。ごめんなさい」

「そうか」

ディアが私を普通に座らせてから、離れて行く。それと入れ違いに、人形を持ったコライユが来た。

私の腕に絡みつき、にこりと笑う。

「大丈夫大丈夫、すぐ終わるって」

「うん……」

「なんかされたら言えよ？　ぶっ殺してやるから」

「それは怖いッスね」

『コライユ本気あ。危ないえ……』

コライユが私から離れた後、トパーシオを睨む。

「……ま、そういう事だから……。変な事するなよ」

「酷いッスね」

「俺、金髪の奴は全面的に信じてないタイプだから」

その言葉に、トパーシオが苦笑した。コライユは私の肩を叩いてから、3人の元に向かう。

「じゃー俺達行くからな」

グラナートがそう言って、扉を開ける。私は何も言えない。行つて欲しくない。この男と2人になるなんて、私の命が危ない気がする。

「土産、買ってきてやるから」

パタン、と扉が閉まった音がして、私は慌てて振り向く。……4人はいなくなっていた。

トパーシオと二人つきりになる。即座に逃げれる様に立ち上がると、その前に反応したトパーシオに、机に押しつけられた。石の机が背中に当たって痛い。

ほらこういう事になる……！

「………許嫁がいるんじゃないんですか、こわい許嫁が」

「いるわけねえだろ、んなめんどくせえもの」

「……嘘付きは泥棒のはじまりって言葉知ってる？」

「泥棒以上の事してるから、別にいい」

そういう問題？

「……さて、質問に答えてもらおうか」

「その前にベルジェとかなんとかが解らないと何言ってるかすら解らない」

「あんたが俺の探してるモノなら、ベルジュの存在位知ってるはずなんだけどな」

「……多分あなたが探してる者じゃない。私は」

「んなの俺が決めることだ」

「……そう」

私の口からため息が零れ落ちる。トパーシオはそれに気にした様子もなく、片手を私から離し、銃剣とやらを取り出す。それをやはり目に向けた。

普通首じゃないの？　なんて、冷静になってしまうのは自分が不老不死だと知ってるからだろう。……痛くても、どうせ死なない。でも痛い思いなんてしたくない。

「……まあいい、忘れてるって可能性もあるからな」

「……」

「ベルジェツーのは、シアンの地下機関だ」

「シアン……？」

「シアンも知らねえのか役立たず。シアンってのは、まあ簡単に言えば何でも屋だ」

「……何でも屋？」

「金や魔力さえ払えば、浮気調査から人殺しまでやる組織」

なんだその幅広い組織。

三四羽

シアン。

通称？教皇？が作った『何でも屋』

裏社会の組織であるが、表社会でも活躍しており、その名を知らぬものはいないとまで言わしめる世界最大の組織だ。

確かルートでは重要なポジションにいる組織だった気もする。

「んで、シアンには一般的にもよく知られてる『シアン・エラン』から、一部の人間しか使えない『シアン・サージュ』チームまで幅広くあるんだが、『ベルジェ』は例外的な地下機関で、唯一の研究チーム。魔術の研究とかしてる様な、な」

「……はあ」

「そのベルジェは事もあるうか意味分からない研究を成功させ——その被験者と共に逃げた」

「……逃げた？」

「研究費用だけシアンに出させて、その機長は他のベルジェのメンバー全員殺して、被験者だけ持って逃げた」

「……それは、」

「だから探してる。その2人——いや、1人と1体を……教皇の命令でな」

教皇って、聖職者の最高位の事をそう言ったと思うのだけど……。それだけ慕われているって事なのだろうか。

「で、その研究内容が『不老不死』……それには巨大な魔力が体内に必要。ここまで言ったらなんであんだにこういう事してるか解るだろ」

……魔力が巨大すぎると、触れるだけで解る。と誰かが言っていた。

「……もしかして、最初にナンパみたいに私の手に触れたのって……」

「ええ、確認ッスよ。あっちのピンクの人は普通の魔力だったけど——」

トパーシオが金色の目を細める。

「……あんたの魔力はケタ違いだった。魔法使いだって言ったって信じられるほど。……それで魔術が使えないって、頭可笑しいんじゃないの」

「……」

「不老不死ならば、怪我が治る。だからあんたの手に傷を付けた。あの時は邪魔が入ったが、今度はそうはいかねえ」

限りなく、私は容疑者に近い。

私も不老不死なのだ。調べられたら——その者だと解られる。

被験者じゃないと解ってもらっても、オワゾー・ブルーアンベラトリス青い鳥の女帝だと誤解される。誤解を解かないと……。

「……私は、その被験者じゃない」

「証拠は」

「……証拠……えっと、あつ、そうだ……その被験者が逃げたのっていつ？」

「つい1週間前位だな」

「なら、違う。1週間前、私はヴァイス共和国に居たもの」

「あんた程の魔力があれば、身代りも用意できそうだがな」

「私は魔術が使えない……魔術が使えたら、こうやってあなたの好

き勝手にさせてない」

私の言葉に、ああ、とトパーシオは頷く。

魔術が使えたら、手を切られた所辺りで魔術使っている。好き好んでこんな状況に陥るなんて、ありえない。私はど変態か。勘弁して欲しい。

「……まあ、一理あるわな。……じゃあ、この魔力は元々持ってるモノだったか？ ……こんな魔力持ってたって、魔術習ってないってあんたの周りの人間頭可笑しいのか」

「……可笑いんじゃないかな」

「……ラウルス王国ならあり得るか……」

ラウルス王国って、青い薔薇の所だっけ？

……あり得るってどういう事だろう。

「……あそこ、2割の人間しか住めねえし」

トパーシオが確認するように呟く。

2割ってなんだっけ……。

えっと、確か……ああそうだ。ミールの血縁じゃないとかだっけ。この世界の人口の、8割は魔力がある人間だけど、2割魔術が使えない人間がいる。

「ふうん、……嘘ついてるって感じじゃねえけど、……ん？」

トパーシオが懷からカードを取り出す。トレーディングカード位の大きさのソレが、急に喋ります。

『坊ちゃん。ナヴァルーニイです。今お時間の方大丈夫でしょうか』

中性かつ機械的な声とそのカードから使える。

え……どういう仕組みなんだろう。そのカードの裏面は真っ黒で、銀色の字で『g a t t o』と大きく書かれていた。

「はいはいどうぞ。何ツスカ」

『……今日は通じやすいですね。2週間程前は、全く通じなかったのに』

「そうツスね、で、何」

『ああ、申し訳ありません。話がそれました。ターゲットらしき人物が、ブルーノ侯国を破壊したと連絡を受けました』

「はあ？ ……はあ、そうツスカ……。ターゲットは今どこにいるとか、解るツスカ？」

『フスクム大公国に向かっているとの事です。今シアン・ド・シャツスがターゲットを尾行しています』

「……シャツスが？ ……国丸々破壊する奴ツスよ、サージュ位つけとけよ」

『……教皇のご命令です』

「ああ、そう。いい手駒は失いたくないって奴ツスカ……報告御苦労」

『……はい。あの、坊ちゃん』

「なんツスカ」

『ご無理は、なされぬように……』

哀切した声が聞こえる。その声を聞いて、この人は女性だと思った。

そして、趣味の悪い事にトパーシオの事を好きなのかも知れない。

「それ、誰の言葉ツスカ」

『……私わたしのですが……』

「あっそう」

冷たくそう言い捨て、トパーシオは再びそのカードを懷に戻す。
……酷過ぎる。こんな男に惚れてはいけないという見本原本だ。
トパーシオは私の上から退き、ため息を吐く。

「……坊ちゃんって」

一番気になっていた事を呟くと、トパーシオが全く感情の灯つてない瞳で私を見つめた。

「坊ちゃんツスよ。教皇の息子ツスから」

「……………は？」

シアンっていうのは、世界一巨大な組織で……トパーシオは、その一番偉い人の息子？

……嘘だあ。

「あはは、冗談きつい」

「何がツスか。僕が坊ちゃんだと可笑しいツスか？」

「……だって、ほら、こうやって普通に仕事してるのが、可笑しいし、そんな……」

「墮落して生きるのは退屈ツスからね、もうそれはして、飽きたんで。今に至ってる訳ツスよ」

「……はあ」

トパーシオは懷から再び何かを取り出す。財布だった。そこから数枚お札を抜き取り、ぽいっと私に放り投げる。……うわあ坊ちゃんっぽい。

「慰謝料ってことで。ま、もう会う事があるか解らねえッスけど」

「……できれば会いたくない」

「酷いッスね」

苦笑してから、トパーシオは去って行く。

私はその背中が消えるまで見つめ、一人ガッツポーズをした。

三五羽

「コロッ！」

慌ただしい足音と、叫び声が聞こえた瞬間、扉が開く。
グラナートが走って来たかと思うと、窓を開けた。

トパーシオが出て行ってから早3時間程経っている。
帰ってくる時間としては妥当だけど、どうしたんだろう？
窓の外はすっかり夜の帳が下りていた。
バタバタと遠慮のない足音が、扉の外から聞こえてくる。
それと、何かの破壊音。

「ぐっ……グラナート？」

「精獣倒した。それに激怒した国民が俺達を追いかけてきてる」

簡易にそう説明してくれて、ああと頷く。

……世界を救う為に中ボスを倒して、国民に怨まれるってどうい
うことなんだろう。

相変わらず勇者御一行に鬼畜すぎるルートに苦笑した。

再び扉が開き、三人が入って来る。

「カルテリコス」

アメさんが扉を閉めた後、呟く。と同時に扉を何度も叩かれ『ク
ソッ！ 防御魔法か……！』と怒声が聞こえた。のんびりとしてい
た私も、その声で流石に焦ってくる。

窓から入ってくる鋭利な程冷たい風が痛い。窓の近くに居るグラ

ナート鼻で笑う。

「どーだ？ 引きつけられたか？」

「任せろ！ 大体はなっ」

「うむ、グラナート、下はどうだ？」

「バカばっかじゃねーな」

窓の外を覗きこみ、グラナートが笑う。

アメさんの隣に居るコライユもその言葉に笑った。……何故か仲良くなっている。

そりゃそうか。元々はすごく相性がいいのだし、これが普通なのだろう。

「第二案だー……アメ、コライユ」

「おう、任せろ。ちよいとごめんよ」

とてとてと可愛く歩いてきたコライユに抱きつかれた。デプ君はコライユの頭の上に乗っている。ダブルで可愛い。

「……適当にこれだけ解るのってすごいよな」

「え？」

「いや。ちよつと借りるぜ。エイセルケスタイ」

魔力を奪う魔術だ。私の中から何かが減る。

コライユは私の胸に顔を埋めて目を瞑る。赤ちゃんみたいに。恥ずかしすぎて、私は赤面する。恥ずかしい。

「ごちそうさまでした」

変態親父みたいな事を言った後、コライユは私から身体を離し、

アメさんの元に向かう。

（どうで抱きつくなら、ちょっとでもいい想いした方がいいとおもわねえか）

（興味ない）

というひそひそ話が聞こえてくる。本人に聞こえている時点で、それはひそひそ話なのかと聞かれたら微妙だ。聴力とか視力とかがすごくよくなっている気がする。

魔力の中核メーアヒュンの力か、なんて思っているとグラナートが少しむすつとしてこちらに来了。

「抱きしめ返すなよー。子供が生まれるんだから」

「……あ、うん」

アメさんがこちらに来て、無表情無言で私を抱きしめた。なんて業務的なんだろう。

「エイセルケスタイ」

耳朵をくすぐる色っぽい声。低く、地の底まで相手を突き落とすような、冷徹な声色だ。

アメさんは即座に私から離れた。業務的すぎる。不満なのだろう。きっと。本当はこんな事したくないけど、MP回復グッズは全て精獣の時に使ってしまったのだと思う。

「じゃあいつちょやるか」

腕まくりをして、コライユが口端を上げ、アメさんを見た。2人はアイコンタクトを取り、2人同時に口を開く。

「「アモイバイオス・アオイダ」」

2人の声と、懐中時計の金属音、本をめくる音がやけに大きく響き、まるで音楽を奏でている様だった。魔術の旋律。神聖なる儀式のように、空気が重く沈んでいる。だけどそれすらも心地よい。

「「ラススタヤーニイーグリース・アディーン　ロクス　セルカ
コーロス」」

旋律が終わった瞬間、私達は光に包まれる。淡く、だけど力強い光。

コーロス……って移動する魔術の言葉なのだろうか。

床から発光してるんじゃないかと思う程の眩い光が私達を包み込み、私は思わず目を瞑った。

身体の節々が痛い。まるでぎゅうぎゅうに箱詰めされたようだ。重い瞼を開けようとする前に、誰かに抱きしめられた。少し柔らかい身体。

目を開けて、目に入っただのは鈍った桃色。暗闇の中にうっすらと、見上げると闇色の天空の城が見えた。灯りがポツポツと灯っている。幻想的な風景。

「エイセルケスタイ」

そう呟いてから、コライユはうりうりと私の胸に顔を埋める。さつき使って、今も使うと言う事は、魔力ギリギリの魔術だったのだろう。

「わりいな何度も」

「ううん。これくらいしか協力できないから」

「……んなことはねえと思うけど」

「ゆっくりすんなー」

ため息混じりのグラナートの声が聞こえて、コライユは急いで私から身体を離す。

「エイセルケスタイ」

コライユが離れた時、アメさんが来て、抱きつきなりそう言った。業務的を通り越して機械的だった。アメさんが離れた、かと思うとひょいっと持ち上げられる。

紅い髪が視界に入る。

「行くぞー!」

私を抱きかかえたグラナートが走り出した。

私はひしひしと感じる謎の痛みに疑問を感じながら、そのまま大人しく運ばれた。

夜の森というのはとても不気味だと思う。

グリースは森の中にあるので、出るには森を抜けなくてはいい。フクロウの鳴き声がある。不気味だ。

灯りもなしに、グラナートは疾走している。

枝や葉が身体に当たるのもお構いなしに。痛いなんて、全く思っていないように何の反応も見せず。

一時間位走り終わったグラナートが、不意に立ち止った。山道はすでに抜ききり、いつものダンジョンに戻って来た。辺りを見渡す限り、暗く広大な草原しか見えない。後ろにいた三人も立ち止る。追手はまだ来ていない。

唐突に立ち止ったグラナートに、ディアは首を傾げた。

「どうしたのだ。グラナート」

「……あのよー」

なんだかとてもなく嫌な予感がした。

グラナートは、んーっと呑気な声を出して、辺りを見渡してから呟く。

「(´・ω・´)ど(´・ω・´)？」

三六羽

「当てがあつて、こちらに走ってきていたのではないのか？」

「おいしい、俺達もわかんねえよ、そんなこと言われても」

呆れている2人に、グラナートは素直に謝る。夜道のダンジョンは不気味だ。灯りなんて全くなく、暗闇の世界が広がっているだけ。方角もなにも解らない。

「……グリースから東方に30キロ地点。……このまま真っ直ぐ20キロ半でアートルム王国に着くだろう」

ため息混じりに呟かれた言葉に、皆がアメさんを見た。さすがアメさんだ。私は担がれたまま小さく拍手をする。

「よし。そーと決まれば、目的地はアートルム王国だなー」

「……結果的によかったものの」

ディアがため息を吐く。グラナートは軽く謝った後さくさくと歩いて行く。

呆れているディアと目が合ったので微笑むと、すごい速度で目を反らされたかと思うと、睨まれた。

コライユがきよとん、としている。私もきよとんだ。ディアが冷たすぎる。そんなに過去を詮索されるのは嫌だったのかな……嫌だよね。嫌に決まっている。

あのでこちゅーは、絶縁の意味とか、そういうのだろう。

哀しくなるのでそれは一先ず置いておこう。それより、

「ね、ねえグラナート」

「んー？」

「もう下ろして貰っても、全然大丈夫だから」

グラナートは私を持ったまま、何時間も歩いている。疲れてるだろう。

追手はもう来ていないようだし、普通に歩ける。

「あーそーだな」

やっと地に足をつけた私は、グラナートにお礼を言ってからグラナートの横を歩き始めた。隣のグラナートは何時も通りさくさく歩いていると思うと、どこか鈍った足取りになる。私も少し歩みを遅め、グラナートの顔を見た。

「なー……」

「うん？」

少し言いづらそうに、グラナートが口を開く。灯りも何もない闇の所為で、グラナートの顔は殆んど見えない。だけどその雰囲気は、どこか切ない。

「……元々」

「うん」

「ヴァイス共和国までって事だっただろー？」

「え？」

「着いてくるの」

「あ……そうだった」

バタバタしてて忘れていたけど、私はヴァイス共和国までの付き合いの筈だった。

そこからは自力で旅をしよう……そういう風に考えて、私は皆の旅に着いてきたんだ。

「……どーすんだ？ 次の国は、パレット州ではヴァイス共和国の次にだけー国だ」

「……ん」

交通機関が優れているということだろう。……私は——そこで別れるべきだと、思う。

足手まといだ。魔力回復をできる巨大飴程度の役割はてきてるけども、ヴァイス共和国の時だって、私が居なければ精獣を倒せていた筈——違う。倒せていた。アニメでは、そうなっていた。

それを、私が……私の所為で無理にってしまった。

私がいては、皆に迷惑がかかる。

そんな当たり前の事を今更思い出した。どうすればいいのだろう。そんなもの、答えは決まってる筈なのに——

言えない。言いたくない。もっと……一緒に居たい。旅をしたい。

「……」

「……ま、別に今すぐ決めなくてもよーラウルス行ってから決めたらどーだ」

「……う、うん」

私が頷くと、グラナートも頷く。

そのまま無言。

……少しだけ、期待していた『一緒に来いよ』と言ってくれる事を。

だけどグラナートは一向に何も言ってくれない。だけど——私から聞いては、いけない気がする。ただの感だけでも。

一時間位歩いたその時、コライユが私の手を引っ張った。

「……なあ、疲れてねえ？」

「疲れたの？」

「いや、俺は……疲れてねえけど……王子様がほら」

その言葉を聞いて振り向くと顔面蒼白なディアが来た。私と目が合うと、ディアは皮肉気に微笑む。

「フツ……かつてないほど全く問題もないのであるぞ」

「かつてない程嘘くさい言葉です」

強がっているのが丸わかりなディアは、むすりと顔を歪ませる。
美少女だ。

コライユが私達の顔を覗き込んだ後、ぐっと拳を握る。

「野宿しようぜ野宿！」

かくして、私達は野宿することになった。

野原に寝そべり、グラナートの勇者コートのポケットから質量を無視して出て来たシーツをふとんにして、4人並んで寝る。私・コライユ・グラナート・ディアという並びだ。アメさんは寝ずの番をするため、少し離れた場所に腰かけている。

ちなみに、勇者コートのポケットは四次元になっているらしく、しかもコートと腕輪は魔術で繋がっているらしい。どこかに行方不明になっていたと思っていたコートは、腕輪の中に収まってたらし

い。魔術って便利。

「……なーコロ、もう寝た？」

「まだ30分しか経ってないよ」

クスクスと笑い、私はコライユの方に身体を向ける。コライユも私の方に身体を向ける。

光は夜空に輝く星と月だけ。ベッドなんてあるはずもなく、スカートがめくれた太ももに草が当たる。

何故か修学旅行を思い出した。全然違うのだけど……どうしてか、そんな感じだった。

「世界を救う——勇者の旅について来ててこんな事言うのもなんだからだよ」

「うん」

「楽しい。俺、すごく楽しい」

柔らかく、花が咲いたようにコライユが微笑む。

「……私も、楽しい」

「そっかそっか。……」

コライユは少し沈黙してから、言葉を選ぶようにくちびるを動かす。

「……俺が楽しいのはさ、コロ含めっーか」

「うん？」

「コロが何で旅について来てるかとか、全然知らねえし、無責任な事言うのもどうかと思うんだけどよ」

「うん」

「……俺は、もっと一緒に居たいぜ。コロと」

そう言うってから、コライユは矢継ぎ早にオヤスミ！
と言っ
てか
ら私に背を向けた。

三七羽

朝早くに起き、私達はアートルム王国に向かった。
ダンジョンでは相変わらず魔物が出てくるけど、四人は軽いな
す。

そして着いた先は——魔界だった。

「い、いやいやいやっ!？」

全体的に黒い国があった。ここまで黒に統一すると趣味が悪すぎる。
る。

しかも、国の中には明らかに人型じゃない人がいっぱいいる。

「どーした」

「ど、どうも、こうも!」

「ここの歪みは魔界だからなー」

「……い、いやいやいや、だ、大丈夫なんですか？」

「おー、普通に人語も喋れるみてーだぜ」

「……じ、人語が喋れるからどうだって物なの!？」

隣に居るグラナートに話しかけるけど、グラナートは大したこと
ないように言う。

国に溢れるのは、半分以上人ではないモノだ。

「差別するでない。皆平等な命なのだ」

「……そ、それはそうだろうけども」

グロテスクな魔物がいっぱいいる。それこそ、ダンジョンに出てきそうな怖い魔物がいっぱい。グラナートはとくに興味なさそうに歩いて行く。

「宿どうすんだ？　この国王のそこには行くのか？」

「んー……またヴァイスみてーになるのは嫌だけどなー」

「ご、ごめんなさい」

「んでお前が謝るんだー？」

「……私の所為だし……」

「バカ野郎、悪いのは全部俺の親父だろ、こちらこそ悪いな」

コライユが私に頭を下げる。私は急いで首を横に振った時——ドン、と私に誰かがぶつかった。薄茶色の髪と、少し汚れた銅色の葉っぱ型髪飾り。

その子が勢いよく顔を上げて、私を見つめる。

森みtainな緑色の瞳で、可愛らしい顔立ちをした女の子。ぱっちりとした二重の目に小さな鼻、少しアヒル口な桃色の唇が開き——、困り眉をさらに困らせる。

すごく普通に、可愛い子だった。居そうで居ない。クラスのアイドルみたいな子。

「申し訳ない！」

パン、と手を顔の前で合わせて、その子は苦笑する。

「えっ、いや、大丈夫です。こちらこそごめんなさい」

「いや、私が前を見ていなかったのが問題なのですぞ」

「……え、う、」

少し変な喋り方の女の子だった。

……この、感じはもしかして——パーティメンバー？

「……オパルス？」

後ろから驚愕を含んだ低い声を聞く。

私達は振り向く、そこには目を丸くしたアメさん。トパーシオの時の様に、その表情にはいつもと違い人間味に溢れている。

「……？」

ぐいっと前に出てきて、アメさんは少女の肩を掴み——息をのんでから手を離れた。

「何故……そんな、」

「アメー？」

「……オパルス……？」

オパルスと呼ばれた少女はきょとんをしていた。

私達も意味が解らなくて、2人を見守る。

「……確かに私はオパルスですぞ？　しかし、君の事は申し訳ないが存じ上げない」

「……っ、それも……仕方がないでしょう」

何故か敬語なアメさんは、浅く息を吐く。

元恋人……って感じじゃないよね。

「……貴女はまだ小さかったから」

小さい頃の、知り合い？

「……生きていて、よかった……オパルス」

「……？ よく解りませんが、ありがとうございます」

少女は初々しく礼をして、微笑んだ、かと思うとすぐに表情は困ったものへと変わる。

腕につけている時計を確認して、パクパクと口を開閉した。

「申し訳ないが、私が時間がおしているのですな！」

「そうか、こちらこそすまなかった」

アメさんは無表情に戻り、申し訳ない！と言って去って行く彼女の背を見つめ、愛おしげに微笑んだ。

「……知り合いのですか？」

「……妹だ」

簡潔に、アメさんは答えてくれた。

妹……？

「いもうとお！？」

「……何を驚いている」

「い、いえ……あまりにも似てなかったのです」

「……血は繋がってない。当たり前だ」

んん？

血が繋がってない妹で、妹の方はアメさんを覚えてない？

……やめよう。詮索はやめよう。

「……よくわかんねーけど、とりあえず飯くわねー？ 飯」

グラナートは詮索する気が0だった。グラナートのようにサツパ
リしたい。

私達は適当な店に入り朝食を取り、宿を見つけた後、皆は私を置
いて王の元へと向かった。そろそろ持ち金が危ないらしい。
宿にいるのも暇なので、私は少し怖いけども国の中を出歩く事
にした。

黒い国を歩いていると、水までも黒い謎の噴水まで行きつく。

ペンキを上からかけたような一面黒い国の中でも、その噴水は異
質だった。

その噴水の前に、一人の少女居た。

——オパルスさんだ。

可愛いワンピースを何度も引っ張り、髪を整え、少し照れながら
楽しそうにその場に居た。

……デートだろうか？

お邪魔してはまずいと、私は踵を返した。

三八羽

「や、やってしまった」

宿の場所を忘れてしまった。

……迷子。

その言葉がぐるぐると頭の中で廻る。

疲れない体だからって、調子に乗って変な所に来てしまった。もう噴水の場所も解らない。

「……その姉ちゃん」

「っ!？」

声をかけられて振り向くと、そこには鳩の顔面をした人間が居た。顔だけ鳩で、身体はムキムキの男性――。

「こ、公園で……」

「？」

「鳩いじめてすみませんでした……!」

深々と頭を下げて、その場を去ろうとすると肩を掴まれた。

決してわざとじゃない。小さい頃は、ものの善悪というのがわからなくて……。

「お、美味しくないです私美味しくないです! 胸もないです!」

「別に食べたい訳じゃない。大体鳩は草食だ」

「……ごめんなさい」

早くここから立ち去りたい。
これから鳩を見たら、そくぎに餌をあげるので離して下さい。お願いします。

「あんた、この国の人間じゃないな」

「は、はい……」

「そうか、で。こちら辺に何か用があったのかな」

「……え？」

「不審者が徘徊していると報告を受けた。あんだだろう」

「え、ふ、不審者……?! ち、違いますよ……! 迷っただけです!」

迷った事を力説すると、ため息を吐かれた。

「そうか、それで、どこに行きたい？」

「宿です」

「……どこの宿？」

「……えっと」

どこだっけ? ……ど、どこだっけ。
思い出せない。……ピンチ。

「く、黒い宿です!」

「この国のものは全て黒いのだが」

「……ふ、噴水の近くでした……」

「一時間近く歩いてわざわざこんな所まで来たのか？」

「こ、こんなところ？」

きよろきよろとあたりを見渡すと、人間が殆んどいなかった。
……百鬼夜行!?

「ここは魔界都市だ。人間は殆んどいない」

「……」

「送ってやろう。噴水の近くまででいいか」

「は、はい……ありがとうございます！」

ものすごくいい人……！

鳩のお兄さんに噴水の近くまで送って貰った。
助かった……ありがとうございます。

「……ん？ あのお姉ちゃん今日もいるのか」

見ると、オパルスさんが噴水に腰掛けている。

「今日も……？」

「毎日毎日あの噴水の前で誰かを待ってるんだ。ああやって」

「……え？」

「一回も、待ち人が来た事ないけどな。可哀想に、あんな可愛い子を何回も待たす男がいるなんてな」

鳩のお兄さんが自分の頭を掻く。羽毛が飛び散った。

「……じゃあ、俺は行くから」

「あ、ありがとうございます」

深々と頭を下げると、鳩のお兄さんはもう歩きだしていた。
惚れそうな位男前な人だったけど、それより今は――

私はオパルスさんに近づく。

「……あの」

オパルスさんは泣いていた。

急いで懷からハンカチを取り出し、彼女に差し出す。

「……申し訳ない」

「……いえ、……」

私はオパルスさんの隣に腰かけた。

オパルスさんはひつくひつくと嗚咽を洩らしている。

「元氣出して……こんな可愛い子を何回も待たすなんて、酷い男です……」

「……マルガリーテース様は、とても素敵の方なんですぞ。それに、待たされたのは今日初めて……ですぞ」

「——マルガリー……テース……？」

その言葉に聞き覚えがあった。

……ブルーの、言っていた人だ。

私の、探し人……！

閃いて、私はオパルスさんの顔を覗き込む。

「そ、その人、今日来るの？」

「来ると……思いますが……何故、かね？」

「……そ、その人……は——」

「コロッ！」

私の言葉は、グラナートの声にさえぎられる。

グラナートはこちらにかけてきて、私の頭にチョップを落とした。

「い、痛い……っ！」

「てめー何してんだ」

「さ、散歩を……そ、それよりちょっと、待って」

「待たない」

紅い目で私を睨み、グラナートは私の腕を取る。

「皆心配してんだ。今すぐ帰るぜ」

「ちょ、ちょっと待って、オパルスさんが――」

再び私の言葉を、鐘の音がさえぎり、その音を聞いたオパルスさんが無言でどこかに歩いて行った。

……え、っと？

「ほら、あいつも帰ったろー？」

「か、帰ったけど……」

「俺達も帰るぜー」

無理矢理私を引っ張って、グラナートは宿に向かった。

三九羽

宿に戻って来た私は、コライユとディアにこっぴどく叱られた。アメさんはずっと無言だったけど、どこかいつもと違う。

叱られ終わった後、私は椅子に無言で座っているアメさんに近づく。

「あの……」

「なんだ」

「……マルガリーテースって、人……知っていますか？」

「……マルガリーテース？ 知らないが」

「そうですか……」

アメさんの隣に座る。妹であるオパルスさんが知っているのなら、アメさんとも繋がりがああるかも知れないと思ったけど、そう簡単にはいかないか……。

……私は、旅について行くかそれとも一人で旅するかはまだ決めかねている。

勿論皆と旅をしたいという気持ちもあるけど、少し落ち着きたくもある。……マルガリーテースさんに会ってから決めれるのが一番ベストだと思う。

そして今、その機会を得ようとしている。

ブルーが言っていたからと言って、その人が本当に私の味方になってくれるかは解らないのだから……。

「おいコロ？」

「はい？」

「……あのよー、俺達精獣探してくるから」

「え？」

「出掛けてもいいーけど、迷うなよ。アメと一緒に大丈夫か」

そう呟いて、グラナートはアメさんは指差し、懽然とした態度で告げる。

「お前は今回コロと一緒にここに居ろ」

「……何故だ」

「ふぬけて役にたたねーからに決まってるだろ」

キツパリと、グラナートはそう言ってからため息を吐いた。

……そ、そんなにハッキリ言う事あるのだろうか……。

もうちょつと、言葉を選んであげて欲しい。

「じゃー俺達行くから」

「待て、俺は仕事で――」

「足手まとい」

眉を顰め、グラナートはアメさんを一瞥した。……そんなに、そこまで言う事があるのだろうか。王の元に行くまでに、何があったか解らないけど……。

グラナートはため息を吐いてから、踵を返して出て行ってしまった。

ディアとコライユも申し訳なさそうにグラナートについて行く。黒い、宿の部屋の中には私とアメさんの二人っきりになる。

「あの……気を落とさないで下さい、その」

「……気など落としていない」

「じゃ、じゃあ楽しい話しましょう！ 楽しい話！」

「楽しい話……？」

てつきり必要ないと思うかと思っていたアメさんは、無表情で私を見る。

……困った。楽しい話……。

「えーっと、アメさんは楽しい話とありますか!」

「……俺?」

「はい!」

肩までの長い紫の髪が風にそよぐ。

少し無言になった後、アメさんは天井を見上げる。

……本格的に弱っている気がする。いつもなら、全く取り合ってくれないだろう。それなのに今日は、普通に会話が成立している。

「な、なら質問です!」

「質問?」

「……その、あー……ディアの事、どうして教えてくれたんですか?」

まずい。暗い話だ、これ。

「……面倒くさかったからだ」

「め、面倒くさかったからですか」

「あのまま知らなかったら、お前は何度も禁術の事を俺に聞いて来ていただろう」

「……ひ、否定はしませんが」

「質問を無くすには、根本を教えた方がいいと思った」

……思ったよりすごい雑な理由だった。

アメさんにとって、ディアが禁術使ったなんて話は隣の犬が散髪

した程度も興味がないのかもしれない。
それは、すごく哀しい事だと思う。

「……他人と喋るのが、嫌いだ」

「……は、話しかけてごめんなさい」

「……心を開いても、いつかは捨てられる」

「……え？」

「それが嫌ならば、関わらなければいい。他人に捨てられることが
恐いのならば、知り合いを作らなければいい。自分を偽ればいい。
——そうすれば傷つかない」

「……アメさん？」

アメさんは深くため息を吐く。

その言葉がアメさんの本心なら、アメさんは演技をしている事になるのだけでも……。

「なんで、そんな事を話してくれたのですか……？」

「……協力して欲しい」

「……え？」

びっくりしてアメさんを見る。

アメさんは唇を噛み締め、拳を握りしめた。

協力——？ 私、何を？

「理由は……聞かないでほしい」

「……」

よくわからないのだけど——。

「任せてください！」

役に立てるのなら役に立ちたい。

私はずっと、役に立ててないのだから。

「……すまない」

アメさんが頭を下げる。いえ、気にしないで下さいと拳を作った。

「あつ、そうだ外に出かけませんか！」

「そうだな……」

無言が少し辛く、私はアメさんを外に誘った。

相変わらずの闇色の街を歩く。夕暮れている。

魔物がうじゃうじゃいて、少し恐ろしい。

だけど周りの人達はそんな魔物を気にしてないっぽい。大体迫害されてしまう存在だと思うのだけでも……。

「……差別とか、ないんですね。いえ、勿論するつもりはないのですが……」

「差別ならある。魔物の中でも人に危害を加える物は差別されるが……ペシエ・オリジネル死者程ではない」

「死者？」

「太古の昔、ブルー・オワゾー青い鳥に逆らった者の末裔の総称だ」

「……青い鳥？」ブルー・オワゾー「……青い鳥の女帝じゃなくて？」

ブルー・オワゾー「青い鳥とは、魔力の中核を作った人物。メーアヒュン青い鳥の女帝はその後を

継ぎ、世界を歪ませた人物だ」

四十羽

適当な喫茶店に入り、お茶を飲みながらアメさんが簡易的に説明してくれた。

太古——人間の寿命は凄く短かった。理由は、魔力の使いすぎ。自分の持つてる魔力以上の魔術を使ったら、人間は死んでしまう。だけど、地上に魔力の中核があった時代は、自分の魔力量が解らないのに、地上にあるから使い放題だった。いくら地上にあるうと、自分の魔力量《血の純度》以上の魔力を使うと死ぬ。正確に言うと、昏睡状態になるらしい。

それを魔力死と言い、魔力死で死ぬ者は年々増え、平均寿命は10代だったらしい。その状態を危惧した一人の魔法使い——青い鳥ブルー・オワゾーが精獣の力を借り、魔力の中核を地上から取り出した。

「青い鳥の信念に反対し、青い鳥と敵対していた者が死望者。現代ではそのリーダーであった男の末裔が死望者と呼ばれるがな」
「……へえ」

魔力の中核が地上からなくなり、人々は自分の魔力以上の魔術は使わなくなり、魔力死も凄く少なくなったらしい。それでもまだ減らないらしいけども。

「また、反対してたが途中から青い鳥側についたのが死変者。ハンズヴルスト家が現在はその呼ばれている。こちらはカタロン家の傘下に入っていることもあり、青い鳥と共に英雄視されている」

「……カタロン家？」
「青い鳥の末裔だけを集めた家だ」

「末裔だけを集めた家……？」

なんだかその言い方には裏がある気がして、ジュースを一口飲んでから聞く。

「……青い鳥のDNAを持つ者が集められるのだ。そして、魔力量が多い順に年齢性別関係なく序列付けされ、当主を決める」

「……え、なんですかそれ」

「皆、血は一応繋がっているらしいな」

「……じゃあ従姉妹もはとも何もかも一緒に住んでるってことですか？」

「ああ」

「それって、きつくないですか？」

「そうか？ ……楽しそうだと思うが」

「は？」

「……何か可笑しい事を言ったか？」

「え……いや、どうでしょう。私が可笑しいかも知れません」

従姉妹はとこ全部を集められ、しかも年齢も性別も関係なく序列を決める……。それって、もしかしたら他人としか思えない年下のはとこに、親が顎で使われるのを見なきゃいけないかったり、使われたりすることがあるってことじゃないのかな。

……ちよつと、いやだ。

「お前もカタロン家かも知れないな」

「えっ！？ な、なんですか」

「魔力量が多い者は、一般的にカタロン家の者だという事が多い」

「……もしそうでも、私はその家に行きたくはないです」

「カタロン家の事を悪く言うと、この国からは迫害されるよ」

隣の椅子が音を立てる。どこかいい声のその人がケーキセットを机に置く。

ムキムキの男の身体。だけど頭は――鳩。

「……鳩のお兄さん！」

「……すごいお兄さんがいるな」

「実兄ではないですよ！？」

目を丸くしているアメさんに突っ込みをいれると、そうなのかと頷かれた。

……アメさんって、実はものすごく天然なんじゃ……。

「よかったな、恋人と出会えたのか」

「ち、違いますよ！ アメさんはそんなのじゃないですから」

「へー、そうなのか」

アメさんは無言で頷き、ケーキを食べる。それは鳩のお兄さんと同じケーキだ。

「ここのケーキは美味しいぜ。お兄さんもケーキ好きなのか」

「好んでは食べない。……美味だとは思うが」

「悪いが意味が解らない。もっと解りやすく話してくれないか」

「……美味だと思うのに、いっぱいは食べないってことですかね？」

「先輩が……」

アメさんはブラック珈琲を一口、口に含んだ。

それすらも決まるクールな風貌。

先輩ってもしかしてトパーシオ？

「『アメ君はクールな外見をしているんスから、甘い物が好きでも

食べない方がいいッスよ〜キャラが立たないんで』と言っていたので、自粛している」

「……そいつ絶対面白がってますよ!」

大体アメさんのキャラを立てて、どうするつもりだあの男。

「髪も鬱陶しいのだが『髪長い方がクールキャラとして立つんスよ!』と言われた」

製作者側のコメントじゃないのかそれ。少なくともキャラ側のセリフではない!

「……そいつがどんな奴かはわかんないが、キャラが立つなんて言われても自分を曲げるのはダメだろ」

鳩のお兄さんが言う。その通りだ。うんうんと頷くと、アメさんはそうかと頷く。

「……すまない、急にこんな話をしてしまつて……。少し、気を抜いているのかも知れない」

「いいですよ、どんどん気を抜いて下さい! そちらの方が嬉しいです」

微笑むと、アメさんはもう一度頷く。肩までの紫色の髪が揺れた。協力すると言ってから、アメさんがマイルドになつてゐる気がする。嬉しい。

「……何故こんなに気が安らぐのだろうか——お前達が人外だからだろうな」

「「いやちょっと待て」」

ものすごい失礼な事をサラリと言ったアメさんに私達は同時に突っ込む。

「私、人外扱いですか?! 人型ですよ!」

「……え?」

「私が可笑しいんですかー!?!」

「……お前は、人外に分類してもいいと思うが」

「人外だから気を許せるって、逆に問題じゃないのか?」

もったもた鳩のお兄さんの言葉に、私は何度も頷く。

アメさんはきょんとしている。それが普通だと言うかのごとく。

「主も異界人であるし、トパーシオさんもそのハーフだ」

異界人も人外扱いなのか……。よかった、そういう意味の人外ね。さすがに人外扱いは堪える。ほっと胸をなでおろすと、ギリリと変な音がした。

「……トパーシオ、だとお?!」

鳩のお兄さんが急に叫ぶ。店内が騒ぎ出し、トパーシオ? と顔を見合す。が、すぐその人達の顔を怒りに歪んだ。

「え、ど、どうしたんですか?」

「アイツは——俺の母親を父から寝とったんだ!」

何してんのトパーシオ!?!

四一羽

「……いや、あの……落ちついて下さい」

「落ちつけるか、俺の母親は毎日アイツの名前で花占いしてんだぞ！」

「心からご愁傷様です！」

「お前の母親は人型なのか？」

「あ、アメさんっ！」

すごく気になってた事をアメさんが聞く。でもこの状況でそんな事を聞けるのは、すごい天然だ。アメさんはきょとんとしており、本当に気になるらしい。私も気になるよ、すごく気になるけど……！
鳩のお兄さんは気にしてないかのように、きっぱりと告げる。

「俺と瓜二つだ」

……ある意味すごいねトパーシオ。節操がないのか。それとも愛があれば外見なんて関係ないのか、それなら尊敬できる。寝取るのはどうかと思うけど――

「そうか。どちらにせよ安心しろ。――トパーシオさんは情報を得るためにしかそう言った事をしない。愛情はないから大丈夫だ」

「俺の母親は、遊ばれたというのか……」

「遊びじゃない。トパーシオさんにとって他人は道具でしかない。そこに感情はない」

最低すぎる。愛なんて一ミリもないじゃないか。

「俺の母親もだ！」

「俺の彼女もだ！」

「俺の妹もだ！」

わらわらと人が集まってくる。普通の人間や、魔物。……トパーシオって怖い。

「最低な男だ！ 俺の母さんは……！」

「あんなの顔と身体だけだろ！」

「妹が……」

「トパーシオさんは強い。仕事の効率もいい」

アメさんのフォローはどこか間違っている気がしてならない。

強いからって何してもいいって事にはならないと思うんだ……。

妹が寝とられたというゴ布林みたいな男の人は、床に頭をつけて泣き出してしまった。

地獄絵図だ。

「あんただって、妹があ野郎に寝とられたら嫌だろうが」

「オパルスが……？」

少し悩んだ後、

「育てる気がないのならば、子供ができるような行為は控えるべきだとは思うが……」

やっぱりどこかずれてる答えを返した。

「……なんかあんた見てると怒りが、しばんでいくよ」

鳩のお兄さんが疲れた様に椅子に背をつく。おろおろと私達を見
ていた店員さんはほっとした顔をしてから、厨房に戻って行く。注
意しなくていいのだろうか……。日常茶飯事なのかな。嫌な日常茶
飯事だ。

「？」

アメさんはきょとんとしていた。……やっぱりこの人すごい天然
だ。

脱力していると、とんとんと肩を叩かれた。胸下までの少しカー
ルされた薄茶色の髪が視界に入る。

「楽しそうですな」

「え？ わっ、オパルスさん！？」

華やかな笑顔を浮かべ、オパルスさんが私の隣に座る。
全く気配を感じなかった……。後、楽しくは全くもってなかった
よ！

「今日はここで夕食を取ろうと思っていましたな」

「そうなんだ」

「今日は……？」

鳩のお兄さんが訝しげにつぶやき、オパルスさんを見た。それが
気になった私は、鳩のお兄さんに近づく。

（何か可笑しい事言いました？）

（……あの子、昨日も来てた）

（え？）

（昨日だけじゃない、三日前からずっとこの店で食べてる。しかも

毎日オムライスセットを)

……そんなことが、噴水の所でもあった。

私はあの時、マルガリーテースの名に反応にして聞き逃したけど

――

――……マルガリーテース様は、とても素敵な方なのですぞ。それに、待たされたのは今日初めて……ですぞ。

そう、今日初めてと言っていた。

でも鳩のお兄さんは毎日毎日と言っていた、……どちらが正しいか解らない。でも鳩のお兄さんがそんな嘘をつく意味があるのだろうか？

「貴女に会いたかったのですぞ」

「――え？」

「これ、ハンカチ」

「あっ……うん」

「ありがとうございますな」

オパルスさんは花が咲き誇ったように可愛く微笑む。

――可愛い。

「どういたしまして」

もう一度微笑んでから、オパルスさんはオムライスセットを頼んだ。

……三日連続、オムライス……。好きで、済ませれる範囲だけど、ちよっと気になる。

鳩のお兄さんは紅い瞳を細めた。……鳩だなあ。首の所がふわふ

わそうで、オーロラみたいに輝いてて――

「……なっ撫でていいですか！」

「年上のオッサン捕まえて言う言葉じゃないな」

「すみません、つい……。公園で鳩を捕まえて遊んでた事を思い出しました」

「非人道的な遊びをしやがって……！」

「ごめんなさい、若さゆえの過ちです」

もふもふしている頭を凝視する。鳩の頭を巨大化したものを人間の体に乗っけている。

「せ、接合部分はどうなってるんですか！」

「……お前は、あれだ。もうちょっと言葉を選びやがれ」

「すみません、テンションあがっちゃって……。ウサギの頭がついたのなら（漫画で）見た事があるのですが。鳩は初めてだったので……。あの時は、怖かったんですけど、今はむしろもふもふ」

「それはどういう感情だ!？」

「もふもふが好き……。女の子は皆ぬいぐるみのもふもふが好きです」

鳩のお兄さんの頭はそれに通じる何かがある。

「……鳥類のかな、それとも、哺乳類……？ はっ、もしかしてどこぞで見た鳥人^{とりんど}!？」

「期待を裏切って悪いが、精獣だよ俺は」

「……え、精獣って、あ、違いますよね」

精獣は世界の歪み^{メモワール}を守っている以外にもいるらしいし、そっちだよね？

「違うって何がだ？」

「……その、世界の歪みメモワールを守ってる精獣ではないですよね？」

「ああ俺は違うよ」

その言葉にほっとする。

「――世界の歪みメモワールを守っているのは俺の親父だ」
「えっ!？」

「それがどうしたんだ？」

……アメさんと顔を見合わせる。
私達は精獣を倒すためにここに来ているのだ。

「もしかして、お前ら勇者御一行か？」

鳩のお兄さんの声に、殺気が混じり――周りに居た魔物が一気に殺気だった。

四二羽

「そうだが」

「あ、アメさん！」

ここは誤魔化さないといけない所だ。アメさん言葉に、皆が冷やかに私達を見る。

勇者御一行と知られて、睨まれるって勇者御一行としてどうなのだろう……。

「……それがどうした？」

「……俺達は前の世界では迫害されてきた」

「え？」

驚いている私とは対照的に、アメさんは相変わらずの無表情だった。

「だからなんだ」

「この世界に来て、カタロン家と王族は我々を受け入れてくれた……。歪みを戻されて、前の世界に戻されるのがごめんだ」

「そうか」

アメさんは珈琲を飲み干す。辺りにはピリピリした空気が流れはじめていて、発言権を許さない。

鳩のお兄さんがテーブルを叩くいた。バンツ、と鈍い音が店内に響く。黙々とオムライスを食べていたオパルスさんが肩を揺らし、私達を見た。鳩のお兄さんが必死の形相で叫ぶ。

「世界なんて救わなくていいだろうが！ 世界は救われている！

俺達の世界は——青い鳥の女帝によって救われた！」
オワゾー・ブルーアンペラトリス

「すく、われた……？」

その言葉で、バラバラでぐちゃぐちゃだったカケラが形を作る。

この世界は、世界を救わないといけないはずなのに——殆んど人が、その世界を受け入れている。嬉々として。だから危機感が全く持てなかった。

それを自分で可笑しいと思ってたけど、本当に可笑しいのだろうか。

「……でも、世界が救われてるなら……なんで、勇者なんて必要なの……？」

「くっ……」

私の独り言に、皆が顔を歪める。痛いところをついてしまったらしい。

「……俺達と同じ世界の奴が、人間を襲いだしたからだ。それまでは、世界が歪んだなんて皆解らなかった……、だが、もうそいつらは死んだよ」

鳩のお兄さんは、忌々しげに呟いた。

魔物が増殖し、国が動いて、自分の国だけじゃなく、他の国も違う次元と混ざった事を知った、と。

そこから——グラナートが言っていたような理由で、勇者の旅が始まった……？

国家同士の為の、政治的な旅。

「そんな旅……、って」

皮肉だと思っていた。政治的な旅なんて。

本当は皆、困っていて、国とか関係なく救わないといけない状況じゃないかと思っていた。だけど——そうではないのならば、本当は誰も困ってなくて、むしろ皆が幸福ならば、

「……本当に、必要……？」

「必要であろうとなかろうと、関係がない」

アメさんは冷徹に切り捨てる。

「俺達は命令されて動いているだけだ」

「……でも、世界が幸福なら救う意味はありませんよね？」

歪んで、世界は幸福になった。

今まで行った国で、歪みを不幸だと嘆いている国はあったか？
なかった。むしろ皆受け入れていた。

それを、歪んでいるという理由だけで戻す。その世界の人達の事は気にせず、世界が歪んでいるからという理由だけで。

それは、とても可笑しい事だと思う。

「……そんなの、誰も救ってません」

誰も救えない、むしろ不幸にする勇者の旅なんて、必要なのだからか。

必要な訳がない。

「ただの、バカな大人の茶番劇です。やめるべきです」

頭の堅い人が、歪んだのだから直すべきだとわめいているか、それとも遊びで戻そうとしているのだろう。

私はアメさんを見つめる。アメさんはため息を吐いた。

「俺に言うな。勇者に言え。俺の一存ではどうにもならない」

「そうですね。では、善は急げです。宿に戻りましょう」

「……ああ」

オパルスさんに挨拶した後、鳩のお兄さん達を見て、笑う。

「鳩が豆鉄砲を食らったような顔してます」

「……いや、まさか、俺達と同じ意見になるなんて、あんた勇者御一行だろ？　こんな魔物の俺達と……」

「関係ありません。間違ってるものは間違ってます。この件に関しては、心から可笑しいと思いますから」

……幸せな人を、不幸に貶めるなんて人として最悪な行為。正義感がそこまである訳じゃないけど、すごく可笑しいと思う。

「……あんた、俺達の事明らかに魔物扱いしてたのに――」

「……それは、本当にごめんなさい」

「いや、いい。むしろ嬉しいよ」

「え？」

鳩のお兄さんを見ると、目を細められる。

「言葉にできないな……なんだろうな。……ともかく、ありがとう」

「こちらこそ、ありがとうございます」

「……なんであんたが頭下げるんだよ」

「その事実気づかずに、勇者の旅についていたら後悔して

ましたから。知れてよかったです」

我ながら似合わない程アクティブだ。これも魔力の中核メーアヒュンの所為なんだろうか？ それとも、自分の意思なんだろうか……。

私は苦笑してしまう。そしてもう一度鳩のお兄さんを見つめる。

「それに、貴方には借りがあります。それだけです。では」

頭を下げて、その場を去った。

胸の中にある何かが温かくなる。まるで私のした行動が正しいかというように、優しい温かさを灯す。

そんな訳ないのに、魔力の中核メーアヒュンが褒めてくれて気がした。

宿に戻ると、既にグラナート達が居た。

「おせーよ。もしかして飯食って来たのかー？」

「ケーキだけだよ、それより」

ベッドに座っているグラナートの横に座り、グラナートの目を見つめる。

「勇者の旅、止めて下さい」

「「は？」」

グラナートとディアとコライユの声が重なった。コライユの精獣のデプ君の声も重なった気がする。

四三羽

愕然としているグラナートに、さっき喫茶店で話した事や感じた事を話すと、グラナートはあからさまに顔を歪ませた。

「あのなー……お前には話したろー？」

「え……？」

「俺が勇者として旅をしてるのは、世界を救う為じゃねー。その過程で探しもんをする為だ」

「な、なんだそれは！　勇者がそのようなことでもいいのか」

……グラナートの、旅の理由はディアの禁術を解く術を探す事だった筈だ。

グラナートは怒るディアを軽く流す。

「……じゃあ、その探し物が見つかったら勇者の旅をやめるの？」

「そんな無責任なことしねーよ。大体、これがある」

シャツをめくり、腕輪を見せる。煌びやかに輝く勇者の腕輪。

「逃げたら速やかに殺されるだろーな」

「……それ、取れないの？」

「あのなー……、はあ……」

グラナートがあからさまにため息を吐いた。
めんどくさそうに、鬱陶しそうに。

「……俺は、世界になんて興味ねーんだよ」

「……」

「他人が死のうが、不幸になろうが知ったことじゃねー。俺は、俺の周りの奴が幸せになれるなら――他の奴が死んでもいいし、殺せって言われたら殺せる」

「……そんなの、可笑しいよ」

グラナートは絶対に勇者になっちゃいけない人だ。

常識や理念や倫理が可笑しい。狂ってる。そしてそれを――可笑しいと思っていない。

「な、なにを言ってるのだグラナート！ お主は人を救うための勇者だろう！ そんな事を言うなどと……！」

「あーあーわりーわりー。コロ、この話は終わりだ」

「……」

終わらず訳にはいけない。

じっとグラナートを見ると、紅い瞳で睨まれた。そして舌打ちされる。

「どーせ一時の感情でだろーが。そのうち、世界になんて興味なくなってくる」

「そんなこと……！」

「たかが人間風情が、世界を救うなんて考えんな」

「魔王のセリフだよそれ。……ねえ、どうして……そんなに、世界に興味がないの」

「お前がおかしーだろ。……赤の他人の為に、世界を救う意味なんてねー」

「確かに私にとっては皆ただの他人だけど、それでも嫌なもの」

私に優しくしてくれた優しい人達が、不幸になるなんて……絶対に嫌だ。

それが、どうしようもなく、絶対に救えないものなら何も言えないけど――救えるの可能性があるのなら、救いたい。

グラナートがもう一度舌打ちしたかと思うと、私をベッドに押し倒す。ギシリとベッドが沈む。突然の事に目を見開くけど、グラナートの顔は不機嫌そうなままだった。

「……俺の邪魔する気かー？」

「……勇者の旅は可笑しいよ」

グラナートの瞳が怒りを孕み、めんどくさそうに吐き捨てる。

「もし俺の邪魔するなら――」

「……するなら？」

「――ここに置いてく。……元々、お前を最後まで旅に連れてく気はなかった」

「……え？」

「旅が終わったら迎えにきてやるから」

目を丸くして、グラナートを見る。冗談を言ってる風ではない。本気……？

「私は、探し人をしてるんだよ？ ……一か所にとどまってる訳じゃない。別れたら、もう二度と会えないかもしれない」

「……くだんねー。会おうと思ったらいつでも会えるだろ。それに、会おうと思って会えないならその程度の縁って事だろーな」

「……、ふーん」

その言葉に、少し腹が立った。――その程度、ということだ。……当たり前か。あんなの事故みたいなものだ。事故求婚だ。

「その程度なんだね……」

「あー？」

「……解ってたよ。フィーリングだけで人を好きになるなんて可笑しい、誰でもよかったんでしょ」

「何で今その話なんだよ」

不機嫌な顔を作った後、グラナートは力を強める。痛い。全く手加減してくれてない気がする。

少しだけ賭けだった。自分を賭けて、グラナートに旅をやめさそうと思っていた。でもそれは無残にも失敗する。先手を打たれて……。

慣れない事はしない方がよかったのだろう。だけど、もう引き返すつもりはない。ただ、意地になってるだけかもしれないけど……。

「俺は、お前の事本気で好きだぜー？」

「……嘘だよ。……グラナートの私に対する好意は——あの王様と、変わらない。ただの、身代りだよ」

ずっと考えてた。何でグラナートが私の事を好きなのか。

考えて出た答えは、初恋の人に、私が似てるから。という最初にした事と同じ答えだ。

あの王様と同じように、私は見ていない。それは当然だ。——元々、私はこの世界の人間ではない。そんな人間が、この世界で好かれようなんて虫が良すぎる。

「身代り……？ てめーは、そういう風にずっと思ってたのか？」

「……ええ」

「へー……そう」

「っ……！」

腕を掴む手が、さらに強められる。

「グラナート！ もうやめんか！」

ディアが私とグラナートを引き離れた。
眉を顰め、グラナートは私を見ている。

「……コロも、少し落ち着け」

「……でも」

「でもない。……そうだな。コロには、選択肢が無さ過ぎるの
やもしれん」

「選択肢？」

こくり、とうなづいた後ディアが私に近寄る。白銀のウェーブし
た髪の毛が、女の子より可愛い顔が至近距離に現れ、思わず身構え
てしまう——むぎゆりと抱きしめられた。

「抱きついてくれ」

「え？ う、うん」

抱きしめ返した瞬間、ディアが離れた。

「これで選択肢が生まれた。グラナートと結婚するか、ワシと結婚
をするか」

……いや、ちょっと待って。色々ちょっと待って。

何で急に、そんな話に。

四四羽

さっきまでのピリピリしたムードが無くなる。

……グラナートは余計不機嫌そうになっているけど。

「ディアこそ、落ちついて……。その、あのね。今そういう話じゃなくて」

「子を身ごもっているから、問題が生じているのだろう」

「え？ ……あ」

そうだった。この人達はハグで子供が生まれると思ってる。

そして私のお腹にはグラナートの子がいると思われているのだ。
ハッキリ言っておかないと、

「子供は身ごもってません」

「「は？」」

決してここはハモるところではない。

「だから二人とも、責任を感じる必要もないの。全く」

「どーいうことだ」

「そのままの意味です。私のお腹にはどちらの子もいない。だから責任を感じて、私と結婚する必要は全くないの」

「なんで」

「なんでって……」

まずハグで子供ができないからだよ。と言うのも憚れて、なんでもだと言うと睨まれた。

グラナートが私に近寄り、肩を掴み、顔を近づける。

「嘘……ついてる風じゃねーな。じゃー本当にガキはいねーのか」

「いないよ」

「……100%っーのは、嘘だったのか？ ……運が悪かっただけか？」

舌打ちした後、グラナートに抱きしめられた。

「……何してるの」

「生まれねーなら、生まれるまで作るだけだ」

「既成事実で女を縛り付ける男って最低だと思う」

ある種の強姦じゃないだろうか。……グラナートが本当の性知識を知っていた事を想像し、ぞっとした。

「……俺は、お前がなんと言おうと、本名明かせねー怪しい奴でも

……ちゃんと好きだ」

「……どうして」

「好きなもんは好きだ」

「……意味が分からない」

グラナートの胸を押すと、グラナートは簡単に離れた。

「……私もグラナートの事好きだけど、それは……恋愛感情じゃない、と思う」

ずっと接して来て、好意は抱いている。他人の女の人と仲良くなるのはちょっと嫌かも知れないけど、それはきつと……求愛していながら、他の人にうつつをつかすと言う人間性が嫌なだけで、グラ

ナートじゃなくても嫌な筈だ。

「そんなの知るか」

「……は？」

「てめーの気持ちなんて関係ねー。お前は絶対に俺と結婚するし、俺の子供を産む」

「……そういう、自分勝手な所が好きじゃない」

いつも私の意思は関係ない。それなのに、私に決めさそうとする。一択しかない選択肢を、自分の意思で私に選ばそうと……。すごく悪質だ。

「……グラナートの言う通り、私はここで皆と離れるよ」

「……」

「その前に……、本当に旅をやめるつもりはないの？」
「ねーよ」

そうだよ。グラナートが自分を曲げる訳がない。

「……青い鳥の女帝は、世界を不幸にしてないよ」
オワゾー・ブルーアンペラトリス

解ったのだ。あの話を聞いて……、
オワゾー・ブルーアンペラトリス
青い鳥の女帝は、世界を壊したりなんてしてない。むしろ——幸せにしたのだ。だけどそれは少しだけ、間違い、結果として、彼女は悪者になった。

「でも、グラナートにはそんな事関係ないんだよね。青い鳥の女帝
オワゾー・ブルーアンペラトリス
が悪い人であろうと、いい人であろうと」

「あー、関係ねー」

グラナートにとって、この旅は——あくまでもディアの禁術を治す為の利用する物なのだ。

「……世界を救うという行為が、この世界に住んでいる人達を……不幸にしても、何も感じないの……？」

「感じねーよ。俺には関係ねーことだからな」

「……勇者は偽善者であるべきだとおもうよ」

「くだんねーな」

鼻で笑い、グラナートは流し目で私を見る。ピリピリとした空気が部屋の中戻ってくる。

「……そう、わかった」

私のしている事は偽善的だと思う。鳩のお兄さんと知り合い、助けて貰わずこの事実を知って……同じ事をしていたかは解らない。

——グラナート達と居れば、色々なモノが保障されるし、苦しい生活はしなくていいだろう。

今までの楽しい旅を思い出し、目を瞑る。楽しかった。それを、一時の感情で手放すことは、バカな事だ。

そう解っているのに、腹が立って仕方がない。

グラナートは目を細め、私を睨んでいる。

立ちあがって、拳を握った。

「……………っ、今までお世話になりました」

私は立ちあがり、部屋の外を出ようとするが、誰かに阻まれる。アメさんだった。

「……一時の感情で行動して、後悔するのは自分自身だ」

「そうでしょうね……」

「……協力すると言うのは、嘘だったのか」

「……すみません。アメさんがこの国を出るまでは協力します。多分、あの人の所に居ますから……」

「……そうか」

アメさつが私の手を離れたかと思うと、誰かが私の腕に絡みつく。

「俺はこっちにつくぜ」

「え……、コライユ？」

「元々、ヴァイス共和国から逃げたくて旅をはじめたからな。勇者の旅であろうと何でもいいんだ」

「……で、でも、ダメだよ。私は、元々いない存在だけど——」

コライユが私についてきたら、本編に問題をきたす。

「いーんじゃねーのか」

私の困惑はグラナートの声で吹き飛ぶ。

グラナートの顔を見るのが嫌で、顔も見ずに私達は部屋を出た。

「勇者のインモラル（前書き）」

閑話・グラナート視点。

読まなくても、全くもって問題がありません。

「勇者のインモラル

コロが乱暴に閉めた黒い扉を見つめる。

……変な形になってんのは気のせいだろ。

アイツ自分では気づいてねーけど、すげー馬鹿力だ。

「……あの女を追い出しても、不利益しかない事を理解しての愚弄か？」

「不利益だー？」

無表情ながら、怜悯に整った顔には怒りしか浮かんでない。……
本気でそう思ってるのか。

「お前、馬鹿だろ」

「女に戦わせるのは紳士的ではない等を甘い事を言うのならば、ま
ずお前の言動を見直せ」

「んな事誰も言ってるねーよ。女でも戦いてー奴は戦えばいいーだろ。

俺には興味ない」

「片思っている相手が戦うのが嫌だというのか」

「……あのなー」

片思い言うな。

それとちげーよ。

「コロの魔力感じて、何もわかんねーのか？」

「……？」

「ならただの馬鹿か、……コロに触れる時間が短すぎて気付かなかっただけだなー」

「三度にわたり、抱きしめているが」

「……お前、すげー怒ってねーか？」

「……怒っているのはアメテュステウス君だけではあるまい」

ディアが俺の隣に座り、俺の頭を叩いた。……いてーんだけど。

「彼女とここで別れるのは早計だろう。……ワシより頭がいいはずのお主が気づかん筈がない」

コロが居たら、魔力回復できる飴なんて買わなくてもいい。便利で、金もかからねー。

それは、コロを道具として使ってる事になるけど、んな事はいい。問題は何より、

「アイツがこの世界の人間で、あの魔力が元から宿ってるなら——カタロン家の人間である可能性が高い」

「それはないだろう。記憶喪失だとしても、ある程度の一般常識は知っている、だが一般常識であるはずの青い鳥ブル！オワッの事を知らない。喪失の仕方が変だ。そこから導きされる答えは——」

「異世界の人間って事だろー。解ってんだよんな事。……もしカタロン家であれば、記憶喪失してまいが、してよーが俺を拒絶しねー訳がない」

「……乙女思考だな。過去敵対していた者が現世で恋人とになれば素敵なのになあなんて夢を見てるのか」

「……お前、本当に機嫌わりーな。俺が言いてーのはそういう事じやねーんだよ」

「……？」

「異世界の人間で、何故この世界の魔力を持ってるか。それが重要なんだよ」

記憶喪失を装ってるのは、異界人と差別されることがあるからだろう。

アイツがカタロン家という可能性は、ほぼ0だ。……そうであれば、嬉しい気もするけど、夢を見過ぎだ。

カタロン家と俺は、相反するもんで、繋がる事はない。

「……あの女の魔力が後付けだとして、それが何だ？」

「魔力っーのは、血で使う。魔力だけあって、血の純度が高くねー奴が魔術を使うとどうなる」

「む？ 何を言っているのだ？」

頭にはてなを浮かべてるディアが、アメと目を合わす。

アメも解ってねーみたいだ。

異界人がこの世界の魔力を宿らせ、使うとどうなるかなんて普通はしらねーし、知らなくていい事だ。しょうがねー。俺が意味わからんねー勉強ばかりしてるから解った事だが、今だけはそれに感謝する。

「アイツが魔術なんて使ったら死ぬぜ」

魔術を使う際には、血を使わないといけない。

元々魔術を使う器ではない者が魔力だけ身体に宿し、魔力を使うと――血以外の物が、魔術を使う為に働く。違う、犠牲になる。

そういう実験が昔ハンスヴルストで行われていた。

元々魔力の無い器に魔力を宿し、魔術を使わせたらどうなるか。結果は、散々たるものだ。

被験者は魔力を使いきると、死ぬ。たったそれだけ。使い捨てだ。

その実験は人権やらを問われ、今は中止になってるから、今はもっと進化してるのかもしれないけど、根本的には変わんねーだろ。

掻い摘んで説明してやると、二人は困惑気味に頷いた。

「……彼女の為を思って、抜けさせたのならよいのだが」

「だがなんだー？」

「ここで別れ、再び出会えるかは……単純に運だと思うぞ」

「会える」

「む？」

「ぜってー会える。そーいうもんだ」

「……うむ、そういうものなのか？」

「そーいうもんだ」

にやりと笑うと、そうかと再び頷いた所で、扉がノックされる。

コロが帰って来たのか？ ……んな奴じゃねーだろ。あいつ、い

つもは流されてるけどいざとなったら凄い頑固な奴だ。

返事も待たず、扉が開く。

入って来たのは、全く知らない女だった。深緑の髪を縦巻きしてる。服は、紅芋色のクラシカルなワンピースを着ている。絶対貴族だ。

その証拠に、俺を見てあからさまに顔を歪めた。珍しいな、大体頬染めてから顔歪めるのに。

「何でここに死望者^{ベシエ・オリジネル}が居るの？！ うえ、嫌なもん見ちゃった。あたしの目を穢して、アンタら何さまのつもり」

「てめーが何さまだ」

「煩いわね、死望者^{ベシエ・オリジネル}は黙ってなさいよ。それよりあんた達、あたしに付き合いなさいよ。やっとマルガリーテース様が帰って来たの。」

お兄様を討伐するチャンスがやって来たわ！　あたしの名前はイズムルート・カタロン。気軽にイズム様でいいわよ」

四五羽

宿から出て、この前迷った魔界都市へと歩いて行く。コライユは私を離さんと腕に絡みついている。辺りはもう暗くなっていた。

「本当によかったの？　コライユ」

「なにがよ？」

「……私について来て」

「おう、つーかよ、俺も……世界には興味がないんだ」

「自分の世界なの？」

「……自分の世界だからだよ」

「？」

「俺は世界に、何の希望も持っていない」

遠い目をした後、コライユは微笑む。

……希望を持ってない、なんて。

「大丈夫……」

「え？」

「きっとこれから希望が持てるよ」

「そうかねえ……そうだといいいけどな」

「そうだよ、望みも願いも私に叶えられる範囲なら叶えるから」

立ち止って、コライユを見つめてそう言う。

知り合いの不幸が、自分の手で取り除ける物ならば取り除きたい。

「私程度の力で、コライユを幸せにできるかは解らないけど……」

「えっ、やつ、あ……ぽっぽ」

「……あ、ごめん、いきなり急に気持ち悪かったよね。あはは」

真っ赤になって謎の奇声を発しだしたコライユに苦笑して、私は再び歩みを始めた。

百鬼夜行。それをここまで表している都市はいないだろう。

人間が来る事が珍しいのか、妖怪やモンスターの方々が私を見ている。

だけど危害を与える気はないのだろう。すぐにどこかに行く。

「こ、コロ……さん？ 道迷いました？」

「いえ、ここだよ。話しかけよう」

「……コロさん性格変わってませんか？」

「私は今まで……」

「うん？」

「この世界で特に意味もなく生きてきたの、だけどやっと、ここでやりたいことが見つかった」

探し人をするのも、ここでなんとなく生きる為だったし、ゲームの世界だと解っていたからか、ここに生きている人の事なんて興味がなかった。

だけど鳩のお兄さんと知り合って、その知り合いの人達を見て……私にできる事があるのならば、したいと思ったのだ。

それに、この世界は不条理で溢れている。完結に向かう程、皆は不幸になっていく。

それなら——阻止すべき。

「やりたいこと……?」

「うん」

オワゾー・ブルーアンペラトリス
青い鳥の女帝は誰を不幸にしてない。

——私は、今青い鳥の女帝の位置にいる。
オワゾー・ブルーアンペラトリス

……今まで考えないようになってきたけど、いつかグラナートと闘わないといけないかもしれない。

その前に、旅を阻止して世界を戻すのをやめさせる。

結局は、自分の為かもしれない。内心苦笑してしまった。偉そうなことをなんやかんや言いながら、私は自分の為に行動している。

きよとんとしているコライユを見て、微笑んだ。

「グラナート達の旅をやめさせる」

「……グラナート達をやめさせても、他に勇者はいるぞ?」

「ううん——グラナート達だけでいい」

オワゾー・ブルーアンペラトリス
他の勇者は青い鳥の女帝までたどり着かない。

絶対に。

——そういう世界になっているのだから。

「……グラナートを、止めたらこの世界は一生救われない」

「……よくわかんねえけど、コロがそう言うなら手伝うぜ」

「でも——」

コライユは元々グラナート達と居るべきだ。

こっちに居るのは——でも、物語を壊そうと思うなら……コライユがこちらについてくれた方がいい。

「……ううん、そうだね。ありがとう協力してくれる?」

「おう、任せとけ」

花のように微笑むコライユを見て私も微笑んだ時、コライユの背後に見知った姿を見つけた。

「鳩のお兄さん！」

「……え、あんた……」

頭部が鳩のお兄さんを振り向いて視界に入れた瞬間、コライユが固まる。

私は笑顔で鳩のお兄さんに挨拶した。

「勇者の旅抜けてきました」

「……大丈夫か？」

「大丈夫です。だけど、その」

「うん？」

「この近くの宿紹介してくれませんか？」

「……宿？」

「はい、あの宿に泊まることはできませんし……」

「……また、なんでこんな所に」

「鳩のお兄さんに、色々聞きたい事とかもありましたので……」

私はこの世界の情報が中途半端に少なすぎる。

色々知って、それから対策を立てないとグラナートには勝てない。

お金は、トパーシオがばらまいたのを取ってあるので全く問題ない。……悔しいけどありがとうトパーシオ。

「……わかった。ことの発端は俺にもある。家に来な」

「……え？ いいんですか？」

「ああ」

「ま、待てーっ！」

コライユが大声を出し、私と鳩のお兄さんの間に割り込んだ。

「鳩だろ！ 鳩だよ！」

「鳩だけど？」

「いや、精獣だからな」

「……精獣だからって、お前」

「いい人だよ」

「……コロちゃん、人を簡単に信用するのはどうかと思うぜ」
「大丈夫だよ」

微笑むと、コライユは困った顔をするが渋々と頷いた。

四六羽

鳩のお兄さん——カルブunksさんの家は普通だった。黒一色じゃない。

普通の家、部屋。勿論は外観は黒一色だったけど。

中はカントリー風だ。

クルさんはご飯を作ってくれている。その後ろ姿は、男らしい。手伝うと言ったのだけど、料理は一人で作る方がいいと言われてしまった。

椅子に座り、クルさんを見つめる。

「実は人間ってオチはないですよね？」

「オチってなんだオチって。残念ながらこの頭は本物だ」

「別に残念じゃないです。……うーん、もし私（人間）にクルさんの子供ができれば、どういう形で生まれてくるんでしょう」

「ぶふっ！」

隣でコライユがお茶を吹いた音が聞こえたと思うと、ザクツと嫌な音が聞こえた。

クルさんを見ると、包丁が……手に。

「ぎゃーっ!？」

「あんた馬鹿か!？」

「パルマコン！」

コライユがゴホゴホと咳込みながら、本を取り出して回復魔術を使う。

クルさんの手は元に戻るけど、みじん切りしていた玉ねぎに血が

付着している。

「もう……私が作ります」

「誰のせいだと思ってるんだ!？」

「え？」

「……コロって、妙な所ですげえ天然っーか、鈍感っていうか」

近づき、料理を手伝おうとしたら二人からなんとも言えない視線を受けてしまった。

「料理は俺が作る。あんたは座っている……」

「でも、手」

「あんたが変な事言わなかったら怪我なんてしない」

紅い瞳で私を見るクルさん。くちばしは白が基調になっているのだけど、先になるほど黒くなっている。つるつるくちばし。……つるつる。

「つるつる」

「おい許可もなく俺の唇に触るな」

「唇なのかそれ!？　ぎゃはははははっ!」

一人で大爆笑しているコライユが、テーブルとドンドンと叩いている。

私は次なる神秘——口の中はどうなっているのだろう。という疑問で頭がいっぱいだった。

「あーんしてくれませんか？」

手を離すと、渋々、かばあっとくちばしを開けてくれた。鳥の口

だった。

鳥……だなあ。本当に。

「鳩って草食なんですよね？」

「いや……あの時はあんたを落ちつかせる為にああ言ったが、鳩は雑食だ——ってだから俺は鳩じゃない！ 精獣だ！ 正確に言うとな半精獣だ！」

クルさんは座ってろと言って私を無理矢理椅子に座らせ、料理を再開した。

「なんだかクルさんというと、素直になれます」

「……コロは鳩を口説いてどうするつもりだ」

「だから俺は鳩じゃない！」

「鳩でも人間でも精獣でも、半精獣でも一緒ですよ」

はじめは魔物が普通に人間と生活してるなんて信じられなかったけど……ああ、なんて言えбайいんだろう。

ともかく、関係ないのだ。そんなこと。

「いい人はいいい人です。人じゃなくても……」

「……そうだな」

コライユが笑顔で頷いてくれて、私も笑う。

「——だがソイツとの交際は俺が認めんぞ」

「あんたちよつと空気読め」

「あははっ、なにそれ」

すごく真面目な顔でコライユが私を見るので思わず笑ってしまっ

た。

なんでそんな話になってるのだろう。

「……その気がないならいいけどよ、さあさあ話題を変えるか。変な空気になるから」

「あんたがしてるんだよ」

脱力気味なクルさんは料理をまた再開する。手際がすごくいい。この世界って料理上手な男の人が多い気がする。コライユはケラケラと笑う。

「クルクルに質問なんだけどよ」

「（クルクルって……）なんだ？」

「性別変える魔術あるろ？」

「第一級魔術だな。それがどうした？」

「この国でそれが受けれるって本当か？」

「は……？」

クルさんが振り向き、目をパチパチしてコライユを見る。私も同じようにコライユを見る。先ほどの朗らかな空気が、一瞬にして凍りつく。

「……あるけど、子供が産めなくなるぞ？」

「問題ねえよ、そこらへんはよ」

「……あんたもしかしてそれ受ける気か？」

「おうよ、だったら何か問題があるか？」

「……親に貰った身体なんだ、大切にしたほうがいいと思うけど」

もったもなその言葉に、コライユは失笑した。心底バカらしいというように……。

「俺は間違ってるんだよ、全てが……逆なんだ。性別が逆だったら、外見が母親じゃなくて父親に似てたら、……こんなことに、なってねえのに」

「……コライユ？」

コライユの過去を、私は知らない。勝手に推測しただけだ。

私はその推測が合って欲しくないと思っている。

でも、コライユの哀しそうな顔はその推測が……ただの推測じゃないんじゃないか、と私の中で呼びかける。

「ま、そんな事はいいいからさっさと教えろって。あるんだろ？ カタロン家でやってんのか？」

「……………いや、ハンスヴルストの研究所で行われてる。確か、

第2研究所だったと思う」

「……………ここから近いかな？」

「ああ。……今は——6時か、今から行けばギリギリ間に合うかもしれない」

「へえ、そりゃあいい」

「ちよ、ちよっと待ってコライユ！」

止めなければ本気で行ってしまいそうなコライユを止めようと、立ちあがって、コライユの横に行く。桃色の髪。人形みたいな可愛らしい顔立ち。

——本当に男になるつもりなのだろうか。

そんなのは、許されることなの？

「……その、もう少し考えてからの方が……」

「5年……」

「え？」

コライユが顔を上げて私を見る。その顔は泣きそうに歪んでいた。

「5年考えて出した結果だ。……俺は、誰かに必要とされるなら――俺じゃなくてもいい」

四七羽

「私は、コライユが必要だよ」
「……」

泣きそうな顔でコライユは私を見た。

「言ったでしょ、私にかなえられる範囲の願いなら叶えるって」
「……あはははは、男前だねえコロちゃん。何時の間にそんなに強くなっちゃったんだ？」

「私にはコライユが必要なの」
「なら——なおのことだ」

泣きそうな顔のまま、コライユは微笑んだ。

「……男になった方がコロを守るだろ」
「……私の為にするなら、してほしくない」
「コロの為だけじゃない。俺の為でもあるんだ」
「……コライユの為？」

「……女で居るのが、辛いんだ。俺は……ずっと、男として育てられてきたから、女って実感もあんなねえし……それに」

俯いて、コライユはお腹に手を当てる。

コライユが瞳を閉じると、涙が桃色のスカートに落ちた。

「俺は……、子供生めない。永遠に、何をして……」
「……ま、じゅつで……どうにかならないの？」

「無理なもんは無理だ。回復系の魔術は、あくまでも外傷しか治せない。……中を治す魔術はないんだ」

「で、でも性別を変えられる魔術があるなら――」

「性別を変える魔術は、相手が居る事で初めて成立するんだ。……いわば、トレードって奴だな。」

「……っ」

何も言い返せない。何かを言わないといけない。

間違っている。間違っている筈だ。

間違ってる……？

それを決めるのは、私ではない。コライユがそうしたいのなら、そうすべきだ。

私に止める権利なんてない。彼女はきっと私の何十倍も辛い思いをしてきて、そして決意があって性別を変えようとしてる。

「……危険じゃないの？」

「魔術で死ぬことはねえな。しかもあのハンスヴルストだろ。魔術機具やらで超有名なガットの本山だぜ？ 何の心配もない」

「……でも」

なんとも言えないこの気持ちはなんだろう。

「大丈夫、嫌になったら戻せるし」

「……本当に？」

コライユは微笑む。

「本当だ」

その笑顔を見て、それ以上何も言えなくなってしまった。

「よし、じゃあいつちよ行ってくるかね」

「……ま、待って、私も行く」

「研究所なんて来ても、つまんねえだろ？」

「ううん、行く。私も行く。クルさんもついて来て……」

「ああ」

「おいおい大げさだな」

「……おおげさにもなるよ」

性別を変えるなんて、一大決心で、すごい事だ。

簡単に戻せると言っていたけど、本当にそうかも解らないし……。

「……夕飯はどうする？」

「後で食うわ。早く行きてえ！ ニュータイプのコライユ君をご期待下さい！」

ケラケラ笑うコライユの顔は晴れ晴れとしていた。

複雑な心境を隠し、私達はクルさんに案内して貰ってハンスヴルストの第二研究所とやらに向かった。

檻のようなものに囲まれた研究所とやは、夜だからか禍々しさしか感じない。

警備員さんに挨拶し、中に入ると病院の待合室みたいになっていた。

長椅子が何個かと、テレビがある。……なんでファンタジーな世界にテレビがあるんだらう。テレビも魔術機具に入っているのだからか？

「……うん？」

廊下の奥から歩いて来ていた人が、少し驚いたような声を出す。声じゃなくて音だと認識してしまいそうなほど、綺麗な声だった。思わずその人を見てしまい、愕然とする。

——グラナートばりの美形だった。

人知を超えてる。人間だと思えない程の美しさ。

臀部まで伸びているワンレンでストレートの深緑の髪。エメラルドのような緑色の瞳。陶器のごとく白く、綺麗な肌。薄く色づいた唇に、高く整った鼻。

身長は170センチ半位だろうか……ゆったりとした服を着ており、性別が解らない。

だけど違和感。

額に、小さな宝石みたいなものがついている。アラブの女王やら、どこぞの神様がつけてるやつ。そして頭に——パンダの耳みたいなものがついているのだ。だけどそれはすごく堅そうだった。小さな砲丸にも見える。

「……ッ！ エスメラルダ当主」

クルさんが急いで頭を下げる。当主？ きょんとしている私とコライユの頭を無理矢理掴み、クルさんが私達の頭を強制的に下げさせた。首が痛い。

「——こちら。いけないよ。女の子の頭を無理矢理下げさせるなんて」

「……は、はい」

手を離され、私達は再び顔を上げる。その人がコライユを深緑の瞳に映し、微笑んだ。心どころか命まで取られそうな狂惑な笑み。

グラナートは自分の容姿の良さをあまり理解してない気がするけど、この人は自分の容姿の良さを理解し、最大限利用しているという感じだった。

「やはり、ヴァイス共和国のコライユ・アングルス姫ではないか。……こんな所に何か用かな？」

コライユは冷や汗をかいた後、にこりと微笑む。初めて見た笑い方だった。完璧な作り笑い。コライユの事を知らなかったなら、作り笑いだと解らない程の笑顔の仮面。

クルさんがあからさまに驚いていた。そうだよ、この子姫なんだよ……私も忘れてた。

「お目にかかれて光栄ですわ。エスメラルダ・カタロン当主。その美貌、お聞きしていた通りで、わたくし少し困惑しています」「そうだろうね」

え、肯定した?! いや、本当に美しいんだけど、こういう所って肯定しちゃダメだと思うんだ。

困惑している私と違いコライユは笑顔で肯定を肯定している。

その人はふふと微笑み、美しい口を開いた。

「私の溢美^{いひび}してもし足りない美しくも快美で純美な美しさは鐘美^{かねみ}しょう美^{うみ}」しすぎているよ」

どうしよう何言ってるのか全く分からない。

コライユはニコニコしながら頷いている。クルさんもだった。なにこれこわい。

四八羽

「……して、コライユ姫。私との邂逅で浮かれる気持ちは理解できるが、そろそろ質問に答えて貰ってよいかな？」

「……質問ですか？」

あら？　　と言って首を傾げるコライユ。このバージョン久々すぎるからか、すごい怖い。

「何故——ここに居るかだよ」

……コライユは性別を変える為にここにいる。

一国の姫が……、そんなことを知られたらすごくまずいのでは。コライユは一切焦りも感じさせない花の様な微笑みを浮かべる。

「……観光ですわ」

「観光？」

「はい、今友人と旅をしていますの。この方が私の友達の……コロさんですわ」

「コロ？　珍しい名前だね」

「本名が長いので、省略しているのです。可愛らしいでしょう？」

「そうだね、コロっとしているし、表情も先ほだからコロコロと変わり、可愛らしい」

エスメラルダさんとやらが私を見た。見られるだけで赤面しそうだけど、グラナートで耐久がついてしまったからか、どうにか紅くならずに済んだ。

……コロっとしてるは、聞かなかったことにしよう。

「しかし、観光か……。そんな話はこちらには来ていなかったよ？
コライユ姫が来るのなら、手厚く迎えたというのに」

「そんな、悪いですわ」

口元を隠し、ウフフと笑うコライユ。……クルさん、とりあえず
口閉じた方がいいです。

「今はどこに泊っているのかな？」

「……国民の生活を味わってみたいと思ひまして、この方のお家にお邪魔させて頂いてます」

上品にクルさんに手を向けるコライユに、エスメラルダさんは目を丸くした。

どんな表情でも、どんな角度でも綺麗だ。……絶世の美男が世界に二人もいて大丈夫なのだろうか。そういうのって一人いるからありがたみがあると思うのだけど……。

「それはいけない。いや、カルブunks君の家が悪いと言っている訳ではないのだよ」

「え、なんで俺の名前……」

愕然としているクルさんに、エスメラルダさんは煽惑に微笑む。

「カタロン家の当主として、国民全員の名前は把握しているに決まっているだろう？」

ええ！？ そんなことってできるの！？

クルさんを見ると、どうすればいいか解らないという感じだった。エスメラルダさんはもう一度微笑んだ後、またコライユに向き合

う。

「家に来ないかい？」

「カタロンの御屋敷に、でしょうか？」

「ええ、本当は姫をもてなすのだから国王の城に招きたいのだけど……最近、忙しいらしくてね。大変だね、王族は」

カタロン家か、アメさんに聞いていた話だとちょっと行きたくない様な行きたい様な……。

コライユに任せよう。

「……ご迷惑になりますわ。今回は――」

「迷惑だなんてとんでもないよ。私が、カタロン家が姫の一人ももてなせない愚図だと思われるかい？ この程度事で不利益を被る程度だと思われるのなら、心外だね」

「……いえ、そんなことは思っていないませんが……」

「嫌なのかい？」

少し哀しそうに微笑んだエスメラルダさんに、コライユは一瞬顔を引き攣らせるが完璧なまでの笑顔を貼り付けた。

「いえ、そんなことは」

コライユの負けだった。

かくして――私達は、カタロン家にお邪魔することになってしまった。

……この、異質な感じ……パーティメンバーな気がしてならない。

馬車の様なモノに乗せられ、着いた所は——屋敷だった。
黒々と輝いている屋敷。

窓だけが黒くなく、夜景のような美しさだ。
執事みたいな人に案内されて、中に入る。

「うわぁ……」

大きな階段の上には、エスメラルダさんとやらの金の装飾がついた大きな肖像画。その横には、エスメラルダさんの肖像画より何回りも小さい簡素な肖像画が、両端に12枚程飾られている。

ナルシスト一家なのかな……。

「あらあらあらあら、その人達はどうなされましたのお兄様」

嘲笑う声と共に、一人の少女が階段から降りて来た。

ワンレンで縦巻きロールな緑の髪に、深緑の明眸。クラシカルなドレスを身に纏った少女は、息をのむ程の美貌を持っている。けど、グラナートやエスメラルダさんの方が美しいというのが、何かこの世界の不条理を感じる。

唇を歪ませて私達を見ている彼女からは、嘲りしか感じない。

「こちらはヴァイス国のコライユ・アンゲルス姫だよ。たまたま観光に来ていた所、はち合わせてね。家に泊って頂こうと思ったのさ」
「ヴァイス国……に居たのって姫だったかしら。まあいいわお兄様、あたしも今日は客人を泊らせているの」

「そうなのかい。珍しいね」

「……うふふ、そうよ。珍しいわよ。どうしてか解る？ どうしてあたしが客人を呼んだか、聡明なるお兄様なら解るんじゃないかしら」

絶対当てられないという嘲りが取って解る様な、歪んだ表情を浮かべるその子にエスメラルダさんは微笑む。

「残念だけど解らないな。どうしてだい？」

負けを認めた言葉に、少女はあざ笑おうとするけど口端を引き攣らせる。

……勝負に勝って、試合に負けたような感じだ。

「お兄様になんて教えないわよヴァーカ！」

顔を真っ赤にして、彼女は去って行った。
完全に負けてる。生意気なお嬢様だと思ったら、ツンデレな女の子だった。

結局、何だったんだろう？
すごく、嫌な予感がする。

「勇者のインモラル? (前書き)」

※下ネタ的なもの注意。

読まなくても支障はありません。

「勇者のインモラル？」

結局、俺達はあのよく分からない女の家に来る事になった。

ディアの『困っているなら助けるべきだ』という一言の所為だ。
あれがなかったら、無視してたのによ……。

深いため息を吐いて、ソファに腰掛ける。

「ちよつと馬鹿ーっ！ 馬鹿、馬鹿馬鹿愚図！」

扉を破壊したいとしか思えない力で扉を開け、飛び込んできた女が俺の元に来る。抱きついてきそうなソイツを避けて立ちあげると、女は無様にもソファに飛び込んだ。

「何で避けるのよ！ ベシエ・オリジナル 死者のくせに！ ベシエ・オリジナル 死者はカタロン家の足

を舐めるのも悦に入らなきゃいけない様な人種なのよっ！」

「うっせー、ベシエ・オリジナル 死者であるっー差別は、勇者になった事によって緩和されてんだよ」

「だから勇者になったの？ ってあんたの事なんてどうでもいいのよ！」

甲高い声で喚く女を無視して、テーブルに置いてある水を飲むと――後ろからタックルされる。背後から腹に抱きつかれた。

「な、何すんだ変態！ てめーと結婚するつもりはねーぞ！」

「ハァ！？ 頭可笑しいのも大概にしなさいよ！ それよりっそれよりっ！ 初恋の人が居たのよ！」

「知るか！ 離せ死ね埋もれろ！」

つい噴き出してしまった水を手の甲で拭き、離れた女を睨む。

「ど、どうしよう、何で？ でも、髪の色も目の色も変わってたの！ 雰囲気も変わってて、名前と立場だけが一緒に……！」

「違う奴なんじゃねーのか」

激しくどうでもいい話だ。

女を無視して、ベッドに向かう。もう寝よう。ディアやアメが居れば話もできるけど、一人で起きてても意味ない。

いつも通りシャツを脱いで、そのまま寝転ぶ。

「無視するんじゃないわよ！ 私本当に悩んでるんだからっ！」
「うざい」

枕に顔を埋めて、無視する。興味ねー奴の興味無い会話程、つまらない物はない。

ひたすら無視していると、ベッドが沈んだ。女はひたすら俺の頭を叩く。

「それで、どうやったら一夜の過ちを犯せて、子供ができて結婚が破棄されるか一緒に考えなさいよ」

「何だよ一夜の過ちって」

「何って、あんた童貞？」

「道程？ 道のりがなんだよ」

「……うわ、あんた……その歳で……、うわあ、どん引き」
「はあ？」

顔を上げてソイツを見ると、言葉の通りどん引きしていた。
ドウテイ？ 何だそれ。

「童貞っていうのは、異性と肉体関係を持ってない奴の事言うのよ。その歳で童貞っていうのは恥ずべきことね。ベシエ・オリジナル死望者だから仕方ないかもしれないけどお」

「肉体関係？ 決闘でもすんのかー？」

「……うわ、知識なしの童貞って何それ。何で知らないの？」

「……はあ？」

「肉体関係って言うのはねー」

つらつらと女が肉体関係とやらを説明しはじめた。

「——と言う事よ」

「………なあ、ちょっといいかー？」

「何、してみたいとか言ったら世界から抹殺するわよ」

「それはねーな」

鼻を鳴らす。俺はそんなに趣味が悪くない。

そんな事はいい。

「……子供って、本当にその行為でできんのか？」

「当たり前でしょ、それ以外でどうやって作るのよ」

「抱きしめ合って、子供が生まれるんじゃないのか？」

俺の言葉に女が噴き出した。

……その反応、グリースでもあったんだけど。

「ありえないーっ！ 馬鹿じゃないの！ あはははははっ！ 頭可笑しいんでしょ！ そうでしょ！」

「……学校で教えられたんだよ」

「はーっ！？」 馬鹿馬鹿馬鹿なの？ 何で学校でそんな事教えるのよ」

「知るか」

ベシユ・オリジナル

「あー解った、あんたが死望者だから、欲望に任せて女を襲わないように学校が善処したのね。……ちよっと、襲ったら殺すわよ？」

「ありえねーよ。てめーとそういう事する程度なら、そこらへんに飛んでる鳥とした方がマシだ」

「死ね」

強めに頭をはたかれた。触りたくねーって言う割に、すげー触ってくるじゃねーか、今までコロが俺を触った10倍位触られたぞ。

「んな事はいーんだよ。……アイツが子供できてねーって言った意味がよーやく分かった」

「はい？ ……なに、抱きしめ合って子供が生まれるって勘違いした状態のまま、抱きしめ合った人がいるの？」

「おー」

「……それは、アレね」

「あん？」

「あんたが好きだから子供ができる覚悟で抱きしめ合ったのではなく、その行為で子供が生まれないって解ってるからしたのよ。勘違いしちゃダメよ」

「……だろーな」

困った顔をしながらも、コロはそこまで嫌がりはしなかった。それを俺は今まで、俺の事が好きだからだと思ってたが――違ったんだ。

「……茶番劇に付き合ってくれてたその子に感謝しなさいよ。普通なら馬鹿だと思われてハイ終了よ。あんたの事本当に好きなら――本当の事を教える筈なんだから。あんたの事愛してるなら、そういう行為をしたいと思う筈なのに、その子はあるに教えなかった。」

その意味が——解るでしょ？」

——好きじゃない。

コロは俺の事を好きじゃない。

「んなの解ってんだよ、恋愛的に好きじゃねーって言われたばっかりだしなー」

「もうアウトじゃない。諦めなさい」

「無理」

「……何で」

ベシエ・オリジナル

「死望者の本質を解ってねーな。……ウチの血は、強制強要強行強暴な傍若無人極まりなく、地で天上天下唯我独尊を行く様になってんの。先天的になー。この血じゃなければ……もつと内気で、心優しい子になってるっーの」

「それはないわ」

「俺もねーと思った」

先天的な物がどれほど影響しようとも、後天的な物には勝てない。
血の所為にするのは、お門違いだ。

ベシエ・オリジナル

「……で、なんですか。死望者君はもしかして次こそ強姦して孕まして既成事実作って自分の物にしてやるぞー。という決心をあたしに打ち明けた訳？ 犯罪宣言ですか？」

「……それもいーかもしれないけど、今の状況でやったら修繕不能になりそーだな。どうにか戻すけどよ」

「これをいって言うてる時点で、女の子は『もげろ』と思ってるわよ。もげろ」

「……やっぱり駄目か」

「ダメ所の話じゃないから。嫌われるどころか怨まれて、その子が心優しくて優柔不断な子だったら、そのまま子供生んじやって、憎

い男の子供だと思いながら育てた結果、ストレス負荷かかり過ぎて一家心中。もしくは虐待とかありえるわよ」

「……詳しいなーおい」

「そういう書物があるのよ、大好きなの、面白くて」

「人の不幸を笑うのは最低だと思うぜー？」

人の道説こうとしてる癖に、コイツ自身人の道を間違ってるだろ。女はため息を吐いて、偉そうな顔をする。

「あんた、恋愛初心者も初心者で犯罪起こしそうだからこのイズム様様が助言してあげるけど、順序ってのは大切なのよ？」

「順序ー？」

「恋人になるまでも、何回も話しかけたり、遊びに誘ったりして相手に好意を持たせ、好意を持たれた所で告白。『好きです。恋人になってください』辺りをちよろっと加工しなさい。あんたの場合、ベシエ・オリジナル死者だけど外見は拔群にいいからどうにかなるでしょう」

「……はあ」

「それではれて恋人になれば、そのあとはデートして、三回目のデート位の時にキス。三カ月後のデートで肉体関係まで纏れ込むってというのが、まあ一般的なんじゃない？」

「……デートって、俺勇者だぜー？ んな時間ねーよ」

旅始ってから、コロを二人きりになれた時間は少ない上に、二人きりで出かけた事なんてない。

「そんなの知らないわよ、勝手にしなさいよ」

「……役にたたねーな」

「……知識童貞を卒業させてあげたのは、いったいどこのどの美麗なるイズム様だったかしらあ？」

うぜー、この上なくうぜー。

あんな事知ったって、なんの得にもなんねーよ。
むしろコロが知ってて俺に隠し……あ？

……ちよつと待て。なんでコロは知ってるんだ？

「なー、てめーってそういう事した事あんのか？」

「あるわよ。当たり前でしょ死望者^{ベシエ・オリジナル}じゃあるまいし」

「そういう知識を知ってるってことはよー……そういう事した事あるってことか？」

「はあ？ ……ああ、あんたの片思い相手の事？ その子がどんな子か解らないからどうとも言えないけど、12歳以降の子なら知識位知ってるんじゃないの？」

「……俺の周りの奴は、誰も知らなかったぞー」

「あんたの国が可笑しいのよ、国が」

「……」

知識を知ってるだけか？ ……それとも、コロはそういう行為自体をしたことがあるのか？

「……むかつく」

「しょうがないでしょ、あんたの国が可笑しいんだから」

「そーじゃねーよ。……アイツが、他の奴と愛し合ってたとか、そういうのすげームカツク」

「過去を気にする男ってやだー……」

コイツの言う通り、過去を気にしてソイツの価値を決めつけるのは最悪だ。

だけど、理屈じゃない。嫌だ。ムカツク。

「そんなに気になるなら聞けば？ って、そんな話はいいのよ。何

でこの華麗なるイズム様があんたに助言しなきゃいけないのよ。馬鹿。あたしの相談に乗りなさいよ！」

ぎゃあぎゃあ騒ぐ女の相談内容は、婚約破棄する為に初恋の相手と既成事実作りたいって事らしい。

お前も既成事実作ろうとしてるじゃねーか……。

四九羽

晚餐が終わり、私は割り当てられた各自の部屋（何故か全員個室）に案内された。

中世を感じさせる高級な客室は、一人で使うには勿体ない。ネオバロックなソファに腰掛け、意味もなくため息を吐く。コライユがどの部屋に居るか解らない為、行くのは無理だ。クルさんは、家に帰ったのだろうか。

「入ってるよ」

「!？」

背後から鈴が鳴る様な綺麗な声が聞こえ、急いで振り向く。エスメラルダさんが居た。

不法侵入……は相手が家の当主だった時には言えない言葉だ。だけど、せめてノックはして欲しい……！

エスメラルダさんは呆然としている私を一瞥してから、私の隣に腰掛ける。

「君は、カタロン家の認定試験を受けた事があるかい？」

「はい？」

「いや、ね。君の魔術は桁違いだから、カタロン家の人間かと思っただよ」

「ち、違うと思います」

「と言う事は、試験は受けてないのだね」

思考を鈍らせる狂惑な笑みを見て、頷いてしまう。

「受ける気はないのかい？」

「な、ないです」

エスメラルダさんから顔を反らし、それだけ伝える。
カタロン家にお世話になるのは、なんとなく嫌だ。

物語を壊すのならば、どこかに留まっておくのもどうかと思うし、
私には青い鳥のDNAはない筈。
ブルー・オウゾー

「そう。それは残念だね」

「すみません」

あまり残念そうでない事が幸いだ。

「では、どこの家の者かい？」

「……えーっと。普通の、ごく普通の家庭ですが……」

「突然変異みたいなものかな。面白いね」

クスクスと笑われて、ある事に気づく。

エスメラルダさんは、私に触れてない。——つまり、魔術が多い
なんて気づく筈がない。
。

首を回し、エスメラルダさんを再び視界に入れる。

森を彷彿させる深緑の眸に、私が映っている。エメラルドの様な
ソレは、果てしなく綺麗だ。

「……悔しい事にね」

「え？」

「君の魔術量は私より勝っているのだよ。世界一の魔力量を誇る私
にね」

「は、はあ……」

愁いを含んだ表情で見つめられ、思わず謝ってしまった。

「ふふ、謝る事はない。世界で一番神に近いとされる私を抜いたと言う事を誇りに思うといい」

「はぁ……」

「万物を従わせる神である私に、君が一番近い。初めてだよ」

……神になっちゃった。

どうしよう、この人厨二病なのかなあ。

「奇し御魂を一億は宿している、神楽を舞われるに相応しい常に神有月な私と同等の存在と言う事だよ。誇るといい」

何言ってるのか全く分からない。

ただ神有月というのは、10月の事だったと思う。常に10月ってどういう事なのだろうか。

やっぱり変な人だ。

「私の家族になるに相応しい、他人だよ。君は……」

「はぁ、は？」

同じトーンで言われた言葉だから、思わず聞き返してしまった。

エスメラルダさんは、幻惑な笑みを浮かべる。

それってもしかして……プロポーズ……？

「私の子供にならないかい？」

まさかの斜め上だった。

五十羽

「な、何で子供なんですか？」

求婚なら、解りたくないけど少し解る。

だけど、養子縁組を申し立てられるのは、なかなか意味が解らない。

「私には婚約者がいてね」

「そうなんですか？」

「正面玄関で出会っただろう？ あの子だよ」

脳裏に浮かぶのは、どこかエスメラルダさんに似た少女。

あの子は、エスメラルダさんの事を『お兄様』と呼んでいた。

「え、えーっと、お兄様って呼ばせてるんですか？」

妹萌えの変態なのか、と結論づけようとする私に、エスメラルダさんは優しく微笑む。頭についている小さい砲丸が、ぴこんぴこんと動いた。……動くんだ。

「家はね、血縁同士でなければ結婚できないんだよ」

「へー……。……。……。へ？」

「彼女は序列4位でね。婚約者として相応しい立場にいるんだよ」

「……。え、でも、血は、その従姉妹以上繋がってませんよね？」

従姉妹と結婚はできない。

四分の一以上繋がっていたら、結婚できない筈だ。理由は、色々

ある。

「いや、三分の二繋がっている立派な兄弟だよ」

「……………」

三分の二……？

どういうこと？ えっと、三？ 一多くない？

母親が姉妹で、父親が二人と結婚したら三か……？

「ふふ、私は一多いのだよ。血が、ね」

「……そ、そうですか」

聞いてはいけない、いや——聞きてしまったら引き戻れなさそうな話だったので、どうにか話を終わらせる。

血が一多いという意味が全く解らないのだけど……。聞いたらデアアの時の二の舞になりそう。

「さて、そろそろ本題に入ろうか」

「本題まだだったんですか!？」

「ああ、そうなんだよ。つつい楽しくて、長話をしてしまってね……。こうやって他人と話せる事は、珍しいからね」

「……そ、そうなんですか」

この世界の住人は、口を開けば暗い話ばかりな気がしてならない。暗い話の地雷畑だ。

「ふふ、私は神として崇められているからね。こうやって普通に、私を人間扱いする人はいないのだよ」

「そ、そうですかー」

それでもこの人は幸せそうだよね……。セルフ幸せというか……。

友達の言ってた『微妙』の意味が解った気がする。多分、この人もすごい闇を抱えているのだろう。

だけど、本人が全く気にしてない。それどころか、誇っているようにも見える。

グラナートは、どうなんだろう……。？ 彼の過去を私は知らない、友達によるとそこまで悲惨じゃないみたいだし、あまり過去に固執している感じもない。

けどあの歪曲して、狂乱な思考は少なからず過去が関係している筈だ。

「それでね、コロ君」

「えっ、はい!？」

いつの間にかエスメラルダさんが話進んでいたようだった。

エスメラルダさんの声は、音楽の様に浸透していくから、考え事をしてしまった時は全く頭に入って来ない。

「明日、大規模なパーティが開かれるのだけど、それに参加しないかい？ という話なのだけどどうかな？」

「あ、はい、参加します」

「そう。きっと楽しいものになる筈だよ、楽しみにしていなさい」

花が咲き誇った様に微笑んだエスメラルダさんは、優美に一礼してから部屋から去って行った。

……適当に返事をしてしまった。ごめんなさい。

「……うーん、寝よう」

起きて考え事しても、解決しない。

過去の事を探る方法はないし、……探るのも嫌だ。

だけどそこに、物語を壊す鍵が隠されているのかも知れない。
嫌だなんて言ってられない時が来るだろう。

目を開けると、自分の顔が視界に入った。

「!?!?!?」

「おはようございます」

私は鏡の前に座っていた。私を取り囲むように、数人のメイドさんが居る。

顔にはすでに化粧が施され、ドレスを身に纏っている。

淡い水色を基調とし、胸の部分だけ白く、袖口には金色の刺繍が施されている。ちよつとだけ、不思議のアリスっぽいドレスだ。

「……えーっと、これは……」

「今日はパーティがありますので」

メイドさんがニコニコと笑いながら答えてくれる。

壁にかかっている時計は、九時半を示していた。窓からは明るい木漏れ日が……。朝だよね。

「……朝から、パーティを？」

貴族のパーティは夜のイメージがある。黄金に輝く、特大級のエントランスホールみたいな所で、赤やらのドレスを着た縦巻きカールのお嬢様が踊る感じの奴だ。

「ええ、十時から始まります」

「早いですね」

「そうですか？」

本物の貴族は、朝からパーティをするのだろうか？

……大体、なんのパーティ？

……コライユが来たから？ ……コライユは、確か世界一の人口を誇るヴァイス共和国の姫だ。姫の中で一番重要視される姫かもしれない。

一日でパーティの用意なんて出来るものか？ ……ここ、剣も魔法もある世界じゃないか。一時間あればパーティの準備なんて整うだろう。

「準備が終わりましたわ。行きましょう」

「あ、はい」

メイドさんに連れられて、私は部屋を出た。

五一羽

今日だけは、屋敷全体がパーティホールなんですよ、というメイドさんの言葉通り、屋敷の中全てがパーティホールだった。

廊下にも料理が並べられていたり、テーブルセットが置かれている。

一番大きな部屋一個では事足りないのだろうか。

貴族の考える事は解らないと、大ホールの柱に背を預けて辺りを観察していると、見知った顔を見つけた。

一度見知ると、永遠に見知りそうな顔面。

「クルさん!」

「……お、おう、なんだ。おめかししてるな」

「はい、寝ている間にいつの間にか」

「なんだそれ」

クルさんが目を細めて笑う。顔面が鳩だから、笑っているとかあまりわからないのだけど、多分笑っている。

「あ、これ食うか？」

「はい」

手に持っていたお皿を顔で刺すクルさんに、私は元氣よく頷く。お腹はぺこぺこなのだ。だけど、取りに行くのもどこか恥ずかしくて、失敗したらどうしようという恐怖で料理を取りに行けなかった。

クルさんの持っているフォークには、ローストビーフみたいな

物が突き刺さっている。

「あーん」

「?! お、おい、えっ」

フォークに刺さっている分だけもらった後は、自分で取りに行こう。クルさんが取った料理を貰うのも悪いし……ただ、一人だと心細いのでクルさんにもついて来て貰いたい。

餌を待つ鳥のように口を開けてクルさんの肉を待つ。人目が気になるけど、気にしない。お腹すいた。

「う、……あ、あーうん」

クルさんがフォークを口まで運んでくれた。

「わぁ！ 美味しい」

「たっ、べながら喋るな、行儀悪い……ぞ」

何故か私から顔を反らすクルさんに首を傾げと同時に、謎の破壊音がした。

硝子を割った様な音が、耳につく。

発生源は、すぐ後ろだった。

見ると、オールバックにされた黒髪に、赤い眸をした――人知を超えた美貌の主が私を睨んでいる。絶世の美男。

タキシードを見事に着こなしており、執事には見えない高貴さにじみ出していた。

その雰囲気と、すこしつり目な双眸には、見覚えがある。

……え、でも。ええ？

グラスを握りつぶした手から、血があふれ出ている。

「……え、グラナート？ ……え？」

「知り合いか？ って、血出てるじゃねえか」

クルさんがグラナート（？）に近づき、懷からハンカチを出して手に当てが、グラナートはクルさんの手を振り払う。クルさんを睨む眸には、殺意がこもっている気がする。

「触んな、消えろ」

明らかに不機嫌な声は、グラナートの物だ。

……何してるの？ あの人。

訝しげな視線を向けていると、グラナート（多分）が大股で私の元に来る。

「てめー。獣が好きなのか」

「はい？ 何を言ってるのかさっぱり……いや、それより、何してるの？ 何その格好？」

勇者が執事にならないといけないなんて、どんな世界だ。

「話反らすな、あの鳩丸焼きにするぞ」

「やめてください！」

グラナートの手から溢れている赤い血が、私の腕の部分を鮮血に染め上げている。

……弁償かな、これ。

大体、何でこんなに機嫌が悪いんだろう？ 八つ当たり？ ……執事のバイト（？）させられて、たまった鬱憤を私とクルさんにぶつけようとしてるのだろうか？

「ちょ、ちよつと何をやってるの馬鹿愚図！」

緑色の袖が視界に入る。

エスメラルダさんの妹さんが、グラナートの腕を掴んでいた。

……え、何その繋がり。

「……問題起こさないで下さる？」

「知るか、今はこっち優先だー」

「……………世界から抹殺してやろうかしら」

物騒すぎる呟きが聞こえた。

グラナートは鼻で笑う。カタロン家ってすごい家らしいから、逆らうと色々めんどくさい事になると思うよ……………？
とはいえず、二人を見守る。

「あの事バラすぞ？」

「…………くっ」

「あの事？」

「…………あー、こいつ」

グラナートが妹さんを指差した。妹さんはその指を掴む。

「…………馬鹿執事…………あつちで、お話ししようか……………？
……………
申し訳ありませんわね、お兄様のお客様方。私の執事が失礼を致しまして」

こめかみをぴくぴくしながら作り笑いを浮かべた妹さんは、グラナートを引っ張ってどこかに行ってしまった。

……………なんだか、仲良さそうだなあ。グラナート……………私やコライユ
という時とは雰囲気とか色々違ったような気がするし……………。

……うん？

何故か胸がちくつとした。……？？？

「ちくつ？」

「どうした？ 大丈夫か？」

「え、あ、はい」

少し血濡れたしまったハンカチを持ったクルさんが、私の顔を覗き込む。

二人が消えて行った方向はスタッフルームだろう。

……二人つきりで、何を話してるのかな？

……………。

「……もやっ？」

「？ どうしたんだ？」

「いえ、意味のわからないモヤモヤやチクチクが……。きっと、黒髪なんかにしてるからですね。そうです、意味もなく似合ってたからモヤモヤしてるんです。元々赤髪だったのに、くどい程赤だったのに」

「え……？」

「はい？」

クルさんが、ハンカチを落とし、目を大きく開いた。

「あの男——ベシエ・オリジナル死望者なのか？」

「……へ？」

五二羽

ペシエ・オリジネル

死望者って何だっけ？　と言う疑問より、私の中に渦巻く全く意味が解らない感情が気になって仕方がない。

……嫉妬のような感情。

を、私がグラナートに抱くの可笑しい。

嫉妬する理由がない筈だ。……それなのに、私は嫉妬に似た感情を抱いている。好き？

グラナートを思い出して見る。天上天下唯我独尊を地で行く人だ。何事も常に強制だし、たまに優しいけど基本的に自己中心的な気がする。特に、私に対しては……。

ディアに対しては驚くほど気を使っているのに、他に対しては殆んどと言って程気を使っていない気がする。

グラナートは……私の事、よく分からないけど好きらしいし、私も好きだ。でもそれは恋愛感情というより、友愛感情みたいな物で……、う……うーん？

………なんだろう、この世界がファンタジーだから実感がわかないのかも知れない。

例えば、これが現代だったら……？

——私とグラナートは同じクラスで、何故かグラナートは私を好きで何かと（勘違いだけど相手にとっては）法ギリギリのアピールをかけてくる男の子だ。今まで他の女の子にそういう事をしてるのは見た事ないので、多分一途だと思う。

だけど喧嘩してしまい、グラナートと私は少し離れる。

その少しの間に——グラナートは隣のクラスの美人お嬢様と仲良くなっていた。しかも髪まで染めて、髪型変えて、喧嘩しながらもとても仲がよさそう。

——私への気持ちなんて偽物だったのか！

……と思うよね、思う思う。なんて軽い男なんだと思う。

ああ、それだ。

グラナートが彼女を好きだって感情云々より、そういう部分が気になるんだ。

結婚するとか言いながら、既成事実作ろうとしながら——喧嘩したら簡単に乗り換える。

グラナートが、本当の事を知らなかっただけで、もし知っていたら……私の身には子供が宿っていた可能性があるのだ。

そんなの事をしておきながら、グラナートはあっさりと……。

この感情は——嫉妬じゃなく——道徳的な嫌悪だ。

ファンタジーの世界に、道徳なんてものを求めるのは些か可笑しいきもするけども……。

「って、はっ！　ごめんなさいクルさん——あれ？」

随分の間思考して、クルさんを放っておいてしまった。急いで顔を上げると、クルさんの姿はなかった。

「えっ、あれ？」

キョロキョロと辺りを見渡すと、コライユの姿をはるか前方に見つけた。

全体的に色素の薄い青年と喋っている。その青年は、何故か裾が長い服を着ている。パーティには相応しくない様な格好だ。

その青年が、コライユの手を取り、くるとコライユの身体を回転させ、背後から抱きしめ——首にナイフを当てた。その手は、何故かロボットのような銀色だ。

「……はい？」

二人を見ていた貴族の人達が悲鳴を上げて、二人から距離を置いて行く。ホール内に悲鳴が木霊している。

「え……えっ」

私は混乱しながらも急いで二人に近づく。一定の距離を取って二人を取りこんでる人ごみに紛れこみ、一番前に出た。

「勇者を呼んで来い」

コライユを拘束している男は、一言そう言った。

……勇者ってグラナートの事？

だ、大体、周りの人は何してるの！？

魔術仕っていっぱいいるのでしょうか？ この中も8割魔術仕の筈だし、カタロン家ってすぐく有名な魔術仕家庭なのだから、誰か一人位……。

『ああ当主が居てくださったら……』

『あの方はヴァイス国のコライユ姫よね……助けたら恩寵が貰えるかも知れなけど、もし失敗したら……』

『あの男もシアンの人間だろ？ シアンに喧嘩を売ると……』

人々のざわめきがやけに耳につく。

……でも大体わかった。

あの男はアメさん達が所属している世界最大の組織——シアンの人間らしく、コライユを助けようとしても失敗するの可能性がある。万が一の確率で成功したら、ヴァイス共和国という後ろ盾がで

るけど、失敗したらヴァイス国から怨まれ、きっと処刑されるだろう。

そんな賭けはしたくない。

ああ、当主が居てくれれば。ってことか……。エスメラルダさんは、どこかに行ってしまったらしい。いったいどこに……。

いや、今はエスメラルダさんの事より、グラナートを呼んで来ない……。い……。

「勇者を呼んで来い、この女の首が飛ぶぞ」

「っ、コライユ！」

コライユの首にナイフがより近づき、私は思わず叫んでしまう。

コライユは——ふわり、と微笑んだ。

「コライユ……？」

人質にされている人の顔ではない。それ程までに清々しい微笑みを、コライユは浮かべたのだ。

——まるで、もう死んでもいいようなそんな笑み。

……コライユは、世界に絶望している。つまりそれは——自分の生にも興味がないと言う事ではないだろうか。

「……コライユ、やめて」

コライユは魔術仕だ。今は武器を持ってないから、8割の力を使えないかもしれない、だけど相手の注意を反らして逃げる程度の魔術は使える筈だ。

それをしないのは、何故……？

コライユはただ微笑んでいる。

「……コライユ、ダメだよ。やめて、死んだら崇るよ……?」

コライユの顔が、不安げに歪んだ。

何で? 約束したのに……ちがう。約束なんてしてない。コライユは私の言葉に頷いてなどいない。信じてくれて、ないのかもしれない。

ここで死ぬつもり? ——そんなのっ……絶対に許さない!

「叶えるって言ったでしょ! こんな所で死んだら本気で、私の魔力全部使っても崇ってやる! 天国になんて行かせやしない地獄だよ地獄! いっそ自縛霊にしてやる!」

「……あはは」

声を出して笑うコライユに、色素の薄い男は無表情で私達を見ている。

人形のように、表情が変わらない男は不気味すぎる。

——魔術の使い方は解らない。私がコライユを助ける方法はたった一つ。人質の——変更だ。私が、コライユの代わりに人質になる。

五三羽（前書き）

※残酷表現注意です。

五三羽

人質の変更を申し出ようとした時、誰かが私の肩を叩いた。
その人は、飄々と前に出る。漆黒の髪にタキシード。

「……グラナート？」

呟くが、返答が帰って来ない。

「お前が勇者か」

「そーだけど？」

その声を聞いて、やっぱりグラナートだと解り、胸を撫で下ろした。勇者なら、グラナートなら……きっとコライユを助けてくれる。そう思って、グラナートのたくましい背中を見て、ある事に気づく。
……武器を、持っていない。

人質にナイフを突き付けている男に、素手で勝てるのだろうか？
……グラナートが魔術を使っている所を見た事がない。魔術も武器もない。

先ほどの不安が蘇ってくる。

「この女は、貴様の仲間だろう」

「……さーな」

「……はぐらかすな、知っている。この女の命が惜しければ、勇者手帳と腕輪を寄こせ」

「ハイハイ、でも……手帳はともかく、腕輪は取れねーぞ？」

「手首を切り落とせばいいだけだろう」

「……すげーこと要求してくんなー」

「でなければ、この女は死ぬ」

手首を切り落とす？ ……腕輪は、利き手につけられてる筈だ。そんなものを切り落としてしまったら――。

でも、男はずっと無表情で……きつと、グラナートが腕を切らなければ、いとも簡単にコライユを殺してしまうだろう。ここはファンタジーの世界。あっさりと、人なんて殺す。

シアンと言えば、あの危険人物トパーシオの所属している場所だ。安易に、人の命の価値なんてゴミみたいに殺す姿が想像できる。

どうするの……？ ドキドキと、嫌に鼓動が速くなって苦しくなる。

「解った。剣寄せ、他人に斬られるのは屈辱的だしな」

グラナートはそれに乗った。色素の無い人は、探る様にグラナートを見てから、小型のナイフを取り出す。床に落として、蹴った。そのナイフはグラナートの足元に届く。

ナイフを拾い上げて、グラナートは自分の人差し指を切った。ぷつりと血が出てくる。軽く触れただけだったのに、あんなに……。ただどあんな小型なナイフで、骨を切る事なんてできるものか。

だけど――やりそうなのだ。グラナートならば……。背筋がひやりと、冷たくなった。

「グラナート……？」

私の呟きに、グラナートは全く反応しない。

何かを考える様に沈黙してから、グラナートが笑った音が聞こえた。自嘲じみた笑み。

私は人ごみをかきわけて、グラナートの顔が見える様な所まで移動したかったけど、できなかった。縫いつけられた様に、足が動かな

い。

グラナートがナイフを握り直す。切るつもり……？

私には、あの人の実力が解らない。切らないと、勝てない相手なの？ ……本当に、切らないといけないの？ そんな事しなくて、他にも案はある筈でしょ？

胸が苦しくなる。私は何もできない。胸を押さえて、見たくなくて、目を瞑ると――嫌な音が耳に届いた。

大ホールが悲鳴に埋め尽くされる。目を、開けられない。開けてはいけない。開けたら……開けたら、泣いてしまいそうだ。

さっき、グラナートが肩に叩いた部分に触れた。

魔術がある、だから永遠になくなる訳ではないだろうけど、ちょっと見たくない。一瞬たりとも、利き手がなくなった彼の姿なんて見たくない。でも――逃げてはダメだ。私は決めたじゃないか。この物語を壊すと。

今までずっと逃げてた色々な事から。だけど、これ以上逃げてはいけない。逃げるのは許されない。私は――“彼女”として物語を破壊するのだから。

ゆっくりと目を開ける、初めに目に入っただのは鋭い軌道を描き、二人に向かうナイフだった。コライユと、男の驚いた顔が見える。私も目を見開く。奇襲……？ 鼓動が速くなり、ナイフの軌道を追った。

何故かスローモーションで見えるナイフは――コライユの腕に刺さった。ミス……した？ やっぱ、利き手じゃないから、軌道が狂ったんだ。

グラナートの奇襲は、失敗した。今度こそ、望みが絶たれた。グラナートの手にはもう武器はない。奇襲は一回きりの勝負だった筈だ。

桃色のドレスが鮮血に染め上げられ、深く突き刺さったソレを見て――コライユの口端が上がった。

「オイオイ、マゾに目覚めちゃったらどうするんですか」

いつも通り、軽薄にコライユが笑う。え……？
薄く色づいている唇と開き――

「プノエー！」

突風が吹き、コライユが空を舞う。

その魔術は、いつもより強い？ 何で？ 武器はない筈なのに。
くるりと回ってから、コライユはグラナートの横に降り立つ。

「……あー痛い痛い。首も怪我しちゃったぜ」

「捕まるお前がわりーんだよ。注意しろよー」

「へいへい」

ケラケラと笑う二人を見て、愕然としてしまう？ ……もしかして、全部計算？ 腕を切り落としたのも、コライユにナイフを投げつけのも。

思わずグラナートの腕を見てしまい、顔を背ける。床には、切断された手が……。

「……侮っていた。こんなに頭が可笑しい連中だとは思ってなかった……」

「おーどーも、最高の褒め言葉だ」

「……貴様ら、優勢に立ったつもりか？」

その言葉で、私は男を見る。……優勢なのだろうか？

コライユは魔術を使えるけど、はたして……コライユがいいなりになっていたのは、コライユ自身が生にあまり興味ないからだろう

か？ 冷静に考えれば、それは違う気がした。

それだけなら、とっく昔に死んでいる筈だ。なのに、今まで死んでなかった。それは、何で？

今回コライユが諦めたのは、どうあがいても敵わないと思ったからじゃないの？

もしそうなら、全く優勢ではない。グラナートは片手を使えるけど、武器は何ひとつない。しかも、いつもは大剣を両手で使っている、片手ではいつもの半分以下の力だろう。

この状況でも、誰かが二人の助太刀をするという事はないようだ。……私も何もできない。盾になる事はできるかも知れないけど、それを二人が許すとは思わない。

……どうすればいいの？ 何も浮かばない。

もし、このまま――二人が、死んでしまったら、どうしよう。そんなのは、耐えきれない。心臓が壊れるほどに音をたてている。息が苦しい。

「……貴様らを殺す理由はない。腕と手帳を寄こせ」

「……お優しーなー」

ケラケラとグラナートが笑う。

よかった、殺されはしないのか……でも、グラナートの片手が取られる。男の腕は多分義手で、義手という技術があるのだろうか。

殺されない。その言葉に、私は深く安堵した。

先ほどまで、息苦しかった呼吸もどうにか元に戻って行く。よかった……よかった。涙ぐみ、グラナート達を見つめた。

懷から手帳を出してから、腕を拾ったグラナートは、そのまま歩いてその人に近づく。近づいて大丈夫なのだろうか？ 危なくないかな……？

「どーぞ」

「……」

受け取ろうと手を出した男に――グラナートは切断された腕と手帳を投げつける。

え……？　と思ったのは私だけではなく、その人もで、グラナートが一瞬で距離を詰めても動かなかった。いや、動けなかったのだろう。

グラナート切断された方の腕をその人の顔面に向けたのだ、切断部分を。

「バーカ。――剣士が魔術使えねーって誰が決めた」

にやり、とグラナートが笑ったように思えた。

「リオート」

「……ッ！」

しかし、男は瞬時に魔術を避けたが、既に遅かった。グラナートは一瞬でその男に近づき、お腹に蹴りを入れる。顔を歪ませ、上半身を落とした彼の頭にかかとを落とす。

「ぐうっ……！」

床にうつ伏せに倒れたその人の頭を、グラナートが踏んだ。

「勇者のインモラル? (前書き)」

※閑話。グロ注意。53羽と同じ話です。

「勇者のインモラル？」

ざわめきが聞こえて、俺は小部屋から出て大広間に向かう。

「愚図！ さっさと来なさい！」

女が小声で俺をまくしたて、顎で人ごみを指す。

どうやら、勇者を探して謎の暗殺者が入り込んだ挙句、人質を取っているらしい。

……勇者って不憫だよなー。

世界を救う為の勇者が、何でこんなに嫌われなきゃいけないんだよ。

髪を掻いてから、中央に向かう。

「頑張りなさいよ！ へましたらご飯抜きだからね！」

「犬扱いかよ」

俺って頼まれてここにいるよな？

ため息を吐いて、人ごみを掻きわけ、進んでいく。後ろで女が逆方向に歩いて行く気配がした。

人ごみから前に出ると、コロが居た。不安げに前を見ている。その視線の先には、男と捕えられた人質が居た。腕が鈍い銀色が輝いている。いわゆる義手だ。両手とも義手って初めてみたな。

男に捕まっている桃色の女が俺を見て、悲しそうに顔をゆがめる。……一瞬誰かわかんなかったけど、コライユじゃねーか。早く魔術でぶっ飛ばせよ。魔術具がねーから無理なのか。

コロの肩を叩いてから、一步前に出た。

「お前が勇者か」

「そーだけど？」

全体的に色素が薄い男は、無表情で頷く。コライユの首には小型のナイフが突きつけられている。すぐ切れそうだ。

でも、脅しで切る事は絶対にしない。あっちが不利になる。

だから――1回でも怒らせたら終了。怒らせたら、コライユは魔術を使っても回復でできない傷を負って死ぬ。瀕死ならまだしも、死ぬ傷は治せない。不便だよな、魔術って。万能な物なんてこの世にはないのか。

「この女は、貴様の仲間だろう」

「……さーな」

アメミみたいな喋り方だな。暗殺者ったら、シアンか。アメもシアンに所属してるのだから、喋り方が似て当然か？

「……はぐらかすな、知っている。この女の命が惜しければ、勇者手帳と腕輪を寄こせ」

「ハイハイ、でも……手帳はともかく、腕輪は取れねーぞ？」

「手首を切り落とせばいいだけだろう」

「……すげーこと要求してくんなー」

「でなければ、この女は死ぬ」

コイツは本当に殺すだろう。そんな目だ。俺と同じ、人の生死に興味ない目。

……だけど、甘いな。違う馬鹿だ。頭はそこまでよくねーな。情報収集を怠った。

その捕まえている女が普通じゃねーことと、俺の事を知らなさすぎだ。

「解った。剣寄せ、他人に斬られるのは屈辱的だしな」

男は探る様に俺を見て、懷から小型のナイフを取り出す。床に落として、蹴った。そのナイフは俺の足元に届く。

馬鹿すぎて相手にもならない。もうちょっと俺を楽しませてくれる奴はいないのか。あのイノシシ鹿はなかなかだったのになー。ナイフを拾い上げて、確認する。すげー切れ味のいいナイフだ。

「グラナート……？」

背後から、コロの不安げな声が聞こえた。

目でも瞑ってると助言してーが、そういう訳にも行かない。

……俺ってアイツにトラウマばかり植え付けてる気がするんだけど、気のせいかな？

自嘲気味に笑ってから、ナイフを握り直す。

右手にある腕輪を除けるには、手首の丁度真ん中あたりを切らないといけない。そこに焦点を合わせて、勢いよくナイフと振るう。

痛いなんて屁でもねーし、激痛も慣れてる。

計算違いだったな馬鹿野郎。こーいうのは慣れてんだよ。

悲鳴が大広間に埋め尽くす。床にはゴロンと転がった腕。手首からは、大量の血が流れ落ちる。痛い、それを表には出さずに、男に笑いかけた。

男も目を見開いた後、呆然とする。ああ、そういう反応すると思ってたよ。お前ごときの人間なら。多少躊躇すると思ってたんだろ？ その後切れたとしても痛がって、タイムロスが生じると思ってるんだろ。どーせ。

隙を狙ってナイフを投げつけた。残念だな、俺は両効きなんだ。片手が落とされようが、関係ない。一直線に、ナイフは飛ぶ。ただ、狙う相手は男じゃない——コライユだ。

一瞬、目を見開いたコライユの腕に、ナイフが突き刺さる。

コライユが、機転を利かせてくれねーと意味がない。だけど、多分コイツなら大丈夫だ。

生気の宿ってなかった目に、光が戻った。まったく、何勝手に死のうとしてんだよ。崇るぞ。

「オイオイ、マゾに目覚めちゃったらどうするんですか」

ケラケラとコライユが笑う。男はコライユは豹変した事に驚く。俺が腕を切り落とした事、俺がナイフをコライユに刺した事、コライユが豹変した事の三つに驚いた男は、隙だらけだった。

「^{突風}プノエー！」

突風が吹き、コライユが空を舞う。

魔力は血を使って発動するもの、その血が予め外に出ていたら、魔術具が無くて10割の魔術が使える。

バク宙してから、コライユは俺の横に降り立った。

「……あー痛い痛い。首も怪我しちゃったぜ」

「捕まるお前がわりーんだよ。注意しろよー」

「へいへい」

愕然と俺達を見ていた男の表情が変わる。

「……侮っていた。こんなに頭が可笑しい連中だとは思ってなかった」

「おーどーも、最高の褒め言葉だ」

「……貴様ら、優勢に立ったつもりか？」

男が目を細める。

優勢ではねーな。武器はもーねーし、コライユとアイツの差って言うのは大きい。

油断してただけじゃねーだろ。元々の力の差がある。それも、結構な。

剣士である俺も今や片手がなく、武器もない。

他に戦えそうな奴は、あのうぜー女しかいねーが、アイツは手を貸さない。大体どこか行っただろ、アイツ。

アメもディアもない。カタロン家は俺に協力しない。それは、本能的な部分でだ。いくら周りの人が死のうとも、カタロン家だけは俺に協力できない。理屈じゃ説明できない様な理由でだ。めんどくせーことこの上ねー。自分の屋敷で起った不始末程度、自分でどーにかしろよ。

周りの人間は、リスクに怯えて何もしない。コライユ以外の人間例えばコロなら周りの奴の加担してただろう。自分にとって、死んでも損害を被らない人間ならば。

そーいうもんだよな、あー鬱陶しい。だから他人になんて頼りたくねーんだよ。

「……貴様らを殺す理由はない。腕と手帳を寄こせ」

「……お優しーな」

その甘さが命取りになると思うけどな。

コイツは決めつけてる。色々な事を。

懐から手帳を出した後、腕を拾う。そのまま歩いて近づいても、ソイツは何も言わない。投げてよこせって言うのが正解だろ、この場合は。

まー、そう言ってもどうにかしてたけど。

俺にとって最高のシチュエーション。驚くほど計算通り。リスクは高い方が確立は上がる。そんな当たり前のことを再確認した。

「どーぞ」

「……」

至近距離まで来た時に――男の顔面に向かって腕と手帳を投げつけた。

切断した方の腕を、ソイツに向ける。滴り落ちる血。
馬鹿馬鹿しくて、思わず口端が上がる。

「バーカ。――剣士が魔術使えねーって誰が決めた」

男の目が見引かれた。

「^{氷れ}リオート」

「……ッ！」

どうにか避けて避けた男に瞬時に近づき、腹に蹴りを入れてから、頭にかかとを落とす。

「ぐうっ……！」

潰れたカエルみてーな格好になったソイツの頭を踏んだ。

痛いのに慣れてるからって、痛くねー訳じゃねーし。血出し過ぎて貧血だ。さっさと終わらせて寝たい。

「……さー、どうすんだ？　ちよつとでも変な動きしたら、脳みそはみ出るぜー？」

「……」

人の頭は堅いけど、頑張れば潰せる。

潰した事ねーけど、多分うまくいくだろう。

「口は開くな、頷け。口開いた瞬間頭潰すからな」

コイツの手は義手。それが武器であれば、口を開けば魔術を発動できる。そうでなくても、ちょっと蹴り過ぎて血が出る為に魔術は使える。……血でねー様にすれば良かった。手加減したのになー。貧弱ばかりだ。

「お前はシアンでいいか？」

頷かない。……まーシアンであろうが何であろうが構わない。

「俺を狙ってたのか？ それとも他の勇者か？」

頷かない。

「……違う場合は二回頷け。頷かなかったら耳潰すぞ。俺拷問関係の教育も受けてるし、そーいうの得意だからな」

『拷問をしなければいけない時が来る』と、親父に教えられた。勇者が誰に何を拷問すんだよ、とあの時は思ったけど……こーいう日も来るんだな。

「さっきの質問に答えろ、俺を狙ってたのか？」
「……」

二回頷く。否。……あん？　なら何でコライユであつた必要がある？　たまたま姫であるコライユが居たから、コライユを――違う。アイツはコライユが俺の仲間だと知ってた。

「……質問を変えるぜ。俺ではなく、勇者を狙ってたのか？」

ギリ、と歯ぎしりの音が聞こえた。

……へー、これはまた。おもしろーな。

「お前は勇者だったら誰でもよかった。違うか？」

頭を踏む力を込めれば、男は弱弱しく一回頷く。

『勇者』を狙っていたシアンの暗殺者。ここから考えられるのは、グリースの人間から依頼されたか――この国の奴から依頼されたか、だ。まあ他の国の可能性もあるだろう。

「……グリース・アートルム王国。この二国のどちらかか？」

男が首を横に振る。やべー踏み過ぎてるかも。ちょっとだけ力を弱める。

……踏み過ぎて意識もうろうとしてそうだな。どーする？　一回気絶させて、拷問かけた方が効率はいーな。

「ちょっとお待ちなさい！」

「あー？　……てめー」

抜群のタイミングで大男が俺を取り囲み、その中心にはあの女が。縦巻きされた深緑の髪。気の強そうな（っーか実際強すぎる）瞳が、俺を睨んでいる。

「ここから先はカタロン家に任せて頂けるかしら？」

「……てめーんちの差し金って事はねーよな？」

「あり得ないわ。貴方を狙うのならば、もっと賢く殺すわよ。カタロン家の家訓は『何でも十割』ひき分けは負け、負けは死なの。つまり――」

女は、色素の薄い男を踏んで俺に近づき、俺の耳元に口を寄せる。

「絶対に勝てる勝負しかしないの。……貴方のこの状態は、勝ったかもしれないけど我々にとっては負けよ。無様なね」

俺から離れ、女は口元を歪ませた。……うぜー女だな。

勝ったもの勝ちなんだよ。どんな怪我を負っても、自分の命を賭けても、勝ったら全てはチャラだ。ウチの家訓ではな。

鼻で笑うと、女も鼻で笑い、大男は俺が踏んでる男を連れて去って行った。

五四羽

暫くグラナートの尋問が続いた後、警備員の様な人達が踏まれていた男の人を連れって行った。……動いてないと思ったけど、カタロン家も水面下で動いていたのかもしれない。

ふう、と安堵の息を吐くが、二人を見て顔を歪める。

怪我を気にした様子もなくケラケラ笑ってる二人には、緊張感も何もない。

何も、感じてないのだ。怪我をした事に関して……。

それは、可笑しい。

私は一步一步、二人に近づく。

「おーコロ、どーした？」

「ぎゅっとして欲しいねえ、頑張ったんだから」

……ああ、もう。

私は苛立ちを隠しきれず、大きく息を吸い込み——怒鳴る。

「このツ——馬鹿っ！」

「「えっ」」

二人の声が重なる。褒めてもらえるとも思ってたのだろうか。何を馬鹿な事を。

こんなことをして、誰が褒めるものか。

「……あのう、コロさん……、いや、悪かったよ、悪かったけど、ね？」

「……あー、まーなー」

「……二人は、何に對して、悪いと思ってるの」

「へ？ そりゃあ、ドレス汚した事？ 弁償させられるかも……」

「俺は、グロい映像見せつけた事かー？」

首を傾げる二人は、何もわかつちやいなかった。

ないんだろう、きっとそんな感情が……だけど、それで悪いのは二人ではない——周りの人間だ。

二人にまた一歩近づき、その頭に——拳骨を落とした。ゴツン、と鈍い音が響く。

固まる二人、騒ぐ場内。

「いッ……え。あのコロちゃん」

「いてーよ……貧血で倒れるぞ」

「……あの、ねえ……、貴方達は何も解ってない。そーいうことさ
れたら、心臓が止まって死にそうになったり、息苦しくて窒息死し
そうになったり、泣くの堪えすぎて頭とか痛くなったりする人がい
るの」

二人は、何も解らない顔をしている。

どうして、ここまで言ったのに解らないの。イライラを通り越し
て、呆れてきた。

ため息と吐いてから、目を伏せる。

「……つまり——死ぬほど心配したの」

「……へ？」

「え？」

二人は、まだ何も解ってない。

馬鹿すぎで泣けて来た。

瞳から涙があふれてくる。それを見てあたふたしている二人にも『心配』するという感情はあるはずなのに、他人に向けられたら解らなくなるのだ。

きつと——今まで、向けられた事が少なかったから。

「うわっ!？」

「なっ……」

二人の頭を抱きかかえるように、抱きついた。

驚いているが、二人は拒否しない。

温かい体温。ちゃんと生きている。

「死ぬかと思った。死んじゃうかと思った……そんなの、絶対嫌だよ」

ずっと恐かった。

このイベントは私がこの世界に來た所為で起きてしまった予期せぬアクシデントではないかと。

そうでなくても、ゲームオーバーと言う物は存在する。デッドエンド

万が一、そんな事になっていたらと思うと、今も背筋が凍る思いだ。

あの人は殺さないと言った、でもあっちの方が強くて奇襲に失敗していたら——どうなっていたか。

そんなのは、考えたくもない。

「馬鹿……心配かけないでよ……私、自慢じゃないけどノミの心臓なんだよ。硝子のハートなの」

「……本当に自慢できねーな」

「だから、心配かけないで……二人は大切な人なの。だから——」

だからこんな無茶をしないで。

諦めなくても、いくらでも方法はあった筈で、腕を切らなくても、いくらでも方法はあった筈だ。

二人は、確立が高くて怪我を妥協した物を選んだ。そのリスクを簡単に背負って。

それは見ている人からしたら、とても辛い物で、二人はその辛さを解ってないし、他人が辛い想いをするとも知らない。

「ああ、もうっ！　ともかく――無事でよかった」

生きててよかった。心からそう思う。

より強く二人を抱きしめると、二人もおずおずと私の背中に腕をまわした。

当たり前だが、パーティは中止になった。

グラナートの腕はコライユが治したが、『一週間絶対安静。じやなきやもげる』と言われて、グラナートは一週間謹慎だ。何故か『もげる』の時に微妙な反応をしたグラナートが気になる。

それと、グラナートは抱きしめ合ったのに子供云々の事を言わなかった。混乱していたのかも知れない。

「そ・れ・で、二人はいったいどこに行ってたのですか」

私の前方にあるヴィクトリア風ソファには、二人の男の人が座っている。

絶世の美男に、頭部が鳩の人。

この二人が居たら、グラナートが腕を切断するなんて蛮行をしながらもすんだかも知れない。

「今日のパーティの主演はね。ハンスヴルストの子だったのだよ。

遠方に序列第三位と旅立っていた子なのだ。ハンスヴルスト傘下の人間なのだけど

第三位という高い地位に仕えていた道具と言う事で、大規模なパーティが催されたみたいだね。……もつとも、当主である私がパーティの事を知ったのは昨日だったのだけでも」

「……それがどうしたのですか？ 理由じゃありません」

「焦らないで。本題はこれからだよ」

エスメラルダさんは、深緑の眸を細めて微笑む。耽美な美しさだが、今はそれどころではない。よって、全くトキメキもしない。

「その子がね、パーティ直前になって参加しないと言いだしてね。必死に宥めていたのだよ。色々お偉いさんも呼んでいるし、王族の方々にも急ぎよ参加してもらったからね」

「……つまり、ごねるその子の説得に時間がかかって来れなかったと？」

「そういう事だね。見事成功して大ホールに向かった時にはあの有様だよ。人ごみが嫌いなあの子はすぐにどこかに消えちゃうし……」

「……部下とかから、報告は来なかったのですか？」

「来たよ。だけど優秀なる私の血縁達ならば、私がいなくてもどうにかできると思っていた。イズムも居たしね。だけど、できなかったみたいだね」

五五羽

エスメラルダさんは、それだけ言って去って行った。
部屋の中には、クルさんと私の二人きりになる。

「クルさんは、どこに行ってたんですか？」

「エスメラルダ当主の所だが、結局会えなかった。報告もする前に、あんたに呼ばれたしな……」

「報告……？」

「……お前は、異界から来たのか知らないのだろうが……ベシエ・オリジネル死望者は、皆が慄く人種なんだ。その人物がいたら、報告をする必要がある」

「……でも、過去の事でしよう……？」

ベシエ・オリジネル死望者の事はアメさんに聞いた事がある。

ブルー・オワソー英雄、青い鳥と敵対していた者の末裔。

歴史的には慄く人種かも知れないけど、だからと言って……差別される意味がわからない。

ベシエ・オリジネル「死望者が危惧されるのは、その異常さ故だ。ブルー・オワソー青い鳥を殺す為、追

い込むために何万もの人間を虐殺している。そしてその血は——今でも、色濃く残っている」

「……クルさんは、異界の人間じゃないですか。なのに、どうして」

「俺は、カタロン家に感謝している。だから、カタロン家の敵である死望者は、敵だ。あんたは、あの死望者の仲間なのか？」

ベシエ・オリジネル死望者——グラナート。

もう意味が分からない。

確かに、グラナートは常識が非常識な所があるけども……。

「なら、悪い事は言わない。アイツとは手を切れ」
「……」

グラナートは異常だ。それはさっき、いやになるほど再確認した。
だけど、それを含めて――

「そんな事、私が決めます。そうやって、皆が差別して慄いて、異常だって騒ぐから……！」 余計に異常になるんじゃないんですかっ
！」

「……っ、そうかも知れないな」

「もう解りました、出てって下さい」

「……ああ」

クルさんが退室する。

私は重い息を吐き、椅子に腰かけた。

「あー……」

またやってしまった。

頭を抱え込み、深いため息を吐く。

また、怒りに任せて怒ってしまったのだ。

……自分の言ってる事が、偽善的な事だとは思う。

仲間である人達に嫌な事を言われて、怒るのは可笑しくない。

だけど、もうちょっと……言い方って物があるし、怒りを隠して優しく諭す方法もある筈なのだ。

――それが、できない。怒りの感情に繋がるフィルターが無くな
ってしまっただけのように。

「散歩、散歩しよう。頭を冷やそう」

何回か頭を振り、立ち上がった。

当てもなく廊下を歩き始め、30分。

美術館のような豪華な廊下は、歩いているだけで楽しい。

クルさんの部屋どこなのかな、謝らないと……怒ったこと。譲れない部分もあるけども……。

「あれ？ ……アメさん」

「……ああ、よかった」

「え？ 何がですか？」

「探していた。……協力して欲しい事があると、言っただろう」

「あ、そうでしたね」

「ああ。部屋に来てくれないか？」

「はい」

頷いてからアメさんについて行く。

部屋は私の案内された客室と、同じような部屋で、しかも私の部屋のすぐ近くだった。

「そういえば、アメさん。今までどこに？」

「用意された客間に、王子と共に居た」

「そうですか……」

ソファに座ると、アメさんがお茶の用意をしてくれる。

その手際の良さが、執事みたいだ。

お茶セットを用意し終わったアメさんは、机を挟んだ前方に座った。

「協力の事だが……、お前……君には、魔術を覚えて貰いたいと思っている。君が魔術を使えないのなら、協力してもらおう意味がないからな……」

「はい」

「……だが、その前に、伝えなければいけない事がある」

アメさんは、深い息を吐き、何かを考える様に沈黙した後、

「俺は、知らなかったのだが……君の体質では、魔術を使えば犠牲が生じる様だ」

「……犠牲？」

「ああ、魔術は血で使う。君にはその血がない。代わりに膨大な魔力がある。血の純度イコール魔力なのは、血が魔術を使う為の媒体だからだ」

「え、っと……つまり？」

「君には媒体がない。だから、魔術を使う為には他の媒体を使わなければいけない」

「……武器も媒体じゃなかったですっけ？」

「魔術を使うには、二度媒体がいるらしいな」

らしいな、って……。

「つまり、君が魔術を使うには魔力の大きさに比例し、犠牲が生じると言うことだ。その犠牲が何かは、俺は解らない」

「……」

「……俺は、すごく自分勝手な事を言っていると解っている。だが、それでも——君に協力して欲しい。君しか居ないんだ」

魔術を使うには多少なりとも犠牲が必要……の犠牲が何か解らない分、答えづらい。

だけど――

「もしかしたら、……命の危険もあるかも知れない」

「アメさんって……」

アメさんが紫色の眸で私を見る。

いつもは無表情なその顔は、少し哀しそうだ。

「アメさんって、おっちょこちよいですよ。実は」

「は？」

目を丸くするアメさんに、私は思わず笑ってしまう。

「……それ、私に伝えなかったら、私は普通に魔術覚えて使ってしまったよ？」

何かが犠牲になっても、魔力の中核メーアヒュンの所為か、と諦めていたかもしれない。

私の言葉に、アメさんは困った様に私から目を反らした。

「……それは、フェアじゃないだろう……協力関係は、……一方通行ではない筈だ」

もによもによと、最後の辺りは何を言っているか聞こえない。

だけど、アメさんがいい人だと言う事は解る。

ああ、もしかして――

「……あの時――ディアの、禁術の事、私に教えてくれたのはめんどくさかったからじゃなくて、アメさんもディアの禁術を解きたいと思ったからじゃないですか？」

「……そんなことはない。おかわりを入れます」

ぽつと真っ赤になったアメさんは、まだなみなみと紅茶をいれられている二つのコップを持って、奥に引っ込んでしまった。

「勇者のインモラル？」

「あの子、すごいわね。このイズム様が思わず褒め称えたい位凄いわ」

俺の事を大嫌いな筈なのに、何故か毎日の様に俺の部屋に来るウザイ女は俺の寝てるベッドに偉そうに足組んで座ってやがる。

こいつの話なんて興味ねー俺は、ベッドに突っ伏して右から左に流そうと思った。

が、あの子って誰だ？ ……コロか？

「……あの子って誰だよ」

「馬鹿じゃないの？ あの子よ、あの子」

「てめーと意思疎通が取れる訳ねーだろ」

「そりゃそうね。あの黒髪の子よ、あんたとコライユ様に拳骨した子」

「コロだな」

「……コロねえ……ふーん」

「コロが何だ？」

「凄いいじゃない。知り合いが嬉々として自分の腕を切るでしょうもない気違い野郎だったのよ？ あたしなら『うわ、きんもー……』って、一生縁切るわよ」

「嬉々としては切ってねーよ」

痛かったっーの。痛覚はあんだよ。バーカ。それを表にださねーことができるだけだな。

「嬉々として切ってなくても、気違いよ。そんな奴目の前にして、どん引きせずにもしかしたら気違いの餌食になるかも知れないのに、拳骨した拳句抱きしめるって……あの子も可笑しいの？ それとも聖人君子の生まれ変わりなの？ 正気の沙汰じゃないわよ」
「……うっせー。アイツは色々特別なんだよ」

名前不明生体不明。不明確な存在。

ただ解るのは、異世界から来ただろうって事と、それなのに膨大な魔力を持っている事。

何もわかんねーけど、アイツが普通の感性のくせして、俺とかに突っかかってくる心臓に毛が生えた奴だとは解る。自分ではノミの心臓って言ってたけどよ。

「ふーん、あの子があんたを振ったって子か」

「……うっせーよ」

「へー。好きなのねえ。具体的にどこが好きなのかしら？」

女の顔にはにまり、と嫌な笑みが浮かんでいる。

何で言わなきゃいけないーんだよ、んな事。

無視してたら、俺の手の甲を抓った。切った方の手を。

「……?! 何すんだアホ！」

ベシエ・オリジネル

「死望者がイズム様のありがたいお言葉を無視してんじゃないわよ」

「知るか。どっか行けーっ!？」

「一週間は接着剤でくっついた状態なのよねえ？ 魔術って言うても、万能じゃないわ。ちよっと叩いただけで……すぐに、壊れる」

馬鹿女は俺が切った部分を、優しく撫でた。だが、明らかに殺気が混じっている。

ぴりりとした殺気に、肌が粟立つ。……こいつ、序列何位だっけ。

……確か四位。当主がぶっちぎりだったけど、五位までは普通の勇者では敵わない程度の力を持っている。

……負ける気はねーけど、腕使えねー剣も使えねー。使えるのは魔術だけ。魔術の総本山の第四位様に魔術だけで戦うのは些か無謀だ。

「ツチ、話せばいいんだろ。話せばー」

「最初からそう言いなさいよ」

鼻で笑ってから、俺の腕から手を除け、汚いもんを触ったように服で拭くまでがワンセットだ。うざってーこの上ねーが、俺もしそうだし、コイツにこんな事されても何とも思わない。……コロにされたら結構シヨック受けそうだ。

「俺がコロの事好きなのは、第一に初恋の相手に似てるからだ」

「うわ死ね」

「……なんでだよ」

うわぁ、と顔をゆがませる女。

「それって身代りでしょ。消耗品扱いなんじゃないの？」

「ハア？」

「オリジナルの代わりを果たせなかったら、捨てるんでしょ？」

「……ハア？」

コロがあの人の代わり？

確かに、似てるは似てるけど、全然違うんだ。外見も性格も。似ているのは、雰囲気だけだ。

そういや、アイツもそんな事言ってたな。

「あんたが自分で自覚してないだけなんじゃない？ それ、コロちやんとやらに話した？ 初恋の人に似てるって」

「ああ」

「うっわ、死ぬ。百億回死ぬ。生きたまま血抜かれて死ぬ」

「……そこまで言うか」

「あんたが振られた理由ってそれよ。まあ頭可笑しいとかもあるけど、それが一番ね。他人の代わりにする人間なんて一人残らず死ぬばいいのよ。……あんたみたいなのが居るから、あの人が……」

「あの人？」

「……こっちの話よ。それより、あんたはまず、初恋の人とやらずに似てないあの子の部分を探した上で、その子の事を好きになる事ね」

「……違う部分なんて山ほどあんだけど」

「……似てるんじゃないの？」

「似てんのは雰囲気だけだ」

なにそれ、と女が呟く。

「その女、どういう奴なの？」

「ジー……兄貴みたいな奴の嫁、多分」

「既婚者……。はあ、まあいいわ。それで？」

「あんまり喋んねー人で、世界の不幸を全て受け継いでるかのようなくれー顔してる人だったな」

「どこがいいのよそんな人」

「その時……5歳位の時は、ジーだけが俺にとって味方だったからよー。その人の嫁って事で、好きだったんだろ」

「それってその人の事別に好きじゃないんじゃないの」

「……さーな」

本当に好きだったのか？ と聞かれたら、微妙だ。

あの人が――ジーの嫁じゃなければ、ジーの知り合いじゃなければ

ば興味を持たなかっただろう。

「……でもよー」

「うん？」

「奇妙な事があるんだよなー」

あの人の事が今でも心に残ってるのは、それが理由でもある。
女が首を傾げた。

「その人の事、誰も覚えてねーんだよ」

「はい？ ナニヲイッテルンデスカー？」

「（むかつく）……だから、覚えてねーんだよ。俺以外。その人の事。ディアに聞いても『そのような人物は国民名簿を探してもおらんし、ジーさんは単身でこの国に来たぞ』って言うだけだし」

唇に手を当て、女は死んだ動物を見る様な視線を俺に向けた。

「まさかとは思いますが、その『初恋の人』というのは、あなたの想像上の存在にすぎないのではないのでしょうか」

「……ハイ？」

この上のない憐みの視線を俺に向け、何故か女は敬語でそう言った。

……想像上の存在？

カラカラと女は笑う。

「……あれよ、あれね。あんたさー、ぶっちゃけ頭可笑しいでしょ。それって多少なりとも過去が関係してるでしょ。その、見る度に吐きそうになる傷とか」

女が俺の背中を指差す。……この位の傷、誰にでもあるんじゃないのか？

そう目線で訴えてみたら、明らかにどん引きされる。……意思疎通できるじゃねーか。

「馬鹿じゃないの。異常よ。そんな異常な過去から、あんたは妄想上の人物を作って、妄想に逃げていた……あらら、可哀想」

「可哀想って言うてる癖に、顔すげー笑ってんぞ」

「他人の不幸、しかも死望者^{ペシエ・オリジネル}の不幸は蜜の味」

光悦と顔を緩ませる。……最悪だなコイツ。

「まあ、あんたの異常話はもういいわ。飽きた」

「てめーから聞いてきたくせに」

……っーかよ、想像上の人物って何だよ。

俺が過去に耐えきれず、生みだした妄想の初恋の人物？ ……俺

は、そんなに弱くねー筈だ。

でも、誰も覚えてない。少し背筋が凍る。……ふざけんな、そんな筈ねー。

女は既にこの話題には飽きたようで、簡単に切り出す。

「次は本題よ。あんた達をここに来させた理由、詳しくは話してなかったでしょう」

「……そーだな」

「その前に、世界秘密レベルの話をしてあげるわ。カタロン家と、一部のお偉方しか知らない話」

唇に人差し指を当てた後、女は笑う。

「青い鳥は、生きていた。数十年前まで」
「……は？」

「青い鳥って、何千年も前から存在してた人物だよな？」
「……何言ってるんだ。」

「青い鳥の伝説の書籍、読んだことあるでしょ？ オリジナルでなくともいいわ。童話でも何でもいい」

「おー、あるけど」

「その終わり、三行位言ってみて。必ずある言葉で終わるのよ」
「……終わり……『こうして魔力の中核を体内に宿した、青い鳥は、今でもみんなを見守っています』だっけ……？」

童話なんて必死に読んでねーから曖昧だ。

「その通り。この意味が解る？」

「はー？ 空から見守ってますとかそんなじゃねーのか？」

「違うわよ。馬鹿じゃないの。魔力の中核が何か知ってるでしょ？ その名の通り、魔力の塊。それも、世界に溢れていた全ての魔力。膨大よ。想像も絶する程の魔力。それを身に宿して、何も起こらないなんて愚図みたいな事本気で言ってるなら泥水で顔洗ってきなさい」

世界に溢れていた魔力を、身に宿したらどうなるか？

「魔力の中核は世界から、奪われたもの。魔力死を無くす為に――あ。」

「そうか……。青い鳥が死ねば、魔力の中核が元に戻る」

「その通り。だけど今まで戻った事はない。つまり、それは――青い鳥の生を意味するのよ」

「……理屈は解った。で？　それがどうした」

ブルー・オウゾー
青い鳥が生きていようが、こっちには関係ない事だ。

女は明らかに馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「第零級魔法^{魔法}は、回数に限度があるって知ってるでしょ？　魔法は血で使う。だから、消耗品なのよ。第零級魔法^{魔法}を使うと、純度が落ちて行く。膨大な魔法で魔力すぎてね。その程度は知ってるでしょ」

「知ってるけど、それがどうしたよ」

はあ、とため息を吐いた後、女は足を組み直す。
第零級魔法の事位、誰でも知ってる。それを今更説明する意味が分からない。

「……青い鳥は世界から魔力の中核を取り出す第零級魔法^{魔法}を使った。精獣と共に力を合わせて。そこまで、魔力を使う魔法を使った後に――世界を混沌とさせることなんてできやしない」

は……？

「ちょっと待て、オイ。それだとして――ブルー・オウゾーらは青い鳥が世界を混沌とさせた原因だと思ってたみたいじゃねーか」

ブルー・オウゾー
カタロン家は青い鳥の血を引き継いだ家だった筈だ。
それが、世界を混沌とさせた諸悪の原因が、一時期でも青い鳥だ
と思ってた？　それは可笑しいだろ。

「当たり前でしょ、馬鹿なの？　世界を混沌とさせるほどの魔法を
使うなんて、魔力の中核を持っていないと不可能よ。まあ、こうい

うのって一般人に言えない事だから知らないんだけど」

歴史的英雄が世界を混沌とさせた理由かもしれねーって事は、確かに隠さないといけない事だ。

……でもそれはあり得ない。

……だからなんだ？

こいつは何を言いたい？ こんな秘密を話してまで。

頭を整理していく。

——魔力の中核は、メーアヒュン青い鳥から青い鳥の女帝に引き継がれ、ブルーアンペラトリス青い鳥の女帝が世界を混沌とさせたと言う事は解った。オワゾー・ブルーアンペラトリス

「っーかよ、大体青い鳥の女帝ってのはなんなんだー？ 世界を混沌とさせた倒すべき敵って事しかわかんねーし」

「勇者っていう文化が十六年間続いた事に疑問を感じる様な、人畜無害な存在に変わりはないわね。あんただって、『世界を救いたい！ 皆を幸せにしたい！』って思って旅はしてないでしょ。今時そんな奴いないわ」

「……そーだな、俺は違う」

まあ、俺の周りに世界を救いたいからって、態々着いて来て奴もいるけど。

俺は、そいつを救うためだけに旅をしている。

「勇者の旅はね、今や化石よ化石。生きた化石の文化。藁にもすがりたい馬鹿な小国が食いついてるだけの物で、大きい国——例えば我が国や、人口第一位のヴァイス共和国。永世中立大陸と言われるオルト大陸は、勇者文化なんてもう一切行っていない。——はずだった」

「は？」

筈だった？ 女の言った通り、勇者なんてもんは時代遅れも時代遅れで、小さい国しか行ってねー。っても、アルシュには小さい国の方が多から結構な国が行ってるけど。

「最近ね。今までずっとどこかに隠居してた筈の青い鳥の女帝様がね、出てきちゃったのよ」
オワゾー・ブルーアンペラトリス

「……あ？」

「しかも国を壊すってオプション付きで。確認できる範囲だとブルーノ侯国、フスクム大公国、カエルレウム連邦の破壊が確認されるわ」

「ハア？ ちょっと待てよ。オワゾー・ブルーアンペラトリス 青い鳥の女帝ってのは、そんな激しい奴だったか？」

「理由も事情も人物像も今は関係ないわ。オワゾー・ブルーアンペラトリス 青い鳥の女帝が破壊活動を始めた。その事実が、世界にとっては重要なものよ。それを知り、世界は再び――過去の産物だった勇者の旅を再び始めようかという話になってる」

「……つまり、なんだよ」

結局コイツは何を言いたいんだ？

コイツの情報はこれから役に立つだろうが、それを俺に伝えてどうするんだ？

俺にとって利益はあるが、世界秘密を話した事がバレたらコイツが危ない筈だ。どーでもいいけど。

「つまりよ、アートルム王国 ウチからも青い鳥の女帝を捕獲する為に勇者が派遣されるわけよ。さて、ここでクイズよ。誰が派遣されるでしょうか？」

「はあ？」

「正解は――」

答えを聞く気のねーそいつはため息を吐いた後、俺を流し眼で見

た。

「――エスメラルダ当主よ」

……妥当だな。

一番強い奴が勇者として派遣される。ならカタロン家の当主が選ばれるのは当然だ。

「……まどろっこしいな。てめー。要点だけ話せ」

「馬鹿にも解る様に簡単に説明してあげると『青い鳥の女帝が何故か数週間前から破壊活動を始め、その行為を阻止する為に勇者が派遣される。その勇者がお兄様であり婚約者であるエスメラルダ当主。それで持って、お兄様が青い鳥の女帝を倒してこの国に戻って来たときにあたしとお兄様の結婚式がある』のよ」

なんだよ結局。まどろっこしいにも程がある。こんだけ長話して、解った事は『何があったか』、そして『何があるのか』だ。

肝心の、『こいつが何をしたいか』は解らない。

……いや、待て。こいつ、なんか言ってたよ……。あーダメだ記憶にねー。興味無さ過ぎて覚えてねー。

「つまりよ、私は結婚したくないのよ。あんたとは違う、想像の存在ではない初恋の相手と添い遂げたいの。お兄様と結婚するなんて死んでも嫌な訳」

「なら死ねー」

もーめんどくせーな。

「死にたくないから他人に頼んでるんじゃない！」
「結局どーすればいいんだよ」

「お兄様が勇者の旅に旅立つまで後六日。その間にお兄様を暗殺して欲しいの――マルガリーテース様と力を合わせて」

五六羽

再び紅茶を入れてきてくれたアメさんは、相変わらぬ無表情だった。

私から切り出した方がいいな。

「……先ほどの件ですけど……」

「ああ」

「……魔術は覚えます。ですが、魔術を使うかは自分で随時に判断します」

「そうか、それでいい」

「……それで、その、何故協力が必要な理由みたいなものは、教えて貰ってもいいですか？」

アメさんは常にそこをお茶に濁している。
少し目が泳いだ後、困った顔で私を見た。

「あ、言いたくないならいいですから！」

「いや、……大まかにでいいか？ まだ、解らない所もあるんだ。
推測の域を出ない」

私は頷く。大まかにでも解ればいい。

でも、理由って何だろう？ 全く想像がつかない。

「トパーシオさんがベルジェの駒を探している事は知っているか？」
「はい。確か、えーっと……研究費とかをぼったくられて探してるですっけ？」

「それは第二要項だ。第一要項は研究が成功した事……そして、その被験者が連れ去られた事。トパーシオさんはその被験者と研究者

を探している。常に仕事を並行して行う人だが、今回はその仕事しかしていない」

「へー……」

こう聞くとトパーシオがすごく有能な気がして、なんだかやっとする。

冷徹な方が仕事の効率がいいのか……。それはそうだなあ。

「その、トパーシオさんが探しているベルジェの駒を見つけたのかもしれない」

「へっ？」

「……そして……」

アメさんが項垂れる。手を握りしめ、深い息を吐く。

……え、何？

「先日から、トパーシオさんと連絡がつかない」

「それって……」

「解らない。まだそう、とは……。だが、その可能性もある」

……トパーシオ死んだっ？！

ええ、いや、待って。ないない。ない。だってまだパーティメンバーに加わってないもの。その前に死ぬわけない。ゲームの世界なんだから……。

……で、でも私が今居る。本来いない筈の私が……。

「……俺の目的――君に協力して欲しい理由は、ベルジェの駒を捕まえる事だ。生かして捕まえ、トパーシオさんの居る場所を聞く。捕まえれなくても、トパーシオさんの生死だけは聞き、今居る筈の場所も聞く筈だ」

「……そ、そうですか……。それは、」

トパーシオ……。もうばやけて思い出せない金髪が視界に蘇る。
が、やっぱり死んだ感じはしない。あの人は、何で聞いたか記憶に
ないけどすごく強運だった筈だ。

きっと死んでない。

「……その理由なら、協力できると思います」

トパーシオのかたき討ちをするつもりはないけど、それ程相手が
強いと言う事だ。

アメさんが一人で行って、怪我したり……。万が一にも死んでしま
ったら嫌すぎる。

そう、アメさんを守る為に頑張ろう。

「善は急げ！　です、今からでも魔術を教えてくださいませんか？」
「ああ」

魔術の勉強の前に、まず古代語を覚えようと言う事になった。

第一印象——果たして本当に文字かも解らなかった。

ロシア文字とギリシャ文字が混ざったのを無理矢理崩し、そこに
音符を付け加えた様な、複雑怪奇な文字だ。

そして、哀しい事に、体力強化と言うチートをやったのけた魔力^{スー}
の^{アヒュン}中核は記憶までは強化してくれなかった。

チートな能力って、いざという時に全然役に立ってくれない。

あまりに難解すぎて、頭が痛くなってくる。

「あ、そういえば！」

「どうした？」

「魔力が多ければ、血が勝手に補うので発音と意味さえきっちりしてれば——って」

「……確かに、君の魔力であればそれも可能だろう。しかし古代語を覚えた方が、君にかかる負荷がすくない」

「……そう、ですか」

そう言われては何も言えない。……チートって、もっと簡単に使えるからチートじゃないの？　こんな制限付きのチートってむしろ、すごく困る。はあ……頑張って覚えよう。

三時間程覚えたけど、英語で言う『This is a pen』レベルしか覚えられなかった。
三時間って短いなあ……。

「続きは明日にするか」

「はい……ごめんなさい」

「？」

「……いえ、何でもないです。明日も頑張ります」

「ああ」

アメさんが立ちあがり、私も立ち上がる。

もっと私の頭がよければよかったのに……。迷惑かけてしまいそうだ。

「送って行きます。と言ってもすぐそこですが」

隣の隣の隣位の筈だ。

アメさんは頷き、私達は外に出た。

廊下に出ると、何故か前方にグラナートが居た。壁に背を預けて、目を瞑っている。何を考えているんだろう？ そう思ってグラナートを観察していると、視線に気づいたグラナートが私達を見た。

「……あ？ 何してんだ二人とも」

「グラナートこそ何してるの？」

「……あー、会議？ 終わった所だけだよー」
「会議？」

首を傾げる。……会議って何？

今してたの？ ……一人で？ 違うか、今まで会議してたってことか。

「……あつ、そういえば、何でグラナート達はここにいるの？」

ずっと気になっていた事を思い出し、首を傾げてそう聞くとグラナートは私を一瞥した後、

「……言えねー理由だ。それよりアメ、ディアはどこにいる？」

言えない理由って何？ ……。あの人に関係ある事だろうか。

……この気持ちは、親ばかだった父親に何故かいつの間にか恋人が出来て構われなくなった……みたいなのに似てるかもしれない。そんな経験はないけども。

「ダイヤモンドならば、イズウムルート・カタロンの元に居る筈だが」

「……」

グラナートは、その言葉に沈黙した後――壁にかかっていた絵画と叩き潰した。

「あの……アマ……ッ！」

五七羽

「えっ、ど、どうしたの？」

「アメ！ 何でディアと居なかった！ クソッ、先手を取られた」
「……すまない。何が起こったんだ？」

グラナートは舌打ちする。私達の言葉はすべて無視して、思考している。

……状況がよく分からないけど、多分ディアに何かがあるかも知れない。ということだ。

「あの、よく分かんないけど協力できることがあったら――」

「足手まといだ。引っ込んで」

「……そうですか」

いつもの五割増し程冷たいグラナートに、胸が痛む。

確かに私にできる事は少ないけど、それでも何か協力できることはある筈だ。

ディアは私の友達でもあるんだし……ディアがピンチなら、私だって動きたい。

「あらあらあら、辛気臭い顔してどうしたのお三方？」

「……クソ女……」

クスクスと笑みを浮かべながら現れたエスメラルダさんの妹さんに、グラナートは殺気を帯びた瞳で睨む。まるで狙ったかのようなタイミングで現れた彼女の顔には、厭らしい嘲笑が浮かんでいた。

「てめー、ディアはどうした？」

「そんなことも解らない愚図だったかしら貴方は？　あなたがあたしの立場ならどうする？」

大げさまでに首を傾げた彼女を見て、グラナートが彼女の首元を掴み――壁に押し付けた。壁に叩きつけられる様な鈍い音。

「っ……！」

「ディアはどこだ。連れて来させろ。話はそれからだ。……それができねーなら今すぐ殺す」

「ぐ、グラナート！」

グラナートの手は既に彼女の首にかかっている。左手だけど、彼は両利きでしかも力が強い。一瞬で、絞めれるだろう。

彼女の足の間に自分の足を割り入れ、彼女の動きを封じる。……女性に対してもどこまでも加減がなかった。

「……どーすんだ？」

「……貴方は、とことん愚図なのね？　どうしてあたしがここにいるか解らないの？」

その言葉に、少し感じていた違和感を思い出す。

そうだ。彼女が、ディアに何か危害を与えたとして……わざわざ私達の前に姿を現す訳がわからない。

彼女の口が、綺麗な三日月を描く。それだけで――グラナートは吹き飛ばされた。

客室のドアも突き破り、突風にあおられた様に、飛んだ。5メートル程先にある、ベッドの側面に叩きつけられる。

「……え？」

魔術？ でも魔術を使うには呪文が必要な筈だ。
それを、彼女はしなかった。なのに、グラナートは吹き飛んだ？
異常な事態に、一気に背筋が凍った。

「ピュール！」

瞬時にアメさんが魔術を使う。懐中時計から飛び出た火の玉は、
彼女の元に届く前に消された。彼女が手を振るっただけで……。
瞬間的に、解る。この人は強い。――敵わない。

「あたしはカタロン家序列四位――イズウムルート・カタロンよ？
貴方方ごときが勝てると思っているのかしら」

「……はっ……ナルシストも大概にしとけよ」

ベッドに叩きつけられていたグラナートが立ち上がり、長細いス
タンドランプを手にする。けどまだ、ベッドの前からは動かない。
少し離れた場所に居るグラナートを見て、イズウムルートさんは、
やれやれとため息を吐いた。

彼女の目的は、何？ 解らないけど、この人は私達を殺すつもり
はない。

殺そうと思ってるなら、一瞬で終わっている筈だ。
それならば、恐くない。

「……あの、何が目的……なのですか」
「あなた、あたしのお気に入りだから教えてあげる」

パチン、と可愛らしくウインクするイズウムルートさんは普通の
女の子にしか見えない。

彼女が私の肩に触れようとした時、叫び声が聞こえ、私と彼女の

間に鋭い風が走る。思わず後退り、壁に刺さった何かを見た。

スタンドランプだ。……ゆっくりとグラナートが居る筈の場所を見る前に、グラナートが前に居た。いつの間に……？

私を背後に押しのけ、グラナートは彼女と対面する。グラナートは荒く息をしており、疲れているのがすぐに解る。それも仕方ない。グラナートは昼も戦っている。腕まで切って――。

「あら、何？ 同性のあたしが触れるのも嫌なの？ 嫉妬深い男ってやーねー」
「うっせー」

え、嫉妬？ ……嫉妬でスタンドランプ投げたの？！
そんな訳がないと思いつつ、他の理由が思い当たらなかった。

「……目的は終わったろーが、さっさと行け。ついでに死んでくれ」

「いいえ、まだよ。宣告がまだだもの」

「さっさとしろ」

「ディアマンテ王子は預かったわ」

「んなこと解ってんだよ」

吐き捨てるグラナートの言葉を無視して、イズウムルートさんは優雅に笑う。

「貴方の仕事が終わったら返してあげる。ただそれだけでは可哀想だから――禁術の解き方も教えてあげるわ」

「……あ？」

彼女の言葉に、私達は目を見開く。瞬時にアメさんとアイコンタクトを取りあった。アメさんも私も、推測の域を出ないけどソレを

知っている。

「はー、それは大層なご褒美だなー。やる気がでてきたぜ」

「そうでしょ？ ……失敗したら貴方達死ぬけどね。……ふふ」

「……その時はてめーも道連れにしてやるよ」

鼻で笑ったグラナートに、イズウムルートさんはお辞儀し、何事もなかったかのように去って行った。

目的って何だったんだろう？ グラナートは解ったらしいけど、私には解らない。

グラナートはため息を吐いて、頭を掻く。未だに黒く染められた髪が乱れる。

「……ツチ、あれで第四位かよ。……第一位は化け物か」

「あのっ、グラナート？」

あの人は結局何をしに来たの？

「あー？」

振り向いたグラナートの頬には、擦り傷ができてしまっていて、聞こうとしていた言葉を飲み込む。

「大丈夫……？」

「この程度の傷なら問題ねー。手もじき治るしなー」

それでも顔についている傷というのはとても気になる。グラナートは無理する体質だ。しかも、簡単に、一瞬に……。私はグラナートの頬に触れた。少し熱いのは、戦った後だからだろう。赤く滲んだ血が痛々しい。

「でも、やっぱり誰かに治して貰った方がいいよ。自分で治すって手もあ——?!」

言い終わる前に——抱きしめられた。

頬に触れていた手を握られ、すごく強く。

いいにおいがして、グラナートの綺麗な首が見える。

「な、何?! あのだ……?!」

グラナートに抱きしめられた事が初めてではない。だけど、アメさんとか知り合いの前で抱きしめられたのは初めての筈だ。恥ずかしい、すごくはずかしい。穴があったら入りたい程恥ずかしい。

赤面している私の耳に、グラナートは口を寄せる。息がかかる程近づいたそれに、心臓が破壊されそうな程に音をたてる。

「——誰かに触れられるな」

「え、いや、あの」

何急に!?! どうしたの!?!

「それと——魔術は絶対に使うな。覚えようともすんな。この三つだけ守れ」

「……え」

「解ったか?」

解らないよ! 全然意味が解らないよ!

なんでグラナートはいつもこう唐突に主語を無視して私に命令するの? ……理由さえ話してくれば、その命令も聞けるかもしれないのに。

なかなか返事をしない私に痺れを切らしたのか、グラナートが私から少し顔を離し向かいあう。何か呟きが聞こえたと思うと――グラナートの顔が近づいた。唇に柔らかいものが当たる。

パキン、と私の中の何かが、変な音をたて、意識が沈んだ。

「勇者のインモラル？」

あの我が儘女の命令で、俺はマルガリーテースとか言う奴に部屋に訪れる事になった。

数回ノックして、相手を待つ。

『……何のよう？』

どこかなまった言葉が聞こえる。

「イズウムルート・カタロンに言われて来たものです。少々お話がありますので、入れて頂いても宜しいでしょうか？」

マナーやらなんやらで習って敬語で離すと、ソイツはあっさりと俺を部屋に入れた。

油断してるのか、信じたのか、それとも敵が来ても勝てると思ってるのが少し気になったが、今はそんな事はいい。

客室と同じような部屋の中に踏む込むと——中に居たのは10歳位の餓鬼だった。

白髪に白眼。色素を全て奪われてしまったかのように白い少年。

椅子に座って、黙って俺を見ている。その顔に、生气はない。幽霊みてーだ。

「……あなたがマルガリーテース・ハンスヴルストですか？」

「……そやけど」

……どっかで聞いた事ある喋り方だな。

ああ、そうか。古代語から覚えると、こんな喋り方になるんだっ

た。最近では滅多にいねーから忘れてた。んなことはどーでもいいか。

「用件は？」

「……イズウムルート・カタロンから聞いていませんか？」

「……さっくりは聞いとる。エスメラルダ当主を殺してほしい、っちゅーことやろ？」

「そうみたいですわ」

「……敬語使わんでいいで。なんか気味悪いわ」

そーかそりゃよかった。俺も自分で自分が気味悪くて吐きそうだったぜ。

「そーか、それでどーするつもりなんだ？」

「……俺はどっちでもええ。エスメラルダに逆らうと言うリスクを背負ってまで、イズウムルートに加担する理由はないけど……」

「俺もだ」

アイツは俺に願っている立場であって、その願いを聞くかは俺次第だ。

当主のエスメラルダ・カタロンったら、世界の魔力量も一位に輝いているまぎれもない実力者で……勝てる確率は限りなく低い。

そのくせに、失敗したら打ち首。リスクしかねー。リターンは一切ねー。

「ただ、カタロン家はそなにあまない。理由がないんやったら、もう既に作られてるはずやろな……自分、ここには一人できたん？」

「いや、連れと——ツチ」

餓鬼の言葉の意味に気付いて舌打ちする。

理由がなければ作ればいい。俺でもそーするだろう。

この場合、何が俺を動かす理由になるか。そんなもん馬鹿でも解る。

俺の周りの人間。

そいつらを人質に取れば、俺は動かなければいけない理由ができる。

妥当なのはディアか？　コロとコライユはあの女が呼んだのではない筈だ。ならばディアかアメの二択になる。二人で居れば、攫われるなんて事はねー筈だが……。

「理由の話はしても意味ないで。したん俺やけど」

「……してくれてよかったぜー」

「……今から行っても遅いとおもうで？」

「そーだろうな」

アメは勇者の旅のお付きの前にディアの護衛だ。あいつがどーにかしてる事を願うしかない。

「ちゃっちゃと本題行かせて貰うけどよー。とりあえず腕治してくんねー？」

「……そやな、剣士が片手やと問題やもんな」

ここまでずっと無表情なそいつは、俺に近づき腕に呪文をかける。ハンスヴルストの奴も魔力は強い。

「三日もあつたら治るやろ……」

「そーか、わりーな」

軽く頭を振ってから、ソイツは机に向かう。数十枚にも及ぶ紙の資料を持って、再びこっちに来る。なんだ？

「これ、エスメラルダ当主の資料やから。これ読んで作戦たてとい
て。俺はやることあるから」

書類を俺に押し付けてから、餓鬼は俺の横を通り抜けて部屋を出
て行った。

……すげーあっさり終わったけど、これでいいのか？

初対面の二人が行き当たりばったりで作戦立ててもうまくいかね
ーってことか。あいつ、見かけは餓鬼だけど……歳は二十歳すぎて
るだろ。感だけど。

俺のマルガリーテースの部屋から出て、自室に戻った。

あいつは死変者で俺は死望者……それが協力するのって、なんか
変な気持ちだ。

邪魔になる書類をベッドに放り投げ、部屋を出る。

ディアの部屋を俺は知らない。……どーする？

壁にもたれかかり、ため息を吐いて目を瞑った。

……9割の確率で、ディアは攫われた。ディアじゃなくてアメが
……って可能性もあるが、俺達の事を調べてるならディアを攫う筈
だ。

問題はその後。今ディアがどうなっているか。

監禁いや、軟禁されているだろう。あいつは精神的には強い。余
程の事がない限り大丈夫だろうが……。

それでもあいつのトラウマを増やす。どいつもこいつもあいつを
利用しやがって……。

苛々しつつも、先ほどから感じていた殺意のない視線の元を見る。
アメとコロだった。

「……あ？ 何してんだ二人とも」

「グラナートこそ何してるの？」

「……あー、会議？ 終わった所だけだよー」

「会議？」

コロが首を傾げた。実際会議なんて殆んどしてねーけど、まあいいか。

他に説明のしようがない。ディアの事を切りだそうと思うと、先にコロが口を開いた。

「……あつ、そういえば、何でグラナート達はここにいるの？」

パーティーにまで出席してたって事は、コロは当主側の人間だろう。当主側でなくても、カタロン家側であることは違いない。あの女の計画がコロにバレたらどうなるかなんて、簡単に想像できる。他の奴が力づくで止めてきても問題ねーけど……、コロまで敵に回ると問題が生じる。ただでさえ勇者の旅の事でごちゃごちゃしてんのに。

「……言えねー理由だ。それよりアメ、ディアはどこにいる？」

「ディアマンテならば、イズウムルート・カタロンの元に居る筈だが」

だよな。解ってた。でもやっぱりムカツク。何がムカツクってあの女の性根腐った所と知ってくせにあっさりと、あいつの案に乗った事だ。こうなることが解らない訳がなかったのに、浮かれてた。壁にかかっている絵画を叩き潰す。絵画は割れ、壁に手が当たる。硝子の手を刺さっても、痛くもかゆくもない。ただ腸が煮えくりかえる。

ディアを殺す訳も、傷つける訳もないのは解っているが――

「あの……アマ……ッ！」

「えっ、ど、どうしたの？」

コロの焦った声が聞こえる。絵画から手を引いて、アメを睨む。

「アメ！ 何でディアと居なかった！ クソッ、先手を取られた」

「……すまない。何が起こったんだ？」

先手どころじゃねー。後手も取られた。俺達の行動はアイツに支配されたも同然だ。

舌打ちしてから考える。

あいつが弱い場合は、俺の手で殺してディアを助けだせる。それが一番だ。

だが、客室とカタロン家の奴が住む場所は、正面玄関……あの趣味悪い肖像画があった所から左右に分かれている。左が客室棟、右が家族棟だ。ディアは、四十八区家族棟にいるだろう。

あいつと敵対した時点で、あいつは寝返り、カタロン家に助けを求める。カタロン家で地位があるのは十三位までだが、十三位以下がこの家に居ない訳ではない。

実質、百人以上はいるだろう。それも質の高い魔術仕ばかり。それと敵対してディアを助け出すのは、俺とアメ、コライユが協力しても勝率は0%に限りなく近い。

「あの、よく分かんないけど協力できることがあったら――」

「足手まといだ。引っ込んで」

「……そうですか」

コロは確かに魔力ある。それもカタロン家当主を圧倒するかも知れないほどの。

だけどコイツは魔術を使う身体ではない。

使ったら最後だ。魔力が少ない魔術なら、どーにかなるだろう。でも第一級魔術なんて使ってみろ。確実にその身を滅ぼす。

「あらあらあら、辛気臭い顔してどうしたのお三方？」

「……クソ女……」

タイミングをはかった様に来やがった女は、気持ち悪い程の笑顔を貼りつけている。

「てめー、ディアはどうした？」

「そんなことも解らない愚図だったかしら貴方は？　あなたがあたしの立場ならどうする？」

認めた。……確定した。ツチ、やっぱりか。俺はソイツの首元を掴んで――壁に押し付けた。手加減すんの忘れたけど、死なねーだろ。

「っ……！」

「ディアはどこだ。連れて来させろ。話はそれからだ。……それができねーなら今すぐ殺す」

「ぐ、グラナート！」

コロの焦った声が聞こえる。でもお前が思ってる通りにはならねーだろうな。こいつが余程の馬鹿じゃねーかぎり。

服を掴んでいた手を首に移動させ、そいつの足の間に足を入れて固定する。今できることの最低限だ。口をわらねーようなら、口に手を持って行って魔術を使えない様にしよう。

「……どーすんだ？」

「……貴方は、とことん愚図なのね？　どうしてあたしがここにい

るか解らないの？」

ああ、それも気づいてんだよ。

このタイミングで姿を現す理由。んなもんは一つしかない。俺の選択肢を潰す為。

——こいつが、第四位のこの女が俺らに圧倒的に勝ち、力を見せつけられ、俺達は反逆できなくなる。

だが逆に、俺がここで勝てば、ディアは戻ってくる。口端を上げると、その女も嗤い——俺は突風にあおられた。

「が……ッ」

何かに叩きつけられる。……魔術は、呪文を言わなければ発動できない。小声でもいいが、発音しなければ魔術は使えない。……んな理屈も、カタロン家なら除けれるのか？

んな訳ない。何か理由がある筈だ。それが解れば勝利の糸口になる。

とっさに右手はかばったが、血がにじんできていた。……あいつに魔術かけてもらってなかったら、吹き飛んでたかもしれねー。

吹き飛んだ所為で筒抜けになった扉の奥では、アメが女に攻撃していた。だがそれも軽く消される。

「あたしはカタロン家序列四位——イズウムルート・カタロンよ？ 貴方方ごときが勝てると思ってるのかしら」

宣言するかのような凜とした声が腹立つ。

「……はっ……ナルシストも大概にしとけよ」

立ち上がり、ベッドの近くにあったスタンドラインプを手に取り。

先端が球体になっているオーソドックスなスタンドランプだが、ねーよりましだ。

片手で勝つのは難しい。……右手が落ちれば、もう一回魔術をかけて貰えばいい。それだけの話だ。

あいつは呪文の時間ロスがねーけど、どの魔術を使うか考える時間ロスは絶対ある。

それに、魔力には底がある。体術はできねーだろうから、魔術を使わせて魔力を消費させ、一気に潰す。作戦を組み立て、奴を睨む。

「……あの、何が目的……なのですか」

「あなた、あたしのお気に入りだから教えてあげる」

……あいつは何してんだ。

無謀にも女に話しかけたコロは、必死な形相で女を見ている。足震えてんだけど……。

女は女でムカツクウインクをした後——コロに触れようとする。

その瞬間、背筋が凍った。あいつは、コロに触れた事が……ない筈だ。

コロは触れただけで解る程の魔力を持っている。

あいつが触れたらどうなる？ ……コロも、ターゲットにされる

んじゃないのか？ それか、どこかに連れて行かれる。

——ただじゃすまない。

接合部分から血のにじんできている右手をみる。左手であいつらの間に投げるより、右手で投げた方がコロに当たらない確率が高い。スタンドを右手に持ち替え——二人の間に投げ入れる。目を見開いた女が、手をとっさに戻すのを見えた。

繋がった右手が糸をほどいたように脆くなる感覚を感じるが、んなことはもういい。投げた瞬間に走り、コロを背後にかばう。スタンドランプは奥深く突き刺さっていた。

——成功した。あいつはコロに触らなかった。

息を整えようとしても一向に整わず、脂汗まで出てくる。修行が足りない。この程度じゃ全然ダメだ。

「あら、何？ 同性のあたしが触れるのも嫌なの？ 嫉妬深い男っ

てやーねー」

「うっせー」

あのうざってー無駄話が、こんなときに役に立った。コイツと毎日毎日無理して話してなかったら、嫉妬なんて答えに行きつかないっただろう。勘違いしてくれてよかった。

「……目的は終わっただろーが、さっさと行け。ついでに死んでくれ」

「いいえ、まだよ。宣告がまだだもの」

「さっさとしろ」

「ディアマンテ王子は預かったわ」

「んなこと解ってんだよ」

「貴方の仕事が終わったら返してあげる。ただそれだけでは可哀想だから――禁術の解き方も教えてあげるわ」

「……あ？」

禁術の解き方……？ ディアの……か？ それは朗報だ。

「はー、それは大層なご褒美だなー。やる気がでてきたぜ」

「そうでしょ？ ……失敗したら貴方達死ぬけどね。……ふふ」

「……その時はためーも道連れにしてやるよ」

思わず鼻で笑う。そいつは性根の腐った笑みを浮かべてから、そんな事は全く感じさせない優美なお辞儀をする。去って行ってソイツの背中を見送った後ため息を吐いた。

頭を掻いて、舌打ちする。勝とうと思えば勝てたが……それはあいつ一人の場合だ。

十三人全員相手にして、勝てる気はしない。本格的に反逆は無理だ。癪だが、あいつの計画は成功した。俺達は、反逆できない。なら命令に従うしかない。

「……ツチ、あれで第四位かよ。……第一位は化け物か」

だが、あいつで四位って事は、第一位のエスメラルダを倒すのは骨が折れる作業だろうな……。

「あのっ、グラナート？」

「あー？」

コロに呼ばれて振り向く。

困った顔をしているコロには外傷はない。……よかった。

「大丈夫……？」

「この程度の傷なら問題ねー。手もじき治るしなー」

回復系の魔術は、一回目に回復しても、二回目に回復すると一回目の魔術に二度目の魔術が書きかえられるという意味わかんねーシステムだ。そして回復魔術は、手当をして治るまでの時間を早めているだけの物だ。重症の場合は時間が過ぎれば過ぎるほど魔術がなじんできて、治る。だから回復の術はさっき受けたばかりなので問題ない。

……コロが魔術の事を知る訳ないが、バレた時用に考えたい訳は意味をなさなかった。

——コロが俺の頬に触れる。やっぱり、誰でも感じる程の強大な魔力。……それなのにこいつは、何も解ってねー。触れただけで魔

力が解るって知ってる筈だよな？
なのになんで簡単に触るんだ。

「でも、やっぱり誰かに治して貰った方がいいよ。自分で治すって手もあ——?!」

コロの手を掴んでから、抱きしめる。慌てふためく気配がするが、これ位しないとこいつは解らないだろう。

「な、何?! あのだ……?!」

耳に口を寄せると、コロの心音が聞こえる。身体越しに感じる心音や体温も、徐々に魔力に塗りつぶされて行く。感じるのは膨大な魔力だけになった。

「——誰かに触れられるな」

「え、いや、あの」

これを他の人間に感じさせてはいけない。異常だと解らせてはいけない。

きつとコロは利用される。利用できるただの魔力の塊として、使われる。

魔術を使う事に耐えれない身体でも、使わされて——死ぬだろう。

「それと——魔術は絶対に使うな。覚えようともすんな。この三つだけ守れ」

「……え」

「解ったか？」

解ってくれ。

ちょっと考えたら解る筈だ。わざわざ自分の命を削る必要は、お前にはない。

自分の為だけに動け、好きな事して生きろ。それがお前の為になるんだから。自分の為だけに生きて、誰にも利用されず、利用せずに、利益なんてない世界で生きてほしい。

俺みたいになってほしくない。目的もなく、ただ楽しい方だけ選んで生きればいい。お前はそのままでもいいのに、何で人は進化を求めらるんだろう。

コロは何も答えない。

——きつと、俺の願いなんで届きやしない。

大人しい筈なのに破天荒で、お人よしで、簡単に善悪を決めてしまう。自分を犠牲にするのは、そう決められている奴だけでいい。俺の思いのたけを全て言えば、こいつは大人しく言う事を聞いてくれるのだろうか。

……無理だ。きつと。口に出して、願って絶望する位なら言わない方がいい。

ならば方法は一つだ。

コロには単語を聞こえない様に呟く。使いたくねーが仕方がない。呪文を唱え終わり、コロを離す。不安そうな顔をしたコロに罪悪感を感じるが仕方がない。怨んでもいいから——自分を犠牲にするな。

あいつみたいに、死ぬかもしれないなんて未来を俺に見せないでくれ。

コロの唇を塞ぐ。目を見開いたコロは、そのまま意識を落とした。

「……はっ……、あいつみたいになって欲しくないが為に、あいつと同じ方法を使うのか」

とんでもない皮肉だ。

五八羽

重い瞼をゆっくりと開く。

混沌とした意識のまま起き上がり、窓を見た。明るい。小鳥が飛んでいる。

「起きたか？」

「……え。あ、れ？」

アメさんがベッドの隣の椅子に座っていた。結構近くて、少しびつくりする。

目を伏せた後、アメさんが眉をひそめた。

「半日、眠っていた。解らなくなるのも仕方がないだろう」

「へ？」

「……先手を打たれたな」

「???」

「すまない。いや、結果としては……君にはよかったかもしれない」

「えーっと……？」

何を言っているのか分からず、首を傾げ、記憶をさかのぼって行く。なんだっけ？ 昨日は、アメさんと魔術の勉強してその後グラナートにあって――！

昨日のアレを思い出し、顔が熱を持ち出してしまった。そ、そうだ。グラナートに……グラナートが……。

「き、きのう、ぐ、ぐら……」

「ああ。先手を取られたな」

「せ、せんで!？」

思わず唇を触ってしまい、唇から手を離す。せ、先手? 先手つてなに?

「ああ。……あの男が禁術を使う程……君に魔術を使わせたくないらしいな」

「は……え?」

「あの口付けは、禁術を使う為のものだ。口封じの禁術。多分、古代語を封じられた」

「え……?」

禁術?

「この分類の禁術は解くこともできるが……。解けば厄介な事になるだろうな。確実に」

「えーっと、……あの」

頭がこんがらがって、訳が解らない。

禁術? ……使う為にキスした?

グラナートは、何かを呟いていた。あれは、呪文を呟いていた?

「な、なんで……そんな事」

変な感情が胸の中をぐるぐると回っている。気持ちが悪い。あのキスは、何の意味もない禁術を使う為だけの物だった? なにそれ

……。そんなのって、酷い。

アメさんが口を開く前に、扉が開いた。グラナート……?

ドキッとしながら扉の方を見ると――イズウムルートさんがいた。さっき、いや昨日グラナートと闘っていた張本人。エスメラルダ当

主の妹。

「失礼するわよ。ちょっとお願いがあるのだけでも」

私達の答えを聞く前に、イズムルートさんの後ろから女の子が出て来た。薄茶色の髪に瞳。可愛らしい顔立ちをしたそうだけはいなさそうな女の子。……オパルスさんだった。アメさんが目を丸くする。私もだ。

「え、オパルスさん？」

「うん？　そうですぞ？」

きょんとしたオパルスさんはオパルスさんなのだけど、どこか変だった。

その違和感が解らない。

「あら知り合い？　よかった。手間がはぶけたわ。この子、マルガリーテース様の知り合いらしくてね、手厚くもてなさないといけないのだけど……あたし、いろいろとやる事あるから、貴方達に頼もうと思って」

「ちょ、ちょっと待って下さいよ！」

「あ、そうそうコロちゃん。貴方には聞きたい事があるの」

私の言葉をまるで聞いてないその人は、ベッドに座る。花の様ないいにおいがした。

ゴーイングマイウエーだ。どうしよう話聞かないタイプの人だ。

「コライユ様の事なのだけど」

「へっ？　コライユ？」

「そう。コライユ様……目と髪の色が変わっていたのだけど、どう

したの？ イメチェン？」

「……は？」

ぽかんとする私をよそに、その人は続ける。

「昔は青髪に青目だったのよ。髪も短くて、男の子みたいで……いえ、男のだと思っていたわ。でも調べたら違うのね……。でも女の子で構わない」

「え、いや……ちょっと待って下さい。おいてかないで」

一人で先人と話してしまっていて、何がなんだかわからない。

コライユの髪が昔、青だった？ うん……？ ちょっと待って。

私はもう思い出したくもないヴァイス共和国での事を思い出す。

王様の部屋にあった写真。王様の弟夫妻の子供の、色が……青ではなかっただろうか。

髪も瞳も深海のような深い青。そう、そうだった。思い出した。

名前は思い出せないけど、コライユの従兄弟の人がそんな色合いの人だった筈だ。

……その人と、コライユの元々の色が同じだった？

ちよっと、待て。どっち……？

——本当のコライユの髪が青だったか、桃色だったか、どっち？ それによって、意味合いが変わってくる。

本当の髪色が青ならば……先天的に男の子っぽくて、親に反抗して、桃色に染めたと考えられる。

でももし、本当の髪色が桃色なら……コライユは一回、従兄と同じ色にさせられた可能性がある。コライユがしたいと言いだした事かもしれないが、我が儘で姫が髪色を変えられるのだろうか。

「……コライユの、髪色と目の色が青だったのは何歳位の話ですか？」

「五歳とかそれ位だと思うわよ？」

……その位の子供が髪を染めたいと言って、親が承認するだろうか。髪だけなら、まだ我が儘を許すかも知れない。だけど、目の色まで変えさせるか？

「……コライユの、母親ってどんな外見か知ってますか？」

「そういえば今のコライユ様に似ていたわね。今のコライユ様を、三十歳位にした感じ」

「髪色目の色も、今のコライユと同じなんですネ？」

「ええ……もしかしてあなた、知っているの？」

推測が確信に近づいて行く時、彼女はそう聞いた。

心の中で警報がなる。頷いたら、きっと嫌な事が起こると。

だけど、頷かざるおえなかった。

彼女は哀しそうな顔をする。アメさんとオパルスさんは首を傾げている。

「そうなのね……コライユ様があなたに話したの？」

「いえ、そうではありませんが……」

ただ、王様に身代りにされて——コライユもそうだったのではないか？ と訝しんでいただけだ。だけど、コライユと話して行くうちに、その証拠がボロボロと出てきた。

イズウムルートさんは、浅く息を吐いた後、真っ直ぐに私を見つめる。

「あたしは、負けないわよ」

「……ハイ？」

何の話ですか？

「コライユ様と添い遂げるのはあたしよ！」

なんだか訳がわからなくなってきた。

五九羽

イズウムルートさんは黒服の人が迎えに来て、去って行ってしまった。

今まで考えていた全てが吹き飛ばされる衝撃発言で、色々と抜け落ちてしまった気がする。

元々がややこしいのに、恋愛することによって余計にややこしい図を生みだしている気がしてならない。

なんだか頭が痛い。……私何を考えないといけないんだっけ……？ イズウムルートさんの恋路は、一先ず置いておこう。

コライユの事も置いておこう。……話してくれるまで、待つべきだ。

私が考えなければいけないのは……これからの自分の事だ。

魔術を使う為には、グラナートにかけられた禁術を解かなければいけない。解き方はきつとアメさんが知っている筈だ。きつとすぐ解決するだろう。

そしてもう一つはオパルスさんの事。私はいつまでここにいるか解らないし、イズウムルートさんの願いを聞く義理もないのだけど……。

大体私は、物語を壊すと決めた後も、特に動いてなければ計画も立ててない。

冷静に考えれば……グラナートだけ止めれば大丈夫ならば、グラナートから離れるべきではない。一緒に旅を続けつつ、妨害するのが一番いい。

だけど今更一緒に旅をしたいとは言えない。さて、どうするか。

「思考中すまないのであるが……」
「わっ」

オパルスさんが私の顔を覗き込み、微笑む。可愛い。

「私の名前はオパルス・ティーテレスと申します。よろしく願いいたしますぞ」

「え？ うん。私はコロって呼んで……？」

はじめましての挨拶みたいなオパルスさんの挨拶に、首を傾げそうになる。

そういえば、名前は名乗ってなかったし、こういう挨拶になってもおかしくないだろう。

それに、数回会っただけだ。忘れていてもしょうがない……かもしれない。

「そちらの方もよろしく願いますな」

「……ああ。アメテユステウスだ」

花を背後に咲き誇らせる程可愛く笑った彼女の言葉には、やはりどこか違和感がある。

「あの、オパルスさん？」

「うん？」

きよとん、と彼女は首を傾げる。

私も数回会っただけで、どんな会話をしたとか明確に覚えている訳ではない。

「……えーっと、私の事覚えて……る？」

「はい？ どこかで会った事ありましたかな？ ……あったのならば、申し訳ない。記憶にないですな」

「……アメさんの事も？」
「？」

首を傾げてから、オパルスさんはアメさんを見る。
アメさんの事も忘れてる？ この国に來た時のことを思い出す。
アメさんはオパルスさんを見た後、詰め寄った。そんな人を忘れる
だろうか？

「申し訳ないが……全く覚えておりませんな」
「……そう、ですか」

胸の中にもやもやとした物が残る。
だけどそのもやもやは、眠気にかき消されて行く。
……眠たい。さつき寝た筈なのに……。

「大丈夫か？」
「……へ？」

「禁術は身体に悪影響を与える。今日一日睡眠を取れば、大分マシ
になると思うが……」
「……そう、ですか」

視界が白く染まって行く前に、アメさんが寝かせてくれる。
重い瞼を閉じると、私はすぐに眠りの世界にいざなわれた。

「……ん」

混濁とした意識の中、ゆっくりと目を開ける。

……窓からは淡い光が。

デジャヴだった。小鳥が飛んでる位置まで同じな気がする。

「……えー」

一日寝てしまったのか。禁術の影響で……。

部屋の中には誰もいない。ベッドから起き上がり、何故か横のベッドに積んである衣服に着替える。誰が着替えさせてくれたか少し知りたくないけど、私の来ていた服はパジャマだった。きつとメイドさんが着替えさせてくれたのだろう。

クラシカルなワンピースに裾を通して鏡を見た。……コスプレにしか見えない筈のこの服が、背景が中世ヨーロッパばりの室内の為に浮いていない。

「……外、出てもいいのかな」

扉を見る。アメさんがいつか来てくれる筈だから、それを待った方がいいのだろうか？ オパルスさんのお世話しろって言われたのに、私何もしてないや。ごめんなさい。

そういえば……コライユはどうしているのかな。

「とりあえず出よう」

扉を開けて外に出る。一昨日はスタンドランプが突き刺さっていたあの場所も、今は修復されていた。

あまり歩きすぎて迷うのは困る。……アメさんの部屋って、あれどこだっけ？

「……どうしよう」

「何がだー？」

「!？」

後ろから見知った声を聞いて、瞬時に振り向くと――グラナートが居た。

「ぐ、グラナート……」

思わず顔が引きつる。……一番会いたくなかった人だ。この世界に来てから、一人で出歩くとその時一番会いたくない人にあっている気がする。運が……悪い。

あの事が脳裏に過り、顔に熱が集まる感覚を感じて、急いで俯く。

「……んなにあからさまに避けなくてもいいじゃねーか」

「べ、べつに、さ、避けてる、とか……そんなのでは、いっさい」

「すげーもってるけど」

「だ、だって!」

勢いよく顔を上げてグラナートを睨む。けろっとして普通の顔をしているグラナートは、キスの事なんてもう忘れているかのようだった。

……ハグで子供ができると思っているのに、キスして大丈夫なのだろうか。術を使う為の事だから、呪文を唱えるのと同じような感覚なの？

「……だって、なんだよ？」

「……き、キス……とかして、大丈夫なの？」

「何が？」

「……何がって、抱き合ったら子供が生まれるんでしょ？」

「……あー……」

グラナートが私から視線を外し、どこかを見る。……何、その反応。

「あれ、違うらしいな」

「……え？」

目を開いて、グラナートを見る。違う。って、もしかして――

「子供できる行為はまた別らしいぜ。てめーは知ってたんだろー？」

ぽかん、と口を開けてしまう。知っていた。勿論知っていた。今時なら小学生でも知っている様な事だ。だけど、ちょっと待って。あれ？ グラナートは知らない筈だ。そして知ってはいけない。

グラナートの、言ってる行為が私の思っている物と正しいかは解らないけど……嫌な予感がした。

アメさんの言っていた言葉が脳内に何度も蘇る。

もし、グラナートが正しい知識を得ていたら――グラナートはもう、他の人としてしまったのだろうか？

――禁術を、阻止する為に。

……その言葉に、すぐく矛盾を感じて、気持ち悪くなった。

六十羽

「グラナート……」

「んだよ？」

「……したの？　そういうこと、その……誰かと」

「ハア？　なんで」

「なんでって……してないの？」

「する訳ねーだろ。何言ってるんだ？」

首を傾げるグラナートは、嘘をついている様子はない。

現代の世界では、子供以上にただの行為とされてるけど、元々ハグで子供ができると思っていた人に説明しても、『子供を生む行為』としか認識しないのかもしれない。だから、他人とするという選択肢は生まれないのかも……？

……ああ、それに、その行為を知ったからという穢れるというあの意味俗的な言葉にはいきつかないのかも知れない。

何故か安心してしまった。……友達の、そういう話は色々複雑だよね。うん、決してそういうのじゃない。

「オイ」

「わっ！　何！？」

いつの間にか距離を詰められていた。思わず一步下がると、腕を掴まれた。

「っ」

再び顔に熱が戻ってくる。グラナートを見ると、すごく不機嫌な

顔をしていた。

「な、何……？」

「お前よー……本当に俺の事信じてねーんだな」

「へ？ な、何の話？」

グラナートの瞳には、明らかな苛立ちが込められている。
なんでそんなに怒っているのか、私には解らない。

「俺は、お前が好きだって言っただろ。何で他の奴と子供作んなきゃなんねーんだよ」

「あ……」

そうだった。……一応、告白されてたのだった。

どうにも信じられなくて、あまり記憶になかったのだけど……。告白した相手から、他の人としたの？ なんて言ったら、確かに怒るよね。

「ごめん……」

「……別にいーけどよ。俺にも問題があるし。ま、いいや。ん？」

「え、何？ ぎゃあッ!？」

ぐいっと顔を近づき——私は思いつき、グラナートの弁慶の泣き所を蹴ってしまった。

顔にこれ以上ないという程熱が集まり、昨日の事が鮮明に思い出されて……！

腕も振り払い、三步程下がる。

「……」

「ご、ごめん……！ 大丈夫？ 何……!？」

「いや、この前感じた魔力の匂いがしたから……」

「は、はい？」

「お前の同じような魔力の匂いがすんだけど……まーいーか」
「は、はぁ」

よく分からなかった。

首を傾げる私の頭に、グラナートの手が伸びる。

「……！」

反射的にその手を叩き落してしまった。

「……」

「……」

「………」

「……ご、ごめんなさい」

グラナートの訝しげな視線が、痛い。

脳裏にキスの事が過って、さっきからずっと顔が赤い。

「……髪、羽毛ついてる」

「え？」

グラナートがさっき触れようとした所に触れて、それを取る。グラナートが言った通り、羽毛だった。

「ご、ごめん……」

「んなに何回も禁術かけたりしねーよ」

「……禁術、とかじゃなくて」

禁術の事ももちろんあるのだけど……。

やっぱり、キスの方がダメージが大きい。

偶然キスしちゃって、その後から意識しすぎて好きになっていくって少女漫画があったと思う。それを思い出した。好きとか好きじゃないとか関係なしに、意識してしまう。

「……んだよ？」

「グラナートは、何も感じないの？」

「何が？」

「……」

した方は気にならないのか。そうだよ、やった方は全く何も感じてなくても、やられた方は凄く気になる。それは何でも同じだ。

グラナートにとって、キスは禁術を使う手段でしかなかったのだろうか。

「……キスって、もっと、大切……な、うん……」

グラナートは順序が可笑しい。

だけど私はそれを教える事はできない。

言葉が続かなくて迷っていると、ため息が聞こえた。

「じゃあ……俺はどうすればいいんだ？」

「え？」

顔を上げて、グラナートを見る。

困った顔をしているグラナートが私を見つめた。視線が交わり、再び真っ赤になりかけるが、どうにか耐えた。

「お前は俺が禁術をかけなければ、魔術を使ってただろ。他人に触

れるし触れられる。……お前は、自分の力を解ってない。てめーの力は、他人に知られれば厄介な力だ」

「……」

グラナートの言う通り、私には青い鳥が、青い鳥の女帝が持つていた膨大な力――魔力の中核を持つている。
ブルー・オウゾー オウゾー・ブルーアンペラトリス

それは、確かに危惧すべきことだし、バレてはいけない事だけでも……。

何か、心に変なもやもやを感じる。

「お前にとって、手段の方が大切な事かもしれねーけど、俺にとっては結果の方が大切なんだよ」

「……そんなの」

可笑しいなんて言えない。グラナートは私の事を考えてしてくれているのだろう。だけど、

「……んだよ」

「……いつ使うかも、誰に触れるかも、全部私が決める。……私はグラナートの妻でなければ、恋人でもないんだよ……？」

グラナートの言葉に違和感があるのは、グラナートが私に親身になり過ぎているせいなのだ。私に好意を抱いてくれているの解るけど、行きすぎた好意は……困る。

私がグラナートを好きで、受け入れる覚悟があるのなら別だけど、私にはその覚悟はまだない。まだと言っても、今後覚悟ができるかも解らない。

「私の事は、私が決めるから……放っておいて」

六一羽

永遠にも思える沈黙。

……このまま逃げるように部屋に入りたい。

その前に謝るべきだろうか。冷静に考えたら、私の事を好意から心配してくれてる人に『放っておいて』は酷かったかもしれない。

本当に放っておいて欲しいのは事実だけでも……。

悩んでいると、ため息が聞こえた。

「……そーか」

「……あ」

俯いてたグラナートが顔を上げる。――いつも通りだった。いつも通りの笑顔。その笑顔に胸が締め付けられる。なんで、こんな時に笑顔を浮かべれるのだろう。

「……解った。だが、禁術は解かねー。うぜーと思うだろーけどな」

「あ……え、っと」

「解こうと思えば、解けるぜ。俺以上の魔力の持ち主に解いてもらえればいい。ただこの禁術は口にかけるもんだ。……解くときも、かける時と同じ事をするのが絶対条件になる」

「……それって……」

禁術を解く為には、もう一度誰かとキスしないといけない……という事？

「……まーいい。お前を縛る権利は俺にはねー。――自由にしろ。悪かったな」

ぽんぽんとグラナートは私の頭を撫でてから、踵を返して去って行く。

後ろ姿が小さくなるまでその背中を見つめる。

何故か瞳に涙が浮かぶ。私から切り出した事だけ――手放されたら手放されたで、こんなにも寂しいものなのか。自己中心的にも程がある。

グラナートとの繋がりが、絡まった糸が解けて切れてしまった感覚がした。きっとそれは、間違っていないだろう。

「……っ」

私もグラナートに背を向けて部屋に入る。

これでいい。きっと、これで正常に戻ったのだ。一回全て白紙に戻ってしまった方がいい。元々の関係が可笑しかった。きっとそう。

ベッドに突っ伏して、ふとんにくるまった。

うだうだするのはやめよう。私はちゃんとこの世界で生きて、私にしかできない事をしよう。そう決めたじゃないか。

私は再び寝てしまったらしい。禁術の影響なのだろうか？ 今一つ禁術と言うものが解らない。アメさんに教えて貰おう。ふとんからもぞもぞと頭だけ抜け出し、絶句した。

――オパルスさんと、アメさんが隣に寝ていたのだ。

このベッドはキングサイズ位あるので、きつきつではない。ゆとりがある川の字だ。

……でも、そういう問題じゃないと思う。

何故かオパルスさんの目ははれていた。……泣いていた？ この人達は私がふとんにくるまって寝ている時にいったい何をしていたのだろうか。

「……む」

怪訝な視線をアメさんに向けると、アメさんが目を開けた。……そういえば、寝てる所初めて見た。それほど、信頼してくれている事かもしれない。そう思うと少しうれしい。

「……ああ、起きましたか」

「……は、はい起きました。おはようございます」

何故か敬語なアメさんは起き上がり、衣服を整える。どこかぼーっとしているアメさんにいつもの覇気はない。アメさんは自分の頬を叩き、深く息を吐く。

「僕はクール、クールクール……」

……アメさんのクールキャラって暗示で成り立っているのか。なんだろうこの、少し哀しい気持ちは。キャラクターのこんな所見たくなかったけども……同時に少し嬉しい。

「あのアメさん」

「……なんだ？」

クールにバージョンチェンジしたアメさんは、いつも通りの無表情で私を見る。暗示の部分から見ると、全くクールに見えない。

「別に私達、仕事上の関係ではないのですから……クールキャラになりきらなくてもいいと思いますよ？」

「……む、確かに……」

冷艶な美貌の持ち主のアメさんは、確かに外見だけで見たらクールだ。そしてクールキャラの方が、女の子を釣りやすくなったりとプラス要素はあると思うけど、あくまでそれはトパーシオの持論だ。……勿論、トパーシオの言う通りクールキャラは人気であるけど……だからと言ってわざとクールを装うのはどうかと思う。

「私は、素のアメさんの方がいいです」

「……そうか？」

アメさんが微かに首を傾げる。私は元気よく『ハイ!』と頷いた。アメさんはじっと私を見た後、もう一度頷く。

「……」

「……」

なんだろうこの、仲良くなった後輩に『タメでいいよ』と言った後の、微妙な沈黙に似ている。

「あーあの、アメさん？」

「何ですか？」

「……えっと、何故ベッドに……？」

「オパルスが屋敷を脱出しまして、街で誰かと待ち合わせしていたようですが、待ちぼうけをくらい……泣いていた所を保護しました」

……素で話せと言ったのは私なのだけど、何故敬語なのだろうか。

「アメさん……」

「やはり、この喋り方では可笑しいですか。トパーシオさんにも『アメ君の外見で敬語なんて使ったら支離滅裂ツスよ』と言われまして……」

認めたくないけど、トパーシオの言う事も解るけども……きつと今までアメさんのクールバージョンに慣れていたから、違和感があるだけだと思う。

うん、このえも言われぬどうしようもない感じはその所為だ。

「戻しましょうか？」

アメさんが首を傾げる。その顔は無表情ではなく、少し困った様な顔だった。

「いえ、素で居てください。……ずっと自分を偽るのはつらいと思いますし」

その辛さは身を持って感じている。私は名前も何も、自分の情報は公開できない。

名前を呼んで貰えないのが、こんなに辛い事だと思わなかった。

「素で居れるなら、居るべきだと思いますよ」

あははと軽く笑ってそう言えば、アメさんはそうですか、と頷いた。

六二羽

「……禁術の件ですが、どうしますか？」

アメさんがそう切り出した。

禁術を解くか解かないかを聞いているのだろう。

……どう、しよう。

解くべきなのだろうか……。私は解きたいと思う。

だけど解いていいのだろうか？

あんなにも私の事を心配してくれている人がいるのに……。

私は不死身だし、死ぬことはないだろう。それにもかしたら、何も起こらないかもしれない。

瞼を閉じて、昨日の事を思い出す。血だらけだった。

その血だまりにいるのは、この世界でとても大切な人達だ。

私はその人達を助けられる力を持っているのに、何も知らないから助けられない。

皆が大切だと思うならば、私は力を使うべきだ。

「……解く。解いて下さい」

例えばそれが、グラナートを裏切ることになっても、私は皆を守りたい。

物語を壊そうと思ったのだって、元と言えば皆を絶望の淵に落とすたくないからだ。

物語が進めば進むほど物語は救いようがなくなる。

それを阻止しなければ……。

「解りました。……では」

アメさんが私の隣に座り、私の肩に触れた。

……禁術を解くには、禁術をかける時と同じ事をしなければなら
ない。

アメさんを嫌いな訳でもないし、むしろ好きだ。勿論友達や仲間
として……。だからこそ、少し辛い。

手段として割り切れるのは、相手が全くの他人の時だけだと思う
なあ……。

「やはりやめますか……？」

「い、いえ……します」

「そうですか……」

アメさんの顔が近づく。紫色の瞳は、開けられたままだ。グラナ
ートも開けたままだっけ？　なんてどうでもいい事を考える。アメ
さんが何かを呟き、唇が触れた。
少し冷たい唇はすぐに離れる。

……こんなに立て続けに、知り合いとキスするなんて……。

「……あれ？　……？」

何か変わった様子は特にない。

アメさんを見ると、とても困った顔をしていた。

「困りました」

「……そんな顔してます」

「説明していなかったのですが、魔術と言うのは血の純度魔力が高い程
効力を発揮するものです。同じ魔術でも、血の純度魔力が強い方が勝ち
ます」

「……はあ、えっとつまり？」

「僕の血の純度を、グラナート・マリートヴァは圧倒していると
言う事ですね」

「……つまり、解けないと……？」

そう言えばグラナートがそんな事を言っていた。
俺より強い魔力の奴に解いてもらえ、と。

「……はい。申し訳ありません」

「……いえ……」

手段としても意味をなさないキスは、いったいどうすればいいん
だろう。

複雑すぎる。

「アメさんは、恋人とか居ませんでしたよね？」

「ええ、それがどうかしましたか？」

「……いえ、ただ気になっただけです」

居たら浮気になっていて、彼女さんにとっても悪い事をしている事
になる。

「そうですか？」

きょとん、と首を傾げるアメさんはキスに関しては全く気にして
いないらしい。

この世界の人間はキスに対して耐性がありすぎじゃないだろうか。

「……アメさんは、気にならないのですか？」

「何がですか？」

「……キス、とか」

聞いてしまったから、なんて事聞いてしまったんだろうと頭を抱えそうになる。

これでは私が気になっているのがバレバレだし、キスは飽くまでの禁術を解く為の手段なのだから気にするのは可笑しい——あれ？

……いつの間に、私は手段として扱っていたのだろう……。

あんなに毛嫌いしていたのに、私も……結局は手段して扱ってしまっている。

「……キスはこのように、術の手段としてや、挨拶で使われているので……特に、どうとは」

「……そうですか」

「もつとも、そのような事をしたのは今日が初めてですが」

「……そうですか——はい？」

「そのような魔術も使いませんでしたし、キスを挨拶とする様な国には住んでいませんでしたから」

「え、……あ、でも恋人とかとした事がありますよね？」

何故か冷や汗が出て来た。

「いえ。恋人がいた事はありません。トパーシオさんが『クールキヤラは女の影を見せちゃいけないんッスよ』と言っていましたので……」

「……」

「……？」

首を傾げるアメさんに、私は頭を抱え込む。

……アメさんはなぜこんなにトパーシオさんの言う事を聞いてしまっているのだろうか。

「アメさん……えっと、おいくつですか？」

「おおよそ20です」

「……おおよそ？」

「はい。物心ついた時には、僕の歳を解る人が周りに居ませんでしたので、的確には解りません。多少の上下あるかと」

とても複雑そうだ。これ以上聞いたらダメだ。置いておこう。

「……アメさん、えーっと……ファーストキスじゃないです、よね？」

「いえ、そうですが」

「……」

何か私は、取り返しのつかない事をしてしまったのではなかろうか。

手段としてキスをしてしまった結果か……。

「ごめんなさい……アメさん。そういうのって、好きな人と……する大切なもののに」

グラナートにされた事と同じような事を、私はしてしまったのだ。アメさんはきよんとしており、何故か余計に切なくなった。

六三羽

「……責任転嫁だは思いますが……」

「はい？　どうかしましたか？」

勿論私が『解いてくれ』と願ったのが、そもそもアメさんのファーストキスを奪ってしまった理由だ。

けどアメさんが……二十歳にも関わらずファーストキスだったのは、トパーシオの原因だろう。

「……アメさんは、どうしてそんなにもトパーシオ……さんを信用してるのですか？」

私の質問にきよとしたアメさんは、暫しきよとしたままだった。

「トパーシオさんは……僕の世話係でした」

「世話係……？」

「はい、シアンに入った者はまず研修をしなければいけないのです。子供だったらなおさら、シアンのいろはを覚える為に、世話係の人に研修をしてもらうのです」

……シアンは、現代で言うマフィアみたいなものだもね。マフィアは浮気調査はしないけども。

「その世話係がトパーシオ……さんだとしても、信用しすぎだと思います」

あの人は決して信頼してはいけない分類の人だと思う。

「トパーシオさんは偉いです。とても立派な人です」

「……ど、どこがですか?!」

「……あの方と初めて出会ったのは、五年前——僕は一五歳、あの人が十歳の時です」

「……はあ。………は?」

ちょっと待って、色々可笑しすぎて頭がパニックになるようなことが聞こえたのは、気のせいだね?

「トパーシオさんは、三歳の時からずっと一人で生きてきました」
「は?」

「三歳児神話というものをご存じですか?」

「いえ……」

「三歳児神話というのは、三歳まで母親が子供を育てないと子供の性格がゆがんんだり、犯罪者になってしまう。という話です」

「……はあ」

「トパーシオさんの母親が無くなったのが三歳より少し前だったらいいです。……トパーシオさんは、まさにそれなのです」

「……はあ」

それって本当の話なのだろうか……。

何で歪む話に神話って付いているんだろう。

「……ですから性格が少し歪んでるのは仕方がない事なのです」

少し所の話じゃない気がするけど、言う通り仕方がないのかなあ……。

なんとなく釈然としないけど、それより……

「三歳からずっと一人でなんて、生きれるんですか？」

「三歳はセルフコントロールが芽生える時期で、性格がはっきりと解る様になる時期でもあるらしいです。それに元々トパーシオさんは心身ともに成長が早く、この時は既に五歳時位の知能を持っていたと推測されます。全然可能です」

「（……いや、ええー？）ご、五歳児でも一人で生きて行くのはつらいと思いますが……」

「……それを、できたからトパーシオさんは教皇の息子という前にトパーシオさんとして崇められているのです」

凄いのか変なのか解らなくなってきた。

「うん……？ あれ、教皇の息子だったのですよね？ 何で一人で生きようと……？」

「教皇がトパーシオさんの存在に気がついたのは、トパーシオさんが八歳の時です。その時トパーシオさんはとても有名な、フリーの殺し屋でして……スカウトしに言ったら、なんと実の息子だったらしいです。運命ってあるんですね」

「……はあ」

どこまでがフィクションなんだろう。

「……信じてませんね」

「……ええ、すみませんが……少し。だって、それって全部トパーシオが話した事なんじゃないんですか？」

三歳からの話なんて、本人しか知らない筈だ。
自らの自慢話なんて、盛られているに決まっている。

「いえ、トパーシオさんは自分の事を語るのは好きではありません。……三歳、外見的には五歳の子供が色々やっていたら、噂になるでしょう？ 教皇の息子だと世間が解った瞬間、そう言った噂話が一気に語られていったのです……。あの時は大変でした」

「はあ……」

「……全く信じていませんね、もういいです」
「すみません」

トパーシオだからか、トパーシオだからこんなに信じられないのか。

トパーシオが……一五歳なんて、誰が信じるものか。見かけ적으로는二五歳位だったのに。

「一説によれば、異界人——教皇とこの世界の女性とのハーフなので成長が早かったというのがあります」

「……教皇ってそんなに大男なんですか？」

「いえ、普通ですが、血や遺伝子が異常をきたしたのでは？」 と

「……はあ」

「……この話は終わりにしましょう。……全く信じていないようですし」

アメさんにジト目で見られた。謝ると、確かに可笑しな話ですよ。と言ってくれるアメさんは、実はものすごくいい人だと思う。

「それよりも、困りましたね。僕が禁術を解けないとなると、他の方に頼むしかありません」

トパーシオの話を切り上げ、アメさんが本題に移った。

今度トパーシオにあつたら年齢を聞いてみよう。

本当に一五歳だったらどうしよう。怖い。

「……そうですね」

「僕の血の純度は60。これを上回るとなると、なかなかいないかと……」

「60ってすごいのですか？」

「平均が30です」

「……倍じゃないですか」

「はい」

アメさんが頷く。

……平均値より倍より上を見つけないきゃ禁術は解けないって事？

「あ、そうだディアは、どうですか？」

ディアは血の純度を上げる禁術を使った。平均値より上の筈だ。

「……あの禁術は、血の純度を二倍にすることしかできません」

「？ ……ああ、平均値が30なら二倍にしても60……アメさんと同じと言う事ですね」

「……はい」

そう言うってから、アメさんは少し目を反らした。

……？ 違うのだろうか？

六四羽

「王子を頼るのはやめましょう。次にコライユ・アンゲルスですが見た感じ……僕より魔力が強くはありません」

「……えーっと、じゃあ……」

じゃあ誰もいない。

……してやられた。あんな事言いながら、私の周りには禁術を解ける人が誰もいないじゃない……！

そう言えばグラナートってすごく頭いいんだっけ……。

「……困りましたね。カタロン家に願い出るのも一つの手ではありますが、今は忙しいようですし……」

「……あの暗殺者の事もありますしね……」

「ええ、シアンの人間らしいですね」

「事情聴取とかされないのですか？ アメさんと同じ、組織の人間ですよ？」

アメさんは少し困った顔をした後、顎に手を置く。

「シアンは一つの組織ですが、その中でも様々な機関が……というよりレベルがありまして、僕はモン・シアンでして、モンは個々で仕事する事が多いので、モンメンバーが不祥事を起こしても特に何も言われません。それに……その方の所属がモン以外であれば、僕に話が回ってくる事はありませんね」

「……へーそうなんですか」

シアンにも色々あるらしい。確かに浮気調査と暗殺が同じ部署な

訳がないよね。どんなごった煮機関だ。

モンは、護衛とかそういうの専用なんだろうか？ 聞いていいのかなあ。

「……ん、う……」

「!？」

小さな声が聞こえて振り向くと、オパルスさんがうにやうにやと可愛い表情をしながら目を開けた。目をこすり、私達を見る。薄茶色の睫毛が頬に影を落としている。可愛い。寝起きで可愛いって凄いなあ……。

「……おはよう、なのですぞ」

「うん、おはようオパルスさん」

上半身を少し起こし、オパルスさんがこくり、と頷いた後微笑む。花が咲いたように笑うオパルスさんに凄く和んだ。

「今、何時ですか……？」

「ん？ えっと」

「3時だ」

いつの間にかクールバージョンに戻ったアメさんが無表情でそう言う。

「おやつタイムですな！」

声を弾ませる彼女は本当に楽しそうだった。

そういえばお腹減ったなあ。起きたのが何時か解らないけど、多分朝だった筈。朝から一食も食べてない。それはお腹がへるはずだ。

「おやつか……。言えば用意してくれるのだろうか」

「どうでしょう……。？　一応客人と言う立場だと思うので、どうにかはなると思います」

「……」

でも客人はあくまでもヴァイス共和国の姫、コライユだ。

……ってそうか！　コライユ呼んでくれれば万事解決する。

「アメさん、コライユの部屋知ってます？」

「いや、知らん。……呼んでくるか？」

「お願いできます？」

「ああ」

頷いて、アメさんは部屋を速足で去って行った。

部屋の中にはオパルスさんと私の二人っきりになる。

いつの間にかアメさんと思疎通が取れるようになっていく気がした。

「コロさん、でしたな？」

「はい」

オパルスさんが起き上がり、もそもそ動いて私の隣に腰掛ける。ベッドに座ったまま足をぶらぶらさせているオパルスさんは、なんだかとても可愛い。年齢不詳だけど、多分16歳位だろう。それなのにこういう無邪気な行動が似合うオパルスさんは唇を尖らせ、うーんと唸ってから私を見た。なんだろう？

「あの人と恋人なのですか？」

「はっ！？」

突拍子のない発言に思わずベッドから滑り落ちそうになる。

「な、なんで?!」

「そのような空気を感じましてな。ハッハッハッハ」

華奢な女の子には似合わない豪快な笑い方をするオパルスさん。
……やっぱり変な子だ。

「アメさんはそういうのではないですよ」

「……では他にそういうのがいるのですかね?」

「……」

いつの間にか恋バナになってしまった。どうしよう。

「わっ、私の事はいいよ（変なのしかないし）オパルスさんは?」

「私ですか? 私は……お恥ずかしながら、片思い中でしてな」

そう言って頬を桃色に染める。……青春してるんだなあ……。

はっ……何でこんなオバサン臭い事を思ってしまったんだろうか。
わ、私だってしてるよ青春。……してるよね。ドロ臭い青春してるよ。

「へえ、どんな人なの?」

「とても素敵な方でして……。唯一の私の味方なのですぞ。白い髪も美しく、真珠の様な瞳をした麗人ですな」

「……麗人」

白い瞳に白い髪か、ディアを思い出す。ディアは銀色だったけど、銀も白も大差ないだろう。

ディア、今何をしているのかな……？

「私の話はここまでにして、コロさんの話をしてほしいのですぞ」

「……え、わ、私？　わ、私は……べ別に、ないよ……そういうの」
「嘘ですな」

オパルスさんがびしりと私の顔を指差す。

「どんなお悩みもこのオパルスに任せれば一発でどこーんですぞ！」

「壊れちゃだめだよね!？」

「か、壊滅的に完膚なきまでに解決するって事なのですぞっ」

それはきつと、解決じゃない。もみ消しかだと思う。

オパルスさんは頬を膨らませて私を睨む。

「ごめんごめん、えーっと恋愛相談だよね？」

私がそう言うと、オパルスさん花がほころんだように、後ろに効
果音ではあああとか付きそうな位すごく可愛く微笑んだ。

……恋バナか、どうしよう。変なのしかないよ。主に……出会っ
て二日目で求婚された話……とか。

六五羽

この世界での恋バナなんて、グラナートの事しかなかった。
あんなどうかしている話をこの子にしているものか……。

オパルスさんは餌を待つ犬の様な目をしてる。キラキラした薄茶色の目には明らかな期待が込められていて、『実はないんだよ〜アハハ』なんて言える空気ではない。

「……えーと、すごく長くなるけどいい？」

「はい！ 任せたまえ」

どーんと大きな胸を張るオパルスさん。今まで気にしてなかったけど、この人すごい巨乳だ。いいな。

少し現実逃避しながら、頭で今までの事をまとめて行く。

本当に長くなるな、と思いつつも私は口を開いた。

一通り話終わると、オパルスさんは何故か泣いていた。

いきなり求婚↓拒絶↓喧嘩のどこに泣けるポイントがあったのか意味不明である。

「うう、すれ違いですなあ……。今は寂しいですが、きっとそれが愛を育むのですぞ。大丈夫、そのグラナート君とやらも、今もコロちゃんの事を思っているのですぞ〜っ！」

「い、いや別に……グラナートの事、べつに、そんな恋愛的に好きじゃないし……」

「嘘ですぞ！　きつともうコロちゃんのハートはグラナート君が愛しくて愛しくてたまらん筈なのですぞっ！」

「……え。いや、な、ないよ、ないないないない」

グラナートは仲間的には好きだ。それはお友達的な意味で、恋愛的な物では全然ない。

「ゆ、友人としてはいいけど、恋人としてはほ、惚れるような所がないよ」

傍若無人な筈なのに、自分の事は全く省みてない。

全て行き成りだし、全て自分で勝手に決めるし、迷惑極まりない。

「世話のかかる子ほど可愛い……という奴ですな。きつとコロちゃんは母性愛が激しいのですぞ。だから子供っぽい彼に惹かれるのですな」

母性愛は激しいなんて表現をしない……！

よその子をまとめて面倒見るような母親像が浮かび、私は激しくないと言を振る。

それはそれで素晴らしい事だけど、私はそんな事はできないのだ。

「いや、違う。違うよ、確かに好きだよ好きだけど！　違うの全然違うの！　変だし、変だもん！　あんな変な人、恋人にしたいと思わないよっ！」

「ふふふ、そんな人が好きなのですな」

「ちが——」

どうにか誤解を解こうと叫んだ時、扉が開いた。

振り向くと、そこには——コライユとアメさんが居た。よかった、

グラナートかと思った。この世界に来て超絶に運が悪い私なら、グラナートと言う事もありえた。

よかった。とホッと息を吐こうとした時、コライユがすましていた顔を思いっきり崩す。

「……だ、誰の事だ……誰の事だーっ!？」
「えっ何!？」

急に叫び出したコライユにアメさんは静かにドアを閉めた。
しかしその顔はどこか困っている。

「あ、アメ……こ、心当たりあるか？」
「……ないが」

「変な人なんて、俺達全員じゃねえか。消去法が使えねえぞ……ッ
!」

「……俺も変に入るのか」
「お前のことはよく知らねえけど、変だ」
「……そうか」

アメさんは無表情だが、どこかしゅんとしていた。アメさんの素
を見てから、意思疎通ができるようになって気が氣がする。
オパルスさんを見ると、何故か楽しそうだった。

「修羅場ですなっ!」
「……は？」

「ああ、修羅場だぜ。相手を聞くまで今日は眠れねえ」

ゴキリ、と首を鳴らすコライユの背後に変なのが見えた。気のせ
いだと思いたい。
なんだろう、空気が可笑しい。

「……いや、でも待て。そいつの事、変と思いながらも好きなんだよな？　自分じゃねえ方がいいと思ったが逆か？」

「……さあ」

アメさんは手に持ったお茶セットを机の上に起き、ソファに座ろうとしたがやはり立って壁に背を預けた。トパーシオに『クールは黙って壁に背を預ける、これ鉄板ツスよ』とか言われているんだろうか。座ればいいのに……。

「さて、コロちゃんよう」

「は、はい？」

「残さずあまさず吐いて貰おうか」

「は？」

「だからその、好きな人とやらだよお！」

コライユの目が可笑しい。マジの目だ。どこか怖いコライユが私の肩を掴んで揺らす。

「ちょ、な、何?!」

「全部聞こえてたぞお前！　好きな奴がいるんだろっ！　ま、まさかあの鳩かーッ!？」

「ち、違うって、それは違うよ!」

クルさんはいいお友達だ。いい人だけど恋人としてなんて考えた事もない。

……というかちょっと待って、全部聞こえてた？　……どうしよう。

グラナートだよ、と本当の事を言ったら言ったで、何か問題が生じる気がする。

『グッグラナートが好きなのかー!?』ってなって、誤解されそうだ。

それは困る。

「いや、あのね、誤解してるよ。別に好きじゃないってはない――」
「あの鳩だけは許さんぞおお！」

全然聞いてない。

「だ、だからクルさんはそういうんじゃない――」
「大体そのクルさんってなんだ！ 新妻か！」
「ええー……」

アメさんもアメさんなんだけども……。

アメさんはいいのだろうか。

やたらとクルさんに突っかかっているコライユは、クルさんに何か恨みでもあるのだろうか。

「あのねコライユ、落ちついて。本当に違うの。その人の事、別に好きではないの」

「唇触ってたりしたてろッ！」

「……そうなのか？」

アメさんが首を傾げる。どうしよう、すごく誤解されている。

「え、ちがつ、あれは唇じゃないよくちばしだよ！」

「……コロさん、どんな人と……」

ちゃんづけからさんづけに戻ってしまった。オパルスさんの好感度がびっくりするほど下がっているのを感じる。と思ったら、オパ

ルスさんは華々しい笑顔を浮かべた。

「異種であろうとも愛があれば大丈夫ですぞっ！ たとえ人間にくちばしが生えようとも、それでも愛する事が愛なのですな！」

「ば、馬鹿野郎……！ 人間にくちばしが生える程度ならいいッ！ 顔面全部鳩なんだぞ！」

「……え」

私は人間にくちばしだけ生えてる方が嫌だな……。

目を見開くオパルスさんは、困った顔で私を見た。誤解だよ……！

六六羽

「み、みんな落ちついて。本当に違うから」

「じゃあ誰なんだよ……！ 他に思い当たらないぞっ！」

……そ、そんな事はないでしょう。

真顔なコライユが嘘を言ってるようには見えない。あれ、コライユ……グラナートと私を応援するみたいな事言ってなかったっけ？

「……はっ、もしかしてグラナートか……？！」

もしかしてグラナートという存在自体コライユの頭の中から消えてしまっていたのだろうか。

「……なぜそこに行きつくまでに時間がかかったんだ」

アメさんは無表情でため息を吐いている。

私も同意だった。むしろ私とそういう関わりがあるのはグラナートしかないような……。

「……グラナートかあ……グラナートねえ」

「……な、なに？」

歯切れの悪いコライユは私の隣に座る。左横にオパルスさん、右横にコライユ。両手に花状態だ。

「グラナートは、ほら……コロは恋愛的に拒絶されてるだろう？ 一回切れたらそこで終了だろ」

「……むっ、そんな事ないですぞ！ 会えない時間が愛を育むのですぞっ！」

むっとした顔で言い返すオパルスさんは、私の太ももに手を置いてコライユを睨む。近くなったオパルスさんから、花のようにいいにおいがした。

コライユは鼻で笑う。

「一回終わったら、もう二度と戻らねえって。無理無理、壊す事は簡単だけど、創る事と治す事は難しいんだよ」

「そんなことないですぞっ！ 切れて戻らないのは愛が足りない印なだけで、愛があれば元に戻るのですぞ！」

オパルスさんの言葉に、コライユはハッと目を丸くした。

「……………そうだな。おお、そうだぜ。愛が足りねえだけかもな」

目を伏せて、コライユは苦笑する。その横顔はとても寂しそうで、思わず声をかけようとしたら、がばりとコライユは顔を上げて笑う。

「けっけっけ、コロちゃんとグラナートはどうなるかねえ……。なんやかんやで愛の力とか発揮しちやってそのまま十八禁！？ ひゃーこわいねえ」

「なっ、そっそんなことならないよっ！」

「ここ人の家だからなあ、汚すなよ？」

「だ、だからしないって！」

ケラケラ笑うコライユはいつも通りだった。だけど無理してるようにも感じられる。……この世界の人ってそんなのばかりだ。

ぐにっとコライユの頬を掴む。

「むぎよっ!？　な、なんだ?!　いていてて」

掴んだはいいものの、言う事が思い浮かばない。
思いつきりギャグでいくか、真剣で行くか。

この場合正しいのは――

「むっ無理しないの!　グラナートと愛しの私がくっついたらやでしょ!」

「へっ!？」

コライユが目を丸くする。

……激しくすべった。もうやらない。ギャグなんて言わない。絶
対言わない。

友達に彼氏出来るとちょっと寂しい……的な事を言いたかったの
だけど、これではただのナルシスト野郎だ。

コライユの顔がどんどん赤く染まって行く。そんなに怒る事を言
ってしまったのか、ごめんコライユ。そんな思いを精一杯込めなが
ら頬を離した。

「……は、ははっは!　そうだぜ!　愛しのコロちゅわんをグラナ
ートなんかによってたまるかっつてんだっ」

乗ってくれてありがとうコライユ。怒ってなかったんだね……そ
れが無理してるのかどっちか解らないけど、お陰でこの変な空気が
どうにかなったよ。ありがとう。ごめんね氣を使わせちゃって……。
横からむぎゅうと抱きついてきたコライユの頭を撫でていると、
オパルスさんが私の顔を覗き込んだ。

「私もコロちゃん大好きですぞ!」

「へっ？」

「優しいですし、面白いですし！ 大好きですぞ〜っ」

むぎゅーっとオパルスさんも私に抱きつく。男が羨むような状況だ。

ほのぼのとした空気が流れる。柔らかい感触が私を包む。オパルスさん本当に胸が大きい。コライユは……ま、まだ成長期だもんね。うん。なんてオヤジみたいな事を数秒で考えていると、無表情で私達を見ていたアメさんと目があった。

すみませんね、妹さんなんて再びサブイギャグを言いそうになった時、アメさんが相変わらざるの無表情で口を開く。

「俺も好きだぞ」

空気が凍った。面白い程の瞬間冷凍だ。

全く抑揚のない声が、やけに大きく響く。

私の腕に頬ずりしていたコライユの頬が止まる。

むぎゅーっと抱きつきながらも楽しそうに揺れていたオパルスさんも止まる。

木のざわめきすらも止まってしまった様に感じた。

「……？ 不味い事言ったか？」

「……え、いや……えーっと」

きょとんとしている（表面的には無表情な）アメさんが私達を見る。

アメさんは、クールキャラの所為なのかもとなのか解らないけど、空気を読めなさすぎる気がする。トパーシオに『クールは空気なんて読まなくていいんすよ！』とか言われているのだろうか。

……天然なんだろうなあ。きつと。

どう答えればいいか解らず苦笑すると、いち早く復活したオパルスさんの目が輝く。

「四角関係ですなっ！」

「……い、いやいやいや」

好かれる様な事しただろうか？

……協力したから？ いやでも、協力するって言ったただけだし……。

「……あ、アメ……お前だけは信じてたのにーっ！ い、いつだいっ好きになった……！」

相変わらずハイテンションなコライユは私から身体を離してアメさんの元まで向かう。

アメさんはチラチラと私を見る。どこか困っている。察するに『僕変な事言いましたか？』みたいな感じだ。こればかりは私にも……いや、私は助けられない。

真意も……気になるし。

私が何もアクションを起こさないと解ったアメさんは、無表情に戻り、眼前まで来たコライユに視線を戻す。

「……少し、前だが」

「少しっていつだよ」

「……つい最近だ」

「最近っていつだよ」

「……この間だ」

「この間っていつだよおおっ！」

コントみたいな事をしている二人に尻目に、オパルスさんが笑顔

で私をの裾を引っ張る。

「三人抜きですなっ！ モテモテなのですぞっ！」

笑顔すぎて何も言えない。本当に楽しそうだ。

ハハハと渴いた笑いを返すと、「モテモテは嫌なのですかな？」と首を傾げられた。

六七羽

騒がしく、楽しい時間はオパルスさんの「もうこんな時間なのですな！ 私は出掛けなくては」と言う一言により、一度終わった。

オパルスさんは出掛けて行ってしまい、私達は三人になる。

オパルスさん中心に話していた気がするから、三人になると少し気まずい。……もともとこのメンバーなのに。

「……そういやさ、聞こうと思ってたんだけどよ。お前らいつまでここにいるんだ？ ……その前に、なんでここにいるんだよ」

「それは答えられない。だが……最低でも後六日はここにいる」「そっか」

悩ましげな表情をしたコライユが私と向き合う。

本当に、なんでアメさん達はここに居るのだろう。

後六日、その数字に何か意味があるかも知れない。

「俺達はこれからどうする？」

「……ん……っと」

「……一回抜けちまって、すげえ気まずいけど……元の通りに戻るか？」

「……ん、んー」

近々考えなければいけないと思ってた問題だ。目的は決まったけど、準備は何一つできていない。

第一に元に戻って、グラナート達と再び旅を始めた方が、私にとってはやりやすい……いや、それしか方法はない。

物語を壊す……いや、停止させるのならグラナートを止めないといけない。

それは、グラナートと共にいないとできない事だろう。

……だけど、コライユの言った通り、戻りにくい事実だ。

……それに。

「……あは、い、言っ
てなかったけど……私グラナートと喧嘩し
ちやっ
たんだよね」

グラナートと私は喧嘩中だ。

そしてどっちも謝るつもりも、許しをこうつもりも全くない。

コライユはぽかーんと口を開いた。

「え……恋愛云々の奴は、あのパーティの時にどうに
かなったんじやねえのか？」

「そ、そっちもまだ……微妙だし、その他にも喧嘩し
ちゃったんだあは」

あははは、と渴いた笑みを浮かべると、白目をむかれた。美少女
なのにそんな表情が何故か似合う。

「……どうすんだよ、実際問題」

「白目のまま喋らないでよ怖いなあ」

「どうすんの？ 勇者と喧嘩したまま御一行には入れないぜ？」

「だ、だからその白目やめて……！」

白目のまま私に顔を近づけるコライユはかなり怖い。

コライユは楽しそうに口端を歪めた後、白目をやめて真面目な顔
で私を見る。少し冷や汗をかいていた。あっさり戻ら
ると思っ
ていた
の
だ
ら
う。

……喧嘩禁術の事がなければ、私もあっさり元に戻っていたら
う。
結果として、考えるまでもなくそちらの方がいいのだから――、

私は何で旅を抜けると言ってしまったのだろうか。虎視眈眈と一緒に旅をした方が得だった筈なのに。

「でも、本当にどうすんだよ。喧嘩やめねえと、御一行になんて加われないぜ？」

「うん……」

思いつきで何かを決めて、感情のままに怒るとこういう事になるんだなあ……。

コライユは顔に手を当ててため息を吐いた後、アメさんを流し見る。

「……アメはどう思うよ。俺達、戻るか、戻らないか」

「俺は……元に戻った方がいいと思うが」

「……だよなあ、俺はべつに二人でもいいんだけどよ」

「……二人でどうするつもりだ」

「鈍行でもするよ、ぶらりとな。金がないなら働けばいいしよ」

「……そうか」

ため息を吐き、アメさんは目を閉じた。

本当にどうしよう。トパーシオがばらまいたお金があるから、何日かは大丈夫だと思うけど……。

いつこの家のコライユに対する接待がなくなるかも解らないし、これからはちゃんと考えて行動した方がいいだろう。

……考えて行動するなら、私はグラナートに謝らないといけない訳だけど……それはちよつと嫌だ。謝るだけ謝って魔術使っているのもダメだし、第一アメさんが言っていた協力事というのはいつはじまるのだろうか？

コライユが居る手前をそれも聞けない。

やることとやりたいことがごちゃごちゃになって、何をすればいい

いか解らない。

「コロは、どうなんだ？」

「え？」

「喧嘩とかそういうの置いといて、ただ単純に――戻りたい？」

コライユが首を傾げた。

「また皆でいっしょに旅をしたいか？」

「……それは――」

それは勿論したい。

五人で居る時はとても楽しかった。

元に戻るなら戻りたい。

けどやはり、それは簡単な事ではないだろう。

「……したいけど、でも」

「なら、謝りに行こうぜ。謝りたくない事だろうけど、……謝らずに一生疎遠よりマシだろ」

「……ん、それは」

このままずっと疎遠なんて、そんなのは嫌だ。

譲れない所はあるけれど、謝って……解決するのならそうすべきだ。

ただ、今回の事は謝って、お互いが気にせず、遠慮できるものではない気がする。

それでもやるだけやるべきか……？

「そう、だね。……謝るよ」

「おう」

コライユが微笑む。

……謝って、解決しなければ本当にどうすればいいのだろう。
そんなマイナス思考が過るが頭を振る。

「善は急げだ、行こうぜ」

不安を打ち消す様な笑顔で、コライユが私の手を引っ張った。

アメさんもついてきてくれて、グラナートの客室に案内してくれた。
た。

ドキドキしながらも客室の扉をノックする。

「……不在？」

いつまで経っても扉が開かない、と思った時——部屋の中で変な
音がした。

花瓶が割れる様な音。

それから怒鳴り声をさえぎるように、扉が開いた。

グラナートがシャツを羽織りながら出て来た。何故か半裸だ。シ
ヤツを着たってことは、上半身は裸だったと考えていいだろう。

部屋の中が見えた、ベッドの上には——糸纏わぬ姿の、妹さん
……イズムさんがいた。

六八羽

「あ？ 何してんだお前ら」

凍りつく空気の中、グラナートは平淡な声でそう言った。

「……グラナート君よお、お前……マジタイミング悪い。最悪……」
「はあ？」

不思議そうな顔をした後、グラナートはシャツのボタンをかけていく。何故か白磁の肌には夥しい程の無数の傷跡が刻まれていて、見るだけで痛々しい。

脇腹には、黒い刺青の様なものが左右対象に足から伸びている。
……そんな事はどうでもいい。問題は、彼が何をしていた、かだ。
この状況でそれを判断するのは、火を見るより明らかな気がするけども。

「……最低、嘘付き」

「は？」

「あー……あああー。お前、七〇位の好意指数があったとしよう。今マイナス五〇位になってるぜ」

「何言ってるか全然分かんねーんだけど、それより何でここに居るんだ？ なんかようか？」

「いやいや、流させてたまるか。お前、ぎゅっとしたら子供生まれちゃう★なんて園児みたいな事言ってたくせに、いつのまに快楽を貪るようになった。どうした、何があった」

「……はー？」

グラナートは不審げにコライユを見た後、ああと頷いてイズムさんを流し見る。

「あれは誤解だったらしーな」

「判決、有罪ッ！」

「……有罪、だな」

「……………有罪、無期懲役」

「は？」

きょんとしてるグラナートは、何を言われてるか解らないようだった。有罪だよ。あきらかな有罪だ。何か言ってくれればいいのに、誤解だとかそういう事を……。

この前、私以外とはしないみたいな事言っただけ？

「……嘘付き」

「だから、何がだよ」

ため息を吐いて、踵を返そうとすると嗚咽が聞こえた。振り向くとイズムさんが泣いていた。コライユとアメさんが困った顔をしている。アメさんは完全にクールキャラが崩壊していて、ぽかーんとした顔でグラナートとイズムさんを見ていたのが、やけに印象的だった。

……どうするべきだろう。

グラナートの尻ぬぐいなんてするつもりはないし、コライユの事好きって言ってた筈なのに何故かそういう事になっちゃってるイズムさんにも不快感を感じるけど――このまま去る事はできない。

何故かちよっと泣きそうになりながらもイズムさんに近寄り、シートをかける。

「……大丈夫ですか？」

「……うっ、グス……うわああああん」

顔を蔽い隠して泣くイズムさんの肌はシルクのように綺麗だった。後ろでコライユとグラナートが話す声が聞こえる。

……ん？ イズムさんは汗一つかいてない。美少女は何があっても汗すらもかかないのだろうか？ それとも、もう大分時間が経っている……？

「オイ」

「え……？」

グラナートの影が私を覆う。振り向いた瞬間——視界がぐるりと変わり、肩に激痛を感じた。

「っ……！？」

肩を無理やり押されて、押し倒された。明らかに不機嫌な顔をしているグラナートが私を睨む。睨みたいのはこっちだ。痛い。

力加減が今までとは全然違う。いきなりなんだっていうのだろう。大体、隣にさっきまでそういう事をしていた人がいるのに、押し倒すなんて非常識すぎる。

痛みを隠しながらグラナートを睨む。グラナートは片眉を上げ、舌打ちした。舌打ちしたいのはこっちだ。

「……お前、根本的に……俺の事、信じてねーんだな」

「……は？」

そんな事を、この前も言われた気がする。

こんなことをしておいて、何を信用しろと言うのだろうか。

「言っただろーが、俺はお前以外としないって」

「……それは、……」

実際にしているじゃない——ううん、誤解？

私の早とちり……？　それなら、私はひどい事を言ってしまっただろう。

ああ、私——

「もー解った。……てめーは、俺の事全然信じてねーし、好きでもねー。そうだろ？」

「……そんな、ことは」

——ないとは、言えない。

私は——恋愛面ではグラナートの事を信じれていないし、好きでもないかもしれない。

結局、私はグラナートの言う通り……彼を、全く信頼できてない。続きを言えない私に、グラナートはため息を吐く。

「……白紙に戻した方がいーのかもしれない。……親父と同じ事して、成功する訳なんてなかったんだ。んな事解ってんのに、結局親父と同じような道ばかり選んでる……」

声が段々小さくなって、最後の方はギリギリ聞こえる位だった。

自嘲気味に笑ってから、グラナートが私を見る。赤い髪はシャンデリアの光を浴びてキラキラと輝いていて、紅の眸は宝石の様に綺麗だ。誰もが好意を抱いてしまうような絶世の美貌。

どうして私は、こんな美しい人に好意を寄せられて領けなかったのだろう。

「……白紙には戻すが、禁術はとかねー。白紙になっても、元仲間だし友達程度ではあるだろーしな」

もう一度ため息を吐き、グラナートが私の上から退き、私を起こしてくれた。

——白紙に戻る。

その言葉が、やけに重く感じられる。

あの求婚も、何もかも全てなかった事になるのだ。

それはきつと、私も望んでいた筈なのに……。

「……ううつ、もういいから恋愛茶番劇とかいいからあつ！ あたしは子供さえできたらいいのよおっ！」

呆然としていると、イズムさんの悲痛な叫び声を聞こえた。

確かに茶番劇かもしれない。

正常に戻っただけだ。——なのに、なんでこんなにも寂しさを感じているのだろう。

「あたしは、あのグラナート劣悪種の事なんてどうでもいいのよっ！ 好意なんて1アトも感じてないのよっ！ ただ死望者ベシエ・オリジネルの子供ならば——お兄様との婚約を破棄する材料になると思ったから……！」

イズムさんは泣き、言葉を続けている。目は真っ赤に腫れ、充血して必死さが解る。いつも優雅に微笑んでいた彼女からは想像もできない。

さっきまでの寂しさを無理矢理消して、イズムさんに向き合った。

「あたしはコイツの事好きでもないし、あたし原因で喧嘩されたら寝ざめが悪いのよっ！ あたしが欲しいのはコイツの子種だけなんだから……！」

「……余計性質悪い気がするのですが」

思わず突っ込んでしまった。

愛なんてそこには1アトもなかったって——アトって100京分の1じゃなかったっけ？

……もう、私、どうすればいいのだろう。

六九羽

「あの……」

アメさんが静かに挙手をした。クールキャラを取り繕う気もないアメさんの表情はおどおどしている。

「……子供を、育てる気はあるのですか？ 子供を育てる気もないのに、生んだら可哀想です」

やっぱり質問はどこか抜けている。

アメさんってド天然だ。

コライユは目を丸くした後、何かを察したように肩をすくめた。

「正論だぜ。すげえ正論だ。だがちょっと黙っとけ」

コライユがアメさんを一蹴し、グラナートを睨む。

何故か誰よりも雄々しく感じた。もういつそコライユと付き合いたいよ私。

「お前ら大事な所ボカしてるけどよ、結局どうなんだ？ やったのか？ 避妊しなかったとかそういうのいいから、とりあえず行為をしたのかしてないかだけを言え」

そんなの、聞くまでもない。グラナートはしていないみたいな事を言ってるけども、この状況で信じるというのは難しい事だろう。

「だから、してねーってんだろ。しつけない」

グラナートはため息を吐き、乱暴に頭を搔く。

「イズムちゃん、君も答えてくれ。したのか、してないのか、どっちだ？」

コライユの優しく語りかけるような声に、イズムさんの肩が揺れた。グラナートは鬱陶しそうな顔でソファに腰掛けて足を組む。

イズムさんの瞳から再び涙が零れ落ちた。

「――してないわよっ！ うううっ！ アイツ、あたしが誘ったら『てめーと子作りする位なら段ボールと子作りした方がマシだ』とか言うのよ……っううッうわーん！」

「……ゆ、有機体ですらないのです――もごっ」

「黙っとけ馬鹿野郎」

アメさんの一言がイズムさんの胸の傷をさらに広げ、イズムさんはベッドに俯けるように泣き出してしまった。コライユに口を封じられたアメさんはもごもごと苦しそうにしている。

グラナートは相変わらずめんどくさそうだ。

――誤解？

……段ボール発言の所為で、最初の言葉が薄れてしまったけども、してないって言ったよね？

「だから最初から言ってるだろーが。アイツに興味なんて、1ヨクトもねーよ。ったく、揃いも揃って疑いやがって……ディアなら俺の事信じてんぞ」

「……だって、しそじゃないで――もごっ」

「黙っとけ馬鹿野郎……いや、その通りか。ごめんごめん」

「……てめーら……」

ため息を吐くグラナートは呆れたように二人を見た後、不敵に笑った。

「まーいい、俺が嘘ついてねーって事がこれで証明されただろうーが。二度と疑うなよ、めんどくせー事になんだから」

「……そうか、解った」

いつもの低い声&無表情でアメさんが頷く。もう手遅れだと思う。今からクールキヤラしても意味がないと思う。

グラナートはそんなアメさんには特に興味がないようだった。

「まあ、疑ったのは悪かったけどよ。疑われる様な行動とるのも控えるべきじゃねえか？」

「そーだなー。それはわりー」

素直に頷いたグラナートに、コライユはよしと笑う。

「……だが、まあ……誤解であろうと生じてしまったひびっつものもあるよな。……コロ」

「……ん」

疑った事に関しては、私が悪いし、グラナートも謝った。謝るべきなのだ。

グラナートを見る。興味のなさそうな赤い眸が私を映す。なんでだろうー謝りたくない。

それでも、謝らないと……。

「……ごめん……」

「気にすんなー」

へらり、とグラナートは笑う。

その笑顔に、何故か鼻の奥がツンとした。

本当ならば、もう少し怒られていた筈だろう。

だけどそれがない。それは――本当に白紙に戻って、ただの友達になったと言うことを如実に現していた。

「……あ、う、うん。あはは、ごめんね。禁術の事も、私は譲れないけどごめん、心配してくれてありがとう、じゃ、じゃあ私行くから」

無理矢理笑顔を作り、シュバッと手を上げてから、私は一目散に部屋を飛び出した。

「……っ」

適当に駆け出し、ついた先は庭園だった。草木をかきわけ、適当な場所に座り込む。

「……は、はは……」

何故か涙が出てくる。なんでだろう。理由が全く解らない。

次から次へと溢れる訳ではなく、瞳に留まっている涙を拭いて、鼻をすする。

泣く理由なんてない筈だ。

それなのに哀しいのか悔しいのか嬉しいのかも解らず、ぐるぐるに回って行く感情が気持ち悪い。

理由のわからない事ほど怖く、気持ち悪いことはないと思う。なのに、この世界に来てから私はいつもそんな状況に陥っている。

——何も、わからない。

「……？ 何をしているのですかな？」

ぼーっとしていると、聞き覚えのある声が聞こえた。綺麗なソプラノボイスに変な喋り方。その子は私の前まで回ってきて、しゃがみこむ。

「どうしたのですかな？」

朗らかな笑顔を浮かべて、彼女は私の涙をすくい取る。

その優しい笑顔に、何故かまた涙がこみ上げて来て、急いで涙を拭おうとした時、オパルスさんは優しく微笑んでから——私を包み込むように抱きしめてくれた。

彼女の小さな手が私の頭を撫でる。急なその行動にびっくりしたが、彼女の穏やかな心音を聞いていると、何故か落ち着いてくる。

「よしよし、大丈夫ですぞ。私が一緒に居ますから」

「っ……う、うん」

優しい声に、あふれ落ちた涙がオパルスさんの服を汚す。悪いと思いつつもオパルスさんに抱きついた。

「……俺は、お邪魔みたいやからもう行くわ」

背後で、子供の声が聞こえた。少し高いけど男の子特有の声。
オパルスさんがうなづく。

「はい、後でお部屋にお伺いしますな」

「……夜の十一時までには来てな。それさえ守ってくれば、何し
てもええから」

「はい、解りましたぞ」

足音が遠ざかって行く。その人が誰なのか——この時は、想像す
る余裕もなかった。

七十羽

泣き終わり、照れて苦笑しながらオパルスさんから身体を離す。
様々な花や草木が咲き誇っている庭園の窓から零れる光が、オパルスさんをキラキラを輝かせていた。

「ごめんね……」

「気にすることはないのですぞ」

どーんと大きな胸を張ったオパルスさんは、優しく微笑む。
その微笑みに、胸が温かくなった。

「ありがとう」

「いえいえ」

もう一度朗らかに微笑んだオパルスさんは、よしと私の手を引く。

「これ以上ここに居ては身体が冷ますぞ。部屋に戻りましょう」

「……うん」

そういえば寒くなってきた。

私はオパルスさんに引かれて、部屋に向かった。

部屋の中には、アメさんとコライユが居た。私を見て、二人はほっとした表情を見せるが、すぐに不機嫌な表情に戻る。

「……まったく、おせえよ。もう晩飯の時間だぜ？」

「……全くだ」

「ごめんね……」

むすーと頬を膨らましたコライユは、フンと私から顔を反らす。椅子に座っているコライユに近寄り、しゃがみこんで顔を覗く。

桜色の眸が私を射抜くように睨んだと思ったら、コライユの手が私の頬に伸びた。

両手でむにゅりと頬を押される。

「あいた、いたたむひょうにいたい」

「まったくよお、急に居なくなっただと思えば他の奴の胸の中ってどういう料簡だ？」

「へふ？」

「普通一番最初に頼るのはこの俺だろ？」

「……へ？」

目を丸くすると、コライユの頬が幽かに赤く染まり、手が離れる。コライユはまたそっぽを向いてしまった。

見ていたのだろうか？ オパルスさんの胸で泣いてしまった事を……それって、探しに来てくれていたって事だろうか？

思わず口元が緩む。きつと、心配してくれたんだろなあ。

「ありがとう」

「……おうよ」

ソファに肘付きに肘をついて、横を向いた姿勢のままコライユはぶっきらぼうにそう言った。

本当にありがとうコライユ。

心の中でもう一度お礼を言ってから、私はアメさんの元に寄った。

アメさんにも心配をかけてしまっただろう。クールに壁に背を預けていたアメさんが、私を一瞥したかと思うと私に向かって両手を伸ばした。

——むにゅり、とコライユが私にしたようにアメさんが私の頬を強く包んだ。

ぽかーんと空気が凍る。……ハ、ハイ？

「え、アメさん……？」

「……空氣的に、こうした方がいいかと」

「アメさんは空気を読まなくていいです！」

「……？」

空気を読もうとして失敗して悪化させるなんて、アメさんは空気を読む力が殆んどないのかも知れない。

きょとん、と首を傾げるアメさんにクールキャラのクの字もなかった。

クールキャラはもういいのかなあ……。

「いえ、気にしないで下さい。あの、キャラ……大丈夫ですか？」

「……！」

アメさんが目を見開いたと思うと、むぎゅっと頬を強く押された。痛っ、痛い。力加減が全然ない。歯が折れそう……！

「ぎゅ、ぎゅ……っう」

「だ、ダメですぞっ！ それ以上やったら、コロさんの顔が床に落ちた半熟目玉焼きみたいですりますぞっ！」

オパルスさんが慌てて止めに来てくれた。ありがたいけど、その例えは……なんだか、簡単に想像できてちょっと嫌だ。あんなにな

りたくない。

じんじんと痛い頬を抑えつつアメさんを見ると、申し訳なさそうな顔をされる。

アメさんにとってクールキャラは、頬を包んだ後は頬を潰す人なんだろうか。

「……お前、最近可笑いぞ？」

訝しげな顔をしたコライユがこちらに来て、眉をひそめてアメさんを見つめた。

「……すまない」

「いや、いいけどよ？　とりあえず、コロの頬潰すのは禁止な。半熟の茹で卵を壁に投げつけたみたいになるぜ」

どうして二人とも卵にこだわるのかなっ！

最近のトレンドは卵を潰すことなんだろうか。

ぐちゃっとなった卵を想像して、渴いた笑みを浮かべそうになった。生卵じゃないだけマシかもしれない。……何が？

馬鹿な事を考えるのをやめてアメさんを見る。

「ああ」

無表情無感情に呟くアメさんはいつものアメさんで、いかにもクールだった。

低い声と相まって、クールな人にしか見えない。

「……じゃあ、俺はもう行くわ」

「え？　どこに」

「ちよい……呼ばれてんだよ」

苦笑するコライユを見て、誰に呼ばれているか解ってしまった。
思わず顔を歪めてしまうと、コライユが私の手を引っ張る。

「わっ」

「大丈夫だって……行ってきます」
「へっ……！」

むにゅり、と頬に柔らかいものが当たる。
目を見開いてコライユを見ると、コライユはケラケラと悪戯っぽく笑う。

「では、私もそろそろ行きますな」

そう言うってから、オパルスさんはコライユみたいにしたずらっ子
な笑みを浮かべた。

とことこと可愛らしく私に近づいてから、オパルスさんは背伸び
して頬に口付ける。

「……えへへ」

可愛らしい笑みを浮かべてから、目を細めた。

「私、ずっとお姉さんが欲しかったのですぞ。——一人っ子だった
もんでしてな」

照れくさそうに笑ってから、オパルスさんは去って行った。

——一人っ子……？

やっぱり、オパルスさんはアメさんの事を忘れているのだろうか
……？ ——オパルスさんは、アメさんの妹の筈なのに……。

コライユが気まずそうに頬をかいてから、じゃあと手を上げて部屋を出た。

「……アメ、さん」

「……大丈夫です、想定しています。……彼女と別れたのは、彼女が小さかった頃ですから。覚えてなくても、仕方がないです」

アメさんが苦笑する。

詳しく聞いたら、ディアの時の二の舞だろう。

だから避けるべきだけど——それはただの逃げだ。

きつと、いつか知らなければいけない時が来る。

それならば、先に知っておくべきかもしれない。

いつまでもずるずる後延ばしにして、適当に流して、後悔するのは自分自身だ。

それを、今日知った。

……グラナートとは、もう一生友達どまりで終わるのだろう。

そうしたのは、私だ。

私はどこかで、ずっとグラナートが私に好意を寄せてくれると思っていた。身代りは、次なる身代りが現れるまで一生身代りだ。

グラナートの初恋の人に似ているという私は、私以上に初恋の人に似ている人が現れるまでは——ずっと、好意の対象になると……だけど、そんな訳はない。

彼が、本当に私をその人の身代りにしていたのか、私の事を本気で好きだったのかは解らないけども——永遠に続く片思いなんてありえないのだ。

……なんで、今までそんなことに気付かなかったのだろう。

——その事に気付いた私は、二度と同じ過ちを繰り返してはいけない。

昔の偉い人が言ってるじゃないか『何もせずに失敗するより、何かをして失敗した方がいい』と。

どっちも失敗するなら、何かした方がいい。筈だ。

七一羽

「アメ、さん」

「はい？」

眉をハの字にしたまま、アメさんは首を傾げた。

「……オパルスさんの事、教えてくれませんか？」

「オパルスの事を？ 誕生日ですか？ 10月6日ですよ」

「い、いえそういう事ではなくて……」

「はい？」

「……アメさんとオパルスさんの……関係と言いますか」

「……コロさん」

「ひょあ?!」

腕を引っ張られたと思えば、抱きしめられる。

行き成りの行動に、心臓が煩い位に音をたてた。なんだろう、この頃スキンシップが皆激しい。

「あ、あの、アメさん……?」

「……アレ？」

「……?」

アメさんが困った顔をしたまま、私を離した。

「……トパーシオさんが、『言いたくない事があれば適当に抱きしめとけばいいッスよ』と言っていたのですが……」

「……トパーシオの言葉は、全部忘れた方がいいと思います」

そうはいったものの、トパーシオの言葉は確かに間違っている。アメさんは、グラナートとはタイプの違う男の最上級みたいなイケメンだ。私は順応能力なのか、それとも目が可笑しくなったのか……見慣れてしまったけども、普通は照れて何も言えず、おどおどして頭の中で考えていた事が全部吹き飛んでしまうだろう。

「？ あなたはトパーシオさんが嫌いなのですか？」

「いえ、嫌い……というよりは、苦手でしょうか」

好きではない事は確かなのだけでも……。

「そうですか……。残念です」

「ぞ、残念ですか？」

「はい、あなたならトパーシオさんの感情を元に戻してくださいかと思ったのですが……」

ふう、とアメさんはため息を吐く。

……話が反れた。これ、天然じゃなくてわざとだったらビックリするほどの小悪魔な気がする。

アメさんを見つめると、眉を下げられ、視線を外される。どこか上の方を見始めたアメさんは、やはり兄弟の事は話したくないのだろう。

ならば、これ以上掘り下げる事はできない。

「トパーシオ、さんの感情っていうのは……もともとないものじゃないのですか？」

「……ありがとうございます」

話反らした時に、お礼言っちゃダメだと思うな……。

アメさんって、やっぱりすごく天然だ。よくクールキャラを続けられたなあ……。クールで、あまり喋らなくていいからギリギリ大丈夫だったのだろうか？

もしトパーシオに『キミの顔は傍若無人な俺様タイプの顔ッスよ。俺様キャラにした方がいいッス』って言われていたら、どうなっただろう。

実は、トパーシオは考えてクールキャラをさせていたのかな……？
アメさんは目を細めた。

「トパーシオさんの感情は、多分……もともとあったと思うのです。感情がない人などいません、と思います」

「……まあ、確かに……」

「きつとトパーシオさんは、辛い過去から感情を無理矢理閉じ込めてしまったのです。暗殺者に、心は無駄ですから……きつとその扉を開ければ、心から喜んだり、怒ったり、悲しんだりできる筈です」
「それは——アメさんでは、出来ないことなのですか？」

私より、アメさんは遥にトパーシオに近い位置にいるだろう。

アメさんは、眉を下げて微笑む。

「トパーシオさんには、きつと家族が必要なのです。辛かった思い出を、上書きするような……トパーシオさんだけの家族が……。僕は男ですし、もし魔術を使って女になっても子供を産めません。性転換の魔術は色々と制約がありますからね」

「トッ……」

トパーシオのためにアメさんがそこまでする必要あるのかな……！？

「……せ、性転換まで、か、考えたのですか？」

「はい」

いたって真面目な顔で頷くアメさんに、頭が痛くなった。

「……あ、アメさんは、その……心は乙女、みたいな……そういう？」

「いえ、そう言った事はありませんが……家事は得意ですが」

「……男しか恋愛対象じゃないわ。的な……」

「いえ、そう言う訳でも。……変なことを聞きますね」

え、私に変なの？

相手がトパーシオだからかな、例えば私がコライユの為に性転換を考えるって事だよね……。

想像できない……。コライユがもともと男っぽいからだろうか？

「……好意に、性別って関係ありますか？」

「へ？」

「女性でも男性でも、好意は好意です。並行なのではないのですか？」

「……ど、どうでしょう？」

「僕は、性別なんて関係がないと思います。好きなのであれば、性別なんてものは関係なくなるかと……」

……アメさんが言っているのは、恋愛的な意味なのだろうか？
そうとは聞こえないのは、アメさんがとてつもない天然だからかもしれない。

「……つ、つまり、アメさんは……トパーシオと、結婚したいと言う事ですか？」

「いえ、トパーシオさんにとって僕は相手不足ですから……相手に

求められてないのに、好意を押し売りしても意味がないですし。僕は後ろから見守ります」

優しく微笑んだアメさんの言っている好意は本当に性別の壁がない様に感じられた。

男女は並行で、誰に対しても一直線で、止まりがない。ただの好意なんだ。恋愛感情　とか関係なく……ただ好きナだけ。

「はっ……あ、いえ、あの、グラナートさんの事を言っている訳では、決してないです。意味がない場合と、意味がある場合がありますし……」

「へ？　……ああ」

グラナートのは、押し売りかもしれない。

結局、私は買い取らなかったけど……。

「……すみません」

しゅん、としたアメさんにいえ、と私は首を振った。

七二羽

グラナートの話題で途切れてしまった会話から、早30分程経った。

無言でも何故か気まずくない。

やっぱりアメさんとオパルスさんは兄弟だ。

どこかほのぼのさせてくれる空気を持っている。

時計を見ると、もう六時だった。

お腹が空いたなあ……。

「……アメさん」

隣に座っているアメさんを覗き込むと、その眸は閉じられていた。幽かに寝息が聞こえる。

……寝てる。すぐがつつり寝てる。今までの不眠を取り戻すかのように寝ている。

この人、実はすぐ寝るのが好きなのでは……。

「……はっ、え、あ……ね、寝てません」

「……はい、寝てませんでした」

私から顔を反らしつつ、アメさんは少し汗をかきながらそう言った。

少し頬が赤い。

「……すみません」

「いえ、寝ていて下さい。あはは、なんなら膝枕でもしましょうか？」

「そうですか？ ではお願いします」

ころん、とアメさんが座っていたソファに寝転がって、私の膝に頭を乗せる。

こ、この世界の人には冗談とか通じないのだろうか？ ほ、本当にするつもりは全然なかったよ！

「昔、トパーシオさんが『膝枕は一度経験して、膝枕に対する幻想を消した方がいいッスよ』。高い枕買った方が喋らないし安眠できるッス』って言っていました……」

女側としてはとてつもなく複雑なのですが！

どうしよう、膝枕なんて初めてしたから恥かしくて変な汗が出そう。

「それでどんなものか為してみたかったです。確かにガットの高級枕と触感は似ていますが、温度がありますので夏には向きませんね。冬には最適だと思います」

「……さいですか」

実況はやめてください恥ずかしい……！

アメさんはきょとんとした顔で私を見る。紫の眸が私を見ていて、居心地がかなり悪い。私はたまらなくなり、アメさんの目を手でふさいだ。

「もう寝てください……」

「？ はい」

手の中で、目を閉じた感触がして、手を離す。アメさんの眸は閉じられていて、深い紫色の睫毛が頬に影を落としていた。

不健康な程白い肌に、高く小さな鼻、シャープな輪郭に、薄い唇。肩までの紫の髪は、今は私の太ももに散らばっている。

端正な男らしい顔を見ても——今や何も感じないなんて何だろうか。私の乙女心大丈夫？

自分の頬に手を当てる。仄かに熱を持っているそれは、先ほどまで照れていた事を感じさせる。

突発な行動には驚いてしまうけども、色々慣れてしまってるのだ。これを、はじめて会った時位にされていたら、今も普通に思考ができなかっただろう。

慣れてって怖い。私の恋愛感情どこに行っちゃったの。……もしかしてこの世界に来た時にどこかに落としてしまったのでは……。

不意に、グラナートの事が脳裏に通り、胸が締め付けられるように痛くなった。

……こんな変な、辛いのが恋愛感情な訳がない。違う違う。好きじゃない。

——私、グラナートの事どう思ってるのだろう。

グラナートは、傍若無人でやる事なす事無茶苦茶な人だ。

求婚しておきながら、その関係を白紙に戻して。結局私の事が好きだったのかは迷宮入りで……。初恋の人の身代りだったのか、私の事を本当に好きだったのかも解らない。

——好きじゃないな、うん。

やはり、グラナートに感じている感情は典型的な『友達以上恋人未満』だろう。

なのに、私は少し意識しすぎな気がする。

ため息を吐いたと同時に、扉がノックされ、心臓が跳ねた。

「……え、は、はい」

首を後ろに回し、ハッと今の状況を思い出して顔面蒼白になる。

この状況を見られたら、100%誤解される。

「あ、アメさんちよっとすみません」

アメさんの頭を浮かし、横に移動してそのままソファに置く。大きなソファでよかった。クッションを頭の下にひいたが、アメさんは起きなかった。爆睡している。……今まで、どんな気持ちで寝ずの番をしてきたのだろう。そんな事を考えて、ちよっと目頭が熱くなりながら扉の元まで向かった。

コライユやグラナートなら、勝手に開ける筈だ。いったい誰だろう？

扉を開け――初めに目に入ったのは、中世な黒い服だった。腰まで伸びる黒ともとれる深緑の髪に、絶世の美貌。

「……エスメラルダさん？」

そこに居たのはエスメラルダさんだった。二日ぶりだ。なんだかすごく久しぶりな気がする。

「やあ、今晚は。今お時間大丈夫かな？」

白い肌に生える緑色の目を細めて、エスメラルダさんは微笑む。やはり頭には、手のひらサイズの謎の砲丸が生えているが、それすらも完璧なる美貌を作りだしている様な奇妙な感覚を感じた。

「はい、大丈夫です」

エスメラルダさんを部屋の中に入れて、アメさんの事に気がついた。……どうしよう。ここにはソファは二つしかなく、机を挟んで対になっている。アメさんが寝ているソファに座るか、アメさんの

寝顔が見える位置に座るかの二択である。

「……すみません、今ちょっとソファで寝ている方がいまして……」

「なら立ち話をしよう」

「すみません」

「いや、いいよ」

「はい」

私が頷いたのを見て、エスメラルダさんは私を見つめた。森のよ
うに、深い緑色の眸の奥にある感情は読み取れない。

「……現在、この国は危機に直面しているんだ」

「はい？」

「……知らないのかい？ オワゾー・ブルーアンベラトリス 青い鳥の女帝が、次々と国を破壊して
るだよ。そしてそれが、この国にま及んでいる」

「……………は？」

「外側から内側にかけてゆっくり、と壊されている。私は、何事にも
頓着することはないのだけど……、神だから。皆を救わないと」

「……はあ」

わあ、今私、神様と喋ってるんだ……。いやいや、ちょっと待
って。 オワゾー・ブルーアンベラトリス 青い鳥の女帝が国を破壊している？

そんな事は、ありえない。 オワゾー・ブルーアンベラトリス 青い鳥の女帝は今は異世界で、立場的
には私がソコにいるのに。

「聡明な君なら、私の言いたいことが——解るね？」

エスメラルダさんの唇が——三日月を描き、雰囲気が一変する。
肌が粟立つほどの殺気を浴びて、思わず一歩後ずさった。彼が言
いたい事なんて、解る訳がない。だけど、何かが危ないと言う事は解

る。警報が頭の中で鳴り響く。

「つまり、そう言う事だ。——君が、いつまで君で居られるか楽しみだよ。三分は持たないだろう。——青い鳥の女帝でも、ね。私、そう言う事は得意だから」

七三羽

そういうのってどうなの!?　なんて突っ込みができない程の、殺気だ。

まわりつく気持ちが悪い空気をぴりぴりと感じる。

どうすればいいのか見当もつかない。これ、ゲームだったらバトル突入のBGMでも流れてるんじゃないかな。……どうしよう、魔術なんて使えないよ。体術もできない。

ただ、攻撃されても私は自動回復機能が備わっている……。負ける事も勝つ事できないなんて、^{ゲームオーバー}負けるより辛い、かも知れない。

「……何の用だ」

いつの間に起きていたアメさんが、これまたいつの間にか背後に居て、隣に来了。何故か手にはガラスコップが。

足音も気配も感じなかった。さすが暗殺者!　……何かな、このテンション。

殺気の圧迫感が凄過ぎて、テンションが変な事になっている。ピンチの時こそ、ハイなテンションになるよね。

「……ふふ」

エスメラルダさんは優雅に笑うだけだ。

雰囲気的には、ダーク化して敵キャラになっちゃって感じだけど、あれこの人ルートではパーティメンバーじゃなかったっけ?

「用がないのであれば、また改めて来て貰えるか?」

「ここは、私の家。いや、どこでも私の家。……誰の許可も必要はないよ」

クスクスと楽しげに笑うエスメラルダさんの瞳には、光彩がない。
……変なルート入っちゃった気がするの、は気のせいかな。背筋が
凍る。

アメさんを見ると、冷や汗をかいていた。やはり、尋常ではない
殺気なんだ……。

「……そうか、では俺達は外で話すでしょう。失礼する」

「……ふふっ」

再び微笑み、エスメラルダさんは手を上げて、口を開く。
それだけで、剣を突き付けられたみたいにかけて、一歩後ずさる。

（……コロ、さん）

アメさんが小声で呟く。

（返事はしなくていいです、ただ聞いて……随ってください）

頷くのもどうかと思ったので、私は怖がるかのようにアメさんの
腕に触れる。

（……分がかなり悪いです。犬とライオン程度の差があります）

猫じゃないだけましだね！ ごめん冗談。それって、すごくヤバ
イのでは。

（……あなたは逃げて下さい。僕がしかけた瞬間、扉に向かって下
さい）

エスメラルダさんは形のよい唇と緑の瞳を歪めて、私達を見ている。

話しも全て聞こえていて、それでもわざと話させている様な感じがしてならない。

『君達程度の力では神様である私には勝てないよ』と言う心の声が聞こえる。

厨二病は力がある人がなっちゃいけないと思うな。

アメさんの手が動き、私の手を退けた。

数歩前に踏み出し、アメさんは手に握っていたガラスコップを割った。アメさんの掌から血が滴り落ちる。

瞬間的に懷中時計を取り出したアメさんは、何かを呟くと同時に私にアイコンタクトを送った。それが合図だと解り、私は駆け出す。後目に巨大化した懷中時計がエスメラルダさんへ振り下ろされているのが見えた。エスメラルダさんは私を一瞥した後、うすら笑いを浮かべてその場から動かない。

どうにも敵の策にはまっている気がするが、私は扉を開けて廊下に出て走り出した。

「……コライユ、とか呼んで来ないと、……」

エスメラルダさんは私を青い鳥の女帝だと疑っていた。私を捕らえて、なぜ国を破壊しているかを聞くつもりだろう。……尋問でもして。

そういう事得意って言ってたけど、その言葉にはもっと深い意味があるのでは……。考えたくもない。

アメさんが言っていたように、カタロン家の当主であるエスメラルダさんとアメさんには凄い力の差がある、みたいだ。

二対一でも勝てるのだろうか？ 確か、グラナートとアメさんを圧倒したイズムさんが序列三位エスメラルダさんは序列一位——無理じゃない？

いくらコライユを呼んでこようが、グラナートを呼んでこようが……エスメラルダさんには勝てないのでは？

なら、どうすればいいのだろう。

考える時間もない。策もない。何もない。

不意に数日前、エスメラルダが言っていた事を思い出した。

——君の魔術量は私より勝っているのだよ。世界一の魔力量を誇る私にね。

そう、確かそう言っていた。

ならば——私が魔術を使えば、どうにか解決する。

解決しなければ、エスメラルダさんからアメさんを助け出さなくては危ない。

理由は解らないが、それだけは解る。あの人は危ない。あの人は

——可笑しい。

歪んだ笑みをおもだし、背筋が凍る。まるで人間じゃないみたいだった。

「つ……グラナートに、頼み込まないと」

今考えれる方法はそれしかない。

いや、もしくはイズムさんに頼むという手もある。

最悪の二択だ。しばらく会いたくなかった二人。なんで喧嘩した当日に頼みごとをしに行く案件が出てきてしまうのだろう。

だけどそんな事も言ってられない。

私はぼんやりした記憶を元に、グラナートの部屋に向かって走り出した。

なんとなくここだと思う部屋の扉をノックした後、返事も待たずに部屋を開ける。

——ビンゴ。

しかもラッキー。運が悪いのかいいのか、どっちなんだろう。

中世ヨーロッパさながらの客室には、三人が居る。

「おう？ どうしたんだコロ」

「……なんだー？」

「……あら」

コライユ、グラナート、イズムさんの三人がそろっていた。事情を説明したら、妹であるイズムさんに妨害されるかもしれない。事情は話せない。用件だけ話すのもどうかと思うけど、それしかない

――

「……イズムさん」

「あ、あたし？」

イズムさんが首を傾げた。

「イズムさんとグラナートの魔力、どっちが純度高いですか？」

「……んなこと聞いてどーするつもりだ」

グラナートに紅い瞳で睨まれるが、構ってられない。もしイズムさんの方が純度が高ければイズムさんに解いて貰おう。グラナートに頼むと、ろくな事がなさそうだ。

「……微妙に、ソレの方が上よ」

「……………」

主人公が初めからスペックの高いゲームって、成長しないからやりがいがないと思う。

七四羽

コライユの魔力はグラナートどころかアメさんよりも下で、キスが条件ならば複合魔術で解く事も不可能。

グラナートを、説得するしか現時点で方法はない。

「グラナート……」

ベッドに座ってるグラナートは、めんどくさそうな顔で私を見ている。私がグラナートより強ければ、脅すというコマンドもあるけども……それは不可能だろう。

説得——そんなものどうすればいいのだろうか。

グラナートは少なからず私の為を思って禁術をかけている。

魔術を使えば、私の身体はなんらかの支障をきたす。らしい。それを止める為に……。

私にとっては有難迷惑でしかない。

「……グラナート、」

グラナートに一步近づく。

グラナートはやはりめんどくさそうだ。

「何でもするから禁術解いて」

「……なんでもー？」

食いついた！

今後の未来にすごく不安を感じるけど、これしかない。

グラナート達ではエスメラルダさんに勝ち、アメさんを助け出す事はできない。

私が、魔術を使わなければアメさんは——大変な事になるだろう。

「じゃー解くから……」

「本当?!」

「おー、解く。——んでももう一回かけるから一生解くな」

「……」

そんな酷い取引あってたまるか。

「……グラナート、本当をお願い……」

「何でそんなに解きてーんだよ」

紅い瞳で睨まれる。整いすぎた顔には怒りが浮かんでいて、かなり怖い。

「……な、何でも!」

理由を言えば、協力してくれるだろう。ただ協力の仕方は『自分も戦う』だろう。それでは意味ない。負け戦に参加させる訳にはいかないのだ。

「……んなざっくりした答えで納得すると思ってんのかー?」

「思ってない、けど」

「……あー、おうおう落ちつけ二人とも。……コロ」

「コライユ……」

頼れるのはコライユだけだ。

切望のまなざしをコライユに向けると、コライユは困ったように頬を掻く。

「コロはどうして禁術を解きたいんだ？」

「……こ、コライユまでグラナートの味方するの！？」

「味方っていうか、よ？ 禁術の件はグラナートから聞いたけど、コロとしては解かない方がいいだろ。コロが魔術使っても、コロにしか被害はいかないんだから」

「そ、それでもやりたい事とか、色々あって……！」

「魔術使ってみてえ、って気持ちは解るけど――」

「そういうことじゃないのっ！」

確かに単純なる好奇心もある。だけど、それだけじゃなくて、私にしかできない事をする為には、魔術は必須で……

「……私の、せいで起った問題は……私が、解決しなきゃいけないの」

アメさんは、たまたまあの場にいたから巻き込まれただけで、エスメラルダさんが用のあったのは私だ。

アメさんを巻き込んだのは私で、助けれるのは私しかない。それなのに、見殺しにするなんて――できない。無理だ。そんなことをして、アメさんが万が一にも命を落としてしまったら私はもう、立ち直れないだろう。

最悪の結末を想像して、目頭が熱くなる。

こんな事してる時間も惜しいのだ。

「ああ、もうっなんでもいいからっこの術解いてよ……っ！ 私の事、考えてくれてるならなおさらっ！」

「……コロ」

コライユが呆然と呟く。グラナートは依然として無然な表情で私と見ている。

解く気は、ないらしい。

グラナートは、私の身体の事は考えてくれてるだろう。でも、心までは考えてくれてない。当たり前だ。他人の全て知る事なんてできない。他人に心配されるだけでありがたい事だろう。

だけど、やっぱりグラナートのやってる事は私にとっては迷惑でしかない。

「……もう、嫌い……」

「……そーかよ」

「……大嫌い」

「あーそー」

グラナートはため息を吐いた。

「……うん、嫌い。……もう、顔を見たくない……声も聞きたくない」

忌々しいとすら思う。自分も、彼も。全てが腹立たしい。

あの時何で私は避けなかったのだろう。拒否していれば、こんな事にはならなかった筈だ。

驚いていたのもあるけど、きっとそれ以上に……してもいいという気持ちがあったのだろう。

「……私は頑なに否定してたけど……、多少は……グラナートの事、好きだったよ」

絶対友情だと思いながらも、心の中では少しでも彼の恋人になってみたいという気持ちもあった。と思う。それがただ単純に彼が好きだからか、ミーハー心でかは解らないけども——私は、心のどこかでは彼の恋人になるという未来も考えていた気がする。

「……だけど、もうダメ。もう嫌。大嫌い。グラナートなんて、一生恋人になんてならない」

「……フーン」

「こ、コロ……お、落ちつけって。やめろ、取り返しをつかないことになるぞ！」

コライユが声を荒げて、泣きそうな顔で私を見る。

「……グラナートを庇うの？　コライユは、味方だと思ってたのに

……」

「っ、ち、違うって、そういうんじゃない！」

「……別にいいよ、それでも。……そうだよね、元々私には味方なんていなかったんだから、元ある所に収まってって事だね」

家族も友達も何もいない異世界。

元の世界に戻りたいと、考えた事がない訳ない。

——このまま何もできずに部屋に戻って、アメさんが死んでたら……私は、もう……使命も何も捨てて、元の世界に戻ろう。

それは逃げだけでも、そんな世界で生きるのは耐えられない。

思わず笑ってしまう。異世界に来て、チートさながらの能力まで手に入れたのに私は、元の世界に居た時に対して変わっていないのだ。

七五羽

「……じゃあ、私は戻るから。急いでるの。ごめんね、お邪魔して」
「っ……！ ま、待ってコロ……っ！」

コライユに引きとめられ、私は歩みを止めて振り返る。

泣きそうな顔をしたコライユは、私の服の裾を掴んで桃色の瞳で探る様に私を見た。

「なに？」

「お、俺はコロの味方だから……」

「……無理しなくてもいいよ。グラナートについておいた方が、今後得だと思っし、そっちの方がいいと思う」

「……え？」

突き放すような冷たい言い方をしてしまったと自己嫌悪する。

「ごめん、……今日は冷静に話し合えそうもないや。また今度にして」

「あ……」

コライユの手を離して、踵を返そうとした時——コライユの手が、私の腕を掴んだ。

「……？ ごめんコライユ、私急いで——?!」

小さな呟きが聞こえたと思えば、桜色の何かが視界を奪い、唇に柔らかな何かが触れた。

遠くでグラナートとイズムさんの焦った声が聞こえる。

少ししょっぱいソレが離れた瞬間——パキン、と何か割れた。
その感覚は、グラナートに禁術をかけられた時と同じだった。だけ
ど逆に、体中に力が溢れる感覚。

——解け、た？

驚いてコライユを見ると、泣いているコライユと目が合う。

「解いたよ、解けた……おれは、コロの味方だから……だから、だ
から嫌いにならないで、俺何でもするから……！」

真摯な表情で私を見つめてくるコライユの瞳からは次々と涙があ
ふれて、零れ落ちて行く。

「ほんとうに、何でもするから、だから、やだ……捨てないで」

「捨てるって、私……そんな」

そんなつもりで言ったんじゃない。もっと軽い気持ちで言ったの
に……。

呆然としている私をよそに、大股で歩いて来たグラナートがコラ
イユの首元を掴んだ。

「て、つめー……！ てめーが、それしたら……！」

「っ……う、あ……でも、おれ……」

「でもじゃねーよ！ くそ、やろう」

忌々しげに吐き捨ててから、グラナートが私を睨む。

コライユはずっと泣き続けていて、イズムさんはぽかんと私達を
見ていたが、キツと私を睨み、こちらに来て——私の頬をぶった。

「え……っ、痛……」

「あ、んた……ねえ……！ た、たかがあんたの我が儘程度で、な

んで、コライユ様が……!」

怒りに震えてるイズムさんの手が再び私をぶとうとした時、コライユが私のイズムさんの間に割り込んだ。

「お、俺はいい……から、へへっ、大丈夫。大した事ねえから……コロは、したい事があったんだろ？俺達が分かんないだけで、それはコロにとってきつと大切な事だと思うぜ。だから」

「だから何だ。てめーが……、……ツチ、うざってー泣くな気味悪い」

「ごめっ……こ、コロ」

コライユが振り向いて、私を見る。ずっとぼろぼろと泣いているコライユは、無理矢理微笑む。

「急いでるんだろ、ほら行けよ。へへ、ここは俺に任せて先に行け
ってか？あは……」

「……ん、うん」

コライユの様子が気になったけど、私には他にしなければいけない事がある。今はそれが最優先だ。

「ごめんね、ありがとう……」

「ううん、気にすんな」

いつも通り、コライユは微笑んだ。

胸に引っ掛かりを感じながらも、私はアメさんの元へと向かった。

「アメさん……！」

部屋に飛び込み、アメさんの姿を探す。

アメさんは――まだエスメラルダさんと闘っていた。
ほっと息を吐く。よかった、死んでない。

「……なっ、なんで来たんですか?! も、戻って下さい!」
「ふふ、来ると思ってたよ」

楽しげにエスメラルダさんは笑う。深緑の髪が揺れて、頭に耳み
たいにのっている砲丸がぴこぴこ動いた。

彼がはずんだ声で呪文を唱えた時、扉が音をたてて閉まる。――
え、閉じ込められた?

「て、敵の思うつぼじゃないですか……! なんで戻って来たんで
すかっ!」

アメさんに怒鳴られる。私はアメさんの近くまで駆け寄った。

「なんでって、その……だって私の所為で……」

「二人死んでは意味がないでしょう!」

「面白い事を言うね。私が君達を殺すとしても?」

「「は?」」

神の一言とも言える言葉に、私達は目を見合す。
殺されないの? 負けたらゲームオーバーじゃないの?

「殺す訳ないだろう？ ……ふふ、記憶だけ書きかえればまた使えるのに、そんな勿体ない事しないよ」

前言撤回……悪魔だった。

負けたら、死ぬ所から記憶を消されて心無くされて、使われる。絶対負けられない。

幸い、アメさんとエスメラルダさんの戦力は天と地程違うという訳ではなさそうだ。勝ち目はある。

意気込み、私はエスメラルダさんを睨む。優雅に笑い、エスメラルダさんは片手を上げてた。

「ふふ、単純な思考が手にとるように解るよ」
「へ？」

「……お楽しみは、取っておくべきだろうか？」
「っ、コロさん！」

アメさんが私の一歩前に出て、私を背に庇うのと、エスメラルダさんの呪文が聞こえたのは同時だった。

七六羽

「……ん？ え……？」

「目が覚めたかい？」

「！」

薄暗い部屋でエスメラルダさんに顔を覗きこまれて、後ろのに仰け反ろうとするが壁にぶつかり不可能だった。手を動かそうにも、手には手錠が……。

「な、なんですかこれ！」

「拷問は自由であつたはいけないからね」

「……ご、拷問」

生唾を飲み、ある事に気づく。横にアメさんが居て、ぐったりして――

「！ あ、アメさん……！」

「……」

「ああ、彼なら一応そこに置いてるだけだから。どちみちあの傷じや、君が――私の言う事を聞かなければ助からないだろうね」

「そ、そんな嘘……」

「わざわざ何で私が嘘を？ ああ、あの爆発を受けて無傷なら、彼は化け物って事になるけど……」

「爆発……？」

「……ふふ、いいの？」

「え？」

「こうやって話している間にも、彼はどんどんと死の世界へと旅立つ準備をしてる訳だけでも」

「……っ」

アメさんを凝視する。だけど薄暗くて何も見えない。
床の手錠にくくられている手に、何か生温かいものが触れる。
鉄の臭いが鼻孔をくすぐり、その後に嗅いだ事もない気味の悪い
臭いがした。

「……な、に、この臭い」

「人間はやはり食用ではないのかもね。焼くだけでこんな臭いがするなんて」

「っ」

爆発が起きて、アメさんは私をかばった。

きつと防御魔術を使っただけで間に合わなかった。もしくは、足りなかった。力の差がありすぎて――

「わたし、何の為に……力を……」

無理言っただけを戻したのは、アメさんを助けたかったからなのに、結局私は助けられている。コライユを泣かせて、グラナートに喧嘩売ってまで得た力は……無意味だった。

いや、そんな事はない。私がこの人に勝って、アメさんに回復魔術を使えば――

「私に勝つのは可能かもしれないけど、その時は……彼は死んでるだろうね」

「なっ――」

「君は利口なのか馬鹿なのか解らないな。彼を助けたいなら、君は自分を犠牲にすべきだ」

「だ、だから私は――」

魔術を使うと危ないとグラナートに止められても、例え何か私に支障をきたしても、仲間を守りたいと、無理矢理力を戻した。

仲間を助けられるなら犠牲になってもいいと思って……

「君は魔術を使う事で犠牲になろうとしているが、それが何になる？」

「……え？」

「君が魔術を使わなければいけない場面なんてない。魔術によって自分の身体を犠牲にする位ならば、自分に出来る事をもっと考えてほしいね」

「……自分にできる事……？」

エスメラルダさんが優雅に笑う。

「この場合、彼を助けたいならつべこべ言わず私の言う事を聞く——というのが最善の策だよ。私の言う事さえ聞けば、彼は完全に回復させてあげよう。君が魔術を使うより、簡単に君が犠牲になって彼を助けられる方法だよ」

「……言う事を、聞く……って、何の言う事を」

「あれ？——君が、犠牲になってもいいんだろう？ どう犠牲になるかも解らないのに君は、仲間を振り払い魔力を取り戻し、魔術を使うつもりだった。……のだよね？」

「……っ」

「なのに、何で私の願いの内容を聞きだそうとするのかな？——結局、口だけで本当は魔術なんて使うつもり、なかったんじゃないのかい？」

「ち、が——！」

「こうやって話せば話す程、彼の生存率は低くなるし——」

身を屈め、エスメラルダさんは私の耳元で優しく囁く。

「――本当に魔術を使おうと思えば、使う機会はいくらでもあったよ」

「……あ」

その言葉に、心臓が早鐘を打つ。

エスメラルダさんの言う通り、だ。

私は使おうと思えば、何時でも魔術を使えた。

けどそうしなかった。でもそれは、私が犠牲になるのが嫌だ、という感情よりは――どうにかなる、という適当な思いからだ。今まで、どうにかなってきたから、私が何かをしなくても、いいと思っていたのかもしれない。

「偽善は悪い事ではないと思うよ。偽物でも、善があるのだからね。さて、どうする？ 偽善でもいいから彼を助けるなら――力を貸すよ」

エスメラルダさんが優しく私の問いかけ、私は弱弱しく頷いた。

アメさんは私の目の前で、エスメラルダさんの回復魔術によって助けられ、従者によって医務室につれていかれた。私も手錠を外して貰い、エスメラルダさんがひょいっと私を抱きあげる。

「え……？」

「今日は疲れているだろう？ ゆっくり休みなさい？」

私の目をエスメラルダさんが覆い――私の意識は闇に落ちた。

七七羽

夢を見た。

あの、王様の夢だ。

軟禁されて、身代りとして可愛がられる生活。

とても辛かった事を覚えている。

今度も、また同じ事になるのだろうか？

私は、事あるごとに選択肢を間違っている気がする。

「――て、お――きて」

声が聞こえる。鈴みたいな綺麗な声。

「……………あ、起きた？」

にへり、と朗らかな笑み。深緑の長い髪を耳にかけ、澄んだ緑の瞳を細める。

「……エスメ、ラルダ……さん？」

「そうだよ？　おはよう、――コロちゃん」

エスメラルダさんが私の額に口付ける。

ぎゅっと目を開き、起き上がって彼と距離を取った。

「な――」

「オハヨウ、の挨拶はお気に召さなかったみたいだね」

楽しげに笑うエスメラルダさんに敵意はない。

「あ……の、アメさんは」

「彼なら医務室でぐっすりお休みだよ」

「……そう、ですか」

よかった。私の所為で、死なれては困る。

ほっと息を吐き、エスメラルダさんを見つめた。

同じ女顔なのに、彼とは正反対に感じる絶世の美貌。

「……それで、あなたの願いとは……なんですか？ ……私を、殺す事ですか？」

肉体的ではなく精神的に、私の人格を殺し、私を利用する。

「ふふ、そんな事はしないよ。私ただ、ね——」

エスメラルダさんが私の傍に寄り、顔を近づけた。

背は壁についている為、逃げられない。

「君を私のモノにしたいんだよ」

いつも通りの優美な笑顔を浮かべて、エスメラルダさんは私の頬に撫でる。

「……物……？ ……そうですか」

やっぱり物じゃないか。

「ふふ、勘違いしているみたいだけど、君を道具として使うつもりはないからね」

「……え？」

「そうだね、小指を立てて『これ』って言う感じかな？」

「……それって、恋人って事ですか……？」

「端的に言えばそうだね。だけど私は、恋人ってあまり好きじゃないんだよね」

「は？」

彼が私の手を取り、小指を絡ませた。

「……明確な理由はないのだけど、終わり——を表しているような気がしないかい？ 恋人、という響きが」

「……人はいずれは別れる、みたいな事ですか？」

「そうだね。……まあ、結婚しようが別れる人はいる。完全な絆なんて存在しない」

「……家族、は？」

「ふふ、君は幸せな家庭で育ったのかな？ 親を捨てる親も、親を捨てる子も捨てる程いる」

「……そう、ですね」

「絶対的な絆に、必要な物を私はまだ知りえてないけど——君とならそれが成し遂げれると思うのだよ」

真剣に見つめられ、私は身動ぎする。

絶対的な絆なんて、この世に存在するのだろうか？

「……私の願いは、君と永遠の絆とやらを見つける事。——受理してくれるよね？」

「……不受理できないんでしょう？」

「ふふ」

可愛らしく微笑み、エスメラルダさんが私を抱きしめる。いいにおいがした。

もうなる様になれ。

私は彼に逆らえない。アメさんの命は、彼の手の中にある。こういう事はもう経験済みだ。あの、王様で……。だから、今度はきつとうまくやれる。

「……ああ、そうだ。聞いてなかったね」

「何を、ですか……？」

「君は女の子が好きなのかい？」

「……………は？」

なんですか、ソレ。

「……いや、そうであれば女の子になった方がいいのかな、と思つてね」

「は？ ……性転換の魔術で、ですか？」

「ふふっ、違うよ」

私から体を離して、エスメラルダさんが微笑んだ。

「私は過去の神々をも超える素晴らしい生命体でね、性別というものが存在しないのだよ。人知を闊歩しつつ撥ね退ける第三の性別、人間を超えた第二の神。ふふふ」

「……………えーっと」

「ふふ、君にも解る様に説明すると、私には精獣の血が入っている。という事かな」

「……精獣の……？ クルさんと同じような感じですか？」

あの人も確か、半精獣と言っていた。

「……うーん、少し違うかな。まあ、彼とは血が繋がっているけど

ね」

「……………は？」

「拝借した精獣の血が、彼の御父上の血でね」

「……………はあ、似てませんね」

「ふふ、そうだね。仕方ないよ。彼の人間の血が少ないからね。母親が人間と精獣のハーフ、父親が精獣だから。まあ、現在の魔医術ならば、彼を人間にする事も可能かもしれないけど」

「……へえ、それは少し見てみたいですね」

全く想像できない。

そういえばオッサンって自分で言ってたから、少なくとも三十は過ぎているのかも？

ちよつとイケてない、寝ぐせつきっぱなしの冴えないオジサンかなあ……。

「ただのトレードだから、顔面は好みで選べるとおもうよ？」

「……！ ……エスメラルダさんって、ところどころ、人の思考読んでません？」

「ふふ、私は神だからね。他人の思考なんてこの辺に文章化されて表示されているよ」

くるくると、私の頭の横辺りで指を回した。

七八羽

「お兄様！」

部屋に飛び込んで来たのは、イズムさんだった。エスメラルダさんは立ち上がり、彼女の近くに行く。

「……やっぱり居たわ」

イズムさんが私を睨んだ。イズムさんを見て、頬が痛くなった気がする。

「お兄様この女お借りしますわよ」

「ダメだよ」

「ありがとうございますでは——え？」

「ダメ」

きょとんとイズムさんがエスメラルダさんを見た。

「人の思考なんて私には手に取るように解るんだよ」

優美に発せられた言葉に、イズムさんが青くなる。え？ 知ってたんじゃないの？

「だから一言言わせて貰うけども……私の旅は延期、いや中止になったよ」

「え……？」

「それと、君との結婚もね」

へっ そうなんだ。いつのまに。

「……も、もしかしてその女と……」

「察しがいいね」

「……………あたしは嫌です」

えっ、エスメラルダさんと婚約破棄するために、グラナート誘惑までしてたのに!?

「お兄様との婚約破棄は嬉しいです。ですが、その女が姉妹になるのは耐えられません」

……ものすごく嫌われている。

「ふうん？ それで？」

「だから、その女はこの家から出して下さい。同じ空気を吸うのも嫌です」

そこまで嫌われてたなんて……とブルーになった。

「君は、この屋敷に死望者を連れ込んでいるらしいけど？」

「そ、それは、」

「そんな君が私に、何か言う権利はあるのかな？」

エスメラルダさんの言葉に、イズムさんは下唇を噛む。

死望者ってグラナートの事だよね……。謝りたいな、グラナートに……。

気が動転していたからと言って、あんな事を言うのはさすがにひどい。

「わかりました。結婚も、追い出すことをひとまずは置いておきます。ただ、その女と話をさせて下さい」

「……どうする？ 彼女が話したいらしいが、私はお勧めしないね。彼女の運んできた調べは、君にとって辛いものだからね」

「私にとって辛い、もの？」

「……このやり取りを聞くのも面倒だわ」

彼女がため息を吐き、手を握りしめる。その拳は怒りに震えていた。エスメラルダさんをため息を吐く。

「あんたの我が儘で、コライユ様が血以外を使って禁術を解いた犠牲——寿命十年分」

「え——？」

「アンゲルス家の平均寿命——四十歳。これだけよ。……二度と、コライユ様に近づかないで」

イズムさんは踵を返し、部屋を去っていった。

「平均だからね、コライユ姫はもしかすると50まで生きるかも知れないよ？」

優しく肩を抱かれる。

彼女の言った事が本当ならば、私は……。私……。

「こ、コライユに会いたい。あわせて下さい、エスメラルダさんっ！」

嘘だと言って欲しい。

彼女が、ただ私を嫌いだからついた嘘だと。

「……ふむ、確かに挨拶は必要だね。君はずっとここにいるが、コライユ姫は後に国に戻らなければならない……。完全なる絆に必要な条件として……他者と接触させないと言うのがあるのだけだね」

クスクスとエスメラルダさんは楽し気に笑う。

それだと、私は一生外に出れない事になるのだけど……。それは、ひとまず置いておこう。今気になるのはコライユの事だ。

彼女が私のために、そんな事をしてしまったのなら私は責任を取らないといけない。

ズキズキと胸が痛くなる。

「コライユ姫をこちらに呼んでくるということでもいいかな？」

「はい、お願いします」

エスメラルダさんが出て行ってもから、数十分後、扉が開いた。ずっと痛い胸を押さえて、扉を見る。

先頭にはエスメラルダさんがおり、その後ろにはコライユと――グラナートが居た。

「……よっ！」

コライユが朗らかに笑い、手をあげる。いつも通りだ。

「コライユ、あの」

ベッドから立ち上がり、コライユに近づく。

「あの、あのっ」

「へへへ、どうした告白か？」

コライユは本当にいつも通りで、あんなことは嘘だと思える。だけど、あの時グラナートは異常なまでにコライユを怒った。その理由は禁術を解いた事より解いた方法にあったとしたら――しつくりくる。

「禁術――」

でも、それを私が聞くの？

コライユにとって、私が一番その事実を知って欲しくない人物なんじゃないの？

「……っ」

「コロちゃんよお、もしかして――」

こてん、とコライユが首を傾げた。

「イズムちゃんが言ってた嘘にひっかかったやつた？」

「え？」

「あはは、バカだなあ。俺のくそおやじあんな外見で40後半だぜ？」

「へっ!？」

「それに、あんな単純な魔術で寿命10年も取られる訳ねえじゃん」
楽しそうに笑うコライユ。本当にそうなのだろうか？

——そんな、訳がない。イズムさんが、私に嘘を吐く事をわざわざコライユに伝えたとして、こんな……私が傷つくような嘘をコライユが許可するわけがない。

ああだけど、それを……私のための嘘を私が暴くなんて……できない。私には……。

それが結局は逃げだとしても——。

七九羽

唇が渴いてひつつく、何も言えない。
コライユはずっと笑顔で私を見ている。

「おい」

「えっあ、グラナート……」

グラナートがぐいっと私の頭を掴み、無理矢理自分の方に向かす。
いつもに増して乱暴なグラナートに怒ってるんだろなって事が
解る。当たり前か。

「……あの、ごめ——」

「それはいい」

「え？」

「謝んな。もう終わった事だー」

心底どうでもいい様な顔をしてから、グラナートは真面目な顔で
私を見た。どうでもいいんだ……。
なんだろう、嫌な予感がする。

「それよりよー」

「は、はい」

グラナートの手が私からパツと離れたかと思うと、頭を撫でられ
た。

「え……？」

「お前はここに残るんだろー？」

「う、うん」

急なグラナートの行動に私は思わず照れる。
何なのだろう急に。

「じゃーさー」

「う、うん」

私の頭を撫でていた手は止まり、離れる。

顔を上げると、いつも通り口端を上げたグラナートが目映った。
エスメラルダさんとは違う、中性的で絶世の美貌。

桜の蕾みたいな唇が開かれ、ガーネットの瞳は細められる。

「俺の事は忘れろよー」

「……………え？」

「白紙に戻ったんだ。俺とお前はまー友達位だろー？」

「そ、そうだけど…………」

「俺は…………やらねーといけねー事があるし。まーそーいうことだ」

「や、え、ぐ、グラナート！ 何言ってんだよテメーは！」

ぽかんとしていたコライユがグラナートに食ってかかる。やらな
いといけない事？

それとグラナートの事を忘れるのはどう関係あるのだろう。

グラナートはめんどくさそうにコライユを往なし、部屋を出て行
ってしまった。

「え、…………あ」

うろたえる私に、イズムさんがにこやかに近づく。先ほどの不機
嫌さはカケラもない。

気分屋さんだ。

クスクスと笑っているイズムさんは私に身を寄せて、耳元で囁く。

「アレはもうあたしの物よ、身も心も……ね」

「……え？」

楽しそうに瞳を細め、イズムさんも部屋を出て行く。

「あ、おい！　こ、コロまたな！」

慌ててコライユも去って行った。

ぽかんとした私と、相変わらず微笑んでいるエスメラルダさんが残る。

エスメラルダさんがポンポンと励ます様に私の肩を叩き、にこやかに笑った。

「あの男とイズムの記憶を消したいのならば、いつでも言ってね」

「……結構です」

残念そうに肩をすくめて、エスメラルダさんは私の肩を抱く。

「さて、私も……少しヤボ用があってね」

「……はい」

「帰るのは遅くなるけれど、寂しくない様に何か送っておこう」

いい子にしているね、と私の頭にキスしてからエスメラルダさんも去って行った。

「……もう、何かなんだか」

ため息を吐いて、扉を見つめる。

グラナートの関係は婚約者（仮）から、友達になり、赤の他人に……。

結局、元に戻ってしまっただけだ。

ソファに座り、天井を見上げる。

手から、ぼろぼろと色々な物が零れ落ちている気がする。

それを引き起こしたのは全て私だ。

どこから間違ってしまったのだろうか……？

しばらく考えていたら、扉がノックされた。

『はい』と返事をして、立ち上がろうとすると、力が抜けたようにそのまま座り込んでしまう。

ノックの主が扉を開き、小さな子供がひよこりと顔を出す。

純白の髪に、純白の瞳。色素がないかの様なその子は、蒼い服を着ており、どこかの聖霊さんみたいだ。

端正な顔が歪み、瞬時に私に駆け寄る。見かけによらず俊敏だ。

「大丈夫か?! どないした!」

……なんで関西弁?

「あ、大丈夫です。ちょっとふらっただけだから」

「……ほなええけど」

「ありがとう」

手を差し伸べられて、その手に自分の手を重ねる。子供体温の温かい手。

私は再びソファに座った。

「あ、あなたもどうぞ」

「……さよか」

彼はそのまま私の横に、少し離れて座る。

「……あなたは？」

「……エスメラルダに言われて、来ただけや」

「そっか……ごめんね」

「何で謝るんや」

「私のせいで、時間無駄にさせちゃってるでしょ？」

その子は、じつと無表情で私を見つめた。

羽のように真っ白な瞳が細められ、そのまま彼は私から視線を外す。

「無駄か無駄やないか決めるんは俺や、勝手に決めんな阿呆」

ぶすつとそう言ってから、色白い肌を朱に染め、そのまま無言を貫き通した。

「勇者のインモラル？」

「おいグラナート！ さっきのどういふことだよ！」

「うふふふ、コライユ様。そちらに関しては私が解説してさしあげますわ」

楽しそうにくるくる回りながら、女は歌う様に語る。

「このバカは私の『頼みごと』によって人を殺し、穢れた身体と心であの子と接したくなかったのですわ……ね」

「……うつせーしね」

こいつは何で俺の心が読めんだ？ 気味悪い。

コライユは驚いたように俺の事を見つめてきて、余計に気味が悪い。

「この男は自分の優しい部分や綺麗な部分を見せるのを嫌いますからねえ。ピュアボーイ？ 偽悪者？ ぷくくくく、恥ずかしいでしょう、グラナートくううん？」

「死ね」

女を一瞥してから速足で歩いて行く。後ろからは女の馬鹿笑いが聞こえる。くそ、なんだってんだ。こんな女と以心伝心なんかしたくねー。

後ろでコライユが『え、人殺した事ねえの！？』という呟きが聞こえた。ひでー奴め。なんで普通に暮らしてる人間が人殺すんだよ。殺そうと思えば殺せるけど、だからって理由なく殺すかは別だ。そ

「……んだよ」

「ごめん。俺……お前の事誤解してたかも……」

「いーよ別に、そーしてたし」

誤解されて、離れて行く奴がいるならそのままでもいい。めんどくせーし。俺には、ジーの家族やディアだけいいればいい。わざわざ他を招き入れる必要はねー。

それでも居る奴だけ居ればいい。……今まで全滅してるけどよ。アメは契約で一緒にいるだけだし、コライユはコロについて行くだろうし、唯一一緒に居そうなコロは俺の手で縁切っちゃったし……。

すぎた事で後悔しても仕方ねーか。

「……で、でもさ」

「あ？」

コライユが上目づかいで俺を見る。ずっとと思ってたけど、こいつちっけーよな。俺との身長差30cm位あるんじゃないか？

「その、あれじゃん、それと、あれとは別っーか。そっちに至っては、その最低っーか」

「……そっち？」

何の話してんだコイツは。

「ああ、グラナートがあたしの物になったって奴ですか？ 身も心も、ぶはっ、ぶふっ、うふふふ」

「……………」

コライユは、俺の顔色をうかがう。

……ちょっと待て。

「おい、その気持ち悪い聞いただけで吐きそうな狂言信じてんのか？」

「え？ 違うのか？ 二人とも仲良さそうだし……」

「ちげーよっ！ こいつと交尾するくれーならゴミ箱と交尾した方がましだ」

「ゴミバコ！？」

「あたしだって、これとやる位ならウジ虫とした方がましですう。これとキスするなら脂ぎって炎がぼおぼお燃えるコンロにキスした方がいいですう」

「はっ、てめーとキスするくれーならマグマにキスした方がましだ」

「どっちも火傷するじゃんっ！ 顔面焼けただれるぞっ！」

「「それくらい無理」」

はもって互いに舌打ちする。

「……仲が悪いのか、いいのか……。理解に苦しむぜ」

「仲良くねーから、キモイ事言うな」

「そうですね、こんな使い捨てたティッシュ以下の男と仲いい訳ないじゃないですか。お互い利用してるだけですから。……あたしが心から好きなのはコライユ様だけです」

「……う、え、あ……あはは」

女に手を握られ、コライユは女から目を反らして俺を見る。『助けてくれ』と心の声が聞こえるが無視だ。自業自得だろ。それに人の関係に口出すのもめんどくせーし。

黙って二人を見てると、足音が近づいて来た。

「イズム様……、御話し中申し訳ありません」

「……？　なによ、あんた達」

いっぞやに見た黒服の奴だ。二人おり、そのうち1人が女に近づく。

（……ほ、捕虜が逃げ出しました）

「はああ！？」

「ああ！？」

小声で話したつもりだろうが、俺には丸聞こえだ。俺が叫んだ事にびっくりした黒服の肩を掴む。

「おい、その捕虜……ディアじゃねーだろうな」

嫌な予感がする。

……あいつが、1人でカタロン家の護衛共から逃げれる訳がない。ディアは回復魔術しか使えねーし、体術も使えない。あの杖も盗られただろうし、他の武器は使えない筈だ。

黒服は俺から目を反らす——凶星かよ。

「……ちよっとお待ちなさいな。あの無能を逃した？　無力な赤ん坊1人に、何をしているの……？」

凍えるような声を聞き、男から手を離すと、それは吹っ飛び、床に叩きつけられる。

女の魔術だろう。……ディアに対する侮辱の貸しは後でしつかり返すからな。

「……そ、その、え、エスメラルダ様が……」

冷や汗をかいているもう一人の黒服がしどろもにそう言う。

……当主が、なんだ？

「その、ハンスヴルストの実験にぴったりだから……と」

「……実験って、あの魔力を他者から抜き取り、植え付けるというアレかしら？」

「はい……そのようです」

「おいどーいうことだ」

そんな実験聞いた事がねー。最近行われてる実験か？

危険が伴う物なら、すぐにでもあいつを奪還しなければならぬ。

「魔力は人によって違う。色が違うと言えいいのかしら、それは解るわよね？」

「あー」

「他人から奪える魔力は限度があり、人から奪った所で純度が上がる訳ではない。ただ魔術が使える量が増えただけ。それを無理矢理、魔力を全て奪い……他の人間に植え付け、植え付けられた人物の純度を上げる実験よ」

「……よくわかんねえけど、それって危険なのか？」

ずっと黙ってこちらを窺ってたコライユが俺達を交互に見る。

「……すぐに、死が訪れる訳ではないわ。ただ、身体に馴染んてが絶望的ね。半年経てば、寿命が一年縮んで、一年すれば三年縮む、二年すれば下手すれば十年程度は縮むと思うわ……。といっても、それらの計算もまだただの計算にすぎないから、彼がどうなるかは……」

「……その時点で、やべーよ」

あいつは禁術を使って、二十までしか生きられない。今は十八で、半年で十九で。……その時点で、あいつは死ぬ。

最悪だ。一年、縮まる。あいつを救う確率が半分以下になる。

「まっ待てよ！ そんな危険な実験で、ハンスヴルストみてえなでかいところなら、契約が必要な筈だろ！？ ディアは王子様なんだし、国際問題になるぞ?!」

「……お兄様の事だから、もうすでに契約も許可も取っているはずよ」

「ふふ、あたりまえだろう？」

「?!」

穏やかな声に振り向けば、そこには当主が居た。

髪をなびかせ、楽しげに嗤っている。……こいつを瀕死まで追い込めて、ディアの場所を聞き出せば一発か？

「無駄だよ。君と私の實力は、私の方が少し優れている。といって、君が血を流し、私は武器無で……だけどね」

「……………、ためーを殺すのは時間の無駄ってことかー」

「そういう事」

「……ディアは、ハンスヴルストの研究所にいんのかー？」

「そうだよ？」

……わざわざ自分にとって不利益になる情報を言う。

その心理は何だ？

ハンスヴルストの研究所、確か第七位まであった筈だ。その内、

第七、第五、第四は復活した青い鳥の女帝に壊されたオワゾー・ブルーアンペラトリスと情報が入ってきてる。

じゃあ後四つの中から探す。分担はどーする？ アメはどこ行っ

た？ 探してる方が時間の無駄か。

コライユと二人、いや契約違反で女に協力を求めて三人で四つ。俺が二つ周るとしても、研究所同士には距離がある。

実験は何時に行われる？ もう行われてる？

探すのも時間がかかる。それ以外の方法……！

「……研究所と、ここは繋がってんのかー？」

「ああ、その通り。ここが研究所の核になっているよ。全ての管理がここで行われている。だけど、全て最新の機械を使っている。…君の知らない様な、ね」

「………ご親切にどーも」

優雅に笑うそいつを見て、さっきの謎が解けた。

——こいつ楽しんでやがる。

俺が、ディアを助けられるかどうか……ゲームしてんだ。多分、退屈しのぎ程度に。

殺す。……こいつ、ディアをたすけた後に絶対殺す。

「ふふ、実験は三十分後に行われるよ」

「え、エスメラルダ当主！ ま、待って下さい！ 彼の本国につ、本当に許可は取れているのですか！？ そのようなこと、許すわけが——」

「取れている。彼に禁術を使わせて、この実験まですれば彼は後一年の命になるうとも、アレが人並みに使えるようになればいい、と彼の御父上は仰っていたよ」

「………なっ」

コライユは絶句している。……そーいやこいつ、知らなかったか。くそ、あの最低の首長が……。

自分の息子だろうが。やっぱり親っーのは、子供を道具としか使

わねー生き物なんだろうな。

「息子だろうと、関係ないよ。あの人は道具として妻を買って、道具として息子を作った……失敗作だったけどね」

「……てめーを殺すのは後だ、こんな無駄な時間を過ごしてられねー」

三十分で全てを周るのは無理だ。女に協力して、黒服を動かしたとしても……。

許可が取れていなければ、強行突破になる。そして当主が許可を出さなければ、序列三位の女ではどうにもならない。

……なら、ここで完結させなければならぬ。

「はい」

「あ？」

薄っぺらい紙を渡され、それを見る。地図だ。しかもこの家の。

……なんだ、これ。★がついてんぞ。

「そこがね、ハンスヴルストの全ての機械の核。それをどうにかすれば、研究室のブレーカーが全て落ちて、君のお姫様は助かるよ」

俺に分がよるぎる。こんなの勝負になってねーんじゃねーか……？
いや、あのカタロン家の当主が……簡単に、勝ちを取らせる訳がない。

「緊急スイッチとかはないよ。ハッキングして、無理やり落とすか……他の方法を使うか。ちなみに、壊した場合……機械は止まらない。その時点でゲームオーバー」

「……」

「この機械というのは、ハンスヴルストが作ったものでね。……カタロン家以外にはない。書物も出ていない。使い方は研究者に教えているが、その研究者は全て席を外させているし——一つ操作を間違えば、12桁のパスワードの入力場面がでてくる」

「そ、そんなの無理に決まっていますわ!」

「そうだろうね」

ずっと楽しげなそいつが頷く。

「それでも、彼を救えたのなら私は君について行こう。君は、私の暇を取り除いてくれる存在だろうからね」

「……いらねーからディア返せ」

「それは無理だね。私は退屈で退屈で死にそうなんだ。彼女は、力こそあるものの彼女自体はあまり面白い人間ではない……。彼女の、ことごとく間違った方向に行く才能は面白いとは思うし、愛しいけどね」

彼女、コロの事か……。あいつは変態ばかりに好かれやがって。まあいい、ヒントはこれ以上ないだろう。

踵を返して、コロの部屋に向かって走った。あれ、しかない。：

……くそ、気のりしねーが、これ以外思いつかねー。

……肝心な時に、俺は他人を使うのか。それはあいつらの生き方と……どーちがうんだ。

八十羽

「ねえボク……そういえばお名前は？」

「……………、マー——」

彼が言葉を発しようとした瞬間——すごい音を立てて扉が開いた。扉は壊れて、情けない姿になっている。

「え……！？　ぐ、グラナート！？」

扉を破壊した人物はグラナートだった。グラナートは私に速足で近づき、私の肩を掴んだ。

その顔は、前髪に隠れて見えない。

「え、あ、あの？」

前髪の隙間から紅い瞳でグラナートが私を見つめる。どきつと胸が高鳴り顔が紅くなりそうになった。

「さっきは、俺の事は忘れろったけど——訂正する」

「え、う、うん……」

訂正……？　他人から、以下になる事はない。ということは、戻るの？　友達に、それとも婚約者……に？

どきどきとグラナートの言葉を待つが、グラナートは苦い顔をしたまままだ。

「……………、コロ」

「うん」

関係の修復にしては、やけに顔が暗い。

先ほどまで、何故か期待に踊っていた胸は嫌な予感に音を立てる。

「俺を憎め」

「え……？」

予想外の言葉に、目を丸くする。

「……ディアを助けるためには——お前を道具として使うしかない」
「どうぐ……？」

「古代には人間を武器にして、戦う事もあったちゅーやつやろ。
今は廃止されてけどなあ、武器になる人間の負荷が高いし。……多用したら、身体が不自由になんねん」

足を組んで、グラナートと私を見ている白い子が解説してくれた。
……多用したら、身体が不自由になる？

「……だが、それは普通の『この世界の人間』しかも魔力が高くて……だ。お前の身体なら——一回使っただけで、身体が不自由になる可能性が高い」

「ちよ、ちよっと待って……、え、あの、そ、その」

「魔力の高い人間を媒体に使う事で、魔術は格段に性能を上げる。
血の通っているものは、普通の武器よりも二倍の力を発する。リスクが高いからな」

「それは普通の魔術の場合やろ」

白い子が足を組み治し、冷たい目でグラナートを睨み、こちらに歩いてくる。

ついていけない私は二人を黙って見つめた。

「……そーだ。俺が使いたいのは、魔法第零級魔術——ベシエ・オリジナル死望者の秘術。……リスクは、普通の魔術の倍以上」

「……彼女が、武器になって身体を負傷する確率は……ま、半々。運だけや」

そう言って、彼が私の手を引っ張った。グラナートは私の肩を掴んだまま、その子を見る。

ディアを助けるためには、とグラナートは言っていた。

それほどまでに、ディアが危険状況に陥っているということだ。ならば私は協力しないと……だけど、負傷する可能性は半分。なんて、高い確率だろう。

っ、ああもう、なんで悩んじゃうんだろう。助けれるなら、助けるべきだ。たとえ、私が犠牲になっても……。そうじゃなければ、アメさんの二の舞になる。アメさんは死ななかったけど、死んでいた可能性もあるのだ。……私の所為で。

意を決してグラナートを、見た時。ぐいっと、再び手が引っ張られる。

「やめとき。支障をきたすのは身体だけやが、身体やかからこそ面倒くさいこともある。もし足が不自由になったら、手が使えなくなったら、目が見えなくなったら、耳が聞こえなくなったら、喋れなくなったら——どないするんや？」

「……っ」

「その時が俺が責任取る」

「え……？」

「お前の身体が不自由になったら、俺が一生お前の面倒を見る。勇者の旅が終わるまで、ずっと一緒に訳にはいかねーが……旅が終わった後は付きっきりで看病するし、何でもする」

「……………」

グラナートの言葉に、私は言葉を失う。

それは、安易な事ではない。簡単に口には出せない事だ。

グラナートはいい加減でめんどくさがりなところもあるけど、よほどじゃないと自分を曲げない。約束は守り通す。絶対に、何をしても……。

もし、私の体が不自由になればグラナートは私が断っても絶対に、私の側にいるだろう。

時計を見、グラナートが私を見た。

「時間がない。断るなら断ってくれ……」

「……私は――」

足が震える。体が不自由になればグラナートが居てくれると言っても……。うう、いや悩むのはダメだ。時間がない。決めないと、すばっと。

私はディアを助けたい。死ぬ訳じゃない。……死ぬ訳じゃないんだ。それに半分。

半分は助かる可能性がある。こんな非道い世界からしたら、この確率はとても救いのある数字。……のはず。

大丈夫。きっと大丈夫。

無理矢理にやあと不敵に笑ってみる。

「……わ、私……が、がんばる」

「……悪い」

「！」

グラナートに抱きしめられた。

「アホか……時間ないならさっさとやりや。そんなアホな事しとらんで。アホ共め」

ふてくされた声が聞こえ、グラナートは私から身体を離す。

私はその子に向き合う。彼とは今日会ったばかりなのに、とても私を気遣ってくれていた。その優しさが嬉しい。

「ごめんね……、ありがとう」

「……べつに、自分のためやないし」

ぷいっとそっぽを向かれた。その頬は紅く染まっていて、可愛い。

「それよか、さっさとしいな。子供の前で、変質的行為に溺れとけや」

「は？ え？」

「道具とのリンク方法は様々やけど、人間道具とリンクする方法は一つ、性交渉のみや」

「……え？」

八一羽

道具とのリンク。

魔術を使う為の媒体は、リンクしなくては使えない。だから思い入れのある物を使うらしい。思い入れのある物なら、リンクの魔術が強化され、武器が強くなるからだ。

補足すれば、思い入れのある物でしかリンクはできなくて――人間を道具として使う場合も、多少の思い入れが必要らしい。

グラナートが私を選んだのは、魔力の量もあつたけども、赤の他人ではいけなかったからで、イズムさんでは血が合わなさ過ぎて魔術が緩和されてしまうらしい。

数十秒で説明してくれた白い子とグラナートはじーっと私を見ている。

「……え、あの、ちょ、ちょっと待って下さい」

一番重要な情報は、人間を道具に使いリンクする為には――身体を繋げなければいけないというええ!?

「ま、ま、ま……」

「それが一番手っ取り早くて、魔力も消費しない方法だー」
「え、いや、あの、そ、それは、その、い、いかが、かと」

それをこれとは話が違う。い、いや悩んでる時間もない。だけど、だけど!

「……まー、他にも方法はあるがなー」

「はあ? そんなもんあらへんやろ」

ベシエ・オリジネル

「死者者っーのは、血自体が特別なんだよ。普通の血じゃない」

「それがどないしたんや」

グラナートが私に近づき、ガリツという嫌な音が聞こえた。なにあの嫌な音。

表情が全く変わらない為、グラナートがどこをがりつとしたのかは解らないけど……すごい嫌な、予感が。

一言も発しないまま、グラナートは私の顎を持つ、そのまま顔を近づき——唇が重なる。むにゅりと舌が割り込み、なんとも言えない味がこれ血！？　　という舌……！

「ん、んむっ……！　　んんっ」

鉄の味が口いっぱいに広がり、気持ち悪い。だけどグラナートの手が顎から頭に固定され、より深く口付けられる。ちょ、ど、どうすればいいの！？

目を開くと、グラナートと目が合い、ごくりと唾を飲む。するとグラナートの唇が離れた。

「……子供の前で、ようやるわ」

「お前ゼって二十歳超えてるいーんだよ」

口端から流れる血をグラナートは手の甲で拭き、反対の手で私の胸に触れた。胸と胸の間の真ん中。鎖骨の下位に掌を——

「ちょ、ぐ、ぐぐらあら……！」

「逃げんな」

「だ、だめ、だめだよ！　こ、子供の前でっ」

「そいつ二十歳超えてるから大丈夫だって」

「そ、そういう問題じゃ……！」

片方の手で私の腰を抱き、固定する。そのままグラナートは早口で魔術を呟いた。

詠唱が終わり、身体がぼうつと光り、身体があたたくなる。

「……どないやねん」

「え、あの」

「……そうか、ベシエ・オリジネル死望者には？干渉？ちゅー特殊能力があったなあ」

「？干渉？……？」

「それに関しては行きながら説明する、ともかく来い！」

ひょいっと私を姫抱きし、グラナートは駆けて出した。

あれ、なんか懐かしい。あの時は俵持ちで、ジビエさんのお別れだったけど……。

ジビエさん……？　　そういえばあの白い子、クーストンであった宿屋の少年に似てたなあ。声とか、顔とか。

性格も、外見の色合いも全然違うけども……。

長い廊下を抱えられながら走る。……何で人っ子一人いないんだろ。

「さっきの干渉のことだが」

「え、う、うん」

ベシエ・オリジネル「死望者のみに与えられてる能力だ。能力はそのまんま干渉。有機物でも無機物でも何でも干渉できる。動物と話そうと思えば話せるったらわかりやすいかー？」

「……すごい能力だね……」

さすがファンタジーなんでもありだ。

魔術の一種と考えればいいのか……。

「ただ干渉ったて万能じゃねー。範囲つてもんがある。直接手を触れているものしか干渉できねーし、距離もある。城の玄関に触ったからと言って、部屋の中まで干渉できる訳でもねー。壁と壁がつかっててもな」

「……はあ」

「だが、そこにプラスで魔術を使えば可能だ。城の玄関に触れただけで、王様の命を奪うことも……。城自体をまるまま破戒すること
も」

「……うわあ」

「だがそれには魔力がいる。膨大な魔力が。……俺の魔力では足りない。ハンスヴルストの研究所全部にリンクするには最低でも人を道具として使うしかない。コライユあたりにやらせよーと思ったんだが――」

「だ、だめっ！」

「……！」

「そ、それはダメ！ コライユにやらせるのはダメ……！」

なぜか分からないけど、コライユにやらせるのだけは絶対に嫌だ。

「安心しろ。あいつはありえねー。あいつ運悪いだろー？」

「……う、うん」

あんまりいい方とは言えないと思う。

「確率が半分っーことは、もう運任せだ。いや99パーセント成功

するっても運任せ。……そんな賭けで、運悪い奴を使う訳にはいかねーだろ。その点でめーは……よくもねーがわるくもねー」

「……はあ」

「理想的なのはアメだがー、あいついねーし。もしくは惚れる系の魔術を俺にかけて、そこらの奴らとリンクするってのも手だがなー」

「……そ、それはどうかと思うな」

「それが一番リスクがすくねーけどな。まー、それも見越してあの当主様は俺の見える範囲に人を置いてねーわけだが」

「……ああ、それで人がいないんだ」

「おー。まー、道具として使うために魔術で惚れたら治すのもめんどーだしな。自分はそいつに惚れてる訳だからとけねーし、だからといって俺以上に魔力が高い奴を探すのも骨が折れる。結局そいつと結婚とかになんじゃねーか？」

「……」

「つつついた」

グラナートが扉を蹴破った。

八二羽

大きなモニターとパソコンが並んでいる部屋だった。だけど人はやほりいない。

グラナートはパソコンの前に私を下ろし、その状態のまま後ろから、タッチパネルみたいなものをいじる。

「……やっぱ、全然わかんねー。くそ、ある程度理解できると思ったのに」

モニターには古代語が並んでおり、私は全く分からない。

「やるしかねーのか……」

ため息が聞こえたと思ったら、グラナートが私の肩を掴んだ。

「……そのパネルに手を置いてくれ」

「う、うん」

言われたとおりにパネルに手を置く。

……今から、その魔術をやらを使うんだろう。体に害を及ぼす可能性は半分。

怖くない訳がないけど、ディアを助けるためだ。

「……いくぞ」

「う……うん」

グラナートが私の手の上に自分の手を重ね――魔術詠唱をはじめた。

いつもよりながい詠唱。

「……！」

ぽうっと私の手が光り、体中を圧迫感が襲う。中から空気を入れられたみたいな気味の悪い感覚。気持ち悪い。

「……っ、う」

目の前がチカチカと点滅してくる。

「は、あ……っ」

意識が飛びそう。このまま意識が飛べば、魔術は中止になってしまふのだろうか？ ならば耐えないと。

そう思っても、激しい圧迫感と目眩が一気に押し寄せてくる。目を開けているのも辛いけど、閉じたらそのまま意識を手放してしまいそうだ。

頭がぐらぐらして、ふらふらして、

涙が出てくる。

もうやめて欲しいなんて情けない考えまで浮かんでくる、だけどそれを言うてはいけない。

涙と汗がパネルに落ちていく。

唇を噛んで耐えるが、視界は徐々に白に塗りつぶされる。

「う、ぐ……あ、……っ」

頭の中で何かが弾けて、視界が完全に白に染まる。
意識を手放す瞬間、グラナートに抱きしめられた気がした。

『殺戮兵器……近寄らないでよ、ママがそう言ったの』
『こいつに近寄ると反逆者がうつるぜ』ばっちい』

どこから声が聞こえる。

私は何故か、浜辺に居た。船が並んでいて、砂浜は極端に狭い。
すぐに塀があって、これでは海を楽しめないだろう。

そこに子供達が居た。遊んでいるのかと思ったけど、なんだか違う。

一人対五人という構図ができているのだ。虐め……？

私からは背中しか見えないから、一人の子がどんな顔をしているかは分からない。

その子はずっと押し黙って居たが、やがて踵を返して歩き出す。あ、こっちに……。

「逃げるのかよ！」

「この国から出てってよ！」

さらさらと潮風に赤い髪が揺れている。その子はこちらに無表情で歩いて来た。

赤い瞳が私を捕らえ——ることはなく、どこかへ歩いて行く。私の知っている彼よりはるかに小さいけど……

(……まさか、グラナート……？)

何か胸に引っかかりを感じて、私は彼について行った。

たぶん五歳位のグラナートは、町を歩いて行く。

仮に五歳なら、女帝により混沌が起きた年って事になるのか……。

一度見た時と何も変わっていない。ここは混沌の影響がないから、皆知らない？

灰紫の煉瓦造りの建物ばかり並ぶ町。グラナートの故郷。

やっぱり彼はグラナートだ。赤い髪と瞳は珍しいらしいから。

じゃあこれはグラナートの過去の夢？

夢だ。そう考えればしっくりくる。

グラナートはある建物の中に入った。

人の家だろうし悪いけど、私も一緒に中に入る。ふわりと、香ばしいパンの匂い。

……こっつてもしかして、ジビエさんの家？

だけどパン屋さんではなく、普通のリビングが広がっている。

中から若いジビエさんが顔を出し、顔を綻ばす。……あんな笑顔、みたことがない。

ジビエさんは無表情ばかりで、笑うなんて殆どなかった。と言っても、私がジビエさんと居た期間は一日だけだったけど。

小さなグラナートはジビエさんに近づき、その足にぴたりとくっつく。

「……パン」

「ミステル、持ってきてやってくれ」

ジビエさんが奥に声をかけると、儂げな少女がパンとお茶セツトを運んで来た。

長い黒髪が美しいお嬢様風の少女だ。たぶん年は十六歳位。

……もしかして、この人が噂のジビエさんのお嫁さん？

ジビエさんは推定二十歳前半、美少女は十六歳位で……微かなロリコンの香りを感じる。

「……大丈夫？」

彼女が小首を傾げる。

グラナートはすでにジビエさんの足から離れ、椅子に座っている。

「……だいじょーぶに決まってんだろー」

「……そうなの？　ならよかった」

ふわりと彼女はグラナートの頭を撫でた。

グラナートは赤くなり、目線をきよきよと移動させる。

……そっか、そういえば初恋の人なのか。グラナートの……。定まらない視線はやがてジビエさんに向く。

「ミステル、紅茶が渋くなるぞ？」

「……あっ」

少女がグラナートから手を離し、慣れた手つきで紅茶を入れる。砂糖とミルクを入れてグラナートに差し出した。

「……どーも」

やはりどこか居心地の悪そうなグラナートは紅茶を飲む。

彼女はジビエさんの隣に行った。ジビエさんはなにやら書棚の前で本を読んでいた。

やがでグラナートがパンを食べ終わる。

小さなグラナートがパンをもふもふ食べてるのはすごく可愛かった。

「……ごちそうさま」

「ああ、家に戻るのか？」

「……おー」

「……そうか、別に泊まって行ってもいいのだぞ？」

「……新婚の家になんか泊まれるかばーかー」

「なんだそれは」

クスクスと二人が笑う。グラナートは小さな声で『また来る』と言って家を出た。

グラナートの背中を見送った二人がため息を吐く。

悲しそうな二人に、グラナートを追っていた足が止まった。

「……いつまで、あのままなのだろうな。あの家族は」

「……養子は結婚していないと難しいよ」

「……新婚なのにな」

「……ふふっ、新婚って言われる度に心臓が止まりそうになる」

「俺もだ」

二人が笑い合う。……ん？　ということは二人は新婚ではない？

「……せめて、あの子を包み込んでくれる女の子でもいたら……」

「……それはまだ難しいだろう。あの年であるし、死望者だと言うこともある」

「いつか現れるかな……？」

「……いつそのこと、お前がなってやればどうだ？」

ジビエさんの発言に、彼女と私はびっくりする。

……ジビエさん気づいていたんだ。

「もうっ、意地悪。あの子が20歳の時、私は31歳だよ……！
犯罪だわ」

「その程度の年の差ならば問題ないだろう」

「……本気で言っているの？　……私が、彼と、だなんて」

「半分くらいは本気だ」

「……無理よ、年以外にも、ダメな要因はいっぱいある。それに――」

「ん？」

「今はあ・な・たと新婚の設定なのに、グラナートと恋仲になっちゃったりますます変な噂が流れるよ」

「変な噂？」

「……知らないの？　あなた、巷では『幼女好き』って言われているの」

「……待て、なんだそれは」

「私とあなたの年の差が、少なくとも6歳はありとされているみたい」

「……俺はそんなに老けているか？」

「……身内ひいきしても私と同じ十代には見えないかな」

「……お前と同じ年だというのに」

ため息を吐くジビエさんに、私は目を見開いてしまう。

……同じ年？ ……ちょ、ちよつと待って。え？

……二人とも、いくつ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1735q/>

アオイトリの消失

2011年5月19日20時40分発行